

うつせみのあなたに

第 1 1 卷

星野廉

目次

はじめに	
はじめに	2
もくじ	4
第1部 10.01.22~10.03.XX	
10.01.22 夢の素 (1)	10
10.01.23 夢の素 (2)	17
10.01.24 夢の素 (3)	25
10.01.24 夢の素 (4)	34
10.02.02 うつせみのたわごと-1-	39
10.02.02 うつせみのたわごと-2-	41
10.02.03 うつせみのたわごと-3-	42
10.02.04 うつせみのたわごと-4-	44
10.02.06 うつせみのたわごと-5-	47
10.02.07 うつせみのたわごと-6-	51
10.02.08 うつせみのたわごと-7-	54
10.02.09 うつせみのたわごと-8-	60
10.02.10 うつせみのたわごと-9-	66
10.02.11 うつせみのたわごと-10-	71
10.02.12 うつせみのたわごと-11-	81
10.02.13 うつせみのたわごと-12-	91
10.02.14 うつせみのたわごと-13-	98
10.02.15 うつせみのたわごと-14-	109
10.02.16 「外国語」で書くこと	120
10.02.17 揺さぶり、ずらし、考える	129
10.02.19 動詞という名の名詞	139
10.02.21 名詞という名の動詞 (前半)	149
10.02.21 名詞という名の動詞 (後半)	154
10.02.25 不思議なこと	159
10.02.27 はかる -1-	174
10.02.28 はかる -2-	181
10.03.XX はかる -3-	195

10.03.XX	はかる -4-	204
10.03.XX	こんなことを書きました (その 20)	205
第2部 10.03.04~10.03.11		
10.03.04	代理としての世界-1-	220
10.03.05	代理としての世界-2-	222
10.03.06	代理としての世界-3-	226
10.03.07	代理としての世界-4-	229
10.03.09	代理としての世界-5-	233
10.03.11	代理としての世界-6-	238
	代理としての世界 (改訂版) (1)	245
	代理としての世界 (改訂版) (2)	247
	代理としての世界 (改訂版) (3)	252
	代理としての世界 (改訂版) (4)	255
あとがき		
	あとがき	264
	『うつせみのあなたに 第1巻~第11巻』の記事タイトル	265
奥付		
	奥付	284

はじめに

はじめに

本書を第 11 巻とするシリーズは、2008 年 12 月 19 日から 2010 年 3 月 11 日までの間に書いたブログの記事を再録したものです。初めて開設したブログのタイトルは「ネガティブに生きる」で、ハンドルネームは「パリス・テキサス」でした。ヴィム・ヴェンダースが監督した映画、“Paris, Texas”（文字通りには、米国の「テキサス州、パリス市」という意味ですね）から取りました。大好きな映画です。邦題は、なぜか「パリ、テキサス」ですね。

どうして「ネガティブに生きる」なのかと申しますと、うつとの闘いと共存をテーマ、あるいは目的にしていたからです。つまり。「ネガティブに生きる＝頑張らない」ほどの感覚で、名付けました。

私のブログは、当初の日記的な色彩が薄れ、徐々にエッセイや論考に近いものになっていきます。ブログにしては長めの記事をほぼ毎日書いていたので、データとしての全体の量はかなり大きいです。したがって、いくつかに分冊する形で電子書籍化していく予定です。

ブログで長文の記事を投稿していた時期には、パソコンや携帯電話で読まれる文章であることを意識し、読者がモニターや液晶の画面で読みやすくするための工夫をしていました。具体的には、各段落を短くし、段落間の改行を頻繁に行うようにしました。また、1 センテンスでの読点をなるべく多くし、中には読点を打つ個所で改行するといった少々乱暴な書き方もしています。

そんなわけで、今回の電子書籍化に当たっては、もとの文章がブログ記事であったことを、できる限り忠実に再現し、上述のような独特のレイアウトをそのまま反映させるように努めました。

*

以下は、過去に開設したブログの記録です。

- * 「ネガティブに生きる」 2008-12-19～2009-02-27
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-01～2009-03-09
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-03-10～2009-03-15
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-26～2009-04-08
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-04-06～2009-04-08
- * 「うつせみのあなたに」 2009-04-17～2009-07-17
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-08-01～2009-08-08
- * 「うつせみのあなたに・・・」 2009-08-11～2009-09-01
- * 「小品集」 2009-09-04～2009-11-14 (ハンドルネームとして「恵」を使ったブログ)
- * 「うつせみのあなたに」 2009-09-04～2009-11-19
- * 「うつせみのあなたに」 2009-11-27～2009-11-29
- * 「うつせみのあなたに」 2009-12-01～2009-12-11
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-12-02～2009-12-10
- * 「ヒト観察記」 2009-12-06～2009-12-10
- * 「うつせみついたうつせみのおと」 2009-12-08～2009-12-10
- * 「うつせみのな」 2009-12-12～2009-12-15

* 「うつせみのくら」（それまでに削除したブログ記事のバックアップを再ブログ化したもの）

* 「うつせみのあなたに」 2009-12-16～2010-02-28

* 「うつせみのうわごと」 2010-03-04～2010-03-11

ブログを作り、壊し、またもや、作り、壊し、の繰り返しです。お恥ずかしい限りです。とはいえ、以上の記事のバックアップは、ちゃんとすべて保存されています。実は、言霊が怖いのです。文章を捨てられない、消せない、つまり削除できないのです。冗談ではなく――。

このシリーズのタイトル、また現在もあるブログのタイトル「うつせみのあなたに」は、いろいろな意味に取れます。その意味の多重性については、本書で何回か触れています。そのため、意味の複数の解釈は保留にしておきますので、どうか想像してみてください。大きめの辞書で「うつせみ」と「あなた」を引いてみると、何通りかの意味に取れることが、お分かりになると思います。

本書は、『うつせみのあなたに』の第11巻です。このシリーズ全体に共通するのは、「代理の仕組み」、つまり「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる」という仕組みです。これをテーマに、さまざまな例を挙げたり、多種多様な素材を使いながら、話を展開していきます。

本書の読み方として、まず記事を読み解説は後回しにする方法以外に、第1部の最終記事「10.03.XX こんなことを書きました（その20）」に収録されている各記事の解説に目をお通しになった後に、それぞれの記事をお読みになるのも、よろしいかと思います。

もくじ

はじめに

もくじ

第1部

10.01.22 夢の素 (1)

10.01.23 夢の素 (2)

10.01.24 夢の素 (3)

10.01.24 夢の素 (4)

10.02.02 うつせみのたわごと -1-

10.02.02 うつせみのたわごと -2-

10.02.03 うつせみのたわごと -3-

10.02.04 うつせみのたわごと -4-

10.02.06 うつせみのたわごと -5-

10.02.07 うつせみのたわごと -6-

10.02.08 うつせみのたわごと -7-

10.02.09 うつせみのたわごと -8-

10.02.10 うつせみのたわごと -9-

10.02.11 うつせみのたわごと -10-

10.02.12 うつせみのたわごと -11-

10.02.13 うつせみのたわごと -12-

10.02.14 うつせみのたわごと -13-

10.02.15 うつせみのたわごと -14-

10.02.16 「外国語」で書くこと

10.02.17 播さぶり、ずらし、考える

10.02.19 動詞という名の名詞

10.02.21 名詞という名の動詞（前半）

10.02.21 名詞という名の動詞（後半）

10-02-25 不思議なこと

10.02.27 はかる -1-

10.02.28 はかる -2-

10.02.XX はかる -3-

10.02.XX はかる -4-

10.03.XX こんなことを書きました（その 20）

第 2 部

10.03.04 代理としての世界 -1-

10.03.05 代理としての世界 -2-

10.03.06 代理としての世界 -3-

10.03.07 代理としての世界 -4-

10.03.09 代理としての世界 -5-

10.03.11 代理としての世界 -6-

代理としての世界 (改訂版) (1)

代理としての世界 (改訂版) (2)

代理としての世界 (改訂版) (3)

代理としての世界 (改訂版) (4)

『うつせみのあなたに PART 1～PART 11』の各記事タイトル

第 1 部 10.01.22~10.03.XX

10.01.22 夢の素 (1)

◆夢の素 (1)

2010-01-22 10:05:18 | さくぶん

「あのね、昨日というのか今日と言うのか分からないんだけど、昨日の晩に寝てから見た夢の話聞いてくる？」なんて、親しいヒトから言われたら、みなさんはどんな気持ちになりますか？「あーあ、面倒くさい」「他人（ひと）の夢になんて興味ないよ」「また？」「退屈そうだな」「どんな夢だろう」「気になるなあ、このヒトの夢なら」「何？ 何？」など、いろいろな気持ちが考えられます。

要は、相手に対して関心や愛情があるかどうかで、そのヒトの夢について知りたいかどうかが決まる、そんな感じではないでしょうか。中には夢占いや、精神分析の一種らしい夢分析に、興味を持っているヒトたちもいるにちがいません。

立場を逆にして考えてみましょう。自分の見た奇妙で不可解な夢や、とてもおもしろかった夢であれば、誰かに話してみたい。夢を見ているときにいただいた「わくわく」「どきどき」「あれれ」「なんだろう」という気持ちを、他人と分かち合いたい。あるヒトが夢に出てきたのなら、そのヒトにぜひ伝えてみたい。そう考えるのは自然な欲求だと思います。

*

自分の見た夢を上手に語るヒトがいます。一編の物語のように、ストーリーがあり、描写がある。起承転結らしきものまであり、会話が頻出するとなると、「このヒトは話をつくっているのではないか」と疑ってしまいます。一方で、見た夢について一生懸命に語

ろうとしているらしいのは分かるのだけど、しどろもどろになってきたり、收拾がつかなくなって途中であきらめてしまうヒトもいます。

そうなるに聞いているほうが、話している相手に同情してしまうのですが、なぐさめるのも変だし、手伝うわけにもいかず、気まずい雰囲気になる。そんな経験をなさったことがありますか。個人的には、自分の見た夢を言葉にしようとして、まとまりがつかなくなってしまうヒトに好感をいただきます。そのほうが正直だという気がするのです。

夢を掌編としてしたためるヒトもいますね。夏目漱石やその門下だった内田百閒の作品が頭に浮かびます。率直に言って、個人的にはどれも楽しめませんでした。両作家の思い出話をつづった短編のほうが、よほどおもしろいです。これは読むヒトの好みの問題でしょう。

*

夢を見るのが好きです。楽しい夢だけでなく、怖い夢でもいいから、今晚は夢を見ることができますように、と祈りながら床につきます。ということは、眠るのが好きだという理屈になります。かなり前から、そうした傾向はあったのですが、特にこの数年前からひどい抑うつ状態が続いています。でも、夜に眠れないということはめったにありません。ドクターには、首を傾げるヒトもいます。「うつの典型的な症状のひとつは不眠なんだけどなあ」という意味のことをおっしゃったドクターもいました。

教科書やマニュアルどおりにいかないのがヒトではないでしょうか。まして、こころの問題です。「おかないなあ。〇〇するはずなんだけど」「あなた、本当に〇〇しない？」と言うお医者さんは、どの科にもいますね。そう言われた患者のほうが困ってしまいます。医師対患者というのは、力関係では力は医師側にありますから、つい「やっぱり、先生のおっしゃるとおり、〇〇です」なんて、気の弱い患者なら言いそうです。個人的にも、そんな経験があります。

で、うつ話に戻りますが、「ドクターは、過信しないように」というのが、大学で心理学の教員をしている知り合いのアドバイスでした。そう言われたからというわけではなく、自分は現在のドクターを信用していません。つらくて悲しくて切なくて苦しい時に、ぼーっとなれるお薬だけを処方してもらうために、通院しています。

日によって程度に違いがありますが、消えたい、なくなりたくない、死にたい、という気持ちはとても強いです。でも、夜眠れないほどの心配事はありません。いつでも、消えてかまいません。今でも、オーケーです。ただ、消えるさいに痛いのは嫌です。それに、おいそれと消えるわけにはいきません。高齢の親の介護という義務があるからです。まだ、自主的に消えるわけにはまいりません。

*

話を戻します。眠ること、夢を見るのが好きです。大好きです。夢は夢でも、将来に向けての夢はありませんけど。

ぼけーっとすること、考えること、思いにふけることも、大好きです。今挙げた3つの状態は、自分の中ではかなり近い行為です。そういえば、「ぼーっとする、ゆえに我あり」2009-06-24 という記事を書いたことがあります。「不自由さ (2)」2009-06-30 でも、触れました。ご興味のある方は、記事をご覧ください。

最近では、「まことはまことか (前半)」2010-01-17 で、図式をつかって、自分のイメージしている「思考する」という行為について書きました。きょうは、その続きです。

*

「思い」は重い。そう思っています。これは、「つらい」という意味にも解釈できますが、ここでは、そうではありません。どういうことかと申しますと、「おもう・おもい・思う・思い・想う・想い」という大和言葉には多義性＝多層性がある、という意味です。いろいろな語義やイメージが詰まっている言葉だとか、いろいろな語義やイメージを担うことができる言葉だ、と言い換えることもできそうです。そんな「重み」のある言葉だと思えます。

愛用している広辞苑によると、「おもう」は「重い」と関係あるかもしれない、それに「おも・面・顔つき」から来ている説もある、と書いてあります。どう結びつくのでしょうか。興味津々です。「思い」は重い。「重い」は思い。「思い」は面（おも）に出る。「面（おも）」は思いの鏡。うーむ……。おもしろい。

具体的な話をしましょう。「おもう・おもい・思う・思い・想う・想い」という言葉と、その言葉が喚起する類語やイメージを並べてみます。

考える・思考する・思想する・想像する・夢想する・夢見る・空想する・物思いにふける・妄想する・認識する・意識する・考慮する・思慮する・熟慮する・考察する・思案する・思惟する・出まかせを言う・熟考する・深慮する・専心する・瞑想する・黙考する・思案する・思いめぐらす・思索する

イメージする・アイデアが浮かぶ・頭をひねる・頭に汗をかく・意思する・意志をい
だく・意図する・思感をいだく・たくらむ・疑う・疑念をいだく・印象をいだく・回想す
る・回顧する・想起する・思い出す・追憶する・思いつく・ひらめく・悟る・感慨をい
だく・感想をいだく・雑感をいだく・雑念をいだく・邪念をいだく・執念をいだく・情念を
いだく・想念をいだく・所感をいだく・心境をいだく・心もちをいだく・気もちをい
だく・気分をいだく・気がする・感じがする

思いやる・思慕する・想定する・推測する・憶測する・推定する・推しはかる・予想す
る・思いを焦がす・思い当たる・思い入れをもつ・思い込む・錯覚する・幻覚をいだく・
幻想をいだく・思い過ごす・思い立つ・思い違いをする・勘違いをする・連想する・誇大
妄想をいだく・無念無想・沈思黙考する・心積もりでいる・心当たりがある・心残りがす
る・夢を描く・夢見る・ぼんやりする・ぼけーっとする・ぼーっとしている・とりとめも
なく考える・うーむ・ああ・ほー・はー・おー・えーっと・ん？ ・そうだ！ ・そうか・
「……………」

*

以上、複数の辞書や類語辞典を参照しながら、思いつくままに書き連ねました。整理されてはいません。とりとめがありません。むしろ、整理されていなくて、とりとめがないほうが自然だと思います。整理する。分ける。分かる。分類する。筋を通す。そうした行為も、「思う」の一種でしょう。というより、それは「思う」の結果としての「文章」や「何度かリハーサルをした後の談話 or プレゼン」だと思います。

今、ここで問題にしているのは、そうした言葉（主に書き言葉）によって整理された

理路整然とした「思う」のありようではなく、みなさんがふだん日常的に経験している「思う」なのです。メモにしろ、下書きにしろ、推敲された作文にしろ、書かれたものとして存在する「思い・考え・アイデア・思考・思想・論考」以前の、もやもや、ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ、なのです。

個人的な意見というか印象ですが、さきほど上に列挙した言葉たちを全部、「思う・思い」に担わせてもよろしいかという気がします。あれだけたくさん並べてみると、もやもや、ごちゃごちゃぐちゃぐちゃした印象を受けます。だから、「思い」は重いのです。

*

よく「言葉を使って思考する」とか言われますが、個人的にはそうは思えません。もっとも、言葉を「話し言葉」と「書き言葉」という狭い意味で取った場合の話です。言葉というものは、「何かの代わりに、その何かではないものを用いる」という仕組みだと考えてみましょう。すると、話し言葉と書き言葉だけでなく、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、指点字、点字、音声（発声）、音楽、合図、映像、図像、さまざまな標識や記号や信号などすべてが、言葉だと言えそうです。

実際、みなさんは、たった今紹介した広義の言葉を使って、考えたり、頭に汗をかいたり、思いにふけったり、夢想したり、妄想したり、推測したり、思い込んだり、ぼけ一っとなったり、思いやったり、思い出したり、ひらめいたり、出まかせを言ったり、たくらんだり、思い過ごしをしたりしているのではないのでしょうか。

たとえば、ブレインストーミングという功利的な「お遊び」があります。あれって、一種の「もやもや、ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」ごっこだと思えてなりません。ふつうは集団でやる「ゲーム」ですが、自分なんかしょっちゅうひとりでやっています。みなさんも、密かに、あるいは無意識にやっていらっしゃるいませんか？

*

話を夢に戻します。「ゆめうつつ・夢現」という言葉があります。夢か現実かが分からなくなっている、ぼけ一っとした状態のことですね。きれいでうっとりするようなイメージをいだかせてくれるので、大好きな言葉です。実際に起こっているのかどうか、曖

味で分からない状態というのは、眠ることと夢を見るのが好きな者にとっては、たまらないイメージです。

以前から、おそらく子どものころから、「夢の素（もと）」というものがあると信じてきました。元素という言葉のイメージと重なります。でも、実は、味の素という化学調味料から連想した言葉なのです。

今、ある日のことを思い出そうとしています。確か小学校の低学年くらいの時だったと思います。授業中にぼんやりと窓の外を眺めているうちに居眠りをしていて、先生に注意されて、目を覚ましたものの、まだうとうとしていて、居眠りの間に見ていた夢が気になって仕方なく、その夢の続きを見たくてたまらなくなり、その夢を思い出そうとしていました。

思い出そうとしているうちに、夢の光景というか音というか断片的な「何か」が光沢を帯びた小さな粒になって、きらきらと目の前に浮かんでいるというか、散っているような気がしました。その粒が味の素に似ていて、その粒状の小さな欠片（かけら）を、一粒ひとつぶ頭の中でとらえるたびに、断片的なイメージが光景や音となって膨らんできて、ほかの粒と混じり合うと、その光景や音が合体したり、別のものに移り変わっていった。そんなイメージというか記憶がよみがえってきます。

「ゆめのもと」「あじのもと」「夢の素」「味の素」。そんな言葉が、粒のイメージと一緒に頭の中を駆けめぐっていた覚えがあります。これまで何度か、思い浮かべた記憶あるいはイメージなのです。

*

大人となった現在でも、夢の素という言葉とイメージが、繰り返し出て来ます。どんな時に出てくるのかというと、たとえば、ものを考えるとき、ものを書くとき、ぼーっとしているとき、寝入ろうとするとき、夢を見ていて目が覚めて、それまで見ていた夢を断片的に覚えているとき——です。ブログ記事を書くときにも、その前の段階として、記事を書くために、思ったことや考えたことやひらめいたことを走り書きメモとして残すときにも、夢の素が出てきます。

そう言えば、きのうの朝に「こんなことを書きました（2010年 その1 前半）」と「こんなことを書きました（2010年 その1 後半）」2010-01-21の下書きを書いているさなかに思い出したことがあります。数週間前、「うつせみのくら」をせっせとつくっていたころに、ブログ画面の左側にある「メッセージを送る」機能を通じて、ある質問を受けました。「こんなことを書きました」にある「直接書かなかったキーワード」とは何か、というお問い合わせでした。メッセージはメールアドレスを付けなくても届くのですが、その質問をなされた方はメールアドレスを添えてくださっていたので、返事を出しました。その返事を要約します。【注：「うつせみのくら」とは、いったん削除した過去のブログ記事のバックアップを使い、再ブログ化したサイトです。そのサイトも削除して、現在はありません。】

「直接書かなかったキーワード」というのは、その記事を書くときに、頭に浮かんだ言葉やイメージです。もっと詳しく言うと、記事を書くために用意してある走り書きメモにある言葉やフレーズ、そしていざ記事を書く時になって、頭に浮かんだ言葉やフレーズやイメージのことです。

だいたい、主に、かつて読んだ本の名前や、その本の著者や、その時に書いている記事のテーマと関係のあるヒトの名前や、記事を書くのを後押ししてくれた言葉やフレーズやイメージです。もちろん、単に記事の中であえて言及でしなかった、つまり、頭には浮かんだものの書く必要性が認められなかった言葉やフレーズも含まれます。

今ではもう手元がない本、書棚にあっても手にすることのない本、押入れ内に積み残されている段ボール箱に入っていると思われる本を、いちいち参照しながら記事を書くことはありません。出まかせと即興＝アドリブに頼っています。記憶力が乏しいせいで、本の内容も、おぼろげに、あるいは断片的に覚えているだけのものがほとんどです。そうした著者や、タイトルや、書かれていたキーワードやフレーズ（用語やテーマ）や、その本と著者についてのイメージ（断片的な記憶や記憶間違い）は、さきほど述べた「夢の素」とほぼ同じです。

「夢の素」と同様に、さまざまなイメージや思いをいだかせ、言葉を誘発するというか、言葉が出るのを後押ししてくれている。そんな感じです。ですから、自分にとって、「夢（＝広い意味での想像界）」と「現実（＝知覚されている現在）」と「思考（＝広義の言葉を用いて動いている心）」とは、かなり近いものとして「在る」し、または「出てくる」と言えます。言い換えると、「夢・現実・思考」は、「夢の素」という粒がばちばちと弾ける「ありよう＝場＝状況＝動き＝事件＝出来事＝偶然＝アクシデント」なのです。

*

たとえば、「直接書かなかったキーワード」でよく出てくる、固有名詞とされる「ステファヌ・マラルメ」という「夢の素」は、自分にとっては学者が研究している対象の「ステファヌ・マラルメ」でもなく、実在したとされる1個のヒトである「ステファヌ・マラルメ」でもなく、「ステファヌ・マラルメ」というヒトが書いたとされる作品群や草稿の集積でもなく、「ステファヌ・マラルメ」というヒトおよび固有名詞をめぐる神話でもありません。圧倒的な偶然性の中で、ひたすら言葉というサイコロを振っている「運動・動き・身ぶり」としての「夢の素」なのです。その意味では、匿名的でニュートラルな存在とも言えます。しかも、きわめて個人的なものなのです。

「蓮實重彦」ならば、絶えず言葉の身ぶりと表情に目を向け、時には自らも言葉に目くばせを送り、「音（おん）」「活字＝文字」という言葉の物質性にひたすら寄り添う「運動・動き・身ぶり」である「夢の素」として、自分に働きかけてくる「言葉とイメージ」なのです。実在の人物とは、「固有名詞」という「名」で、かろうじてつながっているだけでも言えそうです。

人名だけでなく、書名であっても同じです。一例を挙げるなら「ギュスターヴ・フローベール」作とされる『ブヴァールとペキュシェ』です。この小説では、「知を約束するもの＝知を保証するもの」、つまりヒトが「確かなもの」として信じている「言葉・フレーズ・言説」を文字通り取ることにより、『言葉』と『言葉が指し示すとされているもの』とが『連携＝対応』している」という根強い神話に滑稽なまでに裏切られる二人の男が登場します。「夢の素」とは、そうしたヒトの「ありよう・運動・動き・身ぶり・仕草」なのです。運動ですから、動き＝揺らぎます。

10.01.23 夢の素 (2)

◆夢の素 (2)

2010-01-23 10:04:18 | さくぶん

頭の中を整理するために、前回（「夢の素（1）」2010-01-22）のまとめをさせていただきます。

「思い」は重い。つまり、「おもい・おもう・思い・思う・想い・想う」という大和言葉系の言葉は、たとえば「考え・考える・思考する・思想する・夢を見る・夢想する・妄想する・幻想する・ぼけーっとする・ひらめく・錯覚する……」を含む、多層的な意味を持っているという話でした。

「思い・思う」を「分ける」と、多種多様な言葉が出てきます。「分ける」ことで「分かる」というと、「分かる」ような「分からない」ような気がしませんか？ 前回には、「夢の素」という個人的なイメージについても書きました。「思い・思う」を「夢の素」で説明することもできそうです。上で述べたように、「思い・思う」という言葉には、さまざまな意味合いがあります。「思い・思う」という言葉を化学調味料の「味の素」のような「粒」にたとえてみましょう。きらきらした細かな結晶のような粒です。

舐めると「何とも知れない」味がします。塩辛いような、甘いような、唾が出そうになる酸味もあるような気がするし、これを口に頬張ったらもどすのではないかというような気持ち悪さもある。しかも、自然物ではなく、人工の化学調味料だということですから、何となくうさん臭さというか怪しげな感じもしなくはない。そもそもこの調味料の「元」は何なのだろう、という疑問も頭をもたげてきます。

*

英語では、化学調味料を「アクセント = accent」といいますね。その accent という単語も意味深です。アクセント記号なんて意味もあって、これはフランス語では「アクサン」みたいな発音になり、具体的には「t」「`」「^」を指します。時間や角度を表すさいに使う「分」や「秒」を表す「'」「"」も「アクセント」というそうです。これって全部、粒じゃないですか。さらに意味深なのは、英語の accent には、「訛り」という語義まであります。大きな英和辞典でぜひ調べてみてください。おもしろいですよ。

ジーニアス大英和辞典によると、accent の語源は「話し言葉に付けられた曲」らしいです。「まいどありい〜」とか坂田利夫さんの「ありがと、さ〜ん」なんて時の「節・節

回し」を連想します。話を戻しましょう。

*

「思い・思う」という大和言葉系の語を、偉そうに＝もったいぶって言いたい時に使う「意識・意識する」とか「思考・思考する」という曖昧模糊としたイメージの語にずらししてみましょう。こんな具合に、「思い・思う」は「ずらす・言い換える・すり替える・分ける・分類する・区別する」ことができるという意味で、「夢の素」ととても似ている気がします。

もちろん比喩ですが、「夢の素」とは、いろいろな「思い・思う」が詰まった「粒」なのです。いや、「いろいろ」では軽すぎます。「千差万別」「変幻自在」「万華鏡」「百花繚乱」「百家争鳴」「魑魅魍魎」「跳梁跋扈」「鬱蒼・鬱蒼」「もやもや」「ごちゃごちゃ」「ぐちゃぐちゃ」「アナーキー」「支離滅裂」「混沌・カオス」「めちゃくちゃ」「なんでもありー」という感じです。

それが一粒ひとつぶに「びっしり・ぎっしり」詰まっている。それが、「夢の素」です。かなり文章がとちくるってまいりました。これは論じるテーマを記述する言葉たちに演じてもらうという、このブログでよくやる「方法＝戦略＝企み＝お遊び」なのです。こういうやり方をして書いた記事には、よく「直接書かなかったキーワード」として「渡部直己」という固有名詞が出てきます。

自分にとって、「渡部直己」という「言葉」は、「つづる言葉によって『隠喩』としてつづられる対象を『模倣する＝演じる＝擬態する』動作・身ぶり」であり、「つづられる文章の構造・場の構築へと促してくれる『夢の素』」なのです。言い換えると、今述べた「運動への誘（いざな）い」を、「渡部直己」という固有名詞が著者名として記されている書物から、自分が勝手に＝独りよがりに「得た＝感じ取った」イメージなのです。ですから、きわめて個人的なものでしかないとも言えます。万が一渡部直己氏が、この記事をお読みになったとするなら、きっと「誤解だ」「すべてでたらめ」「わたしはそんなことを書いた覚えはない」「なんて馬鹿なやつだ」と苦笑なさるか、あるいはお怒りになるでしょう。致し方ないことです。

なお、「渡部直己」という「言葉」が「直接書かれなかったキーワード」として添えられている記事には、「あう (5)」2009-05-01、「かく・かける (4) (前半)」&「かく・か

ける (4) (後半)」2009-05-16、「かく・かける (7)」2009-05-19、「あらわれる・あらわす (6)」2009-05-30、「出る」2009-06-20、「うんちと言葉」2009-06-21 などがあります。ご興味のある方だけ、ちらりとどんなことが書いてあるのか、覗いてみてください。たぶん、字面で体感できます。アホなことをやっているなあ、とお思いになれば、「体感できた」と言えるのではないのでしょうか。でも、好きなんです、そういう「アホなこと」が。

*

自分は、きわめて交際が薄く、他人様（ひとさま）と議論したり、意見を交わすということが皆無に等しい人生を送ってきました。したがって、きのう挙げた「ステファヌ・マラルメ」にしろ、「蓮實重彦」にしろ、『ブヴァールとペキュシェ』にしろ、上で触れた「渡部直己」にしろ、単なる個人的な「イメージ」であり、つづろうとする言葉を、ある運動へと促してくれる＝後押ししてくれる「信号＝記号＝合図＝印＝夢の素」にほかならないと言えます。

他人様が上述の4つの「固有名詞」についてどんな知識を持っているのか、関連の書籍をどう読んで、どう理解・解釈したのかに関しては、全然知りません。このブログのタイトルの下に添えられたフレーズにあるように、「いま、ここで、手持ちのものを大切にする」という、ものぐさで横着な態度で、ほぼ毎日長めの記事を書いています。無職なので時間だけはあるのです。ないのは、と言うか、どんどん減っていくのはお金です。泣き言は、これくらいにしておきます。

*

「夢の素」をずらすと、『『思い・思う』の素』とも、『『思い・思う』を始動させる装置』とも、「意識・思考の素」とも言うことができます。自分で勝手にイメージしている「妄想」ですから、「そんなこと、何とでも言えるじゃないか」「勝手に言っていれば」と言われれば、「はい、そうですね」としか言いようがありません。「言う・言葉」は、それくらいテキトーでいかがわしいものなのです。何とでも言えます。

その「言う・言葉」に至るまでの過程、あるいは「言う・言葉」の直前にあると見なし得るものが「夢の素」とも言えそうです。いえ、そうなのです。いえ、そうにちがいません。たった今書いた駄洒落って、救いがたいほどくだらなくありませんか。これが、つづる言葉でつづるテーマを演じさせる、という上述の「方法＝戦略＝企み＝お遊

び」の短い一例です。駄目押しに書きました。体感していただけたでしょうか。個人的には大好きな「お遊び」なのですが、なかなか読者の方に共感していただけられないので、寂しく思っております。

*

話を変えます。

みなさん、今、眠いですか？ この駄文をお読みになっているのですから、きっと眠気を感じている方がいらっしゃるだろうと推測しております。眠い時って、気持ちがいいですよ。自分も大好きです。昨日も書きましたが、「ゆめうつつ・夢現・ぼーっとしている・意識が定かでないほうに傾きつつある」といった状態です。

ヒトの意識というものを、グラデーション＝階調＝濃淡としてイメージしてみましょう。「覚醒」から「無意識」あたりを経て「意識不明」。「はっきり」から「ぼんやり」を経て「……………」。「悟り・解脱」から「煩惱・普通」を経て「迷妄・妄執」。簡略化すると、今述べたようなプロセスが頭に浮かびます。

PCでしたら、モニター画面の明暗をコントロールする機能があります。それをいじってみると、ヒトの意識のグラデーションが、比喩的に体感できるように思います。難しく考えないでください。ひとつ大切なことは、このグラデーションは、TPOによって変化するという点です。絶対的で不動の尺度などありません。尺度は、その時々によって異なるものではないでしょうか。刻々と変化すると言っていいかとも思います。為替市場の変動相場制に似ている気もします。

*

昨日から「思い・思う」のうちの「意識・意識する」について、ずっと考えています。知覚器官を通じて「世界＝身のまわり」の情報を「知覚・知覚する」という形で受信し、シナプスを通して脳に送られたデータが処理される。その次の段階が、「意識・意識する」だと個人的にはイメージしています。百家争鳴であろう、心理学や精神医学や脳科学の諸説については全然知りません。お勉強が嫌いなのです。

そんなわけで、ものぐさにとりともなく、「いま、ここで、手持ちのものを大切にしながら、考えています=ぼけーっとしています。そのぼけーっとした状態で「ぼけーっとする」について、ぼけーっと考えるわけです。個人的な体験ですから、個人的なイメージが勝手にどんどん湧いてきます。たぶん、他人様に説明するには時間がかかると思われるイメージや記憶がたくさん、瞬時にあれよあれよという感じで「出てくる」こともあります。「走馬灯」というきれいな比喩がありますね。自分の場合には「高速でランダムな走馬灯」です。「しっちゃかめっちゃか」という、めちゃくちゃテキトーな響きのある言葉も、思い浮かびます。

イメージや「夢の素」など、自分の「いだいている・抱いている・擁いている・懐いている」ものは、「いとしい・愛しい」です。愛着を覚えます。うんちと同じで、自分の一部でありながら、出た瞬間、自分から離れていく。そんなもの悲しさも覚えます。ちなみに、「いだく・抱く」と「だく・抱く」はきょうだいですよ。自分が胸にいだいているものは、いとしいし、かわいいものではないでしょうか。だくことは、だかれることだ。そう思います。もたれることは、もたれられることだ、とも似ています。支えることは支えられることだ。そんなふうにも言えるような気がします。手垢の付いたイメージですが、「人」という「漢字=感字」の感じでしょうか。もたれあう。

*

「意識する」ということは「意識される」ことだ、とも思えてなりません。きょうは、以前から思っているというかイメージしている「夢の素」のひとつをお話したいのです。ちょっとややこしい話なのですが、お分かりいただけるように努力します。

では、その「夢の素」を呼び出します。何だかオカルトめいてきましたが、気にしないでください。その「夢の素」がぱちんと弾けました。

ヒトは「似ている」と「知っている・分かっている」を混同している。あるいは、「似ている」と「知っている・分かっている」とはきわめて近い。そんな思いを以前からいんでいます。「似ている」というのは、「何か」と「何か」、あるいは「誰か」と「誰か」、あるいは「何か」と「誰か」、または「何か」と「誰か」と「どこか」のかかわり合いではないでしょうか。その「何か」と「誰か」と「どこか」に、「自分」が含まれている可能性はきわめて高いように思います。その点に興味があります。というか、考えてみたい点はそれです。

ヒトは「自分のまわり＝世界」を見ている＝知覚しています＝意識しています。少なくとも、そう言われています。そういうことになっています。ヒトは、そう信じています。そうした状態・ありようを、とりあえず「『意識する』という言葉」で、呼んでみましょう。

*

もしかすると、ヒトは「意識する」と同時に「意識されている」のではないのでしょうか。ヒトは、「自分のまわり＝世界」を見ていると同時に、自分自身をいわば鏡に「うつして＝映して＝移して」いる。見ているのは、「自分のまわり＝世界」であると同時に「自分自身」でもある。

「自分のまわり＝世界」と「自分自身」は「似ている」。未知のものであるはずの「自分のまわり＝世界」を、ヒトは実は「知っている」。分からない＝分けることのできない「自分のまわり＝世界」を、ヒトは実は既に「分かっている＝分けている」。

自分が今いちばん興味があるのは、そんなお話＝フィクション＝でまかせ＝作り話＝与太話なのです。こういう記事を書いた時には、後日「こんなこと書きました」で、「直接書かなかったキーワード」として、「ジャック・ラカン」「レフ・ヴィゴツキー」と記すところです。実際、上記の文章を書きながら、「ジャック・ラカン」と「レフ・ヴィゴツキー」という「名」の「夢の素」がぱちぱちと弾けるのを感じました。

*

ヒトは「(意識的に or 無意識に)分かっている」しか「(意識的に or 無意識に)分からない」。そうも言えそうです。この点については、「出来レース」と「経路」というキーワードを用いて記事を書いたことがあります。

なお、「出来レース」に関しては、「もしかして、出来レース？」2009-01-29、「カジノ人間主義」2009-01-30、「かく・かける (8)」2009-05-19を、そして「経路」については「うたう」2009-07-02、「あわいあわい・経路・表層 (1)」2009-07-04、「あわいあわい・経

路・表層(2)(前半)」&「あわいあわい・経路・表層(2)(後半)」2009-07-04、「いみのいみ」2009-07-07、「記述＝奇術＝既述(前半)」&「記述＝奇術＝既述(後半)」2009-07-14、「3つの枠」2009-12-09で考察しています。興味のある方だけ、お時間のある時にでも、ご参照ください。面倒な方は、パスしていただいて一向にかまいません。この記事を読み進めるのには、全然支障はありません。どうか、このままお読み続けてください。

*

「出来レース」と「経路」をずらすと、次のようにも言えそうです。

(A) ヒトは、生まれて間もなく誰か(※助産婦・医師・看護師・乳母・母親・父親など)に抱かれた時に、同時に「何か・誰か・どこか」を抱く。

そう思います。これが自他の「未分化」と呼ばれているものなのかに関しては知りません。「未分化」という言葉には抵抗があります。特に「未だに」というイメージに賛同できません。ヒトは、「いつまで経っても分化されない」というイメージはピンときます。体感できるし、日々体感しています。この時点でも、感じています。

*

今度は、「抱かれる・抱く」をめぐる上のフレーズを、さらにずらしてみましよう。

(B)「抱く＝抱かれる」は、「接触・触れ合い・関係性・一体感」を意識することである。その意識は確認である。つまり、「抱く・抱かれる」は、既に「織り込まれている」。

今書いたことが、いわゆる「本能」なのかもしれませんが、勉強不足の自分は「本能」がどんなものなのか、つまりその定義は知りません。おそらく、各分野の各学派、たとえば発達心理学・精神医学・生物学とその各学派において、「本能」の定義は「分かれている」だろうと思います。

*

以上の（A）と（B）の両フレーズの根底に、「似ている」と「知っている・分かっている」という、きわめて近い行為があるように思えます。

ヒトは、自らが認識できる枠内で、「何かに似ているもの」を探している。その探索で「何かに似ているもの」らしきものを見つけたさいには、それは「未知のもの発見」ではなく、「知っているもの確認」である。でも、通常、それは、「未知のもの発見 or 遭遇」とか「知らなかったことの学習」とか「分からなかったことの習得」と呼ばれている。

そんなイメージです。その前提に立つと、「知る・分かる・分ける」より深いところに「似ている」という認識があるという気がします。さらに言うなら、というか、少しずらしてみると、「似ている」が「似せる・似せたもの・偽物」とつながって、「本物・真実・事実・現実」と呼ばれているものこそが「偽物」である、と言ってもかまわない気がします。

短絡した言い方をすれば、次のようになります。

「本物」なんてない。ヒトにとって、森羅万象は、みんな「似ているもの」という意味での「偽物」だ。

上記のフレーズを書く直前に、「ニーチェ」「ピエール・クロソウスキー」という「夢の素」が、ぱちんぱちんと弾けました。そのさまは、超小型の花火の炸裂のようにきれいでした。

10.01.24 夢の素 (3)

◆夢の素 (3)

2010-01-24 10:05:58 | さくぶん

のっけから、自己輸血＝自己引用をして恐縮ですが、前回の「夢の素 (2)」2010-01-23から、必要な部分をコピペさせていただきます。

>ヒトは、生まれて間もなく誰か（※助産婦・医師・看護師・乳母・母親・父親など）に抱かれた時に、同時に「何か・誰か・どこか」を抱く。

>「抱く＝抱かれる」は、「接触・触れ合い・関係性・一体感」を意識することである。その意識は確認である。つまり、「抱く・抱かれる」は、既に「織り込まれている」。

以上が引用部分です。以前から、気になって仕方がないことがありまして、それを今回はテーマにしてみたいので、上の2カ所を写し＝移しました。

このさい、もっとコピペしちゃいます。

*

>で、これまでずっと不思議に思っていたことが思い出されて、頭の中がごちゃごちゃぐちゃぐちゃ状態になりました。

そもそも位置って何？ 視点・視座って何？ 主語って何？ 主体って何？ ついでに、客体って何？ 語・語句・文・文の連なり・文章・作品・文献における視点・主語ってあるの？ 夢や夢想にも視点・主語ってあるの？ 絵・写真・漫画・映像のコマ、そしてそのコマが連続した動画における視点ってどうなってるの？ ヒトは時間を円環や線状に「たとえる＝こじつける」なんてやってるけど、それって有効性はどれくらいあるの？

前後なんて、空間と時間のこじつけごっこやってるけど、どこまで正気なの？ ついでに、上下左右斜めまで頭に浮かんだけど、それって重力があってこそその言葉とイメージちゃうか？ 宇宙空間では、位置とか視点とか主体って意味があるの？ 宇宙船でいろいろ

ろやっているけど、しょせん、地上のイミテーションじゃないの？ 宇宙ステーションでイミテーションってイミあるの？「発想＝枠組み」の転換が必要だなんて、やっぱし素人であり、しかもアホの浅知恵？

ついでに、ヒトが生まれてから死ぬまでの「間・あわい・過程・プロセス」を、植物なんかの成長にこじつける、また、その逆方向でこじつけるなんてやっているみたいだけど、有意＝意味あり？ 生から死を流れにこじつけるのも、意味ありなの？ それともヒトに通じるだけの仲間内ギャグ？ 進化・発達・発展・退化・衰退・段階なんて言葉とイメージで、生物や無生物の移り変わりを語っているけど、騙っていることにならない？ そもそも「移り変わり」って何？ それって有り？ それとも、ヒトの思い込み？ 知覚・意識という枠組み内での話だけのこと？

以上挙げたのは、ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ状態のほんの一部なのです。

*

以上の*と*の間に挟まれた文章は、「もどるにもどれない」2010-01-14 から引用したものです。「夢の素」について書いているのですから、頭の中の「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ状態」をめぐるの最近の記事から必要部分を取り出してみました。自分は、たとえば、上述のようなとりとめのないことを、あれこれ考えながら＝ぼーっとしながら日々を送っています。

冒頭で引用した前回の記事の断片では、「抱く・抱かれる」がキーワードです。次に引用した文章では、「視点・視座って何？ 主語って何？ 主体って何？ ついでに、客体って何？ 語・語句・文・文の連なり・文章・作品・文献における視点・主語ってあるの？ 夢や夢想にも視点・主語ってあるの？ 絵・写真・漫画・映像のコマ、そしてそのコマが連続した動画における視点ってどうなってるの？」がいちばん気になる部分なのです。

共通するのは、「する＝される」「to do = to be done」です。英語が添えられているのは、酔狂＝お遊び＝景気づけ＝活性化です。というか、きょうは母語である日本語を用いて少々込み入った作業をする予定なので、念のために英語バージョンもくっつけておきたいのです。日本語を使う以上不可避な言葉の綾やレトリックがからんできそうなので、念のため＝気休めに英語でも確認すると言ってもいいです。

*

おびただしい数があると思われる「する＝される」のうちで、特に「抱く・抱かれる」にこだわっているのは、ヒトが生まれて間もなく経験する他者との接触のひとつだからです。母親に相当するヒトの「乳首を口に含んで吸う」、あるいは「乳首に相当する人工のものを口に含んで吸う」でもいいのですが、長くて扱いにくいので、「抱く＝抱かれる」「to hold = to be held」(※「to nurse = to be nursed」もあるみたいですが、hold しておきます)を使って話を進めます。

等号、つまり「＝」で能動と受動が結ばれているのは、今回の記事の主張である、「する」と「される」は近い、あるいはほぼ同じ、思い切って言えば、ヒトという枠内においては同じ、という点を意識してのことです。よくこのブログでは、「＝」を用いていますが、それは「意味＝sense＝判断＝方向」の固定化を防ぐという「戦略＝企み＝方法＝お遊び」です。つまり、言葉にもてあそばれるさいに経験する「偶然性＝いい加減さ＝うろろ＝よろよろ＝うじうじ＝どうなるのだろう＝どうしよう＝ま、いっか状況」に身を任せるうえでの誠実な態度の表明であり、「たしなみ＝倫理＝仁義＝礼儀」にほかなりません。

前置きは、これくらいにして本題に入ります。

*

ヒトが現実・真実・事実と呼んでいるものは、嘘っぱちであり、「似ているもの」という意味での「偽物」である。さらに言うなら、人は過去を再現などできない。再現とは捏造するという行為に他ならない。記憶も同様で、捏造に他ならない。

まず、上記の「フィクション＝話＝意見＝思い＝『夢の素』」を前提にします。自分には、そうとしか思えないし感じられない。理由は、それだけです。学者や研究者のように、実証とか論証とか検証とかいう官僚的なわごととは申しません。そうしなければ、仲間から、あるいは業界の中で馬鹿にされるとか干されるという恐れもありません。そうした作業を生業にしてご飯を食べているわけではないからでしょう。上に書いたように思っている。それだけです。

で、その森羅万象が偽物だらけであるという環境の中に、ヒトは生きています。その偽物たちを、ヒトは見たり、触ったり、耳にしたり、舌で味わったり、その匂いを嗅いだり、その気配を感じたりしているわけです。それが、知覚器官からシナプス経由で脳に至るプロセスで起こっている「情報処理・データ処理」だと考えましょう。

その情報処理は、ヒト以外の生き物たちも行っているみたいです。ヒトの場合には、そこに話し言葉としての言語を始めとする、広義の言語＝表象＝代理による「情報の処理」および「情報の蓄積と引き出し・情報の混同・情報の錯誤・情報の捏造」を行っています。そうした操作＝プロセス＝運動が、多層的なイメージを担っている「思い・思う」のうちの、「意識する・認識する・思考する・混乱する」です。

*

なお、ここで言う広義の言語＝表象＝代理とは、話し言葉と書き言葉だけでなく、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、指点字、点字、音声（発声）、音楽、合図、映像、画像、さまざまな標識や記号や信号などです。言葉と思考 or 思想とがイコールだとか、ヒトは言葉を使って思考する、といった言い回しがあります。その場合の言葉が、狭義の言語、つまり話し言葉と書き言葉に限られるものであるという前提に立っているなら、個人的には支持しません。当然のことながら、話された言葉、あるいは書かれた言葉を、思考 or 思想というプロセスにすり替えるなんてズルはなしですよ。

「思い・思考」というごちゃごちゃもやもやの結果としての、ある程度整理された「音（おん）＝話し言葉＝耳で知覚できる空気の振動」と、インクの染みや画素の集合である「文字＝書き言葉＝目に見える物質」はあくまでも「もの」であって、脳内で起きている情報処理という「動的なプロセス＝こと」ではありません。その両者は別物です。

ヒトは言語（※話し言葉や書き言葉）を使って思考する。

ブログでたわごとを書いている自分ですが、そこまで抽象的で「よく出来た＝こしらえられた＝捏造された」、耳に心地よい美辞麗句＝たわごとは吐けません。そんな「高度な＝低俗な＝見え透いた＝何か思惑ありげな」芸は、真似できません。狭義の言葉で思考する？ できるものなら、目の前でやって見せてほしいです。もっとも、見えるものじゃ

ないですけど。そうか、だから、自信ありげに言えるんだ。可視化できないものは、何とでも言える。納得しました。

ついでに罵倒しておきたいフレーズがあります。

事実と意見を分ける。

論文などのつづり方教室で言われたり、そのたぐいの分野のハウツー本に書かれているたわごとですが、これも、ブログでたわごとばかり書いている者ですら首を傾げる、見え見えすぎるたわごとです。せめて、次のように記述するのが誠実な態度ではないでしょうか。

見たあるいは伝聞による報告と自分がいっている感想を分ける。

これでも、百歩ほど譲っての話です。

*

話を、「抱く＝抱かれる」「する＝される」に戻します。

>ヒトが現実・真実・事実と呼んでいるものは、嘘っぱちであり、「似ているもの」という意味での「偽物」である。

という、さきほどの前提にもうひとつ前提を加えます。

「思い・思う」の一部である「意識する」においては、いわゆる「夢＝ぼけーっ＝思考」も「現（うつつ）＝はっきり＝思考」も同列に扱う。

以上のフレーズを土台とします。目が覚めていようと、うとうとしていようと、ぐっ

すり眠っていようと、「思い・思う＝思考する」が働いている＝作動している＝スイッチが入っている限りは、「夢の素」の破裂・炸裂に促されて「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」から「もやもやぼんやり」を経て「はっきりくっきり」という「グラデーション＝濃淡＝階調」状の「何か」の真っ只中にヒトは「居る＝在る＝有る」。そう思うからです。

*

たとえば、あるヒトが目覚めた状態で走っているとします。走っているヒトは、自分が走っていると知覚し認識し意識しているでしょう。その場合、走っているヒトの思いの中で、「走る」とは「走られる」とも言えるような気がします。「走られる」という言い方は、今まで見聞きした覚えがありません。みなさんは、どう思われますか？ 日本語には方言がありますから、「走られる」という言い方が、「走る」の活用形として何らかの意味を成し、違和感を覚えない方がいるとしても、全然不自然ではありません。たとえば、尊敬語や丁寧語として「走られる」という活用形が使用されている地域が、この国にあっても不思議ではありません。

尊敬語として「走られる」という言い方をするヒトたちがいるとします。その場合の「走られる」のは、「あなた」あるいは「あのお方」でしょう。「走っていらっしゃる」という感じでしょうか。この「走られる」における「言説の主語・言説の視点・観測者の位置・観測する者とされる者との関係」はどうなっているのでしょうか。個人的には、「言説の主語・言説の視点・観測者の位置・観測する者とされる者との関係」といった、もっともらしく小ざかしげな言葉とイメージで処理できることだとは思えないのですが。ただ、「られる」に含まれている「尊敬」と「受身」が「身を任せる＝もてあそばれる」でつながるような気がして、とても興味があります。

それはさておき、形式上＝形態上は、「走る＝走られる」「to run = to be run」となります。しかし、「走られる」は破格っぽいし、「to be run」において、run は自動詞の「走る」ではなく「運営する・経営する・作動させる」という他動詞の受動態とみなされてしまいます。「走る＝走らされる」「to run = to be made to run」とすると、ここで言いたい意味にはなりません。「走らされる」ではなく、あくまでも「走られる」という受身の意味を問題にしているのです。

そういう「言い方・言い回し」がないのなら、そういう「こと・もの・状態・行為」はない、という考え方もあるでしょう。でも、それはレトリックというトリック、言葉の綾という「ありやりや」とらわれているだけだと思います。「走られる」という言い方

でイメージしているのは、「走る・to run」の主体が、「何か・誰か・何らかの状況」によって「走らされる・to be made to run」という意味合いではありません。そうではなくて、「走る」という行為・動作が「見られている」「to be seen running / to be seen to run」、あるいは「視点・視座・主客・主述」といった「フィクション・捏造された話・筋・経路・習性・意識・思考・知覚・思い」の枠外にある、と言いたいのです。

*

ややこしいですね。単純化してみましょう。

今、目が覚めた状態でAさんが走っています。Aさんは、自分が走っていることを自覚しています。そのAさんは、たぶん、自分が走っているさまを思い描いているからこそ、走っていると自覚している、つまり思っている。背後へと飛び去っていく風景、耳に聞こえる風を切る音、露出した肌で感じる空気の流れ、次々と変わるまわりの匂い、舌で感じる渴き、あるいは額から頬を伝って口に入った汗の味、体内の諸器官が激しく機能している気配。そうしたさまざまな情報が脳で処理されて、自分が走っていると感じている。同時に、そういう自分を「思い描いている」。簡単に言うと、自分は走っていると思っている＝意識している。

一方、頭の中では、いろいろなものが浮かんだり消えたりしている。体でもさまざまなものが感じられたり、体感的な記憶としてたちあらわれる。無我の境地とか無我夢中というのは、走った後の記憶＝追想＝後知恵だと思います。走っている最中には、話し言葉や書き言葉や表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語や音声（発声）や音楽や合図や映像や図像や標識や記号や信号などが、頭と体に「浮かんでは消える」という状態にあるような気がします。このブログで用いている言葉とイメージを使うなら、多種多様な「夢の素」がぱちぱちと弾けている、という感じです。

またもや、ややこしくなりそうなので、簡単に言います。Aさんは、走っていると自覚すると同時に、走っている自分を「見ている」「to see O running / to see O run」のです。それが「走る＝走られる」「to see O running / to see O run = to be seen running / to be seen to run」です。

*

以上の状態を仮定した場合、「自分が見ている＝自分が見られている」視点・視座・主語・主体といった言葉やイメージは、意味を成さないと思います。上で、便宜上、「(Aさんは) 走っている自分を『見ている』」と書きましたが、Aさんには、ほぼそんな感じがするだけで、「見ている＝見られている」主語と「見ている＝見られている」対象はなく、「見ている＝見られている」という行為＝動き＝身ぶり＝状況＝光景があるだけなのです。「自分＝主体」と「対象＝客体」がない、匿名的で非人称的でニュートラルな「行為＝動き」というイメージです。

*

次に、Aさんがうとうとしながら自分が走っている、あるいは、自分以外のヒトや動物や物（たとえば自動車）が走っているさまを思い描いた＝思い浮かべた＝思い出したと仮定してみましょう。Aさんが寝入って夢を見ていると仮定してもいいです。Aさんが、目を覚ましていてテレビで何かが走っている映像を見ている、誰かから何かが走っている話を聞かされている、何かが走っている場面を小説で読んでいる、といった場合を仮定してもかまいません。「差異・際・あわい」はないからです。

いずれの場合にも＝条件下にも、さきほどの「走る＝走られる」「見ている＝見られている」という行為＝動き＝身ぶり＝状況＝光景があるだけの状態を意識している。そんなふうにあります。考えている＝思っているだけです。以上述べたこと全部が、個人的に「いただいている＝だいている＝いだかされている＝だかされている」、数々の「夢の素」がぱちぱちと弾けているさなかに、イメージした断片を「継ぎ接ぎした＝パッチワークにした」、「手仕事＝ブリコラージュ＝織物＝テキスト」となって、今、みなさんのお読みになっている。そんなふうには言えると思います。

*

今回の記事を書きながら、ずいぶんたくさんの「夢の素」＝粒が炸裂しました。特に、印象に残ったのは、「ジル・ドゥルーズ」「フェリックス・ガタリ」『機械状無意識』「モーリス・ブランショ」『文学空間』『来るべき書物』「宮川淳」『引用の織物』『紙片と眼差のあいだに』『鏡・空間・イメージ』「豊崎光一」『余白とその余白または幹のない接木』「ミシェル・フーコー」『外の思考』「クロード・レヴィ＝ストロース」『野生の思考』です。残念ながら、『』でくくった書名を持つ書籍はもう処分して、うちにはありません。だからこそ、「夢の素」なのです。いや、たとえ手元にあったとしても、ものぐさでアホ

な自分にとっては、「夢の素」でしかないでしょう。

これらの「夢の素」は同名の固有名詞や書名とはほとんど関係がないかもしれません。あるかもしれません。どちらとも言えないかもしれません。仮に関係があっても、ごく少しだけかもしれません。また、みなさんがいっていていらっしゃる同名の「夢の素」とも重なる部分がないかもしれません。あるかもしれません。どちらかだと言うべき話ではないのかもしれません。

「夢の素」とは、きわめて個人的なものです。わたしの夢は、あなたには見えません。逆も同じです。でも、ヒトは同じような身ぶりや仕草や行為や合図や目くばせをする時があるようにも思えます。そうした匿名的でありながら具体的な「動き」があちこちで反復されているとしたら、それはそれで美しい光景だと思います。

*

なお、「する＝される」「見ている＝見られている」という、今回のお話に興味をお持ちになった方に、ぜひ目を通していただきたい記事を以下に紹介いたします。

「なる (6)」2009-03-31、「なる (7)」&「なる (8)」2009-04-01、「なる (9)」&「なる (10)」2009-04-02、「たとえる (3)」2009-04-04 です。キーワードは、「なりきる・なりきり」です。今挙げた記事は、今回の記事よりも、読みやすいかもしれません。お時間のある時に、お読みいただければ嬉しいです。

10.01.24 夢の素 (4)

◆夢の素 (4)

2010-01-24 14:22:19 | さくぶん

ある作家の作品を読んでいると、その作家の「夢の素」らしきものを感じる場合があります。自分の場合には、複数の作品を読んだことのある作家はあまりいません。例外はスティーヴン・キングです。多作な作家ですから、本屋さんに行けば、たいてい何冊もの作品に出会えます。

処分してしまったため、手元にあるキングの本は数冊しかないのですが、文庫本の後書きなんかに記してある作品リストでタイトルを眺めていると、内容が断片的によみがえってきて、「ああ、あれがキングの『夢の素』だ」と思い当たることがあります。たとえば、雨です。冒頭に雨、それも暴風雨の描写がある作品が多い気がします。

キングファンだと自称なさっている宮部みゆきさんもそうです。2人に共通するのが、雨と火と少年（or「少女」とされながら説話的要素としては「少年」の機能を果たしているキャラクター＝登場人物）でしょうか。キングの場合には、子ども、特に男児にいたずらをする性的虐待者がよく出てきますが、それも「夢の素」だという気がします。「サバイバー」である自分は、その「夢の素」に敏感に反応＝感応＝感光＝共振します。これもまた、きわめて個人的＝ひとりよがりな＝妄想的なものですけど。

雨が降ると物語が始動する。性的虐待者 or 変質者（※これって差別語でしたら、不快な思いをされた関係者の方々にお詫び申し上げます）がストーリーの展開を促してくれる。キングの作品には、そうした不思議な「癖」があります。プロの文芸批評家なら、それだけの材料で論文を1本書けるでしょう。

*

そうした作家の「癖」＝「夢の素」に注目する文芸批評のやり方があります。学生だったころに、よくその手の本や論文を読みました。小説や詩よりも、小説や詩を論じた批評のほうが好きで、作品をそっちのけで批評ばかり読んでいました。そのあげく卒論には、ロラン・バルトがバルザックの中編小説『サラジーン』を批評した『S/Z』を批評する、という屈折した方法をとりました。

指導教授が理解のあるヒトだったので、その方針でオーケーになり、1週間ばかり、それこそ昼も夜も区別できないほど熱中して書き上げました。押入れに積んである段ボール箱のどれかに、卒業論文のコピーが入っているはずです。

作家の「癖」＝「夢の素」に注目する批評家にも、いろいろな「癖」＝「夢の素」あります。作品の語り方＝説話の方法に注目するとか、作品に頻出する語にこだわるとか、作品にあらわれるイメージを体系化して理屈をつけるといったやり方が頭に浮かびます。

ガストン・バシュラールというヒトの批評もおもしろかったです。よく覚えていないのですが、確か火・水・土みたいなものをキーワードに作品を論じるのです。批評とは、「こじつける」作業が基本となりますから、その「こじつけ」の奇抜さが醍醐味というか面白さとも言えます。ジャン・リカルドーというヒトの「こじつけ」もアクロバティックで、おもしろいというより、馬鹿みたいにおかしかった記憶があります。手品みたいなのです。

*

そうした批評家の批評行為を始動させるのも「夢の素」＝「癖」＝「方法」なんです。

話を飛躍させると、ヒトは誰もが「夢の素」＝『『思い・思考・空想・妄想・錯覚』を促してくれる要素』をいただいているように思います。「夢の素」が、動作・行動へと「移る＝変わる」。「転写されて」動きになる。そんな感じです。

*

話を飛ばします。

夢にもいろいろありますが、幻覚も「夢＝重い思い＝多義的で重層的な思い」のうちのひとつです。抑うつと一緒に暮らしている身ですので、ドクターからお薬を処方してもらっています。ドクターに言わせると、とてもお薬に弱い体質なんだそうです。

ある日、処方せんを持って薬局へ行き、お薬を買って家に帰ってきて、あまりにもふ

さいだ気分だったので飲んだところ、自分では覚えていないのですが、親が言うには、壁を伝わりながら家の中を這い回っていて、居間でひっくり返ったそうです。頬っぺたをつねっても、補聴器をしたままの耳に向かって怒鳴っても、まんじりともせず、5時間ほど爆睡（爆酔？）状態にあったらしいのです。もちろん、そのお薬は捨てました。後日ドクターは、「ええっつ？ あんな「なるい」やつで、そうなっちゃったの？」なんて言って、あきれていました。

*

まだ見たことのない甘美な、あるいは激烈かつ刺激的な夢を見たくて、お薬を飲むヒトたちがいます。昔からいたようです。で、その体験を書いて残しているのです。さまざまな形式のものがありますが、次のような「固有名詞」が「夢の素」となって、思い出されます。「トマス・ド・クインシー」『阿片服用者の告白』「オルダス・ハクスリー」『知覚の扉』「ウィリアム・バロウズ」『裸のランチ』「アーヴィン・ウェルシュ」『トレインズポットティング』。

また、直接には関係ないのですが、その水脈の水先案内人となってくれた「由良君美」『椿説泰西浪漫派文学談義』。自分からあえて「夢」を求めたわけではないエピソードをつづった「澁澤龍彦」『都心ノ病院ニテ幻覚ヲ見タルコト』。この記事を書きながら、そんな「夢の素」がぱちぱちと弾けます。他人事のように、ただ今、その線香花火のささやかな炸裂を見ているところです＝見られているところです＝傍観しているところです。けだるくて、とてもいい気分です。あっ、「高山宏」も弾けました。懐かしい。

*

話を戻します。いや、戻っていくのか、飛んでいくのか、ずれていくのか、わからなくなりました。

*

「うつせみのくら」と「うつせみのうつお」で、自分がこれまで書いてきた数々の記事を読み直すと、「夢の素」だらけ、それも金太郎飴状態、つまりワンパターンギャグであることがよく分かり、恥ずかしくなります。全然、芸がない。同工異曲＝変奏＝変装＝変

相=返送=変造というやつです。それも、ひとりでしこしこやっていますから、笑点の仲間受けギャグより憐れな、ひとり受けギャグ。ひとりツイッター。「うつせみついたうつせみのおと」(※「ブログ廃人と呼ばれて」2009-12-08 をご参照願います)。つぶやき 屍蠟=耳聾=痔瘻。

そろそろ、打ち止めにした方がいいのかもしれない。

*

久しぶりに澁澤龍彦のエッセイが読みたくなりました。押入れのふすまを開けて、段ボール箱を漁ってみます。初めて泰西へ目を向けるきっかけを与えてくれた「夢の素」。

*

La chair est triste, hélas ! et j'ai lu tous les livres.

Fuir ! là-bas fuir !

学生時代に暗唱させられた詩の冒頭が口をついて出てきました。こういうのも、「夢の素」です。

là-bas あなたへ、fuir 逃げよう――。いや、逃げたい。消えたい。

ma · larme · mais

ま=間=真=魔=目=身・ら=裸=螺=羅=喇=螺・る=流=縷=弄=榴=瘤・め=目=芽=女=奴=罵

ゆ・め・の・も・と

yu・mai・nos・mot・taux

こういうのって、あやういです。決して、よくはありません。よい兆候ではありません。そう、おもいます。あす、違うドクターを訪ねてみます。

*

やっぱり、そろそろ、打ち止めにした方がいいのかもしれない。

何見てた まなこ開けた ネコに聞く

夢の素 さらし続けて うつおぎに

うつせみの 声にもあきて あなたへと

卒塔婆（そとば）立て 耳を澄ませど 音はなし

つぶすなよ ふみにもやどる たまのこえ

以前なら あやめたブログ 夢をまけ

10.02.02 うつせみのたわごと-1-

◆うつせみのたわごと -1-

2010-02-02 09:51:32 | さくぶん

なにかのかわりに、なにかではないものもちいる。かわりもちいるかわりに、たちばがかわる。そうなると、もう、もてあそばれるしかない。つかうのではなく、つかわれるがわにみをおくことになる。

*

ことわりのないところでことわる。いうまでもなく、ことわりはない。わりきれない。

*

ことをわける。わける。わかる。かわる。おそらく、そのあわいはせまい。わけがわからなくなるほど、せまく、ちかい。

【追記上記の戯言につづられていることばたちに身をまかせてください。どのようにも取れると思います。意味や解などありません。というか、無数にあるでしょう。そうやって、たわむれてみませんか。参考としての、ことわりをお望みの方は、グーグルで、“うつせみのくら” “何かの代わり”、“うつせみのくら” “かわる”、“うつせみのくら” “ことわり”、“うつせみのくら” “あわい”、という具合にダブルのキーワードで、4回検索してみてください。

そのさいには、“○○”と括弧でくくるのをお忘れならないように、ご留意願います。今、挙げた4組のキーワードを、それぞれそのままコピーペーストして検索なさるのが、てっとり早いかもしれません。ヒットするのは、長い文章が多いと思います。関係ありそうなところだけ、拾い読みしていただくだけで十分です。こんな戯事にお付き合いくださる方がいらっしゃれば、うれしいです。】

【注：現在は「うつせみのくら」という過去のブログ記事を再録したサイトがないので、上記の検索は意味をなしません。お詫び申し上げます。】

10.02.02 うつせみのたわごと-2-

◆うつせみのたわごと -2-

2010-02-02 14:56:24 | さくぶん

まことのかたこと。かたことのまこと。

*

まことちゃんがかたことをいう。からだをゆらすたびに、かたことかたことと、はこのなかのあめだまがなる。たまがころがる。かたり、かたり、こと、こと。

*

かたことのからことばで、まことのことをのべようとする。まことにもどかしい。かといって、くにのことばで、まことのことをかたるのも、もどかしい。まことは、まことにまことなのか。そう、みずからにとうのがまこと、いや、かたことなのかかもしれない。まことは、くちぐせ。とんでもない、くせもの。

*

かたられるはなしのかたはしを、みみにし、かたはしからわすれていく。それで、すべてをきいたことにする。なんといわれたと、きかれたら、おぼろにおぼえているところをつくり、おぎない、かたればいい。それしかできないのが、みのほど。それなのに、もっとできると、ひとはおもいこんでいる。いきかせている。

【追記上記の戯言につづられていることばたちに身をまかせてください。どのようにも取れると思います。意味や解などありません。というか、無数にあるでしょう。そうやって、たわむれてみませんか。参考としての、ことわりをお望みの方は、グーグルで、“うつせみのあなたに” “まこと”、“うつせみのくら” “揺らぎ”、“うつせみのあなたに” “からことば”、“うつせみのくら” “かたる”、という具合にダブルのキーワードで、4回検索してみてください。

そのさいには、“○○”と括弧でくくるのをお忘れならないように、ご留意願います。今、挙げた4組のキーワードを、それぞれそのままコピーペーストして検索なさるのが、てっとり早いかもしれません。ヒットするのは、長い文章が多いと思います。関係ありそうなところだけ、拾い読みしていただくだけで十分です。こんな戯事にお付き合いくださる方がいらっしゃれば、うれしいです。】

【注：現在は「うつせみのくら」という過去のブログ記事を再録したサイトがないので、上記の検索は意味をなしません。お詫び申し上げます。】

10.02.03 うつせみのたわごと-3-

◆うつせみのたわごと -3-

2010-02-03 09:27:19 | さくぶん

なぞ。なにかわからない。だから、なぞる。くうにゆびでなぞる。いま、ここに、ないからなぞる。つちやかべに、えをなぞる。あるいは、かく。ひっかく。なすりつける。ぬる。そうして、おもう。おもいをめぐらす。おもいをえがく。

*

なぞ。なにかわからない。だから、なぞる。くうにおもいでなぞる。いま、ここに、ないからなぞる。つちやかべやものに、じをしるす。うちわでしかわからない、ことばともんじ。よそのものには、おしえない、なぞ。うちわだけのなぞ。やがて、それがなかまをしるようになる。おきて。やぶったものは、とがめられ、むくいを受ける。ことばがちからをえる。ひとにさしずし、もうしつけるようになる。

*

しる。しるをかける。つばをつける。なづける。なつける。てなづける。なわをはる。なわばり。それでも、なつかない。このほしをてなづけるのは、むずかしい。どんななをつけても、どんなにながふえても、なつかないものがある。それをわすれる。それをしらない。だから、なつけたものとする。または、このさき、なつくものとする。いのり。ねがい。おまじないのことば。しるしるちしる、しるかけて、つばかける――。ないから、かける。むなしいふるまい。

*

なつかしいところ。いごこちのいいところ。ただしいものにみちたところ。おのれのよりどころ。ささえ。みなもと。おもいのうちで、つねに、かえっていくところ。うち。なか。いえ。むら。むれ。もどることのできる、ちとつちがあるところ。なかまや、はらからや、おやのいるところ。だが、かえれないところがある。なつかしいが、もどれないところ。とおいむかしにあった、といわれるところ。あったと、されるところ。そこは、うつつには、ないからこそ、あるとしんじる。よそのものちをながしても、まもるべき、つちとち。みなもととは、ないにわ。ないにわを、いのちをかけてしんじる。むなしいふるまい。かなしいさが。

*

みなもと。にわ。かえれない。うつせみにはないから。うつお。うつせみのから。うつせみのあな。うつせみのな。うつせみのあなた。うつせみのないにわ。ひろいひろいにわ。ほしほしのうかぶにわ。はて。ないはない。こころとおもいにあるだけ。しんじるしかない。な。ことのは。

【追記上記の戯言につづられていることばたちに身をまかせてください。どのようにも取れると思います。意味や解などありません。というか、無数にあるでしょう。そうやって、たわむれてみませんか。参考としての、ことわりをお望みの方は、グーグルで、“うつせみのくら” “なぞる”、“うつせみのあなたに” “おもい”、“うつせみのくら” “領る”、“うつせみのくら” “名付ける”、という具合にダブルのキーワードで、4回検索してみてください。

そのさいには、“○○”と括弧でくくるのをお忘れならないように、ご留意願います。今、挙げた4組のキーワードを、それぞれそのままコピーペーストして検索なさるのが、てっとり早いかもしれません。ヒットするのは、長い文章が多いと思います。関係ありそうなところだけ、拾い読みしていただくだけで十分です。こんな戯事にお付き合いくださる方がいらっしゃれば、うれしいです。】

【注：現在は「うつせみのくら」という過去のブログ記事を再録したサイトがないので、上記の検索は意味をなしません。お詫び申し上げます。】

10.02.04 うつせみのたわごと-4-

◆うつせみのたわごと -4-

2010-02-04 09:28:06 | さくぶん

そと。よそ。かかわりのない、ちのつながりのないものどものすむところ。よそは、うちにもいる。なかにもいる。よそをおう。だから、よそおう。これは、でまかせ。じびきにはないものは、つくり、かたる。じびきは、ことばのあとをおう。ことばは、じびきにしがわかない。じびきは、おきてではない。はなつ、つくる、かたる、あやまる、なまる、まねる、まねそこなう、まなぶ、まなびそこなう。ことばは、そうしてうまれ、うつりかわってきた。よそとあう。よそとであう。だから、よそおう。これもでまかせ。ことば

は、よそおう。これは、おそらく、まこと。

*

よそおう。ふりをする。かぶる。かわをかぶる。ばける。いのちをかけてまで、なにかのかわりをしようとするものもいる。とらのかわをかぶって、ばけるものもいる。とらのかわで、こしをおおうものもいる。とらをよそおう。とらにばける。えらそうにする。とら、とら、とら。でも、とらではない。かわりは、あくまでも、かわり。にせたもの。にせもの。ほんものにみえるものを、よそおう。そうみえるだけなのに。ほんものかどうかを、しるすべはないのに。だから、だれもがかたられる。だまされる。それでいて、さしてさしさわりがいいから、よはつづく。

*

ほんものとみえるものは、かわりのもの。かりのもの。かりそめのさまを、ひさしいものとする。ものとする。そうきめる。みなで、そうだときめる。すると、そうだということになる。だから、にせる。にせようとつとめる。こうして、よは、にせものだらけとなる。にせものだらけと、かす。かす。かする。ばける。かりのすがたを、みあやまる。ほんものとみあやまる。さしてさしさわりはいい。よはつづく。

*

あやまる。はずれる。ずれる。まちがえる。ごまかす。つくろう。それが、ひとのつね。さが。あやまっても、あやまらない。ずれても、とりつくろう。わすれる。なかったことにする。ぐあいのわるいことは、なかったことにする。そのうち、みんなわすれる。あやまらない。あやまらないはず。たがわれないはず。そうおもいこむ。うたがわれない。それが、ひとのつね。さが。このほしにすむ、ひととよばれる、はずれ、ずれた、いきするものつね。さが。

*

さがしい。こざかしい。さがしても、このほしには、ほかにいそうもない。おのれの

おこないを、はずべきものとおもう、さかしさがありながら。ふりかえることができるはずだ、とおもうころがありながら。はずかしがるけはいがない。はずかしい。かしこまるそぶりもない。わるがしこい。

【追記上記の戯言につづられていることばたちに身をまかせてください。どのようにも取れると思います。意味や解などありません。というか、無数にあるでしょう。そうやって、たわむれてみませんか。参考としての、ことわりをお望みの方は、グーグルで、“うつせみのあなたに” “そと” “うち”、“うつせみのくら” “よそおう、” “うつせみのあなたに” “にせもの”、“うつせみのくら” “ずれる”、という具合にダブルやトリプルのキーワードで、4回検索してみてください。

そのさいには、“○○”と括弧でくくるのをお忘れならないように、ご留意願います。今、挙げた4組のキーワードを、それぞれそのままコピーペーストして検索なさるのが、てっとり早いかもしれません。ヒットするのは、長い文章が多いと思います。関係ありそうなところだけ、拾い読みしていただくだけで十分です。こんな戯事にお付き合いくださる方がいらっしゃれば、うれしいです。】

【追記への追記当ブログの左にある「メッセージを送る」機能をつうじて、ある読者の方からコメントをいただきました。追記にあるキーワードをつかってのグーグルの検索には、どういう意味があるのか。要約すると、そうしたご質問でした。メールアドレスが添えてなかったので、この場を借りてお答えします。目的は2つあります。

1) あやしげな記事の解説のため。いわば参考資料へのご案内です。

2) 実は、「マラルメ」の「サイコロ」を「ふっている」のです。読者のみなさんと一緒に、ひらがなだらけのたわごとをめぐって、「詩作＝思索＝試作＝失策＝失錯＝失作」ごっこができたらなあ。そんな思いで、検索エンジンという「賭博装置＝スロットマシン」の検索ボックスに、キーワードという「さい＝コイン」を放り投げての、「サイコロあそび」をしているのです。「読む＝詠む＝与む＝予む＝余む＝闇む」ことは、「書け＝掛け＝翔け＝懸け＝駆け＝賭け」です。

つまり、「どんな『さいの目＝検索結果』が出るのかな」という、わくわく感を楽しんでいるのです。検索結果で出てきた言葉たちと、記事のたわごととの、目くばせや絡み合いや取っ組み合いやシカトのし合いがおもしろくて、はまっています。言葉って、け

な気でかわいいです。いとしいです。

万が一、この馬鹿馬鹿しいお遊びに関心をお持ちの方がいらっしゃいましたら（「馬鹿馬鹿しいお遊び」とつづりながら、記事を書いている本人は、いたって本気なのですが）、[グーグル](#)で、“うつせみのくら” “マラルメ” “サイコロ” を、トリプルのキーワードとして検索してみてください。

ヒットした検索結果の表示ウィンドウにざっと目を通すだけでも、「いったい、こいつは何をやっているか」の感じがつかめると思います。「とちくるっている」という感想をお持ちになれば、「大当たり」です（とはいうものの、本気なんです。正気だとは申し上げる勇気も根拠もありませんけど、本気です）。ご理解いただけましたでしょうか。】

【注：現在は「うつせみのくら」という過去のブログ記事を再録したサイトがないので、上記の検索は意味をなしません。お詫び申し上げます。】

10.02.06 うつせみのたわごと-5-

◆うつせみのたわごと -5-

2010-02-06 09:17:16 | さくぶん

げん——。きになることば。からからきた、ことば。やまとことばにまけず、おなじおんがおおいのが、からことば。やまとことばとからことば。うちとそと。なかとよそ。ことばのうえに、ことばはない。ことばのしたに、ことばはない。ただ、ひとりひとりにとって、なつかしいことばがあるだけ。みみにこちよいことば、したのうえをよくすべることばがある。こころなごむ。それでいて、みみにさわり、したにざらつくことばを、いみきらう。よそのことばを、いみきらう。みくだす。わかものことばを、いみきらう。そしる。ひとのつね。

*

げん・幻。げんかい・幻界。まぼろしのすむ、ひろいところ。まぼろしのある、にわ。まぼろしのいる、ば。ま——。おもいことば。いくとおりに、みみにひびく、おん。まをほろぼす。間をほろぼす。まほろぼろし。なまって、まぼろし。これ、でかませ。ちかくにあり、ちかしいものとなったかにみえる、とおくのをむねにいだく。へだたったものをだく。いまーじゅ。いめーじ。image。これも、からことば。

*

まぼろしは、ひとりひとりがいだく、ゆめのつぶ。ばちんとはじけ、ひをはなつ。まぼろしは、むれやなかまで、いだくものではない。ゆめは、ひとりでみるもの。ねむりのなかでみる、ゆめ。きたるべきものにかける、ゆめ。ひとつとして、おなじゆめはない。なんどもみるゆめでさえ、ずれている。まをほろぼす。間をほろぼす。魔をほろぼす。真をほろぼす。麻をほろぼす。目をほろぼす.....。

*

ひととひとは、はなれている。ちかくにみえるひとさえ、へだたっている。ちかくにいるのではない。ちかくにみえるだけ。ゆめも、かけはなれている。だから、ゆめにかける。ゆめに、はしをかける。ひとは、つねにうつりかわる。ゆめうつつは、かわりつつあるのが、つね。もどることはできない。かえることはできない。だから、いのる。ねがう。ごまかす。いいきかせる。むれでいのれば、かなうとしんじるものが、いかにおいことか。あさましい。きなくさい。せめて、ひとりでしんじたい。

*

魔をほろぼす。まほろぼしば。まをほふるば。まほろば。まほら。まほ。まほう。みな、でまかせ。みな、でたらめ。そうやって、ことばはうつろってきた。まちがう。まちがえる。まをちがえる。まがさす。まがう。まがよう。まざる。まがごと。まがまがし。まがる。ゆめのなかでは、どんなことでもおきる。おもいのうちは、とりとめがないのがつね。まがいもの。にせもの。かわり。とはいえ、ひとは、まがいをしんじるしかな

い。まぼろしを、しんじ、よりどころとし、いきるしかない。

【追記上記の戯言につづられていることばたちに身をまかせてください。どのようにも取れると思います。意味や解などありません。というか、無数にあるでしょう。そうやって、たわむれてみませんか。参考としての、ことわりをお望みの方は、グーグルで、“うつせみのくら” “まぼろし” “間を滅ぼす”、“うつせみのあなたに” “だく” “だかれる”、“うつせみのあなたに” “夢の素”、という具合にダブルとトリプルのキーワードで、4回検索してみてください。

そのさいには、“○○”と括弧でくくるのをお忘れならないように、ご留意願います。今、挙げた4組のキーワードを、それぞれそのままコピーペーストして検索なさるのが、てっとり早いかもしれません。ヒットするのは、長い文章が多いと思います。関係ありそうなところだけ、拾い読みしていただくだけで十分です。こんな戯事にお付き合いくださる方がいらっしゃれば、うれしいです。】

【注：現在は「うつせみのくら」という過去のブログ記事を再録したサイトがないので、上記の検索は意味をなしません。お詫び申し上げます。】

【後記今回のたわごとで「幻界」が出てきました。実は、「たわむれる」2009-08-11と、「こんなことを書きました（その14）」2010-01-05で述べている、「10の『げん』について各10本の記事を書く」という途方もない計画が頓挫したことが、未だに気になっていました。いわばその罪滅ぼしとして、規模を大幅に縮小し、ささやかながら「10の『げん』について計10本のたわごとを書く」つもりなのです。

そう思い立ったのは、Hさん—グーグルで、“うつせみのくら” “Hさん”をダブルのキーワードにして検索なされば、どのようなお方なのかお分かりになると思いますが、こころやさしい読者のおひとりです—から、「あなたのブログがgooの評判分析で、ネガティブになっていること、知ってんの？別に気にすることは、ないけどさ」とメールをいただき、「えええつつ！？」と驚き、反省したからです。

このブログサイトを間借りさせていただいているgoo様の「評判分析」（※リンクが貼ってありますのでクリックしてみてください）にある、検索ボックスに、うつせみのあなたにをキーワードに検索なさってみてください。Hさんから教わったとおりに、自分も上述のサイトで検索してみましたが、確かに、「えええつつ！？」でした。「評判

分析」がどういう仕組みになっているのか存じませんが、素直に反省いたしました。そうですね、計画が頓挫したままですもんね。ついでに、うつせみのくらをキーワードに検索すると、またもや「えええつつつ！」なのですが、こちらについては「人それぞれ」ということで、参考にさせていただくとどめます。

というわけで、以下に 10 の「げん」なるものを見取り図をコピペしますので、ご参考にしていただければ幸いです。

> 「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・(隔たったものを) 近くする・知覚する」

= 「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」

= 「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ(全・空・虚)をうつ・うつうつ」

= 「げん・限・限界・限度・境目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」

= 「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」

= 「げん・Gen(※ドイツ語)・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」

= 「げん・眼・がん・まなこ・め・見(げん・けん)・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」

= 「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす・まいりました」

= 「げん・滅・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこ

べ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減=増・無限小=無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・0・〇・まあるくおさめまっせー・輪・和・わ・わっ」

=「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でっけー・うへーっ・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ・わけわかんない」

まさに、「わけわかんない」ですよね。ひとさまから見れば、「こいつ、とちくるっている」としか思えないことは、このアホでも、おぼろげながらわかります。でも、本気なんです。はい。そんなわけで、今回を第1弾とし、上記の見取り図にしたがって順次たわごとをつづっていきます。

私事で恐縮ですが、介護をしております親とこの親不孝者ともども、このところ心身の調子が良くありません。いやー、寒いのはつらいですね。早く暖かくなってほしいものです。しんどいときには、ときおり、ネコ（※うちにいる猫の名前です）を相手に「かつおぶしだよ人生は」を歌い、なぐさめてもらっております。YouTubeの字幕を見ながら、難聴の耳で聞きおぼえた、調子はずれの歌なのですが、ちゃんと聞いてくれるんです。やさしい猫なんです。

で、更新ペースはこれまでより、だいぶ落ちると思いますが、記事は書き続けますので、どうか、よろしく願い申し上げます。】

10.02.07 うつせみのたわごと-6-

◆うつせみのたわごと -6-

2010-02-07 08:58:26 | さくぶん

げん——。きになることば。からからきた、ことば。ことだまは、おそれおののくものに、はたらきかける。おのれのでだてとしよう、おもわくをもって、ちかづくものをあいてにすることはない。このしまじまにくらすものことばだけにやどると、だれがいったらうか。ことばは、ひとをえらばない。たまも、ひとをえらばない。ひとしいのが、ひと。ひとは、みなひとしい。ことばも、ことごとくひとしく、ことなることはない。ことなるのは、かたとかたちだけ。ことばは、ひとしく、ひとにはたらきかける。

*

げん・言。げんかい・言界。のっぺらぼう。ぺらぺら。ひらひら。はっぱ。ことのはし。もの、こと、ありよう、みさかいなくはりつく。もっとも、はりつけるのは、ひと。おととして、こえとして、はなち、はなすのも、ひと。もんじとして、しるしとして、かき、ひっかき、ぬり、こすりつけるのも、ひと。なぞり、えがき、ほりきざむのも、ひと。このほしでひとがきえても、きずあととして、のこる。いしころのように、ものとしてのこる。

*

のっぺらぼう。ななし。おと、こえ、かたち、もんよう。よむのは、ひと。うたうのは、ひと。ことこまかに、ことわけするのも、おそらく、ひとだけ。げんかい、幻界、言界。おなじ、おと。そうよむのは、ひと。おなじ、おと。おそらく、おなじおもい。すくなくとも、ちかいおもい。そのあわいはあわい。だから、おもいはおもい。さまざまなおもいが、おなじおとにかさなる。おびただし、おもいとおとが、かさなりあう。だから、おもい。

*

のっぺらぼう。ぺらぺら。べらべら。さわがしい。やかましい。だが、おそらく、おとなしが、まこと。だから、つまるところは、おなじ。おとなし、おんなし、おんなじ、おなじ、とずらす。これ、でまかせ。しゃれ、じゃれ、ざれ、ざれごと、たわごと、かたこと、ところがす。ころがる、たま。たまたま、たま。たまをころがす。じびきにたより、からことばのちからをかりて、ころがす。げん・幻・言・現・限・原・源・元・Gen・眼・弦・減・絃——。ま・真・眞・間・魔・麻・摩・目・身・ma——。やはり、おもい。まこ

とのかたこと。かたことのまこと。ことたま。ことのはしに、たまをみいだし、はたらきかけられるのは、ひと。ひとりずもう。ひとりてんか。ひとりごと。ひとりわらい。ひとりしばい。ひとりじめ。このほしにすむいきものたちのなかで、ひとりだけ。

*

ことばは、すじ。くせもある。うろうろ、おろおろ。なまり、ころがり、うつろい、ふみはずし、ずれる、いや、ずれまくる。ずれることこそがつとめのように、ことばは、ずれる。おもいことばは、ずれている。どうしようもなく、ずれている。なぜだろう。どういうわけか、ひとは、ずれた。さるから、はずれた。あたまのなかで、なにかがずれたというはなしもある。ひとにひとしくそなわっている、といわれている、ことば。ひとをまねるかのように、ことばは、ずれる。ずれまくる。

*

ことばは、おもいをうつす。おもいも、ことばをうつす。つねに、ゆれ、ゆがみ、ずれながら、うつし、うつり、うつろう。それでいて、ことばは、まこととまっとうさをめざす。ところが、ことばは、まことはいうまでもなく、ほんものにも、にせものにも、まがいものにすら、なりそこねる。ひとのおもわくや、たくらみや、いのりや、ねがいをよそに、ことばはなにかのかわりとして、ある。というか、なにかのかわりとしてしか、ない。せめて、こういいたい。けなげに、なにかのかわりをつとめるのだと。いとしい。

*

ことばは、いとしい。みからでたもの。もとは、いき。いきるのいき。かく、きざむ、ぬる、しるす、つづる。もんじは、あとのはなし。もとは、あなからでるもの。あかんぼうや、うんちのごとく、ことのはは、いとしい。どれも、いきんで、あなからだすもの。あなどれない。だからこそ、いとしい。でたあとは、はなれる。かなしい。だが、なにかにはたらきかける。ちからをおよぼす。うごきをさそう。とはいえ、うごくのは、ひと。うれえぬわけにはいかない。このほしのいのちと、ゆくすえさえも、ひとのはく、ことばのちからにかかっている。ひと。ずれた、さる。はずれた、さる。くるえる、さる。むごい、さる。あやうい、さる。むやみにあやめる、さる。おやまの、さる。

*

はなに、ことばありき。はなに、ずれありき。すべては、そこからはじまった。このことは。ことのはし。ことのはじまり。

【追記上記の戯言につづられていることばたちに身をまかせてください。どのようにも取れると思います。意味や解などありません。というか、無数にあるでしょう。そうやって、たわむれてみませんか。参考としての、ことわりをお望みの方は、グーグルで、“うつせみのくら” “言霊” “嘲笑う”、“うつせみのくら” “ニュートラル、” “うつせみのくら” “経路”、“うつせみのくら” “代理の仕組み、という具合にダブルとトリプルのキーワードで、4回検索してみてください。

そのさいには、“○○”と括弧でくくるのをお忘れならないように、ご留意願います。今、挙げた4組のキーワードを、それぞれそのままコピーペーストして検索なさるのが、てっとり早いかもしれません。ヒットするのは、長い文章が多いと思います。関係ありそうなところだけ、拾い読みしていただくだけで十分です。こんな戯事にお付き合いくださる方がいらっしゃれば、うれしいです。】

【注：現在は「うつせみのくら」という過去のブログ記事を再録したサイトがないので、上記の検索は意味をなしません。お詫び申し上げます。】

10.02.08 うつせみのたわごと-7-

◆うつせみのたわごと -7-

2010-02-08 08:57:15 | さくぶん

げん——。きになることば。からからきた、ことば。からから、ものやことがはいいり、

そとうちがまじり、いまのゆたかさがある。よそものをしめだす。よそものをいれない。よそものをかえりみない。おもいやらない。そんなくになが、このさき、さかえるわけがない。そとのかたきとにた、うちなるかたきが、そとをにくめとそそのかす。にたものは、にくみあう。そっくりは、なお、にくみあう。それがうつつか。ひとのよか。あきらめよ、というのか。

*

げん・現。げんかい・現界。うつつ。うつせみ。ゆめからさめても、ひとはゆめうつつ。うつうつ。うつらうつら。うとうと。ゆめとうつつのあわいにあるのが、ひとのおもい。ひとのこころ。ひのもとでも、やみはさらない。よい、まよいは、きえない。

*

めざめる。めをさます。さとる。さととる。さ、ありととる。そうであるとする。これ、でまかせ。さもありません、とおもうだけ。さもあればあれ、いなおるだけ。さもあれ、さとる。なんと、えらそうなことば。ゆめつつ。それで、いいではないか。やまにこもる。ひをたく。けものみちをあるく。みずをあびる。だまり、ただすわりつづける。なんとみがってな。ひとりしばい。おのれだけ、すくわれようとする。あさましい。さどにおりれば、することはやまほどあるのに。すくいをもとめているひとたちが、たくさんいるのに。にせひじり。ひじり。ひをしるひと。えらそうなことば。ありえない。うそっぱち。いかにも、ひとのかんがえそうな、ことのは。ことのはし。かたこと。

*

げんかい、幻界、言界、現界。さかいはない。へだたりはない。かさなりあい、からみあい、そのあわいはあわい。いまここにあるのは、ことのは。ことのはし。現とうつつ。からことばとやまとことば。そのあわいはあわい。なつかしきは、そのひとのうまれと、そだちからおこる。うえもしたもない。ことばはならぶ。ならんでいるだけ。つづるもの。よむもの。そのあわいもあわい。げん、げん、げん。まぼろし、ことのは、うつつ。幻、言、現。ならんでいるだけ。わけるのは、ひと。ひとがいて、はじめて、わけがある。

*

うつをうつ。打つを打つ。全をうつ。空をうつ。虚をうつ。鬱をうつ。うつつ。打つ。撃つ。討つ。棄つ。うつつ。打棄つ。でじゃびゆ。déjà vu。あ、みたことがある。あ、きいたことがある。あ、ふれたことがある。あ、かいたことがある。あ、きいたことがある。あ、このおもい、はじめてではない。ぼん、ぼん。とん、とん。がん、がん。うつ、うつ。からだはから。うてばひびく、うつろなから。にく、ち、ほね、ふしぶし。はだ、すなわち、かわをのこせば、からだはからだ。かわをはった、うつわとおなじ。うてば、ぼん、ぼん。おとがする。かいのから。せみのから。へびのから。たましいのぬけがら。からをうつ。うつをうつ。どこかで、みみにしたことのあるおと。なつかしいおと。はのはらのなかで、きいたおと。まさか。まさに、ゆめうつつ。うつうつ、うつつ。それにしても、ここちよい、ひびき。めをとじ、ききいる。めざめは、いらぬ。さとりなど、いらぬ。わけも、いらぬ。

*

ふし。からだをつなぐふし。からだをくぎるふし。まをへだてるふし。ふしがながれる。うたがながれる。となえる。よむ。からをふきぬける、かぜ。こまかにふるえる、から。ぼん、ぼん。ぼん、ぼん。とん、とん。がん、がん。うつ、うつ。からだはから。うてばひびく、うつろなから。ちは、なみうつ。にくは、ふるえる。ほねは、きしむ。ふしぶしに、おととなみが、はしる。いきも、ふし。ふーっと、ふく。いきる。いきをあわせて、ふしがなみうつ。それがからだ。いきている、あかし。うつつ。うつうつ。

*

ま。まー。ma。am。om。あーむ。おーむ。あうん。あくび。まーと、くちをあげ、うまれる。あーむと、くちをとじ、なくなる。それが、うつせみのよ。よわいうつせみの、よわい。あくび。ゆめうつつのあわいで、なくなるまね。しにまね。かりのし。ねむり。ねむい。ねむる。めをつむる。しにまね。まばたき。またたくまの、しにまね。まぶた。まのふた。まなこをおおう、まなぶた。あくび、まばたき、ねむり。ひびくりかえす、かりのし。そのあわいでみる、ゆめ、おもい。

*

ねむる。かりのし。ゆめをみる。めざめる。よあけ。あさ。あらたなうつつの、はじまり。よみがえる。よみからかえる。やみからかえる。やみはおそろしい。こわい。ひのもとにも、やみがある。ひのかけにも、やみがある。いきていくみちにも、やみがある。なやみ、やまい、くるしみ。おもい、わずらう。ならば、うたおう。なつかしいおとどふしを、おもいだし、うたおう。うつせみのように。うたが、とわにながれる、としんじ、ふしをつけて、うたおう。うたう。うたあう。うちあう。それだけが、うつつ。うたおう。はなうたでもいい。おとが、はずれていてもいい。なかみなど、かんがえずに。ふしとひびきに、みをまかせ、いきのあるかぎり、うたおう。それが、うつつ。からだをはっての、ゆめうつつのあかし。

*

ゆめうつつというが、ゆめもうつつも、ひとのおもいのうちにあるかぎり、わけめ、わかれめがあるはず。ことわけ、わけは、ひとのくせ。さが。うつつは、ないものやないことを、あるとしんじるところ。ゆめのなかでは、しんじるものもこともない。あるという、おもいだけがあるところ。ゆめは、まぼろし。ひたすら、あるとしんじる、ねんじる、いのる、のぞむ、ほっする、ねがう。そのかなたにあるところ。そこがゆめ。そこが、うつつとことなるところ。おそらく。きっと。

*

ひたすら、あるとしんじる、ねんじる。これが、うつつにあるあかし。しるし。ゆめは、しんじるのかなたにある。うつつでは、ひとは、わかろう、しろうと、いのちをかける。よをわたるすべ。かせぐすべ。しあわせをてにする、すべ。さいわいをひきよせる、すべ。うでやちからをみにつける、すべ。はうつ一、はうつう、うつうつ。しかた、やりかた、てだて、すべ。すべすべ。すべからく、まなぶべし。べしべし。わがみに、むちうつ。いそがし。

*

いまのはやり。あたまのなかと、かつすべ。あたまのかわとほねをもぎとり、あはあ、わかったとさけぶ。それをつづる。よにだせば、うれる。もうかる。もうかれば、さらにもうけたい。だから、わかったとさけびながら、ぼける。おさめるべきものをわすれる

ほどの、まぬけぶり。ぼけとたわけは、かおだけにしてくれ。かつまた、はったりをきかす。それをつづる。よにだせば、これまた、うれる。さらにつづらせたい、まわりのやからが、ちやほよほめそやす。そんなわけで、しげるきぎのごとく、ことのはのかずかずを、かきちらす。なんとでもいえるのが、ことのは。はったりにはったりをかさねる。そうしてみせにならぶ、かきもののかずかず。かずかずよもすえ。いや、かずかずよもつづくか。つぎは、きれいがいのち、とか。

*

すべてがはったり。でまかせ。よせあつめ、うつし、まねて、すこしかえて、それをおのれのうんだものだと、はったりをいう。からことばのかきものを、ひとにめいじて、このくにのことばになおさせ、おのれがなおしたと、はったりをいう。そうやって、おおくかいたものの、かち。まともによみ、うけとったものの、まけ。ほねおりぞんの、くたびれまけ。もうけなし。あげくは、がんばりすぎて、うつ。うつうつ、うつつ。こう、やまをかけてでてきたのが、ぎしぎし、ぎすぎす、はぎしりか。うふうふ。とはいえ、がんばらずがんばるとは、わぎなし。どこかできいたはなしの、むしかえし。うらで、かつまたてをむすび、もうけにあずかる、ちゃっかりか。しらぬは、なみのひとびとなり。いや、うすうすしても、しんじない。しんじるのが、らく。しんじれば、すくわれる。あしも、すくわれる。あたまのなかも、すくわれる。からより、ましか。

*

ひたすら、あるとしんじる、ねんじる、いのる、のぞむ、ほっする、ねがう。それがうつつ。うつせみのよ。だから、ことのはにつられて、かりのもの、にせものをほんものとみまちがい、はったりとくちぐせを、まにうけて、よむ。でるから、よむ。きりなく、よむ。うつつをぬかし、よむ。けれども、うまくはいかないのが、よのつね。がんばりすぎたあげくに、うつせみのから。もぬけのから。なかみなし。いまは、おもいおもいは、はやらない。なかみのないかきものほど、きりなく、あきなく、うれる。だから、またかく。うつつをぬかし、かきちらす。かきなぐる。こんながいい、あきないはない。これこそ、まことのうつつのありよう。このたぐいのかきものこそが、まぼろしとことわりにみちたうつつを、うつすかがみなり。げんかい、幻界、言界、現界。ここでも、かさなる。さかいはない。そのあわいはあわい。

*

おもいは、かなう。これが、かきもののひながた。つまるところ、こんだけ一。わらいごとではない。ひとは、そうしんじる。こころより、しんじる。ねんじる。となえる。つづる。かなしき、いのり。むなしい、いのり。あわれ。それにつけこみ、あきないとするものが、いかにおおいことか。かみ、かみがみ、ほどけ、さとり、たま、あのよ、はったりをつづったかきもの、いわしのあたま。あさましい。ひとは、いのるしかない。そこに、つけいる。かたる。おもいと、ことのはは、ゆめとうつつのかけはし。せめて、そう、しんじたい。だから、そう、ねんじる。となえる。つづる。それしか、ない。できれば、ひとりで、しんじよう。むれることなく、ねんじよう。にせものに、みつぐことなく、いのろう。ひとは、ひとりで、おのれをこえたものと、ことばをかわずべき。すくなくとも、このあほは、そうおもう。たわごとなり。

*

うつつは、まことにあらず。うつせみは、まことにあらず。ひとのおもいのなかにあり。まことはかたこと。かたことはまこと。かたこと、かたこと、みずぐるまはまわる。ことごと、ことごと、かざぐるまはまわる。くるくる、きよろきよろ、ひとのまなこもまわる。おちつくところなし。おちつくわけなし。うつうつ、うつつ。あわいをうちうつ。あわいをうつつ。あわいをうつ。おとがする。ひびきあり。なつかしいふしがきこえる。うたおう。うつせみのうたを。

【追記上記の戯言につづられていることばたちに身をまかせてください。どのようにも取れると思います。意味や解などありません。というか、無数にあるでしょう。そうやって、たわむれてみませんか。参考としての、ことわりをお望みの方は、グーグルで、“うつせみのくら” “ゆめうつつ”、“うつせみのくら” “さとり”、“うつせみのくら” “あうん”、“うつせみのくら” “うたう”、“うつせみのくら” “自己啓発書” という具合にダブルとトリプルのキーワードで、5回検索してみてください。

そのさいには、“○○”と括弧でくくるのを忘れられないように、ご留意願います。今、挙げた5組のキーワードを、それぞれそのままコピーペーストして検索なさるのが、てっとり早いかもしれません。ヒットするのは、長い文章が多いと思います。関係ありそうなところだけ、拾い読みしていただくだけで十分です。こんな戯事にお付き合いくださる方がいらっしゃれば、うれしいです。】

【注：現在は「うつせみのくら」という過去のブログ記事を再録したサイトがないので、

上記の検索は意味をなしません。お詫び申し上げます。】

10.02.09 うつせみのたわごと-8-

◆うつせみのたわごと -8-

2010-02-09 09:04:35 | さくぶん

げん——。きになることば。からからきた、ことば。から、とおく、はて、はし、はしっこ、かぎり。よそやそととであう、ば。それが、さかい。さかいめ。わかれめ。きわ。へり。ふち。しきり。いま、このくには、さかいを、あたかもないものとしてみなそうとしている、くうきにみちている。あやういぞ。われ、くにを、うれえる。そういうひとたちにかぎって、よそをかえりみようとしない。それこそ、あやうい。うれえるにあたいする。

*

げん・限。げんかい・限界。うち、そと、さかい。ひとはわかる。せんをひく。なわをはる。つちをなづける。しる。ここは、わたしのもの。これは、わたしのもの。あれも、あそこも、それも、そこも、どこもかしこも、なんでもかんでも、わたしのもの。ここ、そこ、あそこ、どこも。こそあどことば。かぎりをしらない。いや、かぎりをしる、領るというべきか。いや、むしろ、かぎりをしるす、というべき。きりをしるす、というべき。きりが無い。このほしの、そとにまで、なかまをおくりこむ。そのかぎりにおいて、ひとはずれている。ずれまくっている。

*

わかる、わからないは、わく。わくぐみ。わくにきづくものもいれば、きづかないも

のもいる。また、きづくときもあれば、きづかないときもある。わくにきづいたときには、おもいのままにならない、おのれのみをなげく。きづかないときには、おのれのちからに、よいしれる。このほしをおさめているのはひとだと、おもいこむものもおおい。しる、しるす、そして、わかる、わかる。わかるがきわまると、ひとは、そうしたおごりにいたる。

*

わくにしばられていないものはいない。くさき、けもの、いしころ、そらのくも、かわのみず——。すべてが、わくにしばられ、かぎりのこちらがわにあり、さかいをこえることはない。ひとは、ことばをえたことにより、さかい、かぎり、あわい、はし、ふちという、ことのはをおもうようになった。そうしたおもいをいただき、あたりをみまわすとき、ひとはことのはのさししめすものを、うごかせるとおもいこむ。おもいのままになると、おもいこむ。ことのはが、それがさししめすもののかわりであることをわすれる。ものやことやさまと、ことのはとを、とりちがえる。そのおもいこみと、わすれは、ねぶかい。それも、ひとのかかえる、わくにほかならない。ひとは、もはや、えらぶことのできないわなに、おちいつている。そのありように、おもいをめぐらすものもいる。だが、こころにかけないものの方が、おおいだろう。

*

もうひとつ、わながある。ことのはは、ものやことやさまのかずに、おいつけないという、かぎりがあること。ことのはは、つねにたりない。つまり、はてがある。たりないのはあたりまえ。ひとがわかるからにほかならない。わけて、わけまくれば、それだけなまえがいる。ことのはがいる。しるため、しるすため、わかるためには、ことのはがいる。はてしなくわけつづけければ、ことのはのかずがおいつくわけがない。ひとは、わすれやすい。おぼえるにも、かぎりがある。わすれる。わすれると、へる。はてしなく、へる。へりにへる。だから、ひとはつねにへりにいる。いくらわけてもおいつかない、わかりえない、へりにいる。へりくつ。だじゃれ。たわごと。

*

わく。わくぐみ。ありとあらゆるいきものは、わくぐみのなかでいきている。からだのなかもわく。からだのそともわく。からだのからもわく。ひとも、おなじ。ひとのお

もいもわく。すべてのわくぐみは、うつりかわるのがつね。おそらく、ひとは、おのれのわくをずらすことができる。みずから、わくをずらすことができる。たとえば、おもいのわくをずらす。すると、それまでみえなかったものやさまが、みえるようになることもある。

*

いま、このたわごとをつづっているあほ。このあほも、わくをずらそうとしている。だから、あやしげなやまことばづくしのかきものをつづっている。つづることのはの、わくをずらす。あさはかな、たくらみ。たわけた、こころみ。あほが、あほなりに、こころをこめてつづっている。わかっていただければ、さいわい。からことばのかわりに、できるかぎり、やまとことばをもちいようとつとめる。これは、たくらみ。うちのことばにあらがいつつ、さからいつつ、つづる。いいかえるなら、うちのことばのわくのなかで、そとのことばでかたる。ややこしい。やまとことばのわくのなかで、からことばでかたるということではない。そんなこと、できっこない。うちというわくのなかで、そのわくをずらし、そとというわくをくみたてる、とでもいおうか。うちのなかのそと。へりとも、いえるかもしれない。

*

ひらがなづくしも、あほのたくらみ。おなじおとをもちいた、だじやれも、あほのくわだて。いくとおりにもとれる、あつかきものをよむことの、あつみ。おもいことのはの、おもみ。おもいおもいの、おもみ。そうした、いくえにもかさなった、ことのはっぱの、あつみとおもみのありさまを、ことのはにまってもらい、おどってもらう。それを、よむひとに、あたまだけではなく、からだで、あじわってもらいたい。あたまだけでなく、からだで、しってもらいたい。こころに、おもいうかべてもらいたい。ひそやかな、ねがい。

*

ものをかくことは、かけ、つまり、さいころをふるのとおなじ、ばくちである。かかれたもの。かけたもの。かけられたもの。かけられたものをよんだときに、どんなめがでるか、わかったものではないことを、よむひとにかんじってもらいたい。かけばよめる、よめばわかるという、うそっぱちにゆさぶりをかけたい。これも、かけ。ばくち。

むちな、かけ。あさはかな、くわだて。おろかな、ねがい。ともかく、やってみる。やるっきゃない。だから、たわごとをつづりつつ、ことばのわくを、ずらす。それにつられて、よみのわくと、おもいのわくも、ずれるのではなかろうか。あさはかな、たくらみ。ひとりよがり。ひとりずもう。だが、ほんき。ほんきだから、なおあやうい。ほんまもんやから、こわいわ一。そういわれれば、かえすことばなし。とほほほほ。

*

そと、うち、へり。ことわけはできるが、それらのあわいはあわい。すべてがへりだと、かんがえるべきではなかろうか。うちとおもっているものが、そとにみえる。そととみえるものが、うちにおもえる。すべては、ふち、へり、きわ、あわいにあるのではなかろうか。くりかえすが、そと、うち、へりと、ことわりはできる。とはいえ、あくまでも、ひとのくせ。ひとのすじ。おそらく、ひとにしかわからないもの。ねこにはねこのわけかたがある。うおにはうおのわけかたがある。とりにはとりのわけかたがある。どれがただしいというはなしではない。というわけで、すべてはへりだとおもう。これ、ことわりなり。ひとは、ひとのわくからでることなどできない。だから、へりにある。それしか、いえない。

*

よそとうちは、まがい。がせ。もの、こと、さま、すべては、へりにあるというのが、まことにちかひのではないか。へり、ふち。がけつぶち。あわい、あやうい、あぶなっかしい、はらはら、どきどき、ゆらぐ、まよう、あてにならない、ごちゃごちゃ、ごちゃまぜ。まぼろし、ことのは、うつつ、ふち。幻界、言界、現界、限界。さだかなものなし、わけなし。

*

わかる。わかる。というか、わかったつもりになる。おもいこむ。いずれにせよ、ことわりは、すっきりしている。だが、ことわりは、どこかむなし。なぜかむなし。ひとであるかぎり、わかることなしには、いきられない。わけなしには、いきられない。いきにくい。それが、ひとのさが。ひとにとって、わかることこそが、らくないきかた。へりは、あらいのば。たたかいのば。へりにみをおけば、いきにくい。いきがたい。かどがたつ。きわは、であいのば。なににであうか、わからないところ。おそろし。

*

ふちにいれば、おちつくことなし。いごこち、わるし。だから、ひとは、そと、うち、きわとわける。わけて、かたる。そして、かたよる。よそ、なか、へりとわけて、かたる。そして、かたよる。とりわけ、よそとうちは、まがいくさい。かたり、だまし、なづけ、てなずける。かたって、こころのやすらぎをえる。だが、だからこそ、ひとはへりにあるといえる。ひとは、きわにいきる。きわどし。きわなし。はなしは、ここできままる。ことのはは、なし。はなし。は、なし。はな、し。は、な、し。いくとおりに、よめるし、よめない。たわける。たわけ。たわけごと。

*

ことのはは、ことのはてにおいて、ひとのてから、はなれる。ひとが、はなしたのではない。かってに、はなれただけ。ことばは、ひとのしもべにあらず。げんかい、幻界、言界、現界、限界。いずれにおいても、ひとはあるじにあらず。おさにも、かしらにも、あらず。もてあそばれるだけ。あるじとおもいこむのは、ひとの、かって。くせ。さが。

*

やまい、けが、わざわい、おい、あしこしのおとろえ、きのふさぎ。そうしたものにみまわれるとき、ひとは、かぎり、はて、おわり、すえをおもう。このよと、あのよとのさかいをおもう。ひとであることのわくをおもう。ふちにたち、おのれではない、ことやものやさまを、おもいやる。おもいをめぐらす。うつつ、ゆめうつつ、まぼろし、ことのは。幻界、言界、現界、限界。すべてがまじりあったなかで、ひとはとなえる。おそらく、なにかのなを、となえる。ふしをつけて、となえる。うたう。とりやむしやあかんぼうが、なくように。なく。うたう。まーあ。あーむ。そのこえも、やがてやむ。なぐ。なくなる。かたわらで、ほかのひとがつきそおうと、たったひとりで、なくなる。

*

ひとがいるかぎり、かたることばがあるかぎり、ものがたりは、まだつづく。はてし

なくつづくのではなく、はてまでつづく。やがて、このほしから、ひとびとのなきごえがやむ。うたがとぎれる。いきのねが、とだえる。なぐ。なくなる。みんなして。このままゆくかぎり、おそらく、いや、きっと、ひはかげる。そして、いなくなる。いま、ひとだけでなく、このほしのほかのいきものたちもふくめ、やみにもにた、こいかげりのもとで、みながへりにたっていないと、いいきれものはいらぬだろうか。

【追記上記の戯言につづられていることばたちに身をまかせてください。どのようにも取れると思います。意味や解などありません。というか、無数にあるでしょう。そうやって、たわむれてみませんか。参考としての、ことわりをお望みの方は、グーグルで、“うつせみのくら” “きわ” “あわい”、“うつせみのくら” “近親憎悪”、“うつせみのくら” “ずれ”、“うつせみのあなたに” “杵”、という具合にダブルとトリプルのキーワードで、4回検索してみてください。

そのさいには、“〇〇”と括弧でくくるのをお忘れならないように、ご留意願います。今、挙げた4組のキーワードを、それぞれそのままコピーペーストして検索なさるのが、てっとり早いかもしれません。ヒットするのは、長い文章が多いと思います。関係ありそうなところだけ、拾い読みしていただくだけで十分です。こんな戯事にお付き合いくださる方がいらっしゃれば、うれしいです。】

【注：現在は「うつせみのくら」という過去のブログ記事を再録したサイトがないので、上記の検索は意味をなしません。お詫び申し上げます。】

【後記昨日（2月8日）に、このブログの左にある「メッセージを送る」機能経由で、コメントを送ってくださった読者の方に、この場を借りてお答えします。「うつせみのくら」内の「小品集」にあるような小説をもっと読みたい。特に、童話や子ども向けの作品がお好きだとか。そうした内容のコメントでしたね。

同様の内容のメッセージを、これまでに何通か、ほかの方からもいただきました。メールアドレスを添えてくださった方には、直接ご返事申し上げておりますが、現状では小説を書く余裕がありません。過去に書いたものが溜まっているので、それを手直すという方法もありますが、それも今はできそうにありません。ごめんなさい。でも、いつか、小説を書きたいと思いつくことが、きっとあると思います。そのさいには、このブログ（「うつせみのあなたに」）に投稿します。どうか、ご了承をお願いいたします。

いずれにせよ、メッセージをありがとうございました。ブログを書く者にとっては、フィードバックは参考になりますし、とてもうれしいものです。お叱りやご批判のことばであっても、同様です。

過去の記事の再録という当初の目的を果たし、今では更新をしていない「うつせみのくら」を訪れてくださっている方々がいることは、大きな励みにもなっています。「人気ブログランキング」では、だいぶ下のほうにありますが、goo のブログサイトで、アクセス状況を調べる機能を見ると、訪問者数、閲覧数ともに、まだ健闘してくれています。みなさまのご愛顧に感謝しております。今後とも、よろしくお願い申し上げます。】

10.02.10 うつせみのたわごと-9-

◆うつせみのたわごと -9-

2010-02-10 08:58:46 | さくぶん

げん——。きになることば。からからきた、ことば。もとをただせば、おおきなりくからきた、ことのは。ところで、ことばのみなもとを、たどろうとするひとたちがいる。そうしたひとたちの、むれがいる。なぜか、むれると、わかれるとは、ちかい。ひとは、むれると、たちまち、わかれる。みなもとは、ここ。いや、みなもとはあっち。ここ。いや、むこう。なかたがい。どういいうけなのだろう。みなもとにしろ、えだわかれたはしにしろ、よそではなくここだ、つまり、うちだ、というのは、ちがうと、このあほはおもう。うちもそもそもなく、どこもが、へり。しいて、わけることなし。ことなるものたちがであう、きわ。まじりあう、あわい。

*

ちなみに、こことは、このしまじまのことか。ひのでるもと。ひのもとのくに。それが

いつのまにか、ひのいるくにのことばのよみで、よばれている。にっぽん。にほん。やまとにあらず。ややこし。やっぱり、へりではないか。ことなることのはたちが、あわいで、まじりあったにちがいない。いまある、このしまじまのもじのつくりとしくみをみるだけでも、あきらか。ごったまぜ。ほどくに、ほどけない。ゆたか、というひとたちもいる。それで、いいではないか。もと、つまり、うちのうち、なかのなかなどない。もどるところなどない。そもそも、もどるにもどれない、かえるにかえれない。それが、ひとのさが。

*

ことばがえだわかれしていったという、ものがたりがある。おとずれたこともない、とおくに、おのれのはなすことばのみなもとがある。そこから、わかれて、ちっていった。ちるにつれて、であい、まじり、うつりかわっていった。どのことばにも、つきまとう、ものがたり。かたり。もどって、まことかどうかをしらべられない、はなし。ことばだけではない。おやのおや、そのまたおや。ちのすじや、ねっこをたどろうとする、ものがたりにも、ことかかない。みな、みなもとがきになるらしい。だが、もどれない。もどる、とは、もとほる、からきたかもしれないと、じびきにある。もとほるとは、なんのことか。ややこしい。このあほも、ひとのはしくれ。もどるの、みなもとが、きになるが、やはり、あほにはわからず。ほってもほっても、もとはほりだせない。ほっとけ、ほっとけ、ほうっておこう。

*

げん・原。げんかい・原界。からことばを、ずらしてみよう。原、源、元。もじのはなつ、ちからをうけとめてみよう。もと、みなもと、本、基、原子、元素、根っこ、ルート、泉、湧く、わく、わくわく、出る、でるでる。これ、みんな、でまかせ。とはいうものの、いま、しているはなしは、でるという、うごきときはなすわけにはいかない。こちらも、ずらしてみよう。でる。はらからでる。はらから。なかからでる。なかま。なかまはずれ。なかまわれ。うちからでる。みうち。あつまる。よる。みより。むれる。むれ。むれからでる。むらはちぶ。しっぽのないさるたちのなかまから、でる。さる。ひと。にんげん。にんじん。ずれる。はずれる。はみでる。いえからでる。いえで。いえでびと。さまよいびと。ながれもの。たびびと。たびあきんど。たびやくしゃ。しまながし。わたりもの。いっぴきおおかみ。みんな、でまかせ。それにしても、おもしろい。

*

むれをでてからも、つながりをおもんじるものたちもいる。そうしたひとたちは、ふるさとをでたのちも、たすけあいながらいきる。ときおり、おおきなあつまり、よりあいをひらくこともある。いつのひか、ふるさとやむれにかえることを、ゆめみるものたちもいる。にしきをかざる、といういいかたが、ある。おちぶれてかえるわけには、いかないのか。でるとかえるは、ふかくむすびついている。でたものには、かえるというおもいが、つきまとっている。かえることはゆめであり、つねにいただいているまぼろしでもある。そうしたうつつのなかで、でたものたちはいきている。かえるをささえに、いきてゆく。ふちとへりをわたりつづけ、いつか、ふるさとやむれに、もどることをゆめみている。

*

かえるというおもいなしに、ながれつづけるひとやむれもあるだろう。たびげいにんが、あたまにうかぶ。かつて、そうしたひとたちは、たずねるさきぎぎで、こどもにもおとなたちにも、わくわくしたきもちをわかせたのではないだろうか。まつり。はれのとき。ながれものたちが、どこからともなく、おとずれる。ながれつづけるたみのなかには、やむをえずふるさとをでることになった、とおいおやたちのものがたりを、かたりついでいるものもあるときく。いずれにせよ、あわれみをさそう。

*

でたものは、うごきにうつり、いたるところにある、そととうちとのさかいをかきみだす。であう。にらむ。みつめあう。まじる。きそう。あらそう。あやめる。かえる。つくる。つくりかえる。ほろぼす。くずす。つぶす。ずらす。ゆがめる。こわす。うむ。うみだす。さる。とどまる。ことなるものは、よそものとなり、おとずれたところで、うごきをさそい、うごきをなす。そのさまは、さまぎまだ。いずれにせよ、かきませる。かきまわす。幻界、言界、現界、限界、原界は、まじりあっている。せっしあっている。てあかのついたたとえだが、ひとはだれもが、たびびとだといえる。だれもが、ふちにあるともいえる。みなもとなし。みなが、界から界へとかってにゆききし、たびをつづける。おちつくころなし。

*

もと。ものやことが、おこるところ。きにたとえれば、ねっこにあたる。はら。いのちのめのやどるところ。ははのはら。はらからのでるところ。でるにまかせて、ずらしてみよう。はら。はらむ。のはら。しんのすけ。くさはら。かわはら。かわら。さいのかわら。さい。さいのめ。まらるめ。うなばら。こはま。おはま。おばま。はま。はまべ。うみ。うみは、このほしのいのちのみなもと、とならったことがある。うむうむ。うむ。うまれる。これ、でまかせ。だが、いえてるきがする。ははのはらのなかは、みずたまりとか。ちいさなうなばら、ではないかいのう。みずのなかでゆれる、いのちのめ。うつくしい、さま。うつくしい、まぼろし。およぐ、ちいさなちいさなこ。やがて、あなからでる。うまれる。おぎゃー。

*

しをおもう。そのとき、ひとは、もとにかえるとかんがえる。たしかに、くちたからだは、つちにもどるらしい。それが、あらたないのちのもとなる。よくみききする、ものがたり。おそらく、そうなのだろう。しぬ。なくなる。もどる。かえる。また、うまれる。いないいないばあ。うまれかわる。いきかわり、しにかわる。いないいないばあ。でるときえるが、わをえがく。ぐるぐるまわる。めまいをさそうおもい。

*

ひとは、なににうまれかわるのか。ひとは、ひととして、ふたたびうまれる。そうしんじて、うたがわれないひとが、なんとおおいことか。なんとみがってな、かんがえなのだろう。ひとは、そんなにえらいのか。ぐるぐるわっかごっこを、しんじないものとしては、あまりにもあさましいはなしに、あきれはててしまう。いきて、なお、またもや、もとをとりもどそうというのか。いやし。うまれかわるとしんじて、このよで、いやされたいのか。いやし。いじきたなし。よくぶかし。いまをしんじる。いまをいきる。それだけで、いいではないか。あほは、そうおもう。ひと、それぞれか。

【追記上記の戯言につづられていることばたちに身をまかせてください。どのようにも取れると思います。意味や解などありません。というか、無数にあるでしょう。そうやって、たわむれてみませんか。参考としての、ことわりをお望みの方は、グーグルで、“うつせみのあなたに” “かえる”、“うつせみのくら” “でる” “;あらわれる”、“うつせみのくら” “うんち”、“うつせみのくら” “チャバネゴキブリ、という具合にダブルとトリプル

のキーワードで、4回検索してみてください。

そのさいには、"○○"と括弧でくくるのをお忘れならないように、ご留意願います。今、挙げた4組のキーワードを、それぞれそのままコピーペーストして検索なさるのが、てっとり早いかもしれません。ヒットするのは、長い文章が多いと思います。関係ありそうなどころだけ、拾い読みしていただくだけで十分です。こんな戯事にお付き合いくださる方がいらっしゃれば、うれしいです。】

【追記への追記（※以下は、10の「げん」シリーズについての解説として、「うつせみのたわごと-4-」2010-02-04から再録したものです）

当ブログの左にある「メッセージを送る」機能をつうじて、ある読者の方からコメントをいただきました。追記にあるキーワードをつかったのグーグルの検索には、どういう意味があるのか。要約すると、そうしたご質問でした。メールアドレスが添えてなかったので、この場を借りてお答えします。目的は2つあります。

1) あやしげな記事の解説のため。いわば参考資料へのご案内です。

2) 実は、「マラルメ」の「サイコロ」を「ふっている」のです。読者のみなさんと一緒に、ひらがなだらけのたわごとをめぐって、「詩作＝思索＝試作＝失策＝失錯＝失作」ごっこができたらなあ。そんな思いで、検索エンジンという「賭博装置＝スロットマシーン」の検索ボックスに、キーワードという「さい＝コイン」を放り投げての、「サイコロあそび」をしているのです。「読む＝詠む＝与む＝予む＝余む＝闇む」ことは、「書け＝掛け＝翔け＝懸け＝駆け＝賭け」です。

つまり、「どんな『さいの目＝検索結果』が出るのかな」という、わくわく感を楽しんでいるのです。検索結果で出てきた言葉たちと、記事のたわごととの、目くばせや絡み合いや取っ組み合いやシカトのし合いがおもしろくて、はまっています。言葉って、けな気がかわいいです。いとしいです。

万が一、この馬鹿馬鹿しいお遊びに関心をお持ちの方がいらっしゃいましたら（「馬鹿馬鹿しいお遊び」とつづりながら、記事を書いている本人は、いたって本気なのですけど）、グーグルで、“うつせみのくら” “マラルメ” “サイコロ” を、トリプルのキーワード

として検索してみてください。

ヒットした検索結果の表示ウィンドウにざっと目を通すだけでも、「いったい、こいつは何をやっているか」の感じがつかめると思います。「とちくるっている」という感想をお持ちになれば、「大当たり」です（とほいうものの、本気なんです。正気だとは申し上げる勇気も根拠もありませんけど、本気です）。ご理解いただけましたでしょうか。】

【注：現在は「うつせみのくら」という過去のブログ記事を再録したサイトがないので、上記の検索は意味をなしません。お詫び申し上げます。】

10.02.11 うつせみのたわごと-10-

◆うつせみのたわごと -10-

2010-02-11 08:50:41 | さくぶん

げん——。きになることば。からからきた、ことば。このしまじまの、にしどなりにある、りくのはしと、そのむこうにあるおおきなりく。そこより、ずっとはるかかなたにある、りく。さまざまなことばがあるなかで、Gen（※ドイツ語）とつづり、げんとよむことのはがある。もっとも、げーんと、のぼして、くちにするのが、ただしらしい。いのちのもとのこと。

*

いきものをこまかく、さらにこまかく、わかていくと、げんとよばれるつづがあるという。いきものを、きにたとえてみよう。みきがあり、おおきなえだがあり、ちいさなえだへとわかれていく。そのみきにも、えだにも、えだのさきにも、はっばにも、はなにも、みにも、ちいさなつづがやどる。つちのなかで、はっている、おおきなねにも、ち

いなさなねにも、こまかなつぶがやどる。それぞれのつぶたちは、ほぼおなじ、げんからなりたっている。そんな、はなし。

*

げん・Gen。げんかい・Gen界。そこでは、わかれる、ふえる、うつす、つたわる、わたす、うむ、うまれる、でる、あらわれる、わく、がおこる。しくみは、うつすにあるという。うつしをつくる。そっくりをつくる。うつしまちがうことも、あるらしい。そんな、はなし。

*

げんは、いのちのもと。ちいさなちいさな、めにみえないほどの、かすかなつぶをおもいうかべてみよう。まぼろし、ことのは、うつつ、ふち、みなもと。そして、もと。幻界、言界、現界、限界、原界、そしてGen界。そのあわいはあわい。どれもが、ひとがつくった、ものがたり。ひとがおもいえがいた、こと、もの、さま。そとにありながら、うちにある。それがおもい。かたり。ことのはをもちいた、はなし。おそらく、ひとにしるか、つうじない、はなし。ねこには、つうじそうもない。かといって、ひとがえらいわけではないのは、いうまでもない。ひとは、わかるだけ。sonだけ。

*

ひとはわかる。わけてわかったと、おもいこむ。これが、ひとのくせ。くせもの。いのちさえも、ことこまかにわけ、わかりはじめたと、おもいこんでいる。いのちのつぶを、かぞえ、ときほぐし、よむ。いつか、すべてがわかると、しんじている。いのちさえも。ことさえも。ものさえも。さませも。このほしさえも。このほしの、そとさえも。

*

わかるのは、ひとがちいさいからに、ほかならない。ちいさいから、わかる。おおきなものは、みえない。おのれがちいさいから、みえないだけ。おのれがちいさいから、わかるだけ。それだけなのに、おもいちがいをしている。これを、かしこいとみるか、お

ろかとみるか。ひとそれぞれ。つねに、おごりたかぶるものもいれば、おそれつつしみ、かしこまるたちのものもいる。ひとそれぞれ。ひとのたちは、ときによる。ときとともに、かわることもある。おおむね、おろかで、おごりたかぶる。それが、ひと。くせ。たち。すじ。そうしたもので、げんがきめるのだという。そんな、はなしもある。

*

ちいさくしてみて、みえたとおもいこむ。おのれがおおきいとおもえば、ちいさなものを、あなどることができる。みくびることができる。みくです。みきわめたと、おもいこむ。そのくせ、おおくのひとは、いまだに、かみをしんじるといふ。にまいじた。うそつき。あしき、くせ。こころのうちでは、このほしをおさめる、おおかみだとおもっているくせに。おもいと、おこないが、おおきくずれている。くせもの。

*

いのちのつぶのものがたりに、みみをかたむけてみよう。あくまでも、かたりだといふことを、わすれないようにして。きくところによると、いのちのつぶは、ながいながいおびを、ねじったごときかたちをしているとか。そのしくみのかなめは、うつす、うつる、ふえる、つたえる、らしい。ない、から、ある、はうまれぬ。とどのつまりは、あるものを、うつすのが、うむ、うまれる、ということか。おや、つまり、ちちははから、こどもへと、うつしたものが、つたわる、ということか。ややこしい。わずらわしい。

*

すなおに、なるほどうんうんとうなずけない、へそまがり、つむじまがり。このたわごとをつづる、あほも、そのひとり。おつむがまがっているから、いたしかたなし。かたなし。よくできたはなしだと、よくできたものがたりだと、にがわらいするのが、せいぜい。とはいえ、いのちのすじの、しくみをときほぐすわざ、などといわれれば、かしこまってしまふ。やまいをなおし、ゆたかなみのりを、てにするすべ、などといわれれば、おそれいってしまう。ねじれにねじれたしくみを、ほぐしまくる。どんなに、ときほぐしたところで、ほぐしきれぬたぐいはなしとは、おもえないのだが。ひと、それぞれ。

*

なおしたい。なおりたい。ながくいかせたい。ながくいきたい。もっとふやしたい。もっとふえたい。もっとさかえたい。そのためだけではないが、さかりたい。ひとには、つねにさかるといふ、めずらしいくせがある。ほかのいきものにはみられない、すじがある。このほしには、もううけいれないほどのかずの、ひとがいる。それなのに、まだふえつづけている。よいわるいのはなしではない。おそらく。

*

ふえる。ふやしたい。もっと、もちたい。もっと、ゆたかになりたい。さきに、ゆたかになったものたちのあとをおう、あらたにさかえつつあるくにぐに、ひとたちがいる。それにしても、ひとはふえすぎた。このほしにあるものが、すべてのひとたちに、ゆきとどかない。まずしきものと、とめるものとのさが、ひらきすぎた。このほしにあるくにぐにから、ひとがあつまり、はなしあう。はなしあいは、まとまらない。だれもが、おのれとおのれのなかまや、はらからが、かわいい。いとおいしい。こたえはでない。

*

まぼろしがふえる、ことのはもふえる、うつつもふえる、さかいめもふえる、みなもともふえる。そして、ふえるのつぶのときがきた、という。幻界、言界、現界、限界、原界、そして、Gen界。どれもが、にている。ほぼおなじ。ふえる、ます、うむ、でる、わく。そうした、うごきとゆらぎが、あるのみ。おおいなる、うごきのくさり。おおいなる、ゆらぎのわ。

*

ひとは、かわす。ものとものをかわすが、はじまりだったとか。いまでは、もの、ひと、はたらきを、かわす。えっ、このみ。とっ、れいど。まー、けつと。からことばなり。ひとのよは、かわすにみちている。かわすのもとにあるのは、おもみ、ねうち、あたい。おもみ、しますか。ねえ、うち、きらいなの。あたい、きらいなの。それでは、すまない。

*

おもみは、おもうからきたというはなしがある。と、じびきは、いう。おもい、おもみ。どう、つながるのか。また、おも、つまり、つらからきたという、はなしもある。つらは、かわ。ねこのまなこのごとくかわる、かりそめのかおのさま、いいかえれば、かわり。ぼけること。かおにつける、おもてがた。からことばで、ますくというとか。かの、つたんかめんの、ですますくの、ますくとおなじです。いずれにせよ、なにかのかわりになにかでないものもちいる、につうじる。かわりのしくみに、にている。おもい、おもみ。おもしろし。これが、でまかせとすれば、おどろくべき、でたらめ。おどろくべき、であい。おどろくべき、たまたま。おそるべし。

*

すべては、かわりが、かわりのさししめすものの、かわりであることから、くる。なにかと、そのかわりとのあいだには、なんのかわりもない。きまぐれ。なにかがありそうにみえるとしたら、まぐれ。きまま。ままならぬ。おもみ、あたい、ねうちも、おなじ。ままならぬ。ひとは、もてあそばれるだけ。

*

かわすと、ふやすは、ちかい。ちかくみえる、というべきか。からみあっている、ともいえそう。ふやしたい。もっともっと、ふやしたい。あれがほしい。これがほしい。そのためには、おもみのかわり、つまり、かねがいる。かね。まね。まに。まねまねまね、まね。まねすんな。まにまに、まに。まにうけるな。かわりゆえに、まにうけるなといわれても、かねはほしい。とみを、えたい。だれしも、そうおもう。このあほも、そうおもう。おもみはおもい。かねなしでは、くえない。うえじにするだけ。ねこにも、くわせられない。

*

もの、ひと、はたらきのあたい。おもみ。おもみは、ひとのおもいにある。おもいはかわる。めまぐるしく、かわる。ひとのよには、おびたしいかずの、いちばがある。というか、つくられた。できちゃったものは、しかたがない。かねのおもみ。とみのおもみ。

なにかのかわりのもののおもみ。そのおもみとながれが、くるう。もとのしくみが、きまぐれで、きままだから、いたしかたなし。いま、はじまったことではない。

*

くるいは、ひとが、かわしはじめたときに、はじまった。ふえるはずが、へる。へるはずが、ふえる。ふえるふえるが、へるへる。ご一つへる。お一まいがっ。からことばの、ののしりなり。ふえるとへるの、あわいが、ますますあわくなってきたかのごとくみえる。そう、みえるだけ。みえるのは、ひとだけ。かわり、にせもの、おもてがたが、みだれまう。ひとがつくったものが、ひとのてからはなれて、まい、さまよう。とぼっちは、ほかのいきものにも、およぶ。あなどれない。

*

おもみは、あわい。おもみは、はかない。おもみは、あてにならない。なぜなら、おもみはおもいだから。おもいえがくことしか、できないものだから。えにかいたもち、だから。それも、よってたかって、みんながかってに、ふでをだして、かきかえるもちだから。ほしい。もっとほしい。ふやしたい。もっとふやしたい。おもみのしくみにとりつかれた、ひと。いまでは、そのしくみが、ひとのいとなみすべての、もとにある。そのしくみにもてあそばれて、ひとはうごいている。ひとがつくった、ありとあらゆる、もの、こと、さま、はたらきを、うごかしている。ああ、なんたるおもいちがいがい。もとにもどせない、おおちゃんぼ。

*

ふえるはず。おおきくなるはず。そういうしくみだったはずなのに、そうはなっていない。そんなしくみをつくってしまった。これもまた、しっぽのないさるからひとになったときの、あたまのなかでおこったという、ずれのせいなのか。へだたったものをちかくにみせる、しくみ。なにかのかわりになにかでないものもちいる、かわりのしくみ。ふえるはずのものがふえたりへったりする、おもみのしくみ。これらは、ひとがつくったというより、なぜか、てにしてしまった、みにそなわってしまった、とかがえるべきなのか。もしも、そうであれば、ひくにひかれず、もとにはもどれない。ひとのくせ。さが。さかなに、おかをあるけど、いうのとおなじ。どうしようもない。

*

いま、おおごとなのが、かわり、にせもの、おもてがたの、おおぐるい。だれかが、なにかに、しくんだらしい。どくまんじゅう。さぶ、ぶらい、む。からことばなり。おかわりをかえせないものに、おかわりをかした。もとは、そんだけー。どくまんじゅう。どくはまわる。ひとのよを、まわる。うつる。つたわる。かけめぐる。きえそうな、きざしもない。おもみがおもいのうちにあるのなら、きえるとしんじ、ねんじれば、いいのか。どうも、そうはいかないらしい。

*

おもみとかねをめぐる、こぎかしげなものがたりの、かたりても、かたなし。おもみとかねについて、うまくのべるものにあたえられる、のべるなんとかいう、かねでできたまるいいたと、それにそえられたおおがねをもらったものたちも、このどくまんじゅうには、てをやいているらしい。それにしても、のべるなんとかを、そういうひとたちにさずけるとは、うさんくさい、はなしではないか。こうなってしまえば、のべてもしかたなし。のべる、しょうがない。のべるしょうなんて、いらぬ。なに？ ひと、それぞれ？ えっ、このみ？ くすつつ。おもわず、わらう。しょうもない、しゃれ。しゃれこうべ。いずれにせよ、このみで、がせに、かねなんかやるな。みんなのいのちが、かかっているんだ。せきにんしゃ、でてこい。ひとりで、ぼやき、まんざい。じんせいこうろ。

*

ふやす。うつす。そっくりをつくる。ものがほしいときには、かみのかねをする。するとは、そっくりなうつしをつくることなり。すってすってすりまくり、どくまんじゅうたいじ。こうかなし。どくが、ほかのものに、うつってしまったらしい。ぼくちで、すったのとおなじ。すったもんだ。

*

かたや、いのちがほしいときには、Genというつぶのうつしをつくる。からだから、きりはなし、かみをきどった、ひとのてでつくる。うつし、うつし、うつしまくる。そのさ

まは、うつくしくない。おそれをしらぬしわざ。あさましい。ゆくすえが、どうなるかは、まだわからない。おそろしいやまいの、うつしごっこに、ならないことを、いのるのみ。

*

かねと Gen。いずれも、おかわりであり、うつしである。それが、ともに、ふえる。はんばじゃなく、ふえる。それが Gen 界。おかわりのおかわりのおかわり——。うつしのうつしのうつし——。やっぱり、にている。にすぎ。げきに。こくじ。おかわりのうつし。うつしのおかわり。そんなんが、どんどんふえていく、ひとのよ、そして、このほし。あやし。こわし。あやうし。

*

Gen。ふえる。うまれる。いかがわしいかたりは、もういない。おもみのしくみも、もういない。なにしろ、たくらんたはずが、たくらみどおりに、ことがはこぼない、ときている。あやまったに、ちがいない。つくりそこねたに、ちがいない。なにかとなにかをかわす。なにかをあたえて、かわりに、なにかをもらう。sonだけーが、sonだけーでは、すんでいないらしい。このあやしいうごきは、なにかににている。なにかのかわりである、ことのはの、あやしいうごきに、よくにている。かぎは、やっぱり、かわるにあるのではなからうか。かわりにあるのではなからうか。かわるはわかる。ひとは、そうしんじているみたいだが、わかっていないのがまことらしい。

*

ひとは、うむ、うまれる、ふやす、ふえる、のなぞをといたと、おもいちがいをしているのでは、なからうか。かわるがわかっていないのとおなじく、ふやすもうむも、わかっていないのでは、なからうか。Gen をめぐるかたりには、しろうとのめからみても、あぶなっかしいところがある。とりわけ、こわいのが、Gen を、ひとのかってにあわせて、くみかえるというはなし。たくらみが、うらめにでないと、だれがいいきれよう。ひとつまちがえば、このほしのいのちがあやうい。すべてのいきものどうしばかりか、いきしていないものたちのあわいの、つりあいがるいかねない。たとえば、だしぬけにくさきがかれ、おおくのいきものがやまいにたおれ、ひいては、なつにおおゆきがふり、ふゆにむしのむれがたはたをおそいかねない。また、ひとのからだところにくるいがお

こらないと、だれがいいきれるのか。

*

かねとおもみをふやす、かわすいちばのしくみは、あきらかに、おおちゃんぼ。これ、もはや、ばればれのはなしではないか。そうやって、かわるがわる、あらわれる、かたりのかずかず。ふえるのは、そんなかたりだけか。いかにも、ずれたひとのやることらしい。せめて、ほかのいきものたちや、このほしまで、ずらさないでほしい。

*

このほしにくらすいきものは、かわすことでいきている。ふえている。きえることもある。おおきくなる。ちいさくなることもある。ひとは、そのしくみをとくかぎとして、Gen というのはなしをつくり、かたっている。かたりつくしたわけではない。それはさておき、ひとは、かわすことをおぼえた。なにかのかわりかわすことをおぼえた。おもみをかわすことをおぼえた、ともいうべきなのかもしれない。そのうらには、ふやしたい、もっとほしい、さらにおおきくしたいという、おもいおもいがあるとおもえる。

*

ひとは、かわすというしくみを、みにつけた。おそらく、しらずしらずにみにつけた。わけもわからず、みにつけた。いまだに、そのしくみをしらずにいる。なんども、そのしくみの、とちくるいにてあいながら、またもや、くるいのなかにいる。いま、おそっている、とちくるいはおおきい。ふやせふやせ、おおきくしろおおきくしろという、かけごえのなかで、おおきくなったのは、くるいとずれだけ。あたまのなかに、ずれがおきてから、くるいつづけているひとが、またくるい、ずれた。これ、とちくるった、はずれものの、あほのたわごとなり。いうまでもなく、しんじるにあたいせず。

*

それにしても、おもみ、つまり、あたいをかわすと、ふやすとは、もともと、はなしがちがうはず。おもみをかわすに、まどをしぼろう。おもみをかわすしくみは、おそらく、

ひとのおもいや、おもわくでは、はかれないほどのおもみを、そなえているのではないだろうか。いいかえると、ひとには、にがおもすぎる。おもうにも、おもいにも、おもみをおもうには、にがおもすぎる。だから、はかれない。わからない。なにかのかわりになにかでないものもちいるという、かわりのしくみは、ひとにわからないようにできている。それとおなじく、おもみのしくみは、ひとには、はかれないようにできているのではないか。

*

てみじかにいうなら、おもいにおもいはわからない、となる。だめおしに、からことばのたすけをかりてみよう。思い、想い、念い、憶い、重い、面い、主い、母いは、図れない、計れない、測れない、量れない、別れない、謀れない、諮れない。とにかく、にはおもい。ひとには、おもすぎる。はかれない。だから、くるう、ずれるしかない。

*

Gen 界、すなわち、ふえるをめぐってつづることのはたちが、こんなにふえるとはおもいもしなかった。つづるかきものなかみを、つづることのはがまねて、ふえたのにちがいない。ことばは、かしこい。おそれいる。ともかくにも、こんなにも、ながくなった、たわごと。もうしわけなし。

【追記上記の戯言につづられていることばたちに身をまかせてください。どのようにも取れると思います。意味や解などありません。というか、無数にあるでしょう。そうやって、たわむれてみませんか。参考としての、ことわりをお望みの方は、グーグルで、“うつせみのくら” “遺伝子”、“うつせみのくら” “貨幣”、“うつせみのくら” “何かの代わりに”、“うつせみのくら” “かわる” “わかる”、“うつせみのくら” “交換”、“うつせみのくら” “ケインズ” “投資” という具合にダブルとトリプルのキーワードで、6回検索してみてください。

そのさいには、“○○”と括弧でくくるのをお忘れならないように、ご留意願います。今、挙げた6組のキーワードを、それぞれそのままコピーペーストして検索なさるのが、てっとり早いかもしれません。ヒットするのは、長い文章が多いと思います。関係ありそうなどころだけ、拾い読みしていただくだけで十分です。こんな戯事にお付き合いく

ださる方がいらっしやれば、うれしいです。】

【注：現在は「うつせみのくら」という過去のブログ記事を再録したサイトがないので、上記の検索は意味をなしません。お詫び申し上げます。】

【後記きょうのお話は、ややこしいため、長くなってしまいました。ひらがなばかりの続く文章で、さぞかし読みにくかったと思います。また、硬いテーマなので、随所に駄洒落をちりばめましたが、かえって、うざかったでしょうか。ごめんなさい。限界についてつづった「うつせみのたわごと-8-」2010-02-09で述べたように、こうした書き方を選んでいるのは、いわば企み＝試み＝実験＝戦略＝賭けなのです。母語という枠の中で「外国語」（※括弧つきです）で語る＝騙る、そして通常の書き方では書けない、読めない、見えない、思考できないことに触れようという、まことに独りよがり、とちくるった企てなのです。

自分には、あえてこういう書き方をしないと書けないことがあるように思えてなりません。ですので、書かれている内容よりも、書かれている言葉たちの身ぶりや表情に目を向けてくだされば、うれしいです。ここまで、辛抱強くお付き合いくださった方に、こころより感謝いたします。】

10.02.12 うつせみのたわごと-11-

◆うつせみのたわごと -11-

2010-02-12 08:59:41 | さくぶん

げん——。きになることば。からからきた、ことば。からことばが、このくにのことばとであい、まじったときに、とりわけ、おおきなはたらきをしたのが、もじである。このくにのもじのしくみは、からからつたわった、まなど、まなをくずした、かなからなる。まなかなである。まなは、もののかたちから、とられたものだという。

*

まなには、ひとつのもじで、なにかをあらわすものもあれば、いくつかのかたちが、あわさってできあがっているものもある。かたちとなかみをあらわすところと、おとだけをあらわすところに、わかれているものもある。まなにおいては、まなこをはたらかせなければならない。すなわち、よむ、みる、みわけることが、かぎとなる。

*

まなにおいては、かたちがなにかをあらわすとはいえ、みておとをだすこと、すなわち、こえをだしてよむことも、かかせない。まなには、いくとおりかのよみがあるものがおおい。それが、まなにあつみとおもみをあたえている。よみには、からことばによるものと、やまとことばによるものがある。ずらしてみよう。眼、げん、がん、め、まなこ。目、もく、ぼく、ま、め。見、けん、げん、み。じびきをたよりに、ちょっと、あそんでみよう。ま、み、む、め、も。目、見、眸、眼、膜。

*

ひとはまなこをもちいて、みる。ほかのいきものにくらべて、みることが、いきるかしぬかをわけるときえ、いわれている。それほど、まなこのやくめは、おおきらしい。とはいうものの、みるを、ずらしてみると、みるが、まなこのはたらきだけを、しめすものではないことがわかる。みる、見る、視る、観る、診る、看る。ふるいいいかたで、みる、回る、廻る、というのもあるという。

*

みるのもちいかたを、みてみよう。みやくをみる。やまいにかかったひとをみる。ばかをみる。なきをみる。なりゆきをみる。ひとをみるめ。あまくみる。あかんぼうをみる。けがをしたひとをつつききりで、みる。めんどうをみる。ときをみる。ゆめをみる。このように、からだでなにかをうけとめることを、みるということばで、あらわすことができる。

*

さきほど、みてみよう、とかいたが、なにになにしてみる、のみるも、ためしになになにするといいたいときに、もちいられると、じびきにある。じびきをうのみにはできないが、そういうみかたもあるらしい。ちなみに、たったいま、かいた、みかた、の、みは、かんがえるということか。つまり、みかたとは、かんがえかたとも、とれる。これでまかせ。れっと・みー・しー。えーっと……。でも、いえてるかもしれない。

*

たしかにややこしいが、みるということのはの、あつみとおもみは、おもしろい。いろいろにとれるから、おもしろい。ことばずきのものには、こころがひきつけられる、おもいがする。みるということのはの、あつみとおもみが、みるという、いとなみのあつみとおもみと、かさなるものなのか。

*

ひとが、まぼろしをみて、ことのはをとおしてもものやことやさまをみて、うつつのなかでゆめをみて、ふちでであうなにものかをみて、おのれやものごとのみなもとにめをむけ、このよをみきわめたいとのぞむのならば、ひとは、つねにみている、といえるだろう。いきること、すなわち、みることと、いえるだろう。みるためには、ひかりがいる。幻界、言界、現界、限界、原界、Gen界、眼界は、ひかりにみちたばである、といえよう。

*

わすれてならないことがある。すべてのひとが、めがみえるわけではない。おそらく、こころならずも、めしいとよばれるひとたちがいる。やみのなかにおいて、まったくみえないばかりとは、かぎらない。みえないといわれるひとのなかにも、ぼんやりみえる、かすかにみえる、あかるいくらいはわかるという、こい、うすいがあるという。みみのおい、このあほには、きこえにたとえて、その、こい、うすいが、わかるきがする。みえ

るひと、きこえるひとには、そのあわいがわからない。いたしかたなし。

*

みるといういとなみは、ひかりのたすけをかりて、ものをみることだけをさすわけではない。みるを、もっとひろいおこないだと、みなしてもいいとおもう。みる。みえる。みわける。とりわけ、みわけるということわけに、おもいをむけてみたい。みわけるは、見分ける、とかかれることがおおい。かつて、身分ける、とこのんで、しるしたひとがいた。

*

ずらして、みよう。みわける。見分ける。身分ける。ことわる。事割る。言割る。断る。判る。ことわり。事割り。言割り。断り。判り。理。ずらすといいながら、まさに、わけているといえる。では、ずらすをずらして、みよう。ずらす、わける、かえる、うつす、こじつける、たとえる、つなぐ。これらのあわいはあわい。これらをわかす、へだたりはちいさい。へだたりは、おそらく、ひとのおもいのなかにある。

*

へだたり、おくゆき、かたち、ありさま。そうしたもの、こと、さまは、ひかりによってのみ、ひとにとらえられるとはかぎらない。たとえば、こうもりは、おとで、いぬは、において、くもは、ゆらぎで、おのれのまわりをとらえるのに、ひいでているときく。そうやって、えものをねらい、とらえる。また、そうやって、みをまもるといふ。

*

ひとにおいても、こうもりや、いぬや、くもと、にたことがおきているのではないだろうか。まなこをもちいて、みる。ここでは、ひかりがよりどころとなる。みみをもちいて、きく。ここでは、みみのなかのまくへと、つたわる、かすかなゆらぎがたすけとなる。においをかぐ。においのこまかなつぶがあると、きいたおぼえがある。あじをみる。これもこまかなつぶが、したに、はたらきかけるらしい。

*

はだざわり、したざわり、てざわり、はざわり、ということのはがある。からだのいちぶが、なにかにふれたときにおこるさまをしめしている、といえるだろう。このように、からだにそなわっている、ば、つまり、どこかが、なにかをとらえる。それを、ひっくるめて、みるとよんでみてはどうか。あるいは、みるを、へだたったものを、ちかくにあるとおもうしくみだと、みてみよう。

*

みるを、とらえる、とずらす。みるを、とらえる、とよむ。とらえる。おのれのからだのなかに、ばをあたえる。なにかのかわりになにかではないものを、ばとして、からだがうけとめる。おそらく、あたまのなかにある、きわめてほそい、いとと、きわめてこまかい、つぶとのあいだで、なにかがおこって、いまのべた、いとなみがおこなわれるのであろう。そうしたことわりは、どうでもいい。それは、くろうとがかんがえ、かたること。しろうとは、いまここで、からだかどのようにはたらいているか、それだけに、こころをかたむければいい。というか、それしかない。くろうとのことわけなど、どうでもいい。

*

みる。とらえる。からだでうけとめる。それが眼界でおこっていることではなからうか。へだたったものをちかくにあるものとして、とらえる。それを、しる、わかる、みる、ということのはでよぶ。なづける。てなづける。むなしい。あるいは、あやうい。なぜなら、ひとのおごりにつながるから。なづけ、てなづけたつもりの、ものやなわばりをながめて、よいしれる。ひとの、くせ。ひとの、たち。

*

ひとは、わけて、わかったもの、しるしをつけて、しったものをながめて、あるじになったつもりでいる。だが、それだけでは、たりない。もっと、ほしい、もっと、ひろげ

たい。なわのそとをみつめ、せめいり、あらそい、あやめるおりをうかがう。きなくさい。なまぐさい。それが、ひとにおける、みるということか。いきものが、いきるとは、そうしたことなのか。とはいうものの、ひとのやることなすことは、ほかのいきものにくらべ、あまりにもおおきく、ずれている。はずれすぎている。

*

まなこがないにかかわらず、あらゆるいきものは、まわりをみて、みをまもる。たべものをさがす。てきとたたかう。それは、それでいい。ひとのばあいは、どをこしている。このほしにも、かぎりがあるというのに、ひとのほしい、ひろげたいには、はてがない。はどめがない。すでに、がけつぶちにたっているのに、そのさまがみえていない。みてみぬふりをしている、ふしもある。

*

ひとは、おのれが、まなこでみるのに、ひときわ、ひいでているとしんじている。だが、わすれてはならないことがある。めだけで、みるのではないことを。まぼろし、ことのは、うつつ、ふち、みなもと、ものごとのおこり、めでみえるさま。幻界、言界、現界、限界、原界、Gen界、眼界。ひとは、そうした界を、いくえにもかさねて、もの、こと、さま、あるいは、なにかとしかよべないなにかを、みている。とらえている。ひとのめには、みえないものやことやさまは、おびたしいかずにのぼるにちがいない。ひとが、わけられないものやことやさまも、おびたしいにちがいない。

*

ひとが、いちどに、こころをかたむけられるばは、ちいさい。まばらに、まだらに、みているというべきか。わるくいえば、うかつなる、めしい。みるべきものをみないで、みたいものしかみていない。みなくていいもの、あるいは、みたくもないものが、めにはいることもあるだろう。ひとは、おのれのめのしくみを、てなづけ、あやつることはできない。めに、もてあそばれているともいえる。みみ、した、はだをはじめ、からだのどこもかしこもおなじ。

*

だから、ひとは、やまいにかかり、けがをし、あやまちをおかし、まちがいをおこす。それは、それでいい。おそろしいのは、ほかのいきものをみちづれに、ほろびへのみちをあゆみかねないこと。ただすべきおりを、いまだにいつていないと、だれがいえるだろうか。

*

ひとが、こころをかたむけられるときは、みじかい。ひとが、おもうより、はるかにみじかい。とびとびというべきか。わすれっぽい、あきっぽいというべきか。あてにならない。それをおぎなうための、ものやしくみをつくりだしてきたが、それも、つまるところは、ひとのまなこやみみの、はたらきにあわせたものにすぎない。つきに、なかまをおくりこみ、たたせたところで、おごりたかぶり、よいしれてはならない。

*

おのれのちからをおぎなう、しくみやものを、つくりだし、みえないなみを、みえるようにする。みえないところを、みえるようにする。きこえないおとを、きこえるようにする。みみがとどかないおとを、きこえるようにする。みえないうごきやゆらぎを、とらえられるようにする。そのたすけとして、かわりをもちいる。かわりのしくみ。とはいえ、とどのつまりは、かわりをみる、きく、とらえるにゆきつく。それにたよるしかない。ひとの、さが。

*

ひとのいう、うつつとは、ありとあらゆるものが、かわりにすぎない、うつつ。すべてが、にせたもの、にせものにすぎない、うつつ。うつつ、うつうつ。うつをうつ、空を打つ。虚を撃つ。鬱を討つ。むなし。

*

みるにつきまとうこと。みるためには、のがれられないこと。みるといういとなみに

とって、まぬかれないこと。どこから、だれが、どうみるか、という、とい。とけそうにもない、とい。みえそうにもない、とい。おもいもおよばない、とい。

*

ゆめ、おもい、うつつ、まぼろし、え、かたり、はなし、かきもの。それらにおいて、どこで、だれが、どのようにして、みているのか、つづっているのか、えがいているのか、かたっているのか、おもっているのか。ひとの、ありとあらゆるいとなみのもとによこたわる、とけそうもない、とい。なぞ。ひとというわくを、でないかぎり、さとれそうもない、なぞ。せいぜい、くうを、なぞるしかない、たわむれごと。なぞをなぞる。たわけ。

*

ひとには、めのまえのひろがりを、めでとらえることに、ひいでているとおもっているふしがある。かたや、ときのうつりかわりを、めやみみでとらえることについては、にがてだとおもっているふしがある。だから、ひろがりを、ふたたび、べつのぼで、かわりをもちいて、くみたてなおすことは、どちらかといえば、たやすいとおもっている。だが、おこったできごとを、ときをへたのちに、かわりをもちいてくみたてなおすことは、むかしからさかんにやっではいるにはいるが、そのいとなみに、どこかうしろめたさをおぼえているようにおもわれる。

*

まえにおこったことを、かわりをもちいて、くみたてなおす。かわりとは、ことのは、え、しるし、おと、である。あくまでも、かわりであるということ、ひとはきもにめいじるべきだとおもう。ほんものではなく、にせたもの、つまり、にせもの、あるいは、べつものであることを、わすれないようにすべきだとおもう。こうしたおこないにおいて、眼界はかぎりなく幻界と限界にせつするはずなのだが。なんどもやってきたならわしを、いまになって、やめるわけにはいかない。たとえば、さばきという、ひとのつくりあげた、おおがかりなしくみ。つみびとをとがめるさまを、みえるようにしたところで、しくみのもとをなす、おおきなといは、かたづくことなし。いたしかたなし。いたし、かたなし。

*

ひとは、みえていない。よめていない。わかっていない。とらえていない。ひとという、わくにあるかぎり。

*

なにかとしか、なづけようのない、なにか。かりそめに、たわむれに、あえて、しいて、なづけるとすれば、ゆらぎ、うごき——。たとえばのはなし。いうまでもなく、まこととから、ほどとおいはなし。かたり。かたこと。たわごと。

*

ゆらぎ、うごきと、なづけることは、むなしい。はかない。なにしろ、ことのはでしかない。さししめすもののなぞは、とけていない。いたしかたなし。いたし、かたなし。

*

とはいえ、ことわけをこころみてみよう。ばのひろがり、ときのうつりかわり、そのふたえにまたがっておきるさま、とでもいおうか。すべてのいきもの、ありとあらゆるいきていないものの、もとにあり、もとでおこっているさま、とでもいおうか。

*

なづけえぬものをめぐり、ひとはなにができるか。ためしに、ゆらぎ、うごきとよばれるさまともに、みとこころをふるわせて、みる。しいて、ことわけすれば、そういう、ことだろう。こと。

*

ひとは、ことからのがれることはできないということ。こと、言、事、断、異、殊。言なし。事なし。断つ。異なる。殊なる。ことのはのあそび。もてあそばれるしかない。

*

うごく。ゆらぐ。かわる。うつる。うごきというなのな。な、名、字、無、己、汝、何、na、n、a。たわむれに、ずらし、みつめ、となえ、おもいのなかで、みをもって、うごき、ゆらぐ。むなしき、きやすめ。

*

それは、それでいいではないか。ひととして、あほとして、みのほどをしろう。そうすれば、おそらく、いまより、くるうことなし。ことなきをえる。こと、なきをえる。こと、な、きをえる。こと、な、き、おえる。ことのはは、まう。舞う。眩う。まわる。回る。廻る。みる。回る。廻る。見る。みだれまう。みだれまい。めまい。みまい。瞑目。たわけ。たわごとなり。

【追記上記の戯言につづられていることばたちに身をまかせてください。どのようにも取れると思います。意味や解などありません。というか、無数にあるでしょう。そうやって、たわむれてみませんか。参考としての、ことわりをお望みの方は、グーグルで、“うつせみのくら” “視線” “信号”、“うつせみのくら” “空間的” “時間的”、“うつせみのくら” “知覚” “情報”、“うつせみのあなたに” “ことわり”、“; うつせみのくら” “手話” という具合にダブルとトリプルのキーワードで、5回検索してみてください。

そのさいには、“○○”と括弧でくくるのをお忘れならないように、ご留意願います。今、挙げた5組のキーワードを、それぞれそのままコピーペーストして検索なさるのが、てっとり早いかもしれません。ヒットするのは、長い文章が多いと思います。関係ありそうなところだけ、拾い読みしていただくだけで十分です。こんな戯事にお付き合いくださる方がいらっしやれば、うれしいです。】

【注：現在は「うつせみのくら」という過去のブログ記事を再録したサイトがないので、上記の検索は意味をなしません。お詫び申し上げます。】

【後記きょうのお話も、ややこしいため、長くなってしまいました。ひらがなばかりの続く文章で、さぞかし読みにくかったと思います。今回は、段落をなるべく短めにするように工夫をしたのですが、どうでしたか。読みにくい書き方になっている言い訳と弁解は、前回の後記に書いたとおりです。ごめんなさい。ここまで、お付き合いくださったところやさしい方に、お礼を申し上げます。ありがとうございました。】

10.02.13 うつせみのたわごと-12-

◆うつせみのたわごと -12-

2010-02-13 08:45:50 | さくぶん

げん——。きになることば。からからきた、ことば。ことのはをもちいて、うらなうというわざがある。おおむかしにも、あったらしい。むかしのほうが、さかんだったかもしれない。ことのはは、うつつとおもいをむすぶ。うつつでめにする、ものやことやさまの、かわりをつとめるのが、ことのはのやくめでもある。

*

そのかわりのしくみは、どれほどしんじてよいものなのか。まぐれというべきか。それとも、なるべくしてなる、たしかなものなのか。ひとのちからをこえた、なにものかのこえを、そのものになりかわって、ひとびとにつたえるものがいたという。いまも、いる。なにか、あるいは、なにものかが、のりうつるのだ、というはなしもある。あやしい。

*

てんから、ひとすじのつるがたれている。そのつるをにぎり、いのちがけで、すがりついているひと。そんなさまを、ここにえがいてみよう。つるを、いとと、かんがえてもいい。ぶらさがる。ぶらぶら、ゆらゆら。ひとは、いとと、かぜに、みをまかせるしかない。まかせる。まかす。まける。ひとは、おちないように、ひたすら、いのり、ねんじるしかない。こうしたさまは、ひとがいきているさまと、にている。

*

ひとこそが、このほしのあるじだと、かんがえているものはおおい。おごりたかぶっているものは、かずしれない。それでいて、かみ、かみがみ、ほとけ、まものがいると、おそれおののきながら、しんじているものも、かずしれなくいる。いまはなきひとたちのたましい、おのれのおいおやたちのたましい、くさきややまなどにやどる、たましいやちからを、しんじるものたちもおおい。

*

うつせみにある、ひとのちからをこえた、なにものかをおそれ、うやまう。わざわいがおきたときには、なにものかが、いかっているしるしだとかんがえる。そのいかりをしずめるための、すべにおもいをめぐらす。いのる、あがめる。いけにえ、そなえものをさしだす。そうしたおこないをする、くろうとがあらわれた。そのみちの、くろうとたちは、おのれは、ひとのちからをこえたもののかわりだという。あやしい。いかがわしい。さきに、いったもののかちか。

*

こわいことは、ほかのひとにまかせよう、とかんがえたものもいたにちがいない。ともあれ、そのみちのくろうとは、どのようなひとか。まぼろしやゆめをみるのに、なれているひと。なにかや、なにものかに、なりきりやすいひと。なりきりがうまいひと。つまりは、かわりをつとめるのに、たけたひとということ。くろうと。げいにん。ぷろ、ふえっしょ、なる。え、きす、ぱーと。つい、でた、からことばなり。でものはれものところきらわず。

*

いずれにせよ、かりのもの。にせたもの。にせもの。まさか、ほんものとはいえまい。いや、なかには、おのれは、かりのものやにせたものではなく、ほんものだと、いいはるものがあるし、いたらしい。いかがわしい。いかがわしすぎる。みなさま、いかがおもわれますか。ひと、それぞれ。いわしのあたまさえ、ほんまもんになれる。ひとが、ほんまもんになって、どこがわるい。そう、のたまう、あつかましいものもいても、おかしくはない。いや、おかしいか。

*

ゆるしがたいものは、とらのいをかりる、やから。とらのいをかりて、ほかのひとたちをおどす、やから。いをかりれば、らく。すべてのひとは、なにかの、あるいは、だれかのいをかりながら、いきている。らくだから。らくをしたいというおもいは、だれにもある。このあほにも、たっぷりある。でも、やりすぎはよくない。ひとのなかには、なにかと、やりすぎているひとがおおすぎる。また、このほしにすむ、いきものなかで、ひとは、ひときわ、やりすぎている、おそらくゆいいつのいきもの。

*

くいすぎ、のみすぎ、あやめすぎ、たたかいすぎ、きそいすぎ、もちすぎ、ほしがりすぎ、かざりすぎ、ひろげすぎ、ぬすみすぎ、まずしきものととめるものとのさのひらきすぎ、よごしすぎ、すてすぎ、しりすぎ、わけすぎ、でっちあげすぎ、うそのつきすぎ、かんがえすぎ、ゆめのみすぎ、まぼろしのみすぎ、くるいすぎ、ずれすぎ、はずれすぎ、うたがいすぎ、かんちがいのしすぎ、まちがいのしすぎ、とぼけすぎ、わすれすぎ、うみすぎ、ふえすぎ、おごりすぎ、ほかのいきものにちょっかいだしすぎ、いじめすぎ、あそびすぎ、つかいすぎ、もやしすぎ、こわしすぎ、しすぎ、すぎすぎ――。

*

こうやって、ならべて、よくながめてみると、これらを、ひとからとりのぞいたら、なにもものこらないおもいがする。もしも、このほしで、さばきがおこなわれるなら、ひと

は、うえであげた、かずかずのつみで、とがめられるにちがいない。いうまでもなく、このたわごとをつづっているあほも、ふくめてのはなし。

*

すぎ、すぎ、すぎ――。やりすぎ。すぎすぎ。おもわず、くしゃみがでた。すぎのおばな、すなわち、ひとでいえば、まらからこぼれる、おとこのたねの、こまかなこな。そのおびたしいこなが、こぼれおち、かぜにのって、まいちり、ひろがるとき、ちかし。はっくしょん。ぐじゅじゅ。かゆいかゆい。くすりをのべば、ぼけーっ。はらぐだし、するものもいる。お、すぎとぴー、こ。あかい、めと、すいーと、ぴーでは、めもあてられない。このしまじまで、どれだけおおくのひとが、なやみ、くるしみ、どれだけのかねをつかうことか。もとは、よかれとおもって、かってに、ひとがうえた、すぎのなえ。いまは、ひとがなえるもと。やりすぎ。すぎたるは、のちに、きづくなり。こわし。あなどれない、やりすぎ。きづいたときには、もうおそし。きもにめいじよう。

*

はっくしょん。すぎ、ひのき、ぶたくさ、よもぎ、まつ、いねの、はな。はなは、ひとでいえば、まらや、ほとなり。すぎや、いねは、べつとして、はながうつくしいのは、はちなどの、むしをひきつけ、つがうてつだいをさせるためとか。なるほど。すぐれたしくみなり。ひとのちからをこえたもののけはいを、おぼえる。ひとは、くさきのはな、すなわち、まらやほとに、ひきつけられ、かざる。なきひとに、そなえるくせもある。きりばな。いけにえ。ちょんぎって、そなえる。きる。kill。あやめて、そなえる、おとなしき、やぎやとりとおなじ。kill。きる。cut。かっど、なってきるのではない。まじめくさったかおで、きる。ほんまもんやから、こわいわー。ちなまぐさい。ひとの、みがって。このほしでは、すべてが、そんなくあいになっている。いたしかたなし。いたしかた、あるとすれば、ひとがひとでなくなる。なくなる。それは、いたし、かたなし、やるかたなし。やはり、いたしかたなし。かなし。

*

はなしはちがうが、ひとのあそこは、うつくしいだろうか。ひと、それぞれか。いずれにせよ、ひとは、ひきつけられる。ひきつけあう。ひきつけ、あう。くさき、けものどちがい、ときをえらばず、いつでも、おーけー。なんたる、すきもの。すぎたる、すきも

の。すきすぎ。くるえる、さる。ほかのいきものの、あそこをちょんぎる cruel さる。それは、それでいいのではないか。いたしかたなし。

*

ひとのちからをこえたものの、いをかりた、にせものに、はなしをもどそう。このあほは、そうしたえらそうなやくしゃのげいは、しんじない。ひとをこえたなにもものかも、しんじていないから、そのかわりのものも、こわくない。だから、あがめたてまつる、ぎりもない。ひと、それぞれ。ちなみに、このあほはしんでも、はかはなし。とむらいも、ほねひろいも、はかもいならない、とかいたかみがある。はんこまで、おしてある。はかなし。のこったもちものは、おかねにかえて、めぐまれないこどもたちにさしあげる、とも、かきそえてある。もうひとつちなみに、おやのとむらいも、なし。はかなし。おやも、それでいいといっている。にたもの、おやこ。ひと、それぞれ。

*

ぶらぶら、ゆらゆらに、はなしをもどそう。ぶらぶら、ゆらゆらとは、たとえである。ひとのありよう。いきもののありよう。このほしのありよう。このほしをふくむ、おおきなはてしなき、ば、のありよう。そうしたすべてのありようのたとえ。ゆらぎ、うごきといっても、いいだろう。ねつ、ひかりといってもいいだろう。なんとなづけても、それはひとのことわり。そうしたことのはで、さししめそうという、たくらみとは、かわりがないと、ひとはこころえるべき。まけをみとめるべき。

*

まけ。おてあげ。どうにでもしてちょうだい。まいりました。ほかになんといえばいいのか。たわごとをかさねるしかない。ひとのわくのなかに、ひとがそとにむかって、なざすものはない。

*

ことわり。すっきり。くっきり。さっぱり。あきらか。まこと。ただしい。たしか。た

とえなら、ゆるされるたわごと。にせもの、かわり、かりそめのもの、ところろえるなら、ゆるされるうわごと。ほんまもと、ちゃうで一。まちがえたら、あかんで一。ひとのおもいや、くちからでるものを、まことやほんものなどといって、もったいぶるのは、よそう。でまかせ、でたらめ、むちゃくちゃ、めちゃくちゃ、くらいが、まっとうなひととしての、いさぎよい、よびな。みのほどをこころえた、よびな。

*

まぼろし、ことのは、うつつ、へり、みなもと、ものごとのおこり、まなこでみるものやことやさまのありよう、ぶらぶらゆらゆら。幻界、言界、現界、限界、原界、Gen界、眼界、弦界。すべてが、ひとのわくのなかに、おさまる。ひとのまけ。かとう、わくをこえよう、などという、むだなほねおりは、やめよう。できっこない。こころざしを、たかくもちたいものは、ぶらぶらゆらゆらに、さからうのではなく、もてあましているちからを、めぐまれないひとたち、よわきひとたちをたすけることに、むけよう。このたわごとをつづっている、ものぐさで、いくじのないものは、みのほどをわきまえ、おろおろうじうじいきよう。

*

てんからたれている、いとだけは、しっかりと、にぎってしよう。あとは、ひと、それぞれ。

*

このあほのすきなあそびは、さいころをふること。これ、たとえ、ですねん、ねんのため、ゆーときます。ことのはという、さいころを、えいやっつ、とふる。わくわく、どきどき。ぽろりとでる、め。でるにまかせる、でまかせ。とはいえ、ことのははいとしい。けなげに、みぶり、めくばせをおくってくれる。まな、かな、かわいい。からことばのかずかず、これまた、いろけあり。ことのは。ふみ。へたながら、こえにだして、うたうのも、よし。ただ、ぶつぶつ、つぶやくのも、よし。じづらにながめいるのも、よし。

*

ことのはとのであい。ひととのであい。ものやことやさまとのであい。であう。このよに、でたために、あった、ゆかりをすなおによろこびたい。めでたいものとして、うけとめたい。であい。あい。ずらしてみよう。さいころをふり、でまかせに、であってみよう。さいころは、じびきのたとえなり。えいやっつ。ころりじゃなくて、べらべらめくる。ど・れ・に・しようかな。

*

あい、会い、合い、遭い、遇い、逢い、藍、哀、相、間、eye、I、愛。こんなでましたけど――。やっぱり、愛。

【追記上記の戯言につづられていることばたちに身をまかせてください。どのようにも取れると思います。意味や解などありません。というか、無数にあるでしょう。そうやって、たわむれてみませんか。参考としての、ことわりをお望みの方は、グーグルで、“うつせみのくら” “虎の威=衣”、“うつせみのくら” “偶然性” “整合性”、“うつせみのくら” “宙ぶらりん”、“うつせみのくら” “あう” “出あう”、“うつせみのくら” “マラルメ” “サイコロ” という具合にダブルとトリプルのキーワードで、5回検索してみてください。

そのさいには、“○○”と括弧でくくるのをお忘れならないように、ご留意願います。今、挙げた5組のキーワードを、それぞれそのままコピーペーストして検索なさるのが、てっとり早いかもしれません。ヒットするのは、長い文章が多いと思います。関係ありそうなところだけ、拾い読みしていただくだけで十分です。こんな戯事にお付き合いくださる方がいらっしゃれば、うれしいです。】

【注：現在は「うつせみのくら」という過去のブログ記事を再録したサイトがないので、上記の検索は意味をなしません。お詫び申し上げます。】

10.02.14 うつせみのたわごと-13-

◆うつせみのたわごと -13-

2010-02-14 08:50:07 | さくぶん

げん——。きになることば。からからきた、ことば。おおむかし、このしまじまに、からからことばがはいり、もとにあったことばとまじりあったという。ひとのよには、ことのはのかずが、おいことばもあるし、すくないことばもある。どちらが、ひいでているか、ゆたかか、うつくしいか、というはなしではない。すべてのことばは、ひとしい。うえもしたもなし。ただし、なみのひとが、うまれてしぬまでにもちいる、ことのはのかずには、かぎりがある。じびきにしろされたことのはを、すべてしているもの、すべてをつかったことのあるものは、まずいない。とはいえ、ことのはは、つねに、たらない。

*

つねに、たらない。いつも、かけている。かずが、おいつかない。すくない。これ、減界なり。減界なのは、あたりまえ、わかるから、ふえる。わけまくれば、ふえまくる。わけたら、わかったしるしとして、なづけて、てなづける。これでは、なまえが、いくつあっても、たりない。おなじおと、おなじよみ、おなじもじの、ことのはがあっても、いたしかたなし。だぶっても、しかたない。つまり、つねに、たらない、いつも、かけている、ということになる。欠けていれば、取り合いになる。取り合いになれば、それは、賭けと同じ。かつかまけるか。かちまけをかける。めちやくちやな、こじつけ。こじつけは、かけのいのちなり。こじつけなしに、かけなし。うまのなをこじつけて、ばけんをかうもの、おおし。まらるめの、さいころとおなじ。

*

ひとは、わけすぎている。だから、たりない。わけしりがおをしても、たらない。

のーたりん。まりりん・もんろー、のーりたーん。のさか・あきゆきしの、さくしなり。
のーりたーん。かえらざるかわ。りばー・おぶ・のーりたーん。もどるにもどれない。
のーりたーん。かえさなくていい。つかいすて。ことのはに、にたり。

*

ひとは、わかる。わけて、わけまくり、わかったことをかたる。また、さらに、わけ
る。わかったことをかたる。こうして、またもや、わけまくる。わけて、かわをむく。い
くどもかわをむいて、なにやら、また、かわがみえてきたらしい。ちいさなちいさなつ
ぶが、みえてきたという。あやしく、いぶかしげな、つぶ、なの。そう、なの、よ。ただ
しくは、つぶでもあり、なみでもあり、ひかりでもあるとか、ないとか。やぶれる、おの
れからやぶれる、しぼむ、ゆらぐ、ほころぶ、もつれる、くりこむ、ひも、つりあう、あ
ちこち、あるない、あべこべ、しゃれこうべ、さだまらない、さだまさし、などなど。こ
のたわごとと、かわるところなし。

*

まえに限界をかたったときにもふれたが、ことばもおもいも、限界にあるとおなじく、
減界にある。ことのはは、たりない。ものやことやさまに、くらべれば、そのかずは、は
てしなく、すくない。なぜなら、ひとはわかるから。わければ、わけただけ、ことのはが
いる。たわけとは、まさに、このことではないか。だから、ことのはは、つねに、たりな
い。どんなにふやしても、おいつかない。すかすか。すけすけ。まだら。まだらけ。むら
だらけ。ざるのように、ざあざあ、もれる。ちいさなうつわにもった、こめつぶのごと
く、ぽろぽろ、こぼれおちる。たりない。つねに、たりない。ぬけている。まぬけ。ひと
は、おのれを、そうおもうべし。そうおもえば、おごりたかぶるより、いくらかは、かし
こし。

*

わかるために、わかる。とはいえ、しろうとには、わけられない。わけがわからない。
だから、わけのわからないことは、なんでも、でまかせだ、でたらめだ、とおもうのが、
なみのひと。しとうとのくせに、わずらわしくて、しろうともしない。それでいて、くろ
うとは、わけて、わかったという。かたったはなしが、ただしいとわかったという。そ
れこそ、あやしいはなし。やはり、かたりは、かたり。だますことなり。まゆつばもの。

いつか、また、あらたなあやしいはなしで、かたられないと、だれがいえるだろう。やはり、かたりはかたりか。まことのかたこと。かたことのみこと。いくらわけたところで、わかるたぐいのはなしとは、おもえない。あほには、わからない。そういわれれば、かえすことばなし。

*

まをほろぼし、ことをわけ、いまここにあるものを持ちい、はてまでかけはせ、もとをたどり、よりちいさなつづをおいもとめ、めをこらし、おおきなものまえておのれのまけをみとめ、わけるむなしさをおもう。幻界、言界、現界、限界、原界、Gen界、眼界、弦界、減界。しっぽのないさるからはずれた、くるえるさるの、しにものぐるいのさま。とどまるところをしらぬ。あさましくもあり、むなしくもあるさま。なにかに、にている。えづけされたさるが、なげられたえさを、あさるさまににている。ちは、あらそわれない。ひとは、かしこく、あやまらない。あやまつことなし。そう、ひとはおもいこんでいる。だから、たりなくても、へいちゃら。のーたりん。のーりたーん。

*

ぼんやり。きりが、たちこめたさま。それが、ひとのめにうつる、うつつのさま。だが、まだら、すかすかになれた、ひとは、それが、くつきり、あきらかだ、とおもう。ひとにかぎらず、すべてのいきものは、わくのなかにある。あえて、わくを、おもうことなし。わくにこだわるのは、ひとだけ。だから、ひとは、おのれがぼんやりのなかにいることを、ぼんやりとおもう。たりない。なにかが、たりない。かけている。なにかが、かけている。そのなにかは、わからない。しらない。でも、しりたい。わかりたい。だから、しかたなく、わける。わければ、わけただけ、かけらが、ふえる。そのかけらに、な、すなわち、ことのはを、あたえる。なが、たりなくなる。おぼえきれないから、おなじ、なをあたえる。そして、また、わける。きりがない。それなのに、きりのなかにいる。だから、ぼんやり。たわけた、ことわりなり。

*

なは、つねに、たりない。それでいて、しんだことのはを、わらい。あらたなことのはを、ほめそやす。しご。しんご。ちがいは、ん、があるか、ないかだけ。たわけ。ん。n。ひっくりかえして、u。ふたつあわせて、m。む。ひっくりかえしたのを、ふたつあわ

せて、w。だぶるゆー。えいごなり。どうぶるヴえー。ふらんすごなり。uとvは、もとはおなじだというはなし。それにしても、たった、にじゅうろくもじで、ことばをあやつるとは、たいしたもの。まな、かな（ひらがな、かたかな）、ろーまじに、なれた、このしまじまのひとたちには、はかりしれない、しくみ。このたわごとをつづるあほも、くびをかしげるうちの、ひとりなり。

*

なるべくして、なっている。そうかんがえるしかなし。ややこしく、かんがえれば、ややこしくなる。やさしく、かんがえれば、なんでもない。こと、もの、さまは、みるものの、おもいできまる。おもいはおもい、おもいはかるい。もっとわけたい、もうわけなくていい。ひと、それぞれ。にじゅうろくもじ。おびたしいかずのもじ。ものは、いいよう。ものは、かんがえよう。滅界は言界でもあり幻界でもある。

*

ことのはは、またがる。ことのはだけでなく、ことも、ものも、さまも、またがる。ひとつが、ふたつに、みつつに、よつつに——とまたがる。かさなりあう。からみあう。おもいはおもい、おもいはあつい、とかんがえるひとの、ことわりなり。ただしいかどうか、まことかどうか、ひとには、わからない。まことはかたこと。かたことはまこと。ひとが、おかわりをもちいるかぎり、わからない。滅界は言界でもあり幻界でもあり限界でもある。

*

ことはは、またがる。ひとつが、ふたつに、みつつに、よつつに——とまたがる。おなじなのものが、いくつかあるときもある。にたものどうしは、にくみあう。ひとのさが。にたものたちが、ともにいきることは、むずかしい。そっくりだと、なお、むずかしい。にているは、おなじとはことなる。よに、おなじものはない。そっくりも、おなじとはことなる。おなじなをもつ、にたものたち。おなじなをもつ、ことなるものたち。ちなみに、な・己・汝は、わたしでもあり、あなたでもある。わ・我・吾も、おなじ。てまえ、てめえも、おなじ。もっとも、これは、やまとことばでのなはなしなり。からことばについては、しらぬ。からからきたひとがきいたら、ぶったまげるのではないか。いや、にたような、つくりのことばが、どこかのからにあってもおかしくはない。滅界は言界

でもあり現界でもある。

*

じびきを、みてみよう。ひとつのことはに、いくつかのことわりがしるしてある。みじかいおとのことはほど、おおくのことわりがある。どういふことなのか。もとがあつて、わかれたのか。きのように、えだわかれしたという、はなしもある。かたや、いいまちがい、かんちがい、なまつたためだという、ことわりもある。そんなものだろう。ことばのものは、ひとのくちからでた、いき。いきもの。いきものは、ひとりあるきする。けつまずくこともある。つまずけば、われる。つるむこともある。つるめば、こができる。そうやって、ことのはが、ふえる。なまりも、ふえる。ことばも、ふえる。滅界は言界でもあり Gen 界でもあり原界でもある。

*

まみずのような、ことばはない。どのことばにも、べつのことばのかたことがまじっている。ずれた。はずれた。ゆがんだ。まがった。それが、まとも。すこやかに、そだったあかし。みなもとのいずみに、まみずがあるはずだと、しんじるひとたちが、たまにいます。もとに、もどろう。まことのすがたに、もどろう。かえるに、かえろう。そう、わめく。かえるにかえることはできない。おたまじゃくしは、かえるのこ。だが、かえるは、おたまじゃくしに、かえれない。おたまじゃくしは、ゆらゆら、ぶらぶら、およぐ。そのうち、あしがでる。てがでる。そのうち、かえるとなって、すいすいおよぐ。ひとのこも、おなじ。はいはい、よちよち、ゆらゆら、ぶらぶら、よりみちをして、こどもはそだつ。とはいえ、おとなになっても、よりみちばかり、しているものがおおい。このあほも、そのひとり。ゆらゆら、ぶらぶら。滅界は言界でもあり弦界でもある。

*

ことのはは、それがさししめすといわれている、ことやものやさまと、ひとつがひとつに、むきあっているわけではない。ひとつのことはには、あつみとおもみが、そなわっている。なぜなら、ことのはは、もとは、ひとがつくった、いいかえれば、くちにした、ものである。いったん、くちにされ、つくられたことのはは、ふたり、あるいは、それよりおおくのひとのあいだで、かわされることになる。ひとのかずだけ、そのことのはの、あつみとおもみは、ます。いや、たとえ、ひとりのひとが、あることのはを、くち

にしていたとしても、ときとともに、そのことのはは、あつみをまし、おもみを、ます
こともあるだろう。わすれさられることも、あるだろう。

*

ことのはは、かみ。ぺらぺらの、かみっきれ。ただし、それには、なまえが、しるされ
ている。ひとは、ながしるされたかみっきれを、つぎからつぎへと、なにかに、はりつ
け、はがし、また、かわりを、はりつける。おなじものに、なんども、はりかえる。どう
して、そんなことをするのだろう。かみが、たくさんあるからか。なまえが、たくさんあ
るからか。なにかが、たくさんあるからか。いや。たりないからだ。たりないのは、なに
かでも、なまえでも、かみでもない。なにかのかわりになるものが、たりないのだ。ね
んのためにいうと、かわりとは、なまえではない。かわりとは、ひとのおもいのなかに
ある、なにかをさししめすと、おもわれている、はっぱのこと。ことのはと、きわめて、
にているが、ちがう。ことのはのかわりともいえる、なにか。かめん、おめん、ますく
と、よぶこともできるもの。なにかに、にせたもの、つまり、にせものといってもいい。
ぺらぺらした、かわり。うすい、かわりでできた、かわり。それが、つねに、たりない。

*

ことのはは、まぼろし、ゆめ、おもいと、きりはなすことができない。ひとつのこと
のはが、いくえにも、きこえる。もじとして、つづられたものなら、いくえにも、かさ
なってみえる。そして、きいたものであれ、みたものであれ、ことのはは、こころのな
かで、おもいのなかで、いくつかのゆめのつづや、おもいのつづにわかれ、ぱちぱちと、
はじける。すくなくとも、このあほは、そんなつづの、ゆらぎとうごきを、わがみのな
かで、かんじる。げん、滅、幻、言、現、限、原、源、元、Gen、眼、弦、絃、gen、ゲ
ン——。へる、滅る、経る、歴る、謙る、放る、heru、ヘル、hell、Hel、her（※ドイツ
語）、Herr（※ドイツ語）——。滅界は言界でもあり幻界でもあり眼界でもある。

*

へる。たりない。ふえる。みちる。そうしたことわりが、であい、ともにすまうところ。
それが、ことのはという、ば。ことのはにおいては、つじつまあわせは、ふさわしく
ない。ことのはは、おもいや、まぼろしや、ゆめの、かがみ。おもい、まぼろし、ゆめ
に、つじつまは、かならずしも、そぐわない。きまぐれ、まぐれ、でまかせ、でたらめ、
たまたまが、すべるところ。ことわりは、ことのはのがわになく、あくまでも、ひとの

がわにある。というか、ひとは、ことのはと、ことわりとの、あわい、へり、ふちをさまよう。うろうろ、よろよろ、ぶらぶら。

*

へる、たりない。それなのに、ふえる、みちる。なにごとも、ひっくりかえせば、べつのものにみえる。あべこべ。べこべあ。さかさま。まさかさ。ちがってみえても、おなじこと。すべてのことのはは、ひとしい。ひとしくないのは、ひとのめにうつるから。つまり、そのように、ひとにみえるだけ。そんだけー。そうだ。そうじゃない。そうにちがいない。いや、そんなことありえない。どんなにいいあらそっても、おなじこと。あらがう、あらそう、むなし。ねこのみみには、ひとのことわりのこえに、ことわりなし。よそのことばをはなすものには、うちのことばは、ちんぶんかんぶん。ばいす・ばーさ。

*

へるのきわみは、なし。む。無。ふえるのきわみも、なし。む。無。さしひき、ぜろ。0、○、わ、輪、環、話、我、吾、曲、回、わ、◎、○、0。まあるく、おさめまっせー。わっ。おどろかせて、もうしわけない。もうす、わけ、なし。なんにもない。幻界、言界、現界、限界、原界、Gen界、眼界、弦界、滅界。ことわけしても、なんにもない。むなし。む、なし。む、あり。おなじこと。

*

ない、から、あるはうまれない。これ、うそ。ひとにとっては、うそ。ないから、あるを、うむのが、ひと。くれあちお・えくす・にひろ。ちなみに、ひとは、あるから、ないを、うむ、おそれあり。このほしから、いのちといういのちを、ことごとく、なくす、おそれあり。うっそーっ！？ほんまやでー。ほんとに？ほんとに。さしひき、なし。ごはさん。じこはさん。じょうだんや、ないでー。ほんまもんやから、こわいでー。

*

へる。いくつかのたものが、ひとつのものにみえてしまう。あわいが、みえなくなっ

てしまう。ことのはで、たとえをあげれば、遇う、遭う、会う、合う、あう、というぐあい。／ふえる。ひとつのものが、いくつかのにたものに、わかれてみえてしまう。たとえば、かえる、帰る、返る、還る、というふう。／だぶる。ひとつのものが、ふたえ、みえ、いくえにも、みえてしまう。たとえば、原、源、元、腹、胎、本、素、基というかんじ。／くっつきり。ふたえ、みえ、いくえにみえるものが、ひとえにみえてしまう。たとえば、編、篇、偏、片、扁、辺、へん。

*

みえてしまう。なぜか、みえる。わけもわからず、みえる。ことわけにたすけられて、みえる。いずれにせよ、みえるだけ。かわりと、にせものだらけの、うつつでよくみかける、ゆめうつつ。ある、わけではない。いる、わけでもない。みえるだけ。ゆめとまぼろしのなかに、なにが、ある、だろうか。なにものが、いる、だろうか。

*

みえる。どんなふうにもみえる。眼界は、絃界のはたらきを、つよくうけている言界のごとく、きわめてきまぐれであるがゆえに、滅界とGen界がかさなり、それが原界をなして、かぎりなく幻界と現界とせつする限界にある。ことわっておくが、これは、ことわりではなく、うたであり、たわごとなり。ここにつづられたことのはは、しんじるにあたいせず。うたのように、ききながすべし。

*

へる。ない。たりない。かける。すかすか。ばらばら。ちりぢり。とびとび。ちょっと。ちょっぴり。

*

ふえる。ます。みちる。つまる。うようよ。ますます。いよいよ。いっそう。いっばい。

*

0と1、でじたる、いちかばちか、うむ、有無、○(E、∞、0、かぎなく0、n、なの、よ。それで、ことたりる。すかすかでも、おーけー。ちょっとでも、のー・ぶろぶれむ。たっぶりすかすか。ちりぢりにうようよ。

*

ゼロさむ。つどのつまりは、なんにもないちゅー、ことか。zero sum。zero thumb。digital。もとは、finger と、じびきにあり。ゆびおりかぞえる。おおむかしのひとは、どうやって、かぞえたのか。

*

ゆびを、おる、まげる。おる。おれる。あかんなー。まげる。まがる。ねじける。ひねくれる。このあほみたい。あかんなー。なまって、まがう。まがいもの。まちがう。やっぱ、あかんなー。まげる。"がぬけおちて、まける。あかんなー。かぞえるも、ことわりなり。というより、かぞえるこそ、ことわりなり。ことのはより、ふるいかも、しれぬ。

*

てと、あしの、ゆびだけでは、たりない——。いや、だいじょうぶ。げんこと、ゆびいっぽん、さえあれば、なんとかなる。にほん、ゆびの、ヴいさいん。0と1、でじたる。0と1、で事足る。0と1で、ことたりる。なるほど。そのかわり、ちょーはよう、うごかな、あかんでー。はんばや、ないでー。

*

やっぱ、すばこんや。にばんででは、やれん。ほー、そうかいな。しわけで、えーだの、あーだのいっても、らちがあかん。というわけで、しゃしゃりでてきた、りけいの

おやぶんの、どーかつ。りけん（※だぶるみーにんぐ）の、ごねとく。のべるなかまのよ
りきりで、かち。おめでとさん。で、だれのとくに、なるの。しょみんでないことは、た
しか。【※出演者、3名+端役数名。】

*

こんぴゅーた しゃかりきにうごけば ないものはない

つかれをしらず あさばんはたらく でじたるうま

れいといち それだけあれば ひとおよろこび

はらいっぱい まだたりないのは のうみそだけ

みえないつづ あらたにでてきた ひまつぶし

きりはなし えんえんとおもちゃに もてあそばれ

へるはなしなのに いっこうにへらずへらずぐちをたたくのみ

*

へる。hell。Hel。じごくへ、まっしぐら。Help!

*

へる。たりない。このほしの、ゆくすえだけは、まじ、やばそう。ゆめでも、まぼろし
でもなさそう。おそらくのはなしだが――。だから、みんなで、めをさまそう。ひとであ

るかぎり、おそらく、としかいえぬかなしさ。かわりだけを、あいてにせざるをえない、ひとのよるべなさ。さが。かなしさ。まぼろしよ、まぼろしであってくれ。ゆめよ、ゆめであってくれ。くるいよ、くるいであってくれ。たわごとよ、たわごとであってくれ。

【追記上記の戯言につづられていることばたちに身をまかせてください。どのようにも取れると思います。意味や解などありません。というか、無数にあるでしょう。そうやって、たわむれてみませんか。参考としての、ことわりをお望みの方は、グーグルで、“うつせみのくら”“破れ”、“うつせみのくら”“代理”“限界”、“うつせみのくら”“まだら状”、“うつせみのくら”“26文字”、“うつせみのくら”“対応”“関係性”という具合にダブルとトリプルのキーワードで、5回検索してみてください。

そのさいには、“○○”と括弧でくくるのをお忘れならないように、ご留意願います。今、挙げた5組のキーワードを、それぞれそのままコピーペーストして検索なさるのが、てっとり早いかもしれません。ヒットするのは、長い文章が多いと思います。関係ありそうなところだけ、拾い読みしていただくだけで十分です。こんな戯事にお付き合いくださる方がいらっしゃれば、うれしいです。】

【後記滅界の話なのに、きょうも長くなってしまいました。ごめんなさい。残すところ、あと1界です。これまでのどの界についても、自分は言葉に導かれ、もてあそばれながら、つづってきたというのが、実感です。そんな摩訶不思議な10の界=位相（※比喻です）なのです。最後の絃界は、自分にとってはいちばん不可解な界なのですが、とても気になるので、語る・騙るしかありません。

読者の方々から応援クリックやメッセージをいただき、どうもありがとうございます。また、更新をしていないために「人気ブログランキング」で、知らぬ間に消滅しかけになりがちな「うつせみのくら」を、クリックでときどき助けてくださっている方々にも、お礼申し上げます。このブログは友達のいないモノブログですので、仲間票や組織票もなく、ほそぼそとやっております。みなさんのフィードバックが何よりの励みです。くだくだしい駄文にお付き合いくださっている、こころやさしいあなたに、感謝いたします。】

【注：現在は「うつせみのくら」という過去のブログ記事を再録したサイトがないので、上記の検索は意味をなしません。お詫び申し上げます。】

10.02.15 うつせみのたわごと-14-

◆うつせみのたわごと -14-

2010-02-15 08:44:32 | さくぶん

げん——。きになることば。からからきた、ことば。からから、つたわってきたこと
との。つたわるには、すじがいる。いと、みち、つな、みぞ、くだ、つる、ぼう。べつ
に、ほそくのびたものでなくても、いい。なにかとなにかのあいだに、なにかがあれば、
なにかがつたわる。

*

つたわる。わたる。うつる。とどく。あう。であう。つながる。まじる。

*

はなす。はなつ。はっする。おくる。しかける。とどける。あげる。あたえる。やる。
うける。うけとる。むかえる。とめる。うけとめる。てにする。おうじる。もらう。こう
むる。いただく。

*

ま。あいだ。あわい。へだたり。ば。ところ。うち。めん。かん。かんかく。みち。み
ちのり。

*

むき。ほう。ほうこう。ほうがく。かた。すじ。すじみち。みち。

*

なみ。ながれ。つぶ。こな。かたまり。かぜ。くうき。き。け。けはい。もの。ぶっし
つ。ぶつ。こと。さま。ありよう。かた。かたち。すがた。ゆれ。ゆらぎ。うごき。はた
らき。

*

つながり。かかわり。かかわりあい。きずな。つな。あいだがら。むすびつき。ゆか
り。つて。ひき。えん。えんこ。いんねん。かんけい。こね。てづる。すじ。ちすじ。ほ
だし。かせ。

*

つる。ひっかける。とらえる。つかまえる。つかむ。もつ。てにする。てに入れる。よ
せる。ひきよせる。おさめる。もらう。にぎる。とる。うちとる。うぼう。みる。きく。
かぐ。あじわう。はだでかんじる。かんじる。さっする。いだく。おぼえる。おもう。

*

きになるのは、うごく、うごき。うごく、うごきにも、いろいろあるが、とりわけ、
きになるのは、ゆらぐと、ゆらぎ。ゆらゆら、ぶらぶら、ぶるぶる、うろうろ、おろお
ろ、くねくね。

*

うごくこと、うごきほど、まぼろし・幻界、ことわけ・言界、いまここ・現界、ふち・限界、もと・原界、ふえる・Gen界、みる・眼界、まかせる・弦界、へる・減界、つたわる・絃界と、かさなるもの・こと・さまはないきがする。というのは、むなしき、ことわりにすぎない。うごくという、な、すなわち、ことのは。うごきという、あきらめにみちたことのは。ことわりも、ことのはも、うごく・うごきをとらえることはできない。できないように、できている。そういう、つくり。そういう、しくみ。しくみという、ことのはも、むなしき。

*

げん・絃——。きになることば。からからきた、ことのは。ひとには、うまれつき、ことばのすじがあたまのなかに、きざまれているらしい。そのすじをたどるかたちで、まわりで、はなされていることばを、まなび、みにつけていくのだという。どのようなことばであれ、あかんぼうやおさないこどもは、おとなとは、くらべものにならないはやさで、まねていく、まなでいく。まなぶためには、まねるためのみちすじが、そなわっていなければならない。みちが、ひかれているはずだ。このようにして、ことばがつたわる。うけつがれる。という、はなし。ものがたり。たしかめたものはいない。

*

おおむかし、このしまじまに、からのくにぐにからきたひとたちが、うつりすみ、おおきくわけて、ふたつのことばをはなし、かいていたことがあったという。という、はなし。ことばとともに、さまざまなものをつくりかたや、くにおさめかたなどが、つたわったことは、いうまでもない。という、ものがたり。ことばが、ことのはが、ひとをうごかす。ひとをゆさぶる。という、はなし。

*

ことばは、おりものに、よくたとえられる。ちなみに、絃は、いと。おりものとは、いとをおること、または、いとをおってつくったもの。てくすと、てきすと、これ、からことばで、おりもの、すなわち、ぬののようにおられた、ことのはのあつまりだという。てきすと、てくすととは、かきもの、もじをつづったものなり。そういえば、つづるとは、

やぶれたころもをぬいあわせたり、つぎをあてたり、はなれたものをつなぐこと。つづれおりという、きれいないかたもある。

*

おりものと、かきものは、ことのはとして、つながりやすいもよう。えになる。みためもきれいだし、みてわかりやすい、たとえだ。おりものといえば、ぬの。ぬのといえは、ぱっちわーく——。めちやくちやな、こじつけ。やらせ。いかさま。で、でてきたのが、ぶりこらーじゅ。これ、からことばで、てしごとなり。あどりぶ、まにあわせのおかずづくり、ありあわせのりょうりにも、にている。めについたものを、かたっぱしから、くみあわせる。そして、それをもちいて、しごとをする。なにかの、はたらきをする。

*

たりないなら、あるもので、すます。いま、ここにあるものを、もちいる。言界では、ことのはのあつみと、おもみを、おもんじる。ひとつのことのはに、いくつものことのはを、つめこむ。ひとつのことのはに、いくつものことわりを、になわせる。いわゆる、しょうえね。つかうことのはを、できるだけへらす、えこ。いつまのか、減界のはなしにうつってしまった。えこ。えごと、かみひとえ。このほしに、やさしいとまではいえないが、いわゆる、ひとつの、えころじー。がけっぶちにある、このほし。いつのまにか、限界のはなしになってしまった——。めちやくちやな、こじつけ。やらせ。やおちょう。

*

ふえすぎた、ひと。もちすぎた、ひと。ひとは、Gen界にいながらにして、ぶらぶら、ゆらゆらと弦界にある、てんからのつるにつるしあげられて、みをまかせるしかない。そのゆらぐおのれのすがたを、からだでとらえ、まなこをあけて、めまいをおぼえつつ眼界をさまよう。ふと、それがおのれのふるさと、ははのはらのなかだときづく。原界にいるのだときづく。もどったのではない。かえったのではない。いまここが、もとなのだと、さとる——。めちやくちやな、こじつけ。やらせ。できれーす。

*

めちやくちやなこじつけ。なんでもかんでも、くっつければいいというものではない。この、あほめ。たわけめ。めちやくちや、こじつけたうえに、へらずぐちばかりを、たたきよって。

*

ごめんなさい。かえすことばもありません。いや、ことのはしか、かえすものはありません。

*

はなしを、ゆらぎにもどそう。うえのことばたちがえんじてくれた、めちやくちやなこじつけに、はなしをもどそう。つなぐ、めちやくちやに、こじつけて、なんでもかんでも、ことわりもどきのべてんで、つなげる。それが、ゆらぎだと、このあほはおもう。とちくるっているのだから、いたしかたない。

*

ゆらぎと、つたわりを、めぐるはなしを、はなしをつづることのはたちに、えんじてもらう。これ、このたわごとの、たくらみなり。つづるうえでの、すべなり。ひとりずもう。はなしのなかみは、どうでもいい。はなしをつづってくれる、ことのはの、うごき、ゆらぎ、みぶり、めくばせ、かおつきに、めをこらしてほしい。たわごとに、ふさわしい、たわけた、くわだて。はなしをかえよう。

*

くものすを、おもいえがこう。くもは、いとをはき、めぐらし、あみをつくり、すとする。すどいっても、えものをとらえる、わななり。わな。なわばりなり。そのはりめぐらされた、なわ、すなわち、わなに、ひっかかったものは、にげようとして、もがく。ねつと。なつと。ねつとりとした、いとが、もがくたびに、からだにからみつく。もがくほど、からだかゆるる。ゆれが、あみのいとに、つたわる。ぶるぶる。それが、ゆれ。ゆら

ゆら。ぶるぶる。

*

くものすは、あみ。くもは、あみのゆらぎを、からだでうけとめる。そうやって、えものをあやめる、おりをうかがっている。うえぶ。web。このほしにはりめぐらされた、あみ。ひとが、つくったあみ。あなたとわたしをむすぶ、あみ。あなたと、このほしにすむ、とおくはなれた、おびたしいひとたちをつなぐ、あみ。

*

いんたーねっと。いんたーは、からことばで、あわいとか、きわをさす。ねっとは、あみ。あわいあみ。めにはみえないが、ひととひと、ことのはとことのは、きかいときかきを、つなぐ、あみ。でんわも、あみ。むせんも、あみ。けーぶるも、あみ。じんこうえいせいをかいした、あみ。おざき、あみ。すずき、あみ。ぜ、あみ。まい、あみ。もとのもく、あみ。じびき、あみ。なんでもかんでも、ごっそり、すくいとる、あみ。

*

ところで、あみは、こわい。ほんまやで一。ひっかける、しくみ、しかけ。ありとあらゆる、でんばや、ゆうせんのしんごうを、ひっかけると、うわさされる、えしゆるん。それは、さておき、みなさん、おなじみの、けんさくえんじん。けんさくとけんえつは、きわめてちかい。このしまじまの、にしどなるの、おおきなくにのありさまを、みなはれ。ひとごとや、あらへん。あら、へんだと、おもったときには、もうおそし。びっぐ・ぶらざー。ふあしずむ。ふあっと、でてきても、なかなか、しずむことなし。こわいで一。

*

あみをはる、さがす、おう、みつける、ひっかける、つぶす、とらえる、けす、ぼっする、ときには、あやめる。かの、0と1のしくみもちいる。たった、ふたつのしるしなのに、はんぱじゃなく、きわめて、すばやく、はたらかせる。そうすれば、おびたしいかずとりょうので一たを、さばくことができる。さはら、さばく。とてつもなく、でっ

かい、どくぐも。ぐぐる、やふる、えしゆる。にている。げきに。にすぎ。みなさん、せいぜい、きいつけなはれ。まじこわ、でっせー。のぞかれて、まっせー。みられてまっせー。きかれて、まっせー。よまれて、まっせー。このまま、すすめば、よも、まっせ、すなわち、すえ。

*

つなぐ。むすぶ。あみ。ゆらぎ。絃界—幻界—言界—現界—限界—原界—Gen 界—眼界—弦界—滅界。

*

10の「げん」の見取り図を、ふたたび、だしてみよう。

*

「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・(隔たったものを) 近くする・知覚する」

= 「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」

= 「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ(全・空・虚)をうつ・うつうつ」

= 「げん・限・限界・限度・境目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」

= 「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」

= 「げん・Gen (※ドイツ語)・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」

＝「げん・眼・がん・まなこ・め・見（げん・けん）・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」

＝「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす・まいりました」

＝「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減＝増・無限小＝無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・0・〇・まあるくおさめまっせー・輪・和・わ・わっ」

＝「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でっけー・うへーっ・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ・わけわかんない」

*

ひろがる、あみ。あちこちに、はりめぐらされている、さまざまなあみたち。のびた、いと。とおいむかしから、ずっとつづいている、あるいは、ついこのあいだ、あるいは、たったいま、のびたばかりの、いと。あみがほどけば、いととなる。いとがからまれば、あみとなる。いずれにせよ、いとも、あみも、ゆらぎを、つたえる。ばいたい。場・維・帯。

*

あわい。あいだ。ば。つたわる。ゆれ。ゆらぎ。つながる。つながらない。はる。めぐる。きれる。とだける。からまる。まざる。

*

つりを、おもいうかべてみよう。かわのながれ、うみのなみま、いけのさぎなみ。いとをたらす。いとをなげる。あみをなげる。あみをはる。わな。ねらう。いきをこらす。まつ。

*

いとでんわを、おもいうかべてみよう。むこうと、こっち。はなす。こえがつつのそこに、はられたかみをゆらす。いとが、かすかにゆれる。みえないほど、かすかに。つたわる。つながる。つながったときの、よろこび。ときめき。

*

しかけ。しくみ。わな。はまる。ひっかかる。おちいる。つられる。

*

しかける。しくむ。とどける。おくる。つたえる。わたす。かわす。

*

しかける。しくみ。ほしい。ねがう。いのる。たくす。まかせる。とどく。とどかない。かなう。かなわない。じゃまされる。

*

しかけ。しくむ。ねらう。たくらむ。であう。あう。とらえる。とらえられる。のがす。にげられる。じゃまされる。まける。かつ。つながる。まじわる。

*

しかける。しくむ。はる。あむ。おる。まげる。つぐ。つくる。うつる。かわる。あ
う。ゆらぐ。

*

ありとあらゆる、いきものが、しかける。しくむ。ゆらぐ。ゆらぎをとらえる。いきる
ため。くうため。ひとも、おなじ。だが、おそらく、ひとだけが、ことわる。事割る。言
割る。ことわりもなく、ことわる。おごる。

*

ゆらぐ。いきもの。いきをすう。いきをはく。なく。みぶるい。みをふるわすのは、お
もに、みをまもるときの、さま。ぴくぴく。びくびく。ぶるぶる。おののく。いつも、ま
わりに、めをそそぐ。あやうきを、なかまに、つたえることもある。それだけではない。
ぴくぴく。つがる。たねをつける。たねをうける。ぴくぴく。うむ。うまれる。ぴくび
く。くるしむ。なくなる。

*

ゆらぐ。ひと。みぶるい。みをふるわすのは、みをまもるさまだけに、あらず。よろこ
ぶ。いかる。かなしむ。たのしむ。おののく。はなす。かたる。かく。しるす。つづる。
となえる。うたう。いのる。つたえる。わらう。たかぶる。おごる。えらそうに、みをふ
るわす。うきうき。

*

ある。いる。それだけではない。いきものは、ゆらぐ。ことわりは、これくらいにしよ
う。わけても、わからなくなるだけ。いや、ひとであるかぎり、わけるしかない。おも

いのなかで、ゆらぐ。それしかない。

*

ゆれ。これも、なにかの、かわり。なにかの、しるし。なにかそのものにあらず。ゆれる。ぶれる。つたわる。つたわらず。つたわりそこなう。ゆれそのもの？ ことわけ、たわけ、たわごとなり。

*

ともかく、ゆれよう。めがまうまで。

【追記上記の戯言につづられていることばたちに身をまかせてください。どのようにも取れると思います。意味や解などありません。というか、無数にあるでしょう。そうやって、たわむれてみませんか。参考としての、ことわりをお望みの方は、グーグルで、“うつせみのくら” “経路”、“うつせみのくら” “発信” “受信”、“うつせみのくら” “ナンパ” “めくばせ”、“うつせみのくら” “プリコラージュ”、“うつせみのくら” “熱” “二進法”、“うつせみのくら” “揺らぎ” という具合にダブルとトリプルのキーワードで、6回検索してみてください。

そのさいには、“○○”と括弧でくくるのをお忘れならないように、ご留意願います。今、挙げた6組のキーワードを、それぞれそのままコピーペーストして検索なさるのが、てっとり早いかもしれません。ヒットするのは、長い文章が多いと思います。関係ありそうなところだけ、拾い読みしていただくだけで十分です。こんな戯事にお付き合いくださる方がいらっしゃれば、うれしいです。】

【注：現在は「うつせみのくら」という過去のブログ記事を再録したサイトがないので、上記の検索は意味をなしません。お詫び申し上げます。】

【後記10の「げん」についてのたわごと・戯言・戯事は、これでおしまいです。誰に頼まれたわけでもなく、こんな酔狂をやっていましたが、とてもスリリングな体験をしまし

た。自己満足にしかすぎませんが、おもしろかったです。心身ともに、疲れもしました。ただ、次にやってみたいことが、みえてきたので、素直に喜んでいきます。いずれにせよ、少し、休む必要があるようです。

本当に、くだらなかつたでしょう。ごめんなさい。中身など、何も無いお話でした。でも、本気なのです。逆説的な表現に思われるかもしれませんが、くだらないなりに、中身というか内容のないように、仕組みでつづったつもりなのです。ややこしいですね。でも、本気なんです。言い換えると、PCのモニター上につづられた言葉たちとともに、ただぶらぶらと揺らいでくれた方がいたとすれば、そんなうれしいことはありません。

いずれにせよ、貴重な時間を割いて、たわごとを読んでくださった方々に、こころより感謝いたします。

げんげんと たわけたのちに たちくらみ】

10.02.16 「外国語」で書くこと

◆「外国語」で書くこと

2010-02-16 08:57:35 | さくぶん

「母語」の中で「外国語」で書くこと。そのような話を、大学時代に見聞きしたことがありました。だれが、どのような文脈で言っていたのか、書いていたのかは忘れしました。大切なのは、そうしたイメージとフレーズが、今、ここで、自分の中にあるということです。

「母語」を括弧でくくったのは、それが抽象的なものだからです。だれにも、知覚できず、極論を言えば、その存在さえも、明確な形で検証できるものではない。それくらいの意

味です。「外国語」を括弧でくくったのは、それが比喩だからです。たとえですから、あくまでも、言葉の綾であり、これまた抽象的で、存在や真偽の検証など不可能というか、検証の埒外にあります。

そうした、ないものづくしの、お話をしているのです。「うつせみのたわごと」というタイトルで連載した記事たちは、とりあえず「母語」と呼ばれている言葉をもとに、つたない書き手である自分が、わざと、くずし、まげて、つづった書き物です。「くずし、まげた」という点が、括弧つきの「外国語」と表記した理由とも言えるでしょう。

*

ふだん、自分がこうして書いている書き方の枠を「ずらした」とも、言えそうです。いつも自分を縛っている枠であれば、気がつかないのが当然でしょう。でも、その枠をずらせば、「縛り」や「締め付け具合」が気になるものになることは、想像しやすいと思います。いつもと違ったベルトをする。買ったばかりの服を身につける。新しい靴を履く。そんな場合に感じる、違和感を思い浮かべてください。

違和感は、心地よいものであったり、窮屈なものであったりするでしょう。「うつせみのたわごと」シリーズでは、なるべく大和言葉系の語をもちいるように努めました。国語が大の苦手だった者の、お遊びですから、めちゃくちゃだったと思います。だからこそ、「たわごと」と名づけたのです。とはいうものの、以前からブログで書いてきたものすべてが戯言ですから、相変わらずというべきでしょう。

ものを書くさいには、用意していた走り書きメモを頼りに、アドリブで書く癖があります。そのため、文体的な統一など考えずに、文語調であったり、口語調であったり、駄洒落をちりばめたり、ごった煮状態の文章になっています。こればかりは、癖ですし、直す直さないの問題でもないと考えていますので、ご容赦願います。特に、このシリーズはほとんどが、ひらがなであったうえに、今述べたような、あやしげな言葉遣いをしたため、読みにくかったにちがいありません。辛抱して、読んでくださった方々に、あらためてお礼を申し上げるとともに、お詫びいたします。

ありがとうございました。そして、ごめんなさい。

*

basic English や VOA の special English という言葉をご存知でしょうか。簡単に説明しますと、ふだん、日常生活で見聞きする英語よりも、単語の数を少なくしたものです。英語は、ほかの言語に比べて、語彙、つまり、単語の数がずば抜けて多いと言われています。日本語も、そうらしいです。なぜでしょう。不正確な説明になるのを承知のうえで、単純な理由を挙げると、英語も日本語も、大きな大陸の端っこにくっついている島々で話されてきた言葉だ、という共通点があります。

いわば、ふちっこにあるわけですから、大きな大陸にある複数の言葉の影響を、受けやすい。言い換えると、外からの言葉が、島々にもとからあった言葉と混じり合ったという話ですね。すると、もとからあった言葉と、大陸から入ってきた言葉の、二重構造が生まれるわけです。例を挙げれば、「みごもる・はらむ」と「妊娠する・懐妊する」、「have a baby」と「be pregnant」みたいに、二通りの言い方が可能だということです。個人的な印象を申しますと、やまとことば系の「みごもる・はらむ」は、おなかのあたりでどんとくる感じがし、漢語系の「妊娠する」は頭の表皮あたりで理解している気がします。「懐妊する」にいたっては、「えっつ？」という具合に、理解するのに1秒ほど時間がかかる次第です。1秒って、意外と長いですよ。

basic English や VOA の special English は、さまざまな目的や意図から、英語を母語としない人たちが英語を学習する過程で、なるべく負担のないように考慮し、語数を制限した人工的な英語だと言えそうです。2つの言語に興味のある方は、それぞれ、“ベーシック英語”、“スペシャル・イングリッシュ”をキーワードに、グーグルなどで検索なさってください。ウィキペディアの説明が、わかりやすいと思います。

*

「うつせみのたわごと」という連載では、自分なりに、使用する単語に制限を設けて、あやしげなつづり方で、文章を書いたわけですが、そのときに、つねに頭にあったのが、basic English と VOA の special English でした。ところが、回を重ねるうちに、だんだん、マンネリ化してくるのを感じました。第二次世界大戦中に、英語を敵性語とみなし、英語を日本語に言い換えるという政策が、この国でとられていました。たとえば、野球では、「アウト」を「ひけ」と言っただけですね。

それに似た馬鹿馬鹿しさを感じるようになってきたのです。目的が形骸化してきたと言えれば格好をつけすぎですから、ただ飽きてきたというべきでしょう。「うつせみのたわごと-10-」2010-02-11で「Gen界」をあつかったさいには、遺伝子、投資、経済といった分野の話題を、できるかぎり漢語系の言葉をつかわずに、大和言葉系の語に置き換える作業が、とてもおもしろかったのですが、界=回を進めるごとに、徐々に難しく、また、わずらわしくなってきました。

「限界」は、「うつせみのたわごと-8-」2010-02-09で、すでに通り過ぎたのに、「うつせみのたわごと-12-」2010-02-13で、「絃界」をめぐるって書いているうちに、大和言葉だけでなく、外国語の単語もまじえるようになってきて、英語と日本語をクロスさせての駄洒落までするほどになり、まさに限界をひしひしとを感じるようになりました。杵が、だんだん緩くなっていったということです。お恥ずかしい限りです。10の「げん」のうちの最後である「絃界」で、インターネットについて書いているときに、Internetを「あわいあみ」などと置き換えているうちに、あまりにも馬鹿馬鹿しくなり、思わずひとりで笑っちゃいました。

*

でも、本気だったのですよ。本気で、このシリーズを書いていたことは、確かです。本気だからこそ、楽しかったし、ひとさまに笑われようとも、自分にとっては、やりがいがあったのです。だから、続けられたのです。今でも、「たわごとシリーズ」を書いたことは、後悔していません。また、いつか、大和言葉づくしで、文章をつづってみたいという気持ちもあります。

収穫というとおおげさになりますが、杵をずらして書く、あるいは、言葉をつくりながら書くという体験は、当たり前だと思っている、ことや、ものや、さまを、それまでとは異なった視点からとらえる機会になった気がします。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。杵をずらすさいには、

- 1) ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
- 2) 大和言葉系の語を組み合わせるって説明的に書く、

3) 大和言葉系の語を用いて比喩をつかい、ほのめかす、

以上の3つの方法があるように思います。

いずれの作業も、自転車に乗れるようになるとか、泳ぎを覚えることに似て、体でおぼえる部分が大きいと感じました。実際に、やってみないと、ピンとこないところがあります。万が一、ご興味のある方がいらっしゃるとすれば、ぜひ、お試しください。なかなかスリリングな経験ですよ。いい頭の体操にもなります。どうせ素人のやることなので、自己流でかまいません。楽しければいいのです。お勧めします。

*

異化という言葉があります。学問の分野によって、さまざまな意味があるようですが、個人的には、自分をいつもいる場所のふちっこに置くことだ、と理解しています。さきほど、違和感とか、窮屈という言葉を出しましたが、ふちっこ、つまり、そとに近い場に身を置くことは、自分を揺さぶることです。比喩をつかえば、崖っぷちにいて、崖の向こうを目にし、軽いめまいを覚えることです。

たとえば、国籍という言葉があります。漢語系の語です。しかも、抽象的な意味をもっています。辞書や法律関連の専門辞典を引けば、ややこしい説明が書いてあります。でも、何となく、わかったつもりの言葉だとも言えそうです。国籍とは何か。これを感じ取るには、辞書を引くのもひとつの手ですが、国籍の異なる人と接してみるとか、外国に行き、自分が「外国籍の人」になってみるとか、そこまでしなくても、外国旅行をするために必要な手続きを、業者に任せるのではなく、自分でやってみるといいと思います。パスポートの取得作業をしたり、訪ねたい国の大使館などに出向きビザを申請するといった手続きです。

また、いわゆる不法滞在者と呼ばれている人たち、難民とみなされている人たちに関する、テレビニュースや、ドキュメンタリー番組、新聞や雑誌の記事、ウェブサイト、書籍を利用するという方法もあります。そのさいには、自分自身がそうした人たちの立場になったら、どうなるか、というように、「他者＝よそ者＝自分とは関係ない人＝縁のない人＝これまで気にもかけなかったことのない人」を思いやる気持ちと想像力が必要になるでしょう。

違和感や窮屈どころではない、過酷な体験を想像しなければならないかもしれません。でも、そうしないかぎり、国籍という抽象的な概念は、体感しにくいと思います。「国籍」だけでなく、「不法滞在」や「難民」という、何となくわかったつもりでいる言葉を、その言葉が指し示す立場や状態として、体感しようとするならば、相当な覚悟が要るでしょう。そうした境遇にある人たちと出会わないかぎり、あるいは、自分自身がそういう状況にないかぎり、「わかった」とは言えないにちがいません。

*

話が飛躍しました。「母語」の中で「外国語」で話すこと、に戻します。上で、「国籍」という話題を持ち出したのには理由があります。大和言葉系の語と、漢語系の言葉についての、個人的なイメージを取り上げてみたいのです。「国籍」はちょっとややこしい例でしたが、たとえば、「遺伝子」という言葉を見聞きしたさいに、自分が「何となくわかったようなつもり」になっているのを感じることがあります。「インターネット」でも、そうです。「電話する」でも、同じです。

今挙げた3語に共通するのは、広義の「からことば」系の語だという点です。漢字から成り立つ語にしろ、英語をローマ字で表記した語にしろ、抽象度が高いという個人的な印象を受けます。説明にしにくいのですが、「偉そう」、「もったいぶっている」、「これを知らなければ馬鹿だという雰囲気を漂わせている」、「真実・事実・正確という言葉やイメージに裏付けられた強い存在感がある」という言い方もできるかと思います。

ちょっと遊んでみます。「いのちのもととなる細かな粒」。これは、「遺伝子」を大和言葉系の語をもちいて言い換えた表現なのですが、説明であり、比喩でもあると思われま。詩の一部であっても、おかしくないでしょう。「この星にめぐらされた、人と人をつなぐ大きな網」が、「インターネット」のことです。「広くめぐらされた糸を通じて、言葉をやりとりする」が、「電話する」に当たります。

*

「遺伝子」では、その形態や、転写という仕組みや、正確な大きさや、受け継がれるというメカニズムが無視された言い方になっています。これは、文脈に応じて、必要な個所で別の表現にするという方法で、何とかやり過ごせるかなと思っています。

「インターネット」と「電話する」も、文脈次第で異なった言い方はできるかもしれませんが、両者に共通する「電気」あるいは「電子」を大和言葉系の語で表現するのは、至難の業だと半ばあきらめています。せいぜい、「魔法のように」などという具合に、比喻というより「逃げ＝ごまかし」でお茶を濁すのが落ちでしょう。まさか、大和言葉系の語を細工して造語するわけにもいきません。つまり、「かみなりちから」とか、「いなくまちから」みたいに勝手につくるわけです。本文で用いているうちに、なじんでくれば、造語もひとつの手かなとも思えますが。

なんて、アホなことをやっているのかと、お笑いのことでしょう。でも、連載中には、本気でこんなことを考えていたのです。また、今も考えているのです。直りそうも＝治りそうもありませんね。

*

「直りそうも＝治りそう」で、思い出しましたが、「たわごとシリーズ」を書きながら、つねに心に留めていたことがあります。「翻訳不可能」な言葉でつづろうという、これまた、アホな企てなのです。シリーズでは、やたら、かけことばや、駄洒落を使いました。以前に、翻訳の仕事を少しやっていた時期があったのですが、英語での洒落や言葉遊びを日本語にするのには、とても苦労しました。

英語の洒落を日本語でも洒落にして訳す。そんな言葉のアクロバットに命をかけている翻訳家の方がいます。例を挙げると、柳瀬尚紀という英文学者です。翻訳不可能と言われていたジェームズ・ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』を訳した人です。「独特の日本語」で訳されているとの話です。自分は、その訳書を読んだことがないので、何とも言えませんが、ご関心のある方は、お調べになってください。これも又聞きで、恐縮なのですが、小田島雄志という英文学の先生が訳したシェイクスピアの戯曲集は、洒落に満ちているとのこと。これも、お勉強好きな方は、原文と照らし合わせて、確認なさってください。

で、このアホの「たわごとシリーズ」ですが、これは、たとえば英語には訳せないと思われる。「標準的な日本語」（※括弧つきなのは、「そんなものがあれば」というくらいの意味です）にも、直せない感じがします。要約ならようやく可能でしょう。そんな、とちくるった企みで書いたたわごとですから、内容はないような部分がたくさんあるだ

ろうとも感じております。

ところで、翻訳機や翻訳ソフトなら、前回まで書いていたあやしげな日本語を、どのように訳すのでしょうか。その種の機械やソフトが苦手というか、畏れ多くて敬遠していますので、使用を検討する気もありませんし、翻訳の結果については見当もつきません。それなりに健闘してくれるのでしょうか。

*

もうひとつ、「翻訳不可能」を目ざして仕組んだことがあります。これは、以前から何度もやっている「愚行＝徒労」なのですが、つづられる言葉たちに、つづられる内容を演じさせるという、めちゃくちゃな「演出＝自己満足＝ひとりよがり」をやっております。

たとえば、「ふえる」をテーマにした「Gen 界」をあつかった「うつせみのたわごと-10-」2010-02-11 では、つづられる言葉たちに、「増殖する」さまを演じさせた「つもり」なのです。あくまでも、「つもり」です。また、「減ると増えるとは矛盾しない、むしろ裏腹の関係にある」をテーマにした「減界」を「えがいた」「うつせみのたわごと-8-」2010-02-09 でも、「Gen 界」以上に、言葉が増殖するさまを「絵」として「かいた」つもりなのです。こんなことを書いていると、うんざりなさっているみなさんの顔が眼に浮かぶようです。でも、本気なんです。正気とはどうい申せませんが、本気です。

シリーズの最終界＝回の「うつせみのたわごと-14-」2010-02-15 では、「揺らぎ」と「伝わる」という、言葉にするのは不可能と思われるテーマに挑みましたが、文字通り、不可能＝失敗を演じております。これは、誰がつづっても、失敗になるでしょう。つまり、巧まずして＝企まずして、目まいに見まわれたという感じの、言葉たちの情けない表情を、文章をつづるといふより、絵としてえがいたつもりなのです。つもり、つもりと、つもり重なってしまいましたが、そうするつもりではなかった、つまり、強いて意識して行ったことではないと、申し添えておきます。つまり、言葉に身をまかせて、でまかせに、つづっていると、こういう不思議なことがしばしば起こるのです。

言葉であそぶつもりが、あそばれちゃうのです。言葉はあなどれません。

なお、つづられているテーマをつづられている言葉たちに演じさせるについての弁解＝説明に、興味のある方が、万が一いらっしゃいましたら、「夢の素 (2)」2010-01-23で「渡部直己」という固有名詞がある部分に、ちらりと目を通していただければ、うれしいです。

*

「絃界」をあつかった「うつせみのたわごと -14-」2010-02-15では、検索が検閲ときわめて近いことについて、触れています。このシリーズでは、読者の方に、マラルメのさいころ遊びに付き合ってください、つまり、読者参加型ブログを意図とし、「追記」という形で、グーグルを用いてのキーワード検索ができるようにしておきました。

で、その「追記」の部分を除く、たわごとの本文ですが、そこだけは、なるべく検索エンジンにテーマが引っ掛からないように、工夫をしてみました。仕組んだ、とも言えます。ひらがなが多いですから、テーマと関係のある語は、通常の検索エンジンの網＝罟には、かからないのではないかと、高をくくっておりますが、どうでしょうか。固有名詞ですと、ひらがなでも、たいてい引っ掛かります。たとえば、最終回で出てくる「えしゅろん」は、固有名詞ですから、もし「えしゅろん」が、噂どおりに然るべき働きをしている＝ちゃんと機能しているのなら、アホの書いたたわごとがデータとして、傍受され、どこかに保存されている可能性もなきにしもあらずだと考えています。ちなみに、瓶裸出院と表記すれば、餌腫論の網に引っ掛かるでしょうか。

何だか、うつだけじゃなくて、このところ、被害妄想の傾向が強くなってきて、ビョーキ持ちとしては、かなりやばいと自分でも危惧しております。もともと、そうした傾向は強いと感じていました。だからこそ、「架空書評：ビッグ・ブラザー」2009-02-01、「ビッグ・ブラザー」2009-09-21、「きな臭い話」2009-12-11、「け〇〇く」2010-01-15、「2010年1月20日にギャグる」2010-01-20などを書いたりするのでしょう。被害妄想とも言えそうですが、要するに、ビビリ＝小心者＝臆病者ということですね。

>まぼろしよ、まぼろしであってくれ。ゆめよ、ゆめであってくれ。くるいよ、くるいであってくれ。たわごとよ、たわごとであってくれ。

これは、「うつせみのたわごと-13-」2010-02-14の最後の段落から、引用したのですが、今は「もうそうよ、もうそうであってくれ」という心境です。もう、そうだったりし

て。「もう、そうなら＝もうそうなら」、「マジこわー＝あやうい」ですね。失礼いたしました。

10.02.17 揺さぶり、ずらし、考える

◆揺さぶり、ずらし、考える

2010-02-17 12:36:33 | さくぶん

日本語は、話し言葉や書き言葉に関して言えば、規制がゆるやかな言葉だと言われています。話し言葉の場合には、まず、たくさんの方言があります。また、世代間の違いも顕著です。一方で、話し言葉と書き言葉の両方について、「日本語の乱れ」とか「最近の日本語は乱れている」という手垢のついたフレーズが、これまでにおびただしい数の人たちによって、口にされ、または書かれてきました。うんざります。これからも、そうでしょう。

自分は、その種的话题をテレビや新聞で見聞きすると、画面から目をそむけるか、記事を無視します。「乱れ」とは、悪態です。自分の育った環境で経験したもの以外のものを認めない、自分にとって快でない異物は「異形（いぎょう）」のものとして断じるという姿勢ですから、こちらとしても相手にしないのが最良の選択です。わめかせておけばいいのです。

あえて、反論させていただくなら、次のように言いたいです。どの時代においても、言葉は変わる。言葉は、特定の人たちの占有物ではない。天は言葉の上に言葉を造らず、言葉の下に言葉を造らず。乱れていない言葉って何？ そういう、あんた、つかってんの？ という具合に、反論もまた、つい悪態に転じてしまいます。みっともないですね。

書き言葉について言うと、日本語での表記の基準はきわめて曖昧です。いちばん厳しい基準を設けているのが、フランス語だと聞いたことがあります。国家が、積極的とい

うか、半ば強権的に介入しているのです。「これはフランス語と認定するが、そっちのやつはフランス語じゃない」みたいにです。ドイツ語にも、厳格な正書法があるらしいです。ただし、最近というか、世紀の変わり目に大きな改定が行われて、以前よりは使い勝手がよくなったという話を聞いたことがあります。英語の正書法は、比較的ゆるやかなのではないのでしょうか。世界で広く用いられているからでしょうか。

すごく簡単な例を挙げると、英国では、Mr であったり、programme であるものが、米国では Mr. や、program となりますね。スペリングの問題ではないので、詳しいことは、「正書法」または「正字法」をキーワードにして、グーグルなどで検索なさってください。今思い出しましたが、インターネット上の英語で書かれたブログを読んでいて、一人称の I が、i、二人称の you が、u とつづられているのを目にされた方も、多いかと思いますが、母語ではありませんが、個人的には、結構なことだと喜んでおります。

*

そんなスタンスでブログを書いている者ですから、ネット上で見かける、さまざまな日本語のつづり方を目にする、わくわくします。顔文字やアスキーアートも、自分ではつかいませんが、というか作成法を知りませんが、ほほ笑ましいと思います。話は少しずれますが、中学生のころに、町中やテレビや新聞で見かける、いわゆる和製英語や、不正確な英語表現やスペリングについて、批判的な意見を吐く人たちの怒った様子を見て、「あほちゃうか」と感じたのを思い出しました。

自分は、ああいうものは、言葉というより、絵や模様やデザイン的一种だとみなしていたからです。デザインした人が、格好いいとか、きれいだとか、しゃれていると思っているのなら、それでいいじゃない。そんなふうに、思っていました。

百歩か何歩か知りませんが譲って、英語を解する外国人向けの標識での誤記であったとしても、それが通じなかったり、誤解されても、何の不都合もないのではないか。言葉というのは、通じるよりも通じないことのほうが、ふつうなのではないか。おかしいと感じたら、知恵を働かせて自分で解決すればいい。間違った表記や表現でも、状況を敏感に察知すれば、何となく意味は分かるのと、ちゃうか。たぶん、生死にかかわるような話じゃないだろう。漠然とですが、そんなふうに考えていました。英語を習うようになって、世界にはいろんな英語があると知ってからは、いわゆる「正しくない英語」に対する抵抗感は、皆無に近いものになりました。

言葉が通じないところを旅するさいには、言葉にかぎらず、身ぶり手ぶりなどをつかうのも、知恵であり、楽しみではないか、とも思っています。旅行にかぎらず、日常生活においても、文字、あるいは話し言葉だけに頼るのは、ちょっと芸がなさすぎるように感じます。中途難聴者だから、よけいに、そう感じるのかもしれませんが。

*

思えば、幼いころから、とろくて鈍いところがありました。早い時期から、へそも曲がっていました。勘違い、外れた思い込み、間違い、誤解、曲解、どじ、あるいは「確信犯的」へま、の多い毎日を送ってきました。今でも、そうです。特に、中途難聴に見舞われ、徐々に聴力が低下していますから、聞こえの悪さが原因のトラブルには事欠きません。でも、何とか、ない知恵を絞って、こうじゃないかな、ああじゃないかなあ、という具合に生活しています。重大なトラブルでなければ、楽しむように心がけてもいます。聞き間違いを思い出して、あとで、自室でひとりで大笑いなんて、しょっちゅうです。

さて、前回の「「外国語」で書くこと」2010-02-16 という記事の冒頭で、＜「母語」の中で「外国語」で書くこと＞、と書きました。そのフレーズにある「外国語」とは、広く取れば、ひとりひとりが話したり書いている「母語」のことではないかと、きのう記事を投稿したのちに、ふと思いました。その記事の中では、「うつせみのたわごと」という連載でつづっていた、あやしげな日本語を指していたのですが、あれは意識的にできるかぎり大和言葉系の語をもちいて書くという「実験＝企て＝ひとりよがりの愚行」でしたから、日本語をベースにした人工的な言語とも言えないことはありません。その意味では、「外国語」（※括弧つきです）であり、「あやしげな日本語」でしょう。

*

でも、「あやしげではない日本語 or きちんとした日本語 or 標準的な日本語 or 正しい日本語 or 美しい日本語 or 乱れていない日本語」なんて、あるのでしょうか。ない、と思います。と言うか、人それぞれの「日本語」＝「抽象的な『日本語』（※括弧つきであることに注目してください、確たるものはないという意味です）の中にある『外国語』（※括弧つきであることに注目してください、比喩です）」がある、としか言えないと思います。

誰もが「外国語」を話したり書いている、とも言えます。日本語に限らず、どんな言語においてもです。どの言語も、つねにずれつつあり、揺らいでいます。個人のレベルで、誰もが、移り変わりつつある、いわゆる「標準語」から外れた言葉話し、書いてもいる。そんな感じですか。ずれの中でずれている、とも言えそうです。

文体という言葉があります。曖昧で嘘くさい言葉です。です・ます調、だ・である調、口語体、文語体、漢文脈、和文脈など、主に、語の選択を基準にした呼び名があります。名文、悪文、美文、翻訳調という、自分の好みを基準にした褒め言葉や罵倒もあります。さらに、〇〇さんらしい文体という言い方もありますね。

何とでも呼ぶのはけっこうというか、その人の勝手です。しかし、「正しい対正しくない」とか「美しい対美しくない」とか「分かりやすい対分かりにくい」という線引きの仕方で、ひとさまの文章のつづり方を批判するのは、はしたないし、説得力がない。また、ひとさまの書き方を、自分に合わせさせようという意味にとれる主張は、身勝手すぎる。そんなふうに思います。

*

人はつねに変わりつつある存在だ。人はTPOに応じて、さまざまな自分を演じる。という前提で話を進めるなら、人は文章の書き方や話し方を、時と所と場合しだいで、使い分けると言えるのではないのでしょうか。確かに、その人なりの癖というものはあります。でも、言葉を使い分ける、あるいは、異なる役目を演じ分けるというのは、誰もが日常的に経験していることではないかと思えます。

で、たとえば、ある人がAさんに話しかけるさいには、ある話し方をする。Bさんに対しては異なった話し方になる。AさんとBさんの両方を前にすると、また、微妙に違った口調となる。こんなことは、ざらにあるのではないのでしょうか。書き方も同様だと考えられます。そうした、具体的な、日常的レベルでの言葉の使い方の総体が、たとえば「日本語」なのだという気がします。

ですから、「標準的な日本語」というのは、抽象的であり、そんなものは言葉の綾でしかない。つまり、うそだと思います。こうした考え方でいくと、「ふつうの日本人」とか、「ふつうの人」という言い方も、うそかどうか、曖昧すぎて何も言っていないに等しい、ということになりそうです。

*

人は考えることが好きではない。考えることが苦手だ。ひよっとすると人は考えることができないのではないか。よく、そんなふうに思います。この場合の「考える」という言い方は、「思う」とはちょっと違う意味合いで使っています。「考える」とは、言葉になっていない「何かの思いや感情やイメージやごちゃごちゃ」を言葉として他人に向けて送り出す作業だ、くらいにイメージしています。

「考える」をこのような作業だと取れば、真剣に臨めば、ややこしいし、面倒くさいし、失敗したときのことを思うとこわいし、できれば簡単に済ませたいことです。では、どうすればいいのか。「考える」を、簡単に済ませる方法はないのか。あります。「決まり文句」を使えばいいのです。こういう時、こういう所で、こういう場合には、こう言えばたいい無難に事が運ぶ。人は、言語を身につける過程で、今述べたような「決まり文句」をどんどん覚えていくのではないかと思っています。

言葉を、話し言葉と書き言葉という狭い意味に取るのではなく、その両者を含め、さらに表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、指点字、点字、音声（発声）、音楽、合図、映像、図像、さまざまな標識や記号や信号などをひっきりめた「こと・もの・行為・状態」と取ってみましょう。

難しく考えないでください。こういう時、こういう所で、こういう場合には、こうすればいいのだ、という感じです。校長先生 or 社長 or 先輩に、道端で会ったら、頭を下げて、「こんにちは」と言い、見えないところで舌を出す。人が集まっている場所では、間違っても大きな音を立てておならはしない。どうしても我慢できなかつたら、音を立てずに注意し、身動きもしないで、少しずつ漏らす。例を挙げれば、広い意味での「決まり文句」とは、そんなことです。

*

思考停止という言葉があります。決まり文句を重ねて人と話をするのは、わりと簡単ですし、だいいち楽です。

「オリンピックだね」「そうそう。バンクーバー」「金メダル、欲しいよね」「うん。メダルほしいよね」「〇〇は、金とれるかな」「とってほしいよね。とれるって、きっと」「□□の CEE が、調子いいから、ちょっぴり、心配じゃない?」「あんなの、めじゃないって」「そうだよ、めじゃない」「頑張れ、にっぽん」「頑張れ、にっぽん」

「不景気ですね」「そう、何もかも停滞して嫌になっちゃう」「ほんと。『世界の△△社』が、今、やばいことになっていますね」「リコールだろ。大変な問題だよ」「今回の件は、△△社だけの問題にとどまらないのが、こわいとか」「そのとおり。うちも対岸の火事じゃすまないぞ」「本当ですか?何か情報でも?」「うん、ちょっと、専務と話していて気になるデータを耳にしたんだ」「さすが、社内きっての事情通。お伺いしてもよろしいでしょうか」「機が熟したら、話してやるよ、はっはっは」

以上の会話で、「思考する＝考える」が感じられますか。何だか、当たり障りのない、言葉が行きかっているだけという気がしませんか。相手がこう言えば、こっちはこう言う。相手がこうすれば、こっちはこうする。そんなお気楽な、やりとりが、「決まり文句」の機能する場なのです。

【※人の話し書く言葉が、ある意味で、すべて「決まり文句」ではないか、という疑問については、「げん・言-6-」2009-08-29 と「げん・言 -7-」2009-08-31 で論じています。ご興味のある方は、ぜひ、参照ください。】

*

一方で、少々ぎくしゃくした会話もあり得ます。

「オリンピックだね」「バンクーバーで開催中の、冬季オリンピックのことか。その次の五輪まで視野に入れなきゃ」「金メダル、欲しいよね」「メダルより、内容だね」「〇〇は、金とれるかな」「さあ、データを知らないから何とも言えないな」「□□の CEE が、調子いいから、ちょっぴり、心配じゃない?」「その根拠は? えっと、今、ネットで検索してみてもよー。えっと、確かに、世界選手権で優勝したときのタイムは xx.xx だね。記録的には、選手権には出ていなかった〇〇のほうが確かにいい」「そうだよ、めじゃない」「予断を許さない状況としか言えない」「頑張れ、にっぽん」

以上の会話だと、一方の人は、それなりに「思考する＝考える」しているように、感じられません。ただし、その人のことを苦手だと思っている人たちや、その人と話すと疲れると言う人が多いという気もしませんか。そうなのです。「思考する＝考える」とは、多くの人にとって、苦手なことであり、疲れる作業なのです。楽な行為ではないことは、確かです。話をがらりと変えます。

*

「権利」をやさしく言うとしたら、あなたなら、どう表現しますか。辞書を引いちゃだめですよ。「人がしていいこと」なんてフレーズが口から飛び出しました。まさに、出まかせです。「基本的人権」だったら、「だれでも生まれながらにしてもいいと、みんなで決めたこと」という感じでしょうか。「義務」なら、「人がしなければならぬこと」とか、ちょっとだけもったいぶって「人としてすべきこと」なんて、どうでしょう。

素人の出まかせですから、きっと異論や反論はあることでしょう。真剣にとらないでください。なにしろ、「たわごとシリーズ」を思い出して、たった今即席につくった、漢語系の言葉を大和言葉系の語に言い換えるサンプルです。連載では、こんなようなことをやっていたというだけの話です。

*

聖書が多数の言語に翻訳されていることや、明治維新後に日本でいわば言語革命が起こったらしい話について、以前にブログ記事で触れたことがありました。そのときにも、ある言語を話す人たちの日常生活において、ないことやものやさまが、どう訳されるのか、という問題を論じました。そのさいには論じきれませんでした。日本にないもの、あるいは、日本語にない言葉を、日本語に翻訳する場合には、さまざまなテクニックが用いられてきたのではないかと想像しています。

前回に書いたことを少し変えて、整理してみます。言葉を言い換えるのには、大きく分けて4つの方法があるのではないのでしょうか。

1) ほぼ同じ意味の別の語を用いる。

2) 説明する。

3) 比喩を用いてほのめかす。

4) 造語する。

以上のうち、

1) は、運次第というか、そうした語があるかの問題でしょう。

2) は、その語が指し示すものをよく理解していなければならないと同時に、表現上のさまざまなテクニックが必要だと思われます。言い換えると、「思考する＝考える」ことが不可欠です。

3) は、詩を書くのと似た想像力の有無が鍵となりそうです。

4) は、比較的簡単にできますが（※ギャル語や新語・流行語大賞の候補を思い浮かべてください）、ほかの人たちが乗ってくれるか、乗り続けてくれるか、という問題に突き当たります（※新語大賞の過去の落選例や同賞出身の死語を思い出してください）。

同じ言語の中での言葉の言い換えを、広義の翻訳ととらえてみる。また、言葉の言い換えを、誰もが日常的に行っているごくありふれた行為とみなしてみる。すると、広義の翻訳とは、言葉と言葉の入れ替えという単純な作業ではなく、ある言葉で各人がいだいているイメージや、多数の人たちがほぼ同じように受けとめているイメージを、とらえなおすことだと思われます。

個人的には、言葉の言い換えとは、まさに「思考する＝考える」行為であり、各人が当然だと思っていることや「何となく分かっていること」に「揺さぶり」をかける行為だと受けとめています。「行為」である。つまり、「運動」であるという点が、大切です。「状態」や「さま」ではありません。比喩的に言えば、ゆらゆら、ぶらぶら、「揺れる」こ

となのです。ですから、「思考する＝考える」は、疲れるし、好きな人はあまりいないし、苦手意識をいだいている人が多いし、簡単にはできないから「決まり文句」で代用している場合がほとんどではないか、とさえ思えるのです。

*

話を戻します。

「日本語の乱れ」「最近の日本語は乱れている」。そうつぶったり、口にする人は、おそらく、日本語についても、言語というものについても、考えたことがないのではないか。誰かの言ったフレーズ＝決まり文句を、誰かが言ったようなかたちで、繰り返しているだけなのではないか。そう思えてなりません。

もしも、言葉を対象にして思考を重ねたのなら、もっとぶらぶら、ゆらゆらした、とりとめのないフレーズを口にしたり、つぶったりするはずです。日本語が乱れている、などという、コピーライターが鼻くそでもほじりながら思いついたみたいに、耳に心地よく響く、すぱっと竹を割ったようなフレーズは、出てこないはず。言い換えると、あんな「何となく分かった気にさせる」フレーズには、ならないだろうということです。

*

「分かる・分かっている・分ける」という「状態」は、「考える・思考する」という「行為」とは遠いです。まず、「状態」と「行為」という点で隔たりがあります。「分かる・分かっている・分ける」は、「見る」に近いと思います。「知る」と「名付ける」にも近いと思います。「分かる・分かっている・分ける・見る・知る・名付ける」は、「状態」だという感じがします。

「状態」というふうに、括弧を付けていることから、お分かりになるとおもいますが、通常の意味合いでもちいてはいません。比喻や、言葉の綾や、レトリックをもちいているとも言えます。一応、断っておきますが、この駄文を書いているアホ流のひとりよがりなギャグですから、真剣に取っていただく必要はありません。

このアホの意見では、「状態」とは、たとえ動詞であっても、必ずしも、「動作」とは言えず、「ありさま」である場合が多いみたいです。一方、「考える」は「行為」つまり「動作」だというのが、このアホの意見です。「状態」と「動作」の違いは、「揺れる・揺さぶる・ぶらぶら・ゆらゆら」があるかどうかだ、と勝手に思い込んでいます。

*

話が抽象的になってきたので、ここで、ちょっと実際に「揺さぶる」を実行してみましょう。

先ほどから何回か引用した「日本語の乱れ」と「最近の日本語は乱れている」というよく見聞きする、「何となく分かっている」「分かりやすい」フレーズを「分かる・分かっている・分ける」のではなく、「思考する・考える」＝「揺さぶる」の対象にしてみます。

日本語という言語は、上で述べたように「具体的な、日常的レベルでの言葉の使い方の総体」です。1億人以上の人たちが日々、用いているはずで、方言も多数あり、それにさまざまな世代による多様性が重なり、刻々と感情が変化する各人がTPOに応じて複数の「自分」や役割を演じるさいに言葉遣いを変え、誰もがいわゆる言い間違いをし書き間違いをしています。

また、不幸にも、病気やけががもとで、言語上の障害に見舞われている人たちが少なからずいます。帰国子女や、母語が日本語ではない人たちの中には、日本語の習得や使用に苦労している向きもあるにちがいません。また、日本語は、日本に住んでいて日本国籍を持っている人たちだけによって使われているわけでも、ありません。

何を言いたいのかと申しますと、言葉について「考える」とぐちゃぐちゃごちゃごちゃになる、ということです。ヒトが大前提としている枠組みが、揺さぶれ、ずれるからです。「すっきり」「単純明快」「理路整然」「よく分かる」「コピーライターの制作したキャッチフレーズのように、陳腐で分かりやすい」（※以上は、あくまでもイメージです。何となくそう感じられるだけという意味です。思考は働いていません）という具合にはなりません。

話を戻し、さきほどのごちゃごちゃした日本語をめぐる諸事情を念頭に置けば、

日本語は「乱れている」し、「揺らいでいる」と考えられます。そうした意味であれば、「日本語の乱れ」と「最近の日本語は乱れている」とも言えるでしょう。ただし、ヒトの言語における当然のなりゆきであり、常態だという意味です。このように、たとえ、思考停止に等しい決まり文句であっても、その言葉を「揺さぶる」ことにより、「ずらす」ことができます。そうした「行為」を「思考する・考える」と呼んでもいいのではないのでしょうか。

最近の日本語は、とてもよく健闘している。生き生きしている。という、お話でした。えっつ？ こじつけ、牽強付会、曲解ですか？ はい、そのように、ずらすこともできます。

10.02.19 動詞という名の名詞

◆動詞という名の名詞

2010-02-19 16:21:41 | さくぶん

言葉について考えていると、頭の中がごちゃごちゃになってくる。そんな意味のことを、前回に書きました。なぜなのでしょう。考えるときに、話し言葉の助けを借りる。あるいは、言葉で考える。よく見聞きする話であり、分かりやすい説明です。でも、それだけではない気がします。というより、そんな単純な話ではないでしょう。

たとえ、考えたことをそのまま口にして書き取ったとしても、出版社などで働く編集者や校正をする人たちから、注意されない文章になるだろう。考えたままに言葉たちを組み合わせれば、ちゃんとした文章をつくれる。そうした言葉のありようを想定して、言葉で考えるというのなら、ずいぶん大雑把で、考えの足りない説明だと思います。たわごとを言ったり書いたり、たわけるのにも、それなりの仁義を持ってほしいです。

考えるとは、どういう作業なのでしょう。頭の中でうろちよろする、さまざまな言葉の断片たち。ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ浮かんでは消えるイメージたち。ゆらゆらぶら

ぶらゆれている、「何か」としか言えないようなものたち。幾重にもだぶって見えたり、次々に姿を変えていく像や絵に似たものたち。考えるとか、思うということをめぐって、考えるとわけが分からない状態になります。

言語をめぐっていろいろ考えるさいだけでなく、何について考えるときにも、以上のような、わけが分からない状態になると思います。そのとりとめのない状態から、「ま、いっか」とか「ええい、面倒だから、このさい、すぱっと、やっちゃおう」という感じで、口から出てきたり、文章としてつづられたものを、話し言葉 or 話や、書き言葉 or 文章というのではないのでしょうか。

そういう感じが出てきた文章の特徴を挙げると、決まり文句に満ちているということです。「ま、いっか」とか「ええい、面倒だから、このさい、すぱっと、やっちゃおう」という、言葉への姿勢に、妥協めいたあきらめ、あるいは、横着さを感じます。既成の文章の型に、ごちゃごちゃぐちゃぐちゃやゆらゆらぶらぶらを無理やり合わせてしまうという意味で、横着であり、杜撰（ずさん）なのです。でも、それでいいのです。そうでもしなければ、いわゆるコミュニケーションとか、相互理解というものを期待するわけにはいかないと言うべきでしょう。コミュニケーションを成立させたいければ、お互いに決まり文句を言えればいいのです。決まり文句の交換ですから、楽です。決まり文句をかわしあうことで、めでたしめでたしとなります。

*

大学に入学したころに、何かで読んだフレーズというか悪態を思い出しました。「言語学者の悪文」という、ののしりの言葉なのですが、サンプルとして挙げられていた、言語学を研究している何人かの人たちの書いた文章の一部を読んでいて、確かに「分かりにくい」と感じました。どのような分野の文章であれ、そのテーマに詳しくない人たちにとっては、専門用語や専門知識を知らないと、「分かりにくい」ものです。

今思うと、「言語学者の悪文」という悪態の背景には、言語をコミュニケーションの道具としてとらえる、実利的な言語観を感じます。言語を研究する者を一種の科学者や技術者とみなす、言語をあなどった態度も感じます。今だから言えることです。当時は、「言語学者の悪文」というフレーズを見聞きすると、顔をしかめ、うなずいていたものでした。昔を振り返ってみます。

大学の外国文学科に在籍し、文学ではなく言語に興味を覚えるにつれ、「言語学者の悪文」という罵倒に、疑問をいだくようになっていきました。もともと、哲学科に入りたかったのですが、結局は外国の文学をまなぶ学科を選びました。「哲学なんか勉強している人間は、いずれ自殺するか路頭に迷うのがオチだ」という、親の意見というか思い込みに従わないわけにはいかなかったからです。学費を出してくれる親には、逆らえなかった。それだけの理由です。

で、大学では、外国の小説や戯曲や詩よりも、そうした文学作品の批評に強い関心を持つようになっていきました。哲学の論文とみなしてもいいような、ややこしい書き方と内容に満ちた文芸批評を、たくさん読みました。というより、流し読みや、拾い読みをしていました。翻訳されたものには、特に苦勞しました。わけが分からなかったのです。日本人によって書かれたものを読むのにも、苦勞しました。そんな読書ばかりしていたためか、「言語学者の悪文」や「翻訳調の文章」や「翻訳書の文章」を気にしなくなっていきました。

言語そのものや、文学作品における言語について書かれた文章を「分ろう＝理解しよう」というスタンスには、大いに疑問を覚えます。「分かる＝理解する」にあらがう。そういう身ぶり、仕草、表情をまとった言葉たちに満ちた文章だと感じられるからです。だから、そうした身ぶり、仕草、表情をまねればいいのです。まなぼうなどという、見当違いな姿勢で臨んでも、何もまなべないでしょう。言うまでもなく、あくまでも、個人的な意見です。人それぞれですから、「まねる」を想定し「まなぶ」を想定していないと思われる言葉たちから、何かをまなんでしまう人を非難しているわけではありません。

*

「言語学者の悪文」という悪態を、前回の「言葉の乱れ」という罵倒同様に、揺さぶり、ずらして、考えてみます。すごく好意的にずらすと、言語という「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」を学問分野の対象とすると、「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」になってしまうと言えそうです。一方で、言語をあつかっているはずなのにもかかわらず、「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」ではなく、「すっきりはっきり」した論文や書物になっているのなら、かなり重要な部分を切り捨てた「すかすか」な文章を読んでいるとも言えそうです。

というわけで、前回に引き続き、次のように申し上げたいと思っております。「すっきりした」「単純明快な」「理路整然とした」「よく分かる」「コピーライター制作したキャッチフレーズのように、陳腐で分かりやすい」文章には気をつけましょう。とりわ

け、言語を対象にした、あるいは、言語と深くかかわっているはずの「分かりやすい」文章には、肩につばを塗って臨むか、読むのをやめましょう。もちろん、これまた、人それぞれですから、言語について書かれた明快な文章を読みたい方に、けちをつけているわけではありません。愚見を述べているだけです。

なお、「言語学者の悪文」と言ってもいろいろありますので、さきほどとは違い、すごく好意的にずらすのではない方法を持ちいて、ずらし、考えてみます。次のようになります。言語という「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」を学問分野の対象とすると、「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」になってしまうと言えそうです。ありゃ、上と同じになってしまいました。まさに、たわけのたわごとです。ただし、上述の「言語を対象にした、あるいは、言語と深くかかわっているはずの『分かりやすい』文章」よりは、ましだと言えそうです。

*

話を変えます。

> 「分かる・分かっている・分ける」という「状態」

> 「考える・思考する」という「行為」

前回の記事からの引用です。「分かる・分かっている・分ける・見る・知る・名付ける」を「状態」だと考えている。そんな意味のことも、書きました。ここでは、さらに次のように付け加えたいです。

「思う・ぼけ一っとする or ぼ一っとする」という「状態・ありさま・ありよう・かすかな揺らぎ」

「考える」という「行為・動き・激しい揺らぎ」

こんなふうに「ことわり・言割り・事割り・断り・理」をしています、あくまでも、

素人のたわごとです。要は、そんな気がするというお話です。蛇足とは承知しつつ、念のために、お断りしておきます。

【※上記の「ぼけーっとする」に関して論じた「ぼーっとする、ゆえに我あり」2009-06-24と「あつい」と「わからない」2009-06-23に、ちらりと目を通していただくと嬉しいです。】

*

「揺らぎ」には、3種類あるような気がします。1) 自ら揺れる。2) 何かによって揺らされる。3) たがいに、揺れ合っている＝揺さぶり合っている。このように、「ことわけして＝たわけて」みましょう。なぜ、「ことわけ＝たわけ」なのかと申しますと、いまここでやっていることを、良く言えば「実験・思考」と呼ぶことができ、悪く言えば「でたらめ・出まかせ」となるからです。「人それぞれ＝見る人によって異なる」、今流行の大きな言い方をすれば、「観測者による判断」の問題も言えそうです。

3つの「揺らぎ」のうち、個人的には、3)のイメージに惹かれます。そのなかでは、いちばんピンとくるという感じです。そんなことを、きのうの記事を書き終えてから、ずっと考えていました。

で、「思う・ぼけーっとする or ぼーっとする」には、受動的な響きを覚えます。だから、「状態・ありさま・ありよう・かすかな揺らぎ」と勝手に決めつけました。「考える」には、能動的なニュアンスを感じます。だから、「行為・動き・激しい揺らぎ」としておきます。

*

「思う」と「考える」という動詞について、きのうから、ああでもないこうでもない、ああでもありこうでもある、ああでもないこうでもある、ああでもありこうでもない、などと考えているうちに、あきてきました。そこで、気分転換に、いかにも動詞という印象をいだかせる「動く・揺らぐ・揺れる・走る・泳ぐ」などの言葉を、次々と頭の中でころがしてみました。

ころがし、ずらす。具体的に、どういうことをやっていたのかと申しますと、「動く・動き・動くこと」「揺らぐ・揺らぎ・揺らぐこと」「揺れる・揺れ・揺れること」「走る・走れ・走ること」「泳ぐ・泳ぎ・泳ぐこと」という具合に、いわゆる動詞を名詞化して遊んでいたのです。

日本語の動詞では、発音上、語尾に「u」が出てきますね。ugoku、hashiru みたいです。その動詞を名詞化すると、発音するさいには、「i」か「e」で終わる形になります。たとえば、yuraki、yure です。不思議でなりません。言語学や国語学の文献に、そうした現象の規則性を説明する、何らかの「理屈＝ことわけ＝こじつけ」が書かれているなら、ぜひ読んでみたいと思いました。

*

「動くこと」「走ること」のように、動詞に「こと」をつけると、名詞になります。とてもおもしろいです。で、そういう時に出てくる「こと」ですが、何なのでしょう。いかにも、あやしげです。不可解です。不思議でしかたありません。動詞を名詞化する「こと」を、広辞苑で調べてみると、「こと・言」ではなく、「こと・事」の項にあり、それなりに説明してあるのですが、今一つぴんとこないのです。

さらに、「動き」と「動くこと」、「走る」と「走ること」の「違い＝間・あわい＝隔たり＝差異」についても、いろいろと考えてみたのですが、分かりません。どう違うのでしょうか。

「ほら、彼の足の動きをよく見ているのよ」と言っても、「ほら、彼の足の動くことをよく見るのよ」とは、言わない気がします。后者では、「動くこと」の代りに「動き方・動き具合・動く様子」とすれば、言えるのではないのでしょうか。そうであれば、「動き」＝「動き方・動き具合・動く様子・動いている過程」となりそうです。いちおう、そんなかたちで、けりをつけたことにしておきます。異論や反論や悪態が予想されますが、研究やお勉強をする場ではないブログでの「けり」ですから、ご容赦ください。

*

もう一方の「動くこと」、一般化すれば「・・・すること」についても、いろいろと考
えているのですが、何なのでしょう。

何かではなく、どのような働き＝役目をしているのかという具合に、ずらしてみましょ
う。「体が小刻みに動くことを、震えという」というセンテンスに対しては、違和感を覚
えません。でも、「体が小刻みに動きを、震えという」とは、言いませんよね。少し変え
て、「体の小刻みな動きを、震えという」なら、言えるでしょう。いずれにせよ、ずらし
ても、不可解なままです。広辞苑を参考に、ずらしまくってみました。

「こと・言・事・もの・物・者・さま・ありよう・ありさま・ありかた・わけ・かた・かた
ち・わざ・しわざ・しかた」

「こと・現象・状態・状況・様子・様態・事情・事態・理由・内容・中身・実体・経験・習
慣・必要・願望・命令・禁止・感嘆・疑問」

ついでに、「・・・するもの」とも言える、「もの」についても、広辞苑を見ながら、ず
らしてみましよう。

「もの・物・物体・物品・対象・存在・物事・事柄・内容・言葉・当然のこと・感嘆・理
由」

「もの・者・人」

こと。もの。たった2文字なのに層が厚い、つまり、幾重にも重なった重い言葉です
ね。どういう「動き＝働き」をする語なのでしょう。こんな時に、よくやる作業なので
すが、英語に直すというかたちで、ずらしてみましよう。

*

英語の what と似た動き＝働きをするようにも、思われます。OALD (= Oxford
Advanced Learner's Dictionary とロングマン現代アメリカ英語辞典を参考にします。

I don't believe what you have just said. 「あなたの言ったことを信じてはいません」／
A dream is what you see in your mind while you are asleep. 「夢とは、眠っているあいだに、頭に浮かんでくるかたちで見えるものである」

上の例文では、what = 「こと・もの」と言えそうです。英語で、ある動詞を名詞化する場合には、1) to move、2) moving、3) move・motion・movement のようになりますね。1) 不定詞の名詞的用法、2) 動名詞、3) 動詞と同源の類語、ということです。英語と日本語を比較してみました。結果としては、「ふーん」としか言えませんでした。

*

で、思ったのですが、動詞を名詞とみなしてもいいのではないのでしょうか。当たり前ですよね。「詞」を辞書で調べると、語義のひとつとして「言葉」と書かれています。ちなみに、広辞苑によると、以前には動詞を作用言とか活語と呼んでいたそうです。すると、「詞・言・語」というふうに、ずらすことができます。やはり、動詞＝名詞となりそうです。

『『動く』行為や状態』に名を付け、名詞化すると、「動く・動き・動くこと」となる。「言葉を介する＝言葉を代理とする」限り、「動く・動き・動くこと・動くさま・動き方・動くという行為・動くという動き・動くという揺らぎ」を、名詞としてしか認識できない。そう言えるのではないのでしょうか。動詞という名の名詞ということです。

ヒトである限り、動きを動きとしてとらえることの限界性＝不可能性を、ひしひしと感じます。狭い意味での言葉、つまり、書き言葉と話し言葉をもちいる限り、動きを動きとしてとらえられない。極論を言えば、「動く」であれ、「揺らぐ」であれ、名詞でしかない。なぜなら、「言葉＝言語＝言＝語＝詞」の使用においては、そういう仕組みが働いているからだ。そんなふうに思っています。この前提に立つと、ヒトの限界性をイメージしやすくなります。空間的広がりや時間的経過を、知覚すること。さらに、認識・記憶・想起すること。ならびに、空想・想像すること。また、思考・捏造（ねつぞう）すること。以上の「すること」の限界性＝不可能性。そんな感じです。

【※ヒトの空間的広がりと時間的経過の処理について触れた記事として、「揺らぎ」と「変質」2009-06-29、「不自由さ(1)(前半)」2009-06-30、「不自由さ(1)(後半)」2009-06-30、「ぐるぐるゆらゆら(2)」2009-07-01 をご紹介しておきます。】

*

森羅万象の動きや揺らぎを、名詞としてしかとらえられないヒトという生き物——。ヒトにとって名詞でしかないものを、名詞以外のものとして認識するためには、広義の言葉をもちいることを視野に入れるべきだと考えています。話し言葉、書き言葉をはじめ、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、指点字、点字、音声（発声）、音楽、合図、映像、図像、さまざまな標識や記号や信号などを、ひっくるめた「こと・もの・行為・状態」、すなわち広義の言葉から、話し言葉と書き言葉を除いたものに、森羅万象の動きや揺らぎを、名詞以外のものとしてとらえる可能性を感じます。

とはいうものの、広義の言葉と言っても、しょせん、何かの代わりに何かでないものをもちいる、という「代理の仕組み」を免れないわけにはいきません。万物を「名付ける・なづける・てなづける」という、ヒトに備わった習性、つまり名詞至上主義とでも呼びたくなる性癖に対する、ささやかな抵抗。その抵抗として、たとえば、音楽や映像に期待を寄せています。でも、いちばん、気になるものを挙げるとすれば、日本語や中国語や英語などと同じく言語である、手話です。

中途難聴者としては、いつか中途失聴者となる可能性を視野に入れておかなければなりません。ひとごとだと言って片づけるわけにはいきません。

*

今回の記事では、「動く・動き・揺らぐ・揺らぎ」をあつかいました。今回も、このアホ独特の「企み＝戦略＝お遊び」をしてみました。つづられるテーマを、つづる言葉たちに演じてもらうという酔狂です。お気づきになったでしょうか。ものすごく馬鹿馬鹿しい試みなのですが、「・・・は or が——する or です」という具合に、「主語＋述語」or「主部＋述部」という、センテンスレベルでのステレオタイプ化した書き方を避けたのです。

そうすることで、述語 or 述部に出てくる動作・状態をきわだてたい。とりわけ、動作を演じる動詞に、思う存分おどってもらいたい。読者に躍動感を体感してもらいたい。そんな思感をもっていたのですが、今読み返してみて、失敗だと気づきました。図式化すると主語＝名詞、述部＝動詞・形容詞・名詞という感じですから、動詞ばかりが、おどってくれるとは限らないのです。

そもそも、日本語で書かれた文には「主語＋述語」or「主部＋述部」という、言葉をつづるうえでの定型を見いだせないから、主語を回避しても、徒労に終わる。また「主語＋述語」にならないようにしたと言っても、たった今書いたセンテンスの途中にある「定型を見いだせない」を「定型は見いだせない」の書き換えとするような小細工に、終始していたにすぎない。上で述べたように、動詞を含むあらゆる品詞を「詞＝言＝語＝名」のついた名詞だとみなせば、名詞だらけ。たとえばスポーツといった躍動感のあるテーマを語っていない文章に、躍動感のある動詞の出番はなく、読者に動詞の躍動感を体感してもらおうと期待しても、無理というもの。だから、失敗＝徒労でした。

*

要するに、きわめてアホなことをやっていたということになります。アホのきわみです。です・ます調でブログの記事を書く場合に、「私」に当たる主語を使わないというこだわりと同様に（※「テリトリー (5)」2009-06-10 をご参照ください）、アホな癖です。アホな癖に、反省もせず、アホな癖で書いているという、いかにもアホらしい話なのです。

でも、動詞であれ、名詞であれ、形容詞であれ、つづった言葉たちに備わっているはずの表情・身ぶり・目くばせ・動きという意味での「揺らぎ」を読者の方々に感じ取っていただけたなら、さらには読者の方々に何らかの「揺らぎ」を誘発できたなら、とても嬉しいのですが.....無理ですよ。たった今、苦笑なり、嘲笑なりをしていただいた方に、感謝いたします。かすかに揺らいでくださったのですから。すっきりしゃっきりとした笑いではなく、ぐちゃぐちゃごちゃごちゃした笑いだったにちがいません。もし、そうであれば、揺らぎに共振し、まなぶのではなく、まねてくださったのですから。

10.02.21 名詞という名の動詞（前半）

◆名詞という名の動詞（前半）

2010-02-21 10:28:39 | さくぶん

まず、前回の「動詞という名の名詞」2010-02-19 で書いたことを、まとめさせてください。動詞、名詞といった品詞と呼ばれているものは、詞がついていることから分かるように、「詞＝言＝語＝名前」である。動詞は動きや状態を指し示す、と一般に信じられているが、それはうさん臭い。「詞＝言＝語＝名前」が「動きや状態」と対応するという話も、きわめてうさん臭い。以上のように要約できると思います。

でも、そう言ってしまうと、身も蓋もなくなってしまいます。「それを言っちゃあ、おしまいだ」状態になってしまいます。そこで、「救済策＝お茶を濁すこと」として、品詞というペテン詞（※ペテン師の親戚です）をまとわされてしまった、あわれな言葉たちに備わっているはずの、表情・身ぶり・目くばせ・動き、つまり「揺らぎ」に目を注ぎ、その「揺らぎ」に同調し共振してみようではないか。そのように考えれば、すべての品詞が瀕死の状態を免れ、生き生きとした「揺らぎ」を発するものとも取れる。という意味のことも、前回の記事では付け加えておきました。

言葉は、健気でいとおしいです。ヒトは、言葉を仲介役として、外界と接しています。外界を見てもいます。言葉を、かなり広い意味で取りましょう。話し言葉、書き言葉だけでなく、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、指点字、点字、音声（発声）、音楽、合図、映像、図像、さまざまな標識や記号や信号などを、ひっくるめた「こと・もの・行為・状態」としてイメージしてみましよう。そう言えば、イメージもまた、言葉に含めていいのではないかと思います。いや、含めるべきです。

広い意味での言葉はヒトと外界との「あいだ・あわい・へだたり」を近くしてくれる、と信じています。ヒトと外界をつないでくれる、と信じたい気持ちもあります。

*

先日、新聞を読んでいて、「暗黒物質」というものについての、やや長めの解説を目にしました。一通り目を通しましたが、読解力のないこのアホには、さっぱり分かりませんでした。「読む」ということが、とても苦手なのです。小学生になって、本格的に読み書きを学ぶようになってから、ずっとそうでした。今もそうです。話を「聞く」ことも、苦手です。身体障害者手帳を交付されている中途難聴者であり、「hear が困難である＝聞こえにくい」という現状以前に、「listen が困難である＝聞いた話を理解しにくい」という状態があったのです。今でも、その状態は続いています。

で、「暗黒物質」ですが、「見えない物質」とも言うそうです。そんな意味のことが書いてあったようなので、とても驚きました。「見えない物質」をめぐって、科学と呼ばれる分野の一部で大騒ぎが起こっているらしい。そこまでは、何とか分かりました。でも、何か妙な気がしてならない。騙されたような気がする。そこで気になったところだけを再読してみました。すると、「見えている物質」というものがあって、それについては、もう解決済みみたいなニュアンスで、その記事が書かれているのです。

誤読かもしれません。よくあることなのです。ですから、読解力が乏しいうえに、へそが曲がっているアホがいただいた感想だと、あらかじめ断っておきますが、「見えている物質」ってあるのでしょうか。もう、科学は「見えている物質」については、「卒業」してしまったのでしょうか。電子顕微鏡、観測装置、検出装置といった、間接的に「何か」を「見る」装置がいろいろあるようです。そうした装置をもちいて、「何か」を「見る」ということは、「何か」を「何かではないもの」に置き換えて「見る」作業のはずです。

装置＝ヒトがつくった道具を介してヒトが見ているものとは、ヒトという生き物の視覚器官とその親分である脳という器官の都合に合わせた「代替りのもの＝仮のもの」ではないのでしょうか。そこまで話を大きくしないで、日常生活をおくるうえで誰もが体験していることを考えてみましょう。

*

あなたは、今、何かを見えていますか。視覚に重い障害がない人であれば、「ちゃんと、見えているよ」とお答えになると思います。では、次の会話を読んでみてください。

あなたの目はよく見えるほうですか。「何でも見えるよ」。今は何を見えていますか。「パソコン (or ケータイ) の画面」。画面には何が見えますか。「活字とか、アイコンとか、模様とか、いろいろ」。今見えているものに名前がついていますか。「ついているものあれば、ついているみたいだけど、何て呼ぶのか分からないものもある」名前のついているものと名前のついていないものとの間で、見え具合に差がありますか。「変な質問だなあ。考えたことがないよ」

ところで、あなたが見えているものは、たとえば、犬や猫や猿やフクロウやトンボやカニと同じように見えている、と思いますか。「知らない。確か、トンボの目は複眼とかいうんだっけ。それくらいしか知らない」。ヒトの目は、地球上のすべての動物のうちで、いちばん正確にものを視覚的にとらえているのでしょうか。「よくは知らないけど、そうなんじゃないかな。ヒトはいちばん頭がいい動物だし」

ふだんからよく目にしている、あなたの持ち物で、今身のまわりにないものを思い浮かべてください。「いつも左手首にある腕時計が、今はない」。それを正確に思い出すことができますか。「えーっと。たぶん」。絵に描くことができますか。「写真みたいには正確ではないと思うけど、描けるんじゃないかな」。試してみましようか。「……。いいよ。やってみよう」

描けましたね。あなたの腕時計とそっくりですか。「これほど難しいとは思わなかったけど、だいたい、こんなもんじゃない」。唐突な質問ですけど、あるものを、あなたと私が頬と頬をくっつけてほぼ同じ方向から、見ているとします。あなたの見ているものと、私の見ているものは、同じだと思いますか。「そりゃ、そうですね」。あなたの目に映っている像と、私の目に映っている像は、同じだと思いますか。「きっと同じでしょう。あっ、そうだ。視力が同じなら同じでしょう」。あなたと私は同じですか。「ねえ、冗談はやめてくれない？ ひょっとして、からかっているんじゃないの？」

*

言葉というものは、ヒトを錯覚させます。「見る・見える」という言葉があり、その「見る・見える」をつかうことによって、ヒトは「見た・見えた」気持ちになってしまう。「見る・見える」と「見た・見えた気持ちになる」とでは、大違いです。これは、いわゆる五感とか知覚という言葉のキーワードである、「見る」「聞く」「嗅ぐ」「味をみる」「触

れる」だけでなく、いわゆる思考や意識という言葉のキーワードである、「思う」「考える」「分かる」「理解する」「意識する」「感じる」についても、言えるような気がします。気がするだけですけれど。たった今、つけた「気がする」も、思考や意識について語るさいに出てくる言葉ですね。

気がする。気がするという気持ちになる。要するに、この駄文もきわめていかがわしく、うさん臭いものである、ということになります。「そんなの百も承知だ」という、みなさんの声が聞こえてくる気がします。気がするどころか、実際、そうにちがいはありません。この駄文をつづっているアホ自身が、いかがわしいなあ、うさん臭いなあ、と思っているのですから。

言葉はあなどれません。ヒトは言葉を「つかっている」気持ちになっているようですが、ヒトは言葉に「もてあそばれている」としか思えません。ヒトが言葉をつくったのか。それとも、わけの分からないうちに、ヒトに言葉が備わってしまったのか。それさえ、分からないのではないようです。個人のレベルでの言語の学習という過程においても、ヒトという生物のレベルの言語の獲得という話＝神話においても、そのわけは分からない、つまり、わけが分からないみたいです。

*

「見える」はあなどれません。ヒトは「見えている」気持ちになっているようですが、ヒトは「見える」に「もてあそばれている」としか思えません。ヒトが「ものがちゃんと見える」ように自分を訓練したのか、それとも、わけの分からないうちに、「ものがちゃんと見える」なってしまったのか。それさえ、分からないのではないのでしょうか。個人のレベルでの視覚においても、ヒトという生物のレベルの視覚においても、そのわけは分からない、つまり、わけが分からないみたいです。

愚見を述べますと、ヒトはまだら状でしか身のまわりを見ていないと思います。視覚に死角や盲点があるという程度の意味ではありません。ほかの生き物の視覚との比較について語る資格はありませんが、視覚について騙る資格ならありそうなので、騙らせてください。「騙る」を「語る」と考えてくださってもかまいません。同じことです。ヒトは見たいものしか見ない。見えるものしか見ていない。そもそも、ヒトの知覚が集中できる範囲は、ヒトが感じているほど広くはない。また、集中を持続できる時間も、ヒトが感じているほど長くはない。個人的な感覚からして、そんな感じがします。

ヒトはつねに、何かを「捨てている＝知覚できるのにしないている」。同時に、ほかの何かを「拾っている＝知覚できるものの中から選んで知覚している」。「捨てている＝知覚できるのにしないている」と「拾っている＝知覚できるものの中から選んで知覚している」とでは、前者のほうが圧倒的に多い。なお、ヒトには、「拾うことも捨てることもできない＝知覚しようとしてもできない」ものやことやさまがある。それは、おそらく、「捨てている＝知覚できるのにしないている」と「拾っている＝知覚できるものの中から選んで知覚している」と比べれば、はるかに多い。そんな気がします。

*

ヒトには見えていながら、見ていないものがある。知覚していながら、自覚していない、つまり、意識にのぼっていないものがある。こうした現象は、広義の「名づける」とからんでいるように思えます。

広義の「名づける」とは、「なづける・名を付ける・てなづける・なつかせる・なつく・なれる・なれしたしむ・ならう・なれ・ならい・なじむ・なじませる・しずめる・おさめる・けりをつける」／「きめる・きまり・しきたり・おきて・くせ・すじ・たち・みち・みちすじ・すじあい・しくみ・しかけ・ほねぐみ・かた・かたち・かたらき・はたらく・うごき・うごく・ゆらぎ・ゆらぐ」と大和言葉系の語で、ずらすことができます。

漢語系の言葉でもずらしてみましよう。「なづける・命名する・称する・分類する・種類・特徴・性向・性癖・傾向・志向・指向・習性・習慣・慣習・様式・形式・雛形・スタイル・ルール・規則・法則・法律・法・摂理・道理・条理・理・秩序・メカニズム・システム・体系・系統・系・経路・装置・機械・作動・自動・自働・自動操縦・オートメーション・稼動・秩序・運動・動作・共振・同調・共鳴・シンクロ・当然・必然・自然」

上とは、少し違ったずらし方をしてみましよう。「名づける・てなづける・おさめる・けりをつける・みていなくてもかまわないものにする・かんがえなくてもいいものにする・てぬきができるものにする・かまわなくてもいいものにする」

ヒトは、名づけることにより、手抜きをする方法を習得したのではないのでしょうか。言い換えると、視野に入るすべてのものを注視しなくてもいい仕組みを手にしたということです。自分の周辺を、まだら状に見ていても大丈夫になったのです。別の比喩もち

いと、ヒトは意識の大部分を自動操縦に任せている、と言えそうです。見ていない＝積極的に知覚していない＝ぼーっとしている、とも言えそうです。もちろん、ヒトにそうした自覚はありません。おごりたかぶっているからです。この星のどんな生物よりも、総合点でだんとつに優れていると信じているからです。

以上は、「ことわり・事割り・言割り・断り・理」をもちいたこじつけです。出まかせです。実際問題として、ヒトが、知覚しているすべてのものを、取捨選択することなく自覚＝意識＝認識したとすれば、発狂してしまうでしょう。脳に備わっている、テータの処理能力を超えてしまうからです。そうした事態を防ぐ仕組みが、備わっている。どのようにして備わったのかは謎。わけが分からない。そんな話ではないかと思われま

【※「見る」および「知覚する」ことの、不安定さ＝いかがわしさに興味をお持ちの方は、「まぼろし」2009-02-20、「あつさのせい？」2009-07-16、「げん・現-1-」2010-01-06、「まことはまことか（前半）」2010-01-17、「まことはまことか（後半）」2010-01-17 をぜひ、ご参照ください。愛着のある記事たちなのです。】

10.02.21 名詞という名の動詞（後半）

◆名詞という名の動詞（後半）

2010-02-21 10:45:38 | さくぶん

*

テーマを、知覚から言葉に変えます。

きわめて「粗雑な＝分かりやすい」考え方をするなら、すべての言葉は名前である、と言えそうです。このうさん臭い考え方を、物語っぽく語った＝騙った「な、いいだろ

う？」2009-10-29、「テラ取り物語（続・「な、いいだろう？」）」2009-10-30、「宇宙法廷審理中（1）」2009-10-31～「宇宙法廷審理中（4）」2009-11-03 という、一連の記事がありますので、ご興味のある方はご笑覧ください。

「すべての言葉は名前である」と言うなら、「すべての品詞は名前である」とも言えそうです。大げさですよ。肩に力が入りすぎています。頑張りすぎて、うつが悪化するといけないので、話を絞ります。

*

「固有名詞＋する」という言い方が気に入っています。固有名詞といっても、たいは人名です。「デリダする」「バルトする」「マラルメする」「アホの坂田する」という具合です。ブログ記事の中でも、何回かつかった記憶があります。「固有名詞＋する」というのは、このアホが「夢の素」と呼んでいるものとほぼ同じ働きを指す言い方です。

たとえば、「夢の素（2）」2010-01-23 では、「渡部直己」という人名が出てきますが、「渡部直己する」というのは、簡単に言うと、前回の記事で書いた「つづられるテーマを、つづる言葉たちに演じてもらうという酔狂を行う」ことです。人名という固有名詞が名指していると信じられている「ある人」は、おびたしい数の「自分」を意識的に、あるいは無意識のうちに演じています。

このアホを例にとると、親や知り合いに内緒で、あやしげなブログ記事を書いていた、親の介護をしていたり、親の年金で食べていたり、節約料理に凝っていたり、抑うつ状態や被害妄想に悩まされていたり、ネコにご飯を出したり、とにかく、いろいろな役割を演じています。ここでの役割とは、ある行動を定期的に繰り返しているという意味です。

その行動を名詞的に言い表すと、へっぽこブロガー、介護者、親のすねかじり、節約料理人、ビョーキの人 or うつ病患者、愛猫家、という感じでしょうか。要するに、ラベル＝レッテルを貼ることですね。何か大きな事件で有罪の判決を受け、刑に服している or いた人のように、1度だけの行動で、世間から「〇〇した人」というラベルを貼られることもあります。1回だけ、オリンピックで金メダルをとった人も、「〇〇した人」と呼ばれるでしょう。「〇〇した人」「〇〇人」「〇〇家」「〇〇者」と呼ばれる裏には、いろいろなケースや事情があるでしょう。

*

このブログで出てきそうな「固有名詞+する」、つまり、「夢の素」のうちの人名バージョンを解説付きで挙げてみます。

「(ロラン) バルトする」：とっかえひっかえ興味の対象やテーマを変える。

「(ステファヌ) マラルメ」する」：1) 言葉に徹底的にもてあそばれる。；2) 言葉というサイコロを振ることで、思索＝詩作＝試作する。

「(ジャック) デリダする」：駄洒落と「考える」をシンクロさせる。

「蓮實重彦する」：1) 言葉の表情・身ぶり・目くばせに目を凝らしながら、読む、あるいは書く。；2) 映画を好きだとは、ほかの人に言わせないと言うほどまでに、映画に淫する。

「坂部恵する」：大和言葉系の語にこだわりつつ、日本語で哲学する。

書名バージョンもあります。

「(ギュスターヴ・フローベール作の)『紋切型事典(紋切型辞典)』する」：ヒトは決まり文句しか話さないという視点から物事を論じる。

「(ギュスターヴ・フローベール作の)『ブヴァールとペキュシェ』する」：言葉で書かれたものが現実であると錯覚するというヒトの習性に注目して、物事を論じる。

「(ニーチェ作の)『善悪の彼岸』する」：論理的矛盾や破綻といった批判を物ともせず思考を重ね、言説の断片を積み重ねていく。

以上のように、だいたいが一面的で、その固有名詞で呼ばれている各人の、業績や仕事や私生活でのさまざまな役割を切り捨てています。それ以上のことを望むわけにはまいません。たとえば、基本的に「見る」人であると思われるミシェル・フーコーについて、多面的に「固有名詞+する」しようすると、次のようになります。

「ミシェル・フーコー」する：見て、観て、見つめ、認められ、見られ、見入られ、魅入られ、見せられ、魅せられ、身を張り、身をかけ、見舞われ、診られ、看られ、看取られる。【※合掌。】

書物であれば、上記のように、ある書物のある部分だけをとらえた、ひとりよがりな根拠の乏しい印象だけに焦点を絞ることになります。つまり、ごく個人的なイメージをもとにして、遊んでいるだけです。ですから、こうしたひとりよがりな言い回しをもちいるさいには、どんな意味で使っているのかが読者に伝わるように、前後関係の記述に工夫をします。

*

これまでに書いたブログの記事では、固有名詞、とりわけ、人名や著作名をなるべく出さないような工夫もしてきました。このブログでは「こんなことを書きました」というタイトルの記事を定期的に掲載し、その中で、それまでに投稿した各記事について短い解説を書きます。その解説の最後のほうに「直接書かなかったキーワード」として挙げるものに、本当は「固有名詞+する」とつづりたかった人名や著作名が混じっています。

固有名詞は、強く、また多様なイメージを各人に喚起させる言葉です。あるテーマを論じる場合に、ある固有名詞を登場させると、たとえば、その固有名詞を名に持つ人に対する読者の多様なイメージが次々と呼び覚まされます。それがいわば「ノイズ＝ラベル」となって、そのテーマを演じている言葉たちの「表情・身ぶり・目くばせ・働き」などに、読者の目が行かなくなる。つまり、つづられている言葉たちへの注視の妨げになる。それほど、固有名詞のイメージの喚起力は強いのです。

*

ある話や文章に、ある人名が登場すると、その名前を聞いたり目にした人が、「条件反射的行動＝思考停止状態」に陥ることがよくあります。その人名にまつわる紋切り型のイメージや言葉の断片が、頭に浮かぶということです。

「ああ、あの有名な哲学者か」「難しい本を書いていた人だな」「あっ、構造主義者だ」「左翼だ」「右翼だ」「自殺した人だ」「危険思想の持ち主だと何かで読んだことがある」「あの人の顔、お笑い芸人の△△にそっくり」

以上のように、読んでいる文章のテーマとは無関係であったり、それほどテーマとからみ合わないイメージや言葉のかけらが、まるで「ノイズ＝決まり文句（※夢の粒とも言えます）」のように頭の中に現れます。その「ノイズ＝紋切り型のイメージ」の分だけ、話されている言葉たち、あるいは、つづられている言葉たちに注意を向けなくなります。これは、致し方ないことのようにです。ふだんヒトが認識できる範囲は、ヒトが思い込んでいるよりは、かなり狭いと思われれます。また、あるものやことに集中する力も、意外と弱い気がします。

【※固有名詞のイメージ喚起力については、「あえて、その名は挙げない」2008-12-24、「横たわる漱石」2008-12-26、「東京」(E 無限大) 2009-02-14 で、そして、ヒトの意識の狭さをめぐっては、「1人に2台のテレビ」2009-02-09、「人面管から人面壁へ」2009-02-10で触れました。お時間のある方は、ざっと飛ばし読みをしてください。】

*

読解を助けるにしろ、読解の妨げになるにしろ、固有名詞は、それを耳にする人や目にする人に強く働きかけます。個人差はあるでしょうが、名詞の中ではいちばん人の心や意識を揺さぶります。品詞の中では、特に名詞と動詞が激しい「揺らぎ＝動き」を人に「送ってくる＝発してくる」気がします。そのほかの品詞も、人を揺さぶります。言うまでもなく、個人的な感想であり意見です。

品詞などという言葉を持ちいて、「ことわり＝言割り＝事割り＝断り」をする必要はない。品詞ではなく、言葉＝言の葉でいい。言葉は、人に働きかけ、「揺らぎ＝動き」を人に「送ってくる＝発してくる」。その「揺らぎ＝動き」と同調し共振した人は、「考える・

思考する」にいたる。そんなふうに、思っています。イメージしています。その意味で、すべての言葉＝語は、動きを宿した「動詞」（※もちろん比喩です）であると言ってもいいのではないのでしょうか。

10.02.25 不思議なこと

◆不思議なこと（前半）

2010-02-25 10:13:16 | さくぶん

不思議でならないことがあります。それは、ことです。こと、ですよ。こと。「こと」という「事・言」なのです。まあ、くだらないことです。これ以上、くだらないことは言わないこと。なんて、言われても困ります。このところ、気になって仕方がないのです。

殊に、ことことに至っては、このパリス・テキサスことアホめ、いや、このアホことパリス・テキサスめが、ことに触れて、このブログで触れてきたことであり、ことによると、今後のビョーキのなりゆきをも左右しかねない、ことなのです。Dr. コトーに診てもらってもできない身としては、心の中の孤島で生きながら、事無きを得るのを祈るばかり。ことほど左様に重要かつ、どうしても考えてみたいことなので、ございます。【注：「パリス・テキサス」は、「うつせみのあなたに」というタイトルでブログを書いていた時期のハンドルネームです。】

ことことに関しては、中途半端にうわべだけを糊塗するわけにはいかず、ことのほか、言と事が異なるかについて、ことごとしいのは百も承知で、ことわけ、たわけ、ことわりを重ねてまいりましたが、とどのつまりは、ことしかないことに気づき、「不思議なこと」というタイトルで、まこと【※今気がついたのですが、「まこと」って不思議です。ま+こと、ですよ。めまいがするほど興味深い。これはどういうことなのか？ でも、今はそれにかかわっている暇はないので、後に考える「こと」にします。】に戯けたことを、かたことという言葉をつづりながら、本日、語って＝騙してみようかと思っている次第

なのです。

こと・koto。たった2音節の短い語でありながら、いろいろな語義があります。辞書では、短い語ほど長い解説がある。以前に、「見えないものを見る」2009-01-08と、その記事を別のハンドルネームを使っているときに書き直した「不思議」2009-09-16で触れたことです。そうした不思議なことについても、以下に書いてみるつもりです。あえて考えなければ、それまでのこと。いざ、考えてみると不可解。まことに、不思議なことなのです。

*

さて、一部の読者の方々には、失礼な言い方になると思いますが、「初めに言葉があった」「万物は言葉によってできた」「できたもののうちで、言葉によらずにできたものはなかった」という一連のフレーズに疑問を呈したいと存じます。ここで出てくる「言葉」とは、英語訳では、たいてい Word という言葉がもちいられているようです。しかも、文中でも大文字。God と同じ扱いになります。同格ということでしょう。

辞書を引いて word の語源の説明を読むと、これまた「言葉」「語」「話す」とかいう言葉が出てきて、肩透かしを食います。がくん、がーん、がちょーん、という感じです。もっとすごいものが出てくると期待するほうが、馬鹿だったということでしょうか。

そもそも、世界的なベストセラーである聖なる書に出てくる言葉は、電車ごっこじゃなくて転写ごっこを、時間的にも空間的にも繰り返しています。ほかの諸言語ではどんな意味合いの言葉に訳されているのかとか、これまでにどんな語を経由してきたのかとか、原語が何かについても知りません。惹句・出理駄さんが罵倒していた路語素中華思想の路語素とも、関係がある気もしますけど。その路語素という語も、転写されたものだったとの話を聞いた覚えがあります。そもそも、転写されていないものなど、ないみたいですけど。

こと(1)→こと(2)→こと(3)→こと(4)→こと.....ということでしょうか。「転写=写る・写す=移る・移す=コピーのコピー」の連鎖です。ときには、うつし間違いも起こるようですが、詳しいことは知りません。とにかく、「こと」は増殖する属性を備えているようです。

*

言葉という言葉の言に当たる「こと・言」ですが、日本語の辞書では、「こと・事」と隣り合わせているか、その「こと・言」の親戚と言ってもいいような「こと」があいだに挟まっていることがほとんどだと言えそうです。広辞苑という字引では、「言」の項が先に来て、冒頭に「(事と同源)」と記してあります。その次に載っている「事」の説明としては、「(もと「こと(言)」と同語)」とあります。

これが、不思議で仕方がないのです。『言葉と物』という訳書がありますが、そのタイトルにある「物」、つまり「もの・物・者」という言葉があり、これがまた、「こと・事」とよく似ている点がまことに不思議というか、気になる言葉なのです。さらには、「ものごと・物事」などという「もの」と「こと」が合体した言葉までありますから、わけが分からなくなってきました。とはいうものの、こういう不可解なことって、個人的には、実はとても好きなんです。

言葉、いかめしく言うと、言語について考えることが好きなのです。なぜ、好きなのかと申しますと、軽い目まい、場合によっては、かなり激しい目まいに見舞われることがあるからなのです。子どもはぐるぐる回るものや、自分自身がぐるぐる回ることが好きですね。目が回るのが好きな子が多いみたいです。もちろん、嫌いなお子さんもいるにちがいません。

*

この記事の冒頭に挙げた「たわごと・戯言」では、やたら「こと」が出てきましたが、うんざりしますね。自分で書いておきながら、読んでみると軽い「めまい・目まい・眩暈・目眩・目舞い」を覚えます。個人的には「目舞い」という感字を当てたい感じなのですが、広辞苑によると「まう・眩う」(目がまわる・目がくらむ)と「まう・舞う」(まわる・めぐる)があったりして、またまた軽い目まいに誘われます。

で、冒頭の駄文ですけど、今回書こうとしている「こと」というテーマを、書かれる側にある言葉たちが、あのようによく演じてくれるのを見ると、言葉というもの(いや、ことかな?)が健気でいとおしく感じられます。あの中には、言も事もことも異もコトも糊塗も殊も出てきますが、そういう「ことわり・事割り・言割り・断り・理」に

つては、「どうでもいい」と「おもしろい」という、相反する感情をいただきます。その曖昧な気分、「あわいあわい・淡い間」感じに惹かれます。

こういう状態を「おもいはおもい・思いは重い」とか「おもいはあつい・思いは厚い・思いは熱い」などと言って、このアホはひとりでにやにやしているのです。不気味ですね。それはさておき、音として、そして文字として、どの言葉も重みと厚みを備えている、つまり多義的=多層的であると言いたいのです。

その重みと厚みは、ヒトという枠内においてのお話=戯言であることは言うまでもありません。音として、そして文字としての言葉は、ヒトという枠外では、あくまでもニュートラルな「もの」でしかあり得ません。つまり、意味はないということですね。

*

で、「こと」ですが、ヒトにとっては、いろいろな意味があるようですが、そうした「いみ・意味」というものを「いみ・忌・齋」、つまり「忌むべきもの」とずらしてみましよう。言葉には、「意味」というものが伴う一方で、「忌」もまた常にうるさくつきまとっていて離れないみたいなのです。

ここでは「いみ・忌」を広く取ります。ヒトが言葉に担わせようとするメッセージを、裏切ったり、嘲笑ったり、場合によっては、攪乱する、いわば「滅正辞」という感字を当ててもいいような、ノイズもどきのものが「付く=憑く」。そんなふうイメージしています。もう少しずらして、「揺さぶる・揺るがせる」と言ってもかまわないかな、とも思っています。

意味と忌（※「いみ」と読んでください）が同居する場。それが言葉だ。なんて言ってもいいのではないのでしょうか。まあ、ビョーキの者としては、そこまで肩に力を入れないうほうが身のため、心のため、かもしれません。

そう言えば、忌にも忌があるのを思い出しました。「暗澹死体・暗澹屍体」とか書いて、ちょっと訛って「あんた、ん、してー」みたいに読みます。「ん」を「する」とは、意味深です（※「ん」については、「ん？」2009-01-14、「「ん」の不思議」2009-01-15、「言葉とうんちと人間（言葉編）」2009-11-11 で書きましたので、ご覧いただければ嬉しいです）。

で、「あんた、ん、してー」ですが、何をして欲しいのでしょうかね。転じて「案胆仕手」とか「安耽至帝」という感字を当てる場合もあるそうです。そういえば、「intensité」というフランス語とも関係があるとかないとか。いずれにせよ、なんでもあり一的で、しかも不気味な気配にただならぬ趣とパワーを感じます。揺らいでしまいそうになります。目まいに誘われそうです。

*

「こと・事・言」という思いの厚みと重みについて考えてみましょう。「事＝言」ということになれば、さきほど挙げた「初めに言葉があった」「万物は言葉によってできた」「できたもののうちで、言葉によらずにできたものはなかった」に似ていなくもないですね。違いは、God が出てこないくらいです。出てこないかなあ。ゴドーを待ちながら、しあわせな日々。なんちゃって。さて、あの一連のフレーズは、人類最大のギャグ、あるいは人類の歴史という不条理演劇の台詞だと思っていたのですが、ここで心が揺らいできました。

ところで、「大ごと」の反対は何でしょうか。とっさに尋ねれば、「小ごと」という答えが返ってきそうです。でも、「大事←→小言」とすると、違うなあと思えてきます。それとも、やっぱり、素直に「事＝言」と考えるべきなのでしょうか。こういうのを、たわけと申します。たわけとは、形式的に考えることです。論理的に考えることの多くも、たわけに含まれます。笑いごとでは、ありません。ざらにあることなのです。気がついていないだけです。

ぐちゃぐちゃごちゃごちゃしたものを、すばっととか、すっきりとか、くっきりとか、分けよう、切ろう、割ろうなんて考えるから、戯けと言うのです。かといって、ふにやあとか、ぶちよっとか、ぼよよんという具合に分けたり、切ったり、割ったりできそうもありません。いや、案外できたりして……。

*

こうなると、このブログでやっている、いつものやり方でお茶を濁すしかないようです。ずらすのです。「ずらす」というのは、連想ゲームや、ひとりブレンストーミング

みたいなものです。例によって広辞苑（※手元には、これしか手ごろな辞書がないのでず）を参考にします。

ずらし方（1）：こと・事・言・もの・物・者・さま・様・状・方・態

ずらし方（2）：言・ことば・詞・語・言う・話す・歌・詩歌

ずらし方（3）：事・抽象的・現象・できごと・事件・事情・事態・様子・理由・わざ・しわざ・しかた・やりかた・おこない・つとめ・中身・内容・実体

ずらし方（4）：物・物体・物品・存在・物のけ・物事・事柄・言葉・言語・・わけのわからないもの・内容・対象・対象物・物質・状態・ありよう

ずらし方（5）：者・人・あいつ・あのやろう・事

ずらし方（6）：様・状・あり方・しかた・方・方向・方法・方式・形式・ありさま・様態・ふう・様子・すがた・かたち・形・型・なりふり・おもむき・心の動く方向・心の動き・心のあり方・なりゆき・内容・伝えたいこと・事情・趣向・あじわい・体裁・感じ・表面・みえ

うーん。なかなか興味深いです。本を読むのが苦手なアホにとっては、こうして言葉をずらして眺め入るほうが、哲学書なんかを読むより、ずっとスリリングなのです。誰々が何々と書いていた。それは、何々と位置づけることができる。といった作文での引用や解説ごっこをするのも読むのも退屈です。お仕事なら、たぶん別でしょうけれど。というのは大嘘でして、ものぐさで横着なうえに、頭が悪いので、そうした芸当ができなだけなのです。一時は、その手の職業を旨として大学院に入ったこともありましたが、3カ月も経たないうちに退学。修行に耐えられませんでした。芸道の厳しさを思い知りました。トホホ。

実は、このアホは、身の程知らずと呼ばれるのを承知のうえで、言葉のフェティシス

トを自任させていただいております。そんなわけで、フェティシズムおよびフェティシストについて、「トリトメのない話」2009-02-21、「あう(3)」2009-04-29、「げん・言-4」2009-08-27 で、その効用を力説しておりますので、もしご関心をお持ちの方がいらっしゃれば、関係のある部分だけでも、目をお通しください。ちなみに、エッチな意味のことは書いてありませんので、ご安心を。

*

ヒトは、なぜか言語を獲得してしまいました。その結果かそれが原因かは分かりませんが、うだつが上がらない、体毛の薄い、尻尾のないおサルさんから、ホモ・サピエンスという偉そうな智人、年中発情している痴 or 恥人になってしまったらしいのです。で、なぜかは分かりませんが、ヒトは言葉＝語を発し、それをもちいて、「もの」、「こと」、「さま」に名前をつける作業を始めました。その名前は、ヒトに大きな自信を与える役割を果たしました。

名前はラベルみたいなものですから、勝手に貼ればいいのです。貼る対象は何でもかまいません。たぶん、そのいい加減さから、「こと・事・言」なんていう混乱が生じたのではないのでしょうか。何か分かんないけど、訳が分かんないけど、とりあえず、名前を貼る。そんなテキトーな態度で臨めば、「貼られた対象が何か」などという問題は、すっ飛んでしまいます。

こと、もの、さま。事・物・様。事象・物体・現象。何とでも呼んでください。要は、名前というラベル。べらべらのラベル。中身や、貼った対象が何かなんて考えるのは野暮。名こそが命。命名万歳！

*

何にでも名前をつけるとすごくいい気分になる。この快樂を覚えたヒトは、もうやめられません。名前依存症。名前中毒。名前至上主義。名前教。そんな感じになってしまいます。「妄想・もうそう」ではありません。もう、そうなのです。もう、そうなっています。この状況には弊害があります。名前と名前をつけた対象を混同するのです。好例は、「分かる・分かった」とか「見える・見る・見えた・見た」。こんな名前をつけたために、「分かる・分かった」とか「見える・見る・見えた・見た」気持ちになってしまう。ヒトには、自分がつくった名前になりきってしまう癖がついたらしいのです。言葉を「模倣

する＝擬態する」癖がついた、とも言えそうです。

なりきる。これは、恐ろしいことです。「ヒト＝名前」状態が常態化することですから。なお、この点について、ご興味のある方は、「なる (6)」2009-03-31 と「なる (7)」2009-04-01 に、ぜひ、目を通してください。お時間のない方は、パスしちゃっていただいて、いっこうに差し支えありません。

名づける。すると、その名づけたものが「ある・在る・有る」「いる・居る」「おる・居る」ことになってしまう。ちなみに、今挙げた「ある・在る・有る」「いる・居る」「おる・居る」も、名前。「ある・在る・有る」「いる・居る」「おる・居る」ことになってしまっただけ。

それは、「実在するのか」「真実なのか」と、問い正したいところですが、「実在（実在する）」も「真実（真実である）」も、名前だから処置なし。ほどこすべがない。手のつけようがない。これって、恐ろしいことではないでしょうか。でも、大丈夫なんです。ヒトであるかぎり、気にすることはないと言えます。迷惑するのは、ヒトでない生き物たちです。ひいては、この星です。その意味では、まことに恐ろしいことです。

*

実に不思議なことです。「こと・もの・ものごと・さま」を錯覚させる「仕組み＝仕掛け＝装置＝システム＝メカニズム＝ダイナミズム」が、なぜか、ヒトに備わっているらしいのです。「らしい」としか言えない悲しさを嘯みしめましょう。

動きであれ、在りようであれ、ヒトの心 or 頭 or 意識の中に浮かんだ「こと・もの・ものごと・さま」であれ、すべてが名＝名前＝名詞＝言の葉＝事の端＝言葉＝語になってしまうのです。オー、マイ、語っ！ 大迷語！

驚くべきことです。怪しいことです。こんなふうには、「こと」としか言えません。実に摩訶不思議な「こと」なのです。

*

namae。name。似ている。激似。なめんじゃない。なめんなよー。

name の語源をジーニアス英和大辞典で調べてみました。すると、nama、nomen、onoma という語が記してありました。なま、のーめん、おのま。何だか日本語っぽい響きがありませんか。生、能面、大野間・大埜間（※こんな苗字があります）。驚くには当たりません。アルファベットにはいろいろありますが、英語やフランス語であれば基本的に 26 文字だけです。その組み合わせで、どれほどの数の単語ができるのか。上限を 5 文字という条件で、コンピューターに確率の計算をさせれば、答えは出てくるでしょう。いわゆる、確率の問題という名の問題。わけが分からない時に吐く決まり文句の 1 つ。思考停止状態。

それだけのことです。いちいち偶然にびっくりしていたら、ヒトなんてやっていたりません。せいぜい、その偶然に対する感応力＝無知＝鈍感力を利用して、名前や言葉を素材にした、占い師になるとか、スピリチュアル方面に進むという方法もありそうです。実際、それで成功なさって、お金持ちになっている方も大勢いらっしゃいます。一つ間違えて、ビョーキ扱いされたり、詐欺罪に問われて獄中にいる方々も少なからぬ数にのぼると聞きます。name を name ちゃ、no-no ということですね。

*

でも、どうやら、ヒトは、なまえに、なめられているらしい。もてあそばれているらしい。

名前は麻薬＝魔薬。名前がついたもの＝いったん言葉に置き換えたものは、すべて「了解済＝解決済＝既知のもの＝分かったもの」。だから、もう考える必要はない。そんなもの、とうのむかしに知ってるよ。分かってるよ。考える必要なし。そんな具合に、名前はヒトが手抜きをするための「口実＝すべ＝道具」になってしまった。成り下がってしまった。

決まり文句と紋切型の「氾濫＝反乱」と「饗宴＝共演＝狂宴」。思考停止。判断停止。えっ、ぼけーっつ。自動操縦。ああ言えばこう言う。想定問答集。阿吽の呼吸。コミュニケーション。ディベート。ダイアログ。ディスカッション。論文の書き方。論理的思

考。ロジカル・シンキング。問題解決テクニック。ME(?)E = 飯のたね、考える技術。作文技術。4代目柳亭痴楽の綴り方狂室。もっともらしい名前がついているけど、ほぼ出来レース。ほぼやらせ。ほぼ八百長。型がある。様式美の世界。形骸化。むくろ。なきがら。うつせみ。

考えるのではなく、考えないための手抜きが、まかり通る。だから、世の中うまく行かない。うまくいったとすれば、たまたま。たまたまにまで、セレンディピティなんて、ちゃんと名前がついている。あれを真に受けるなんて、考えていない証拠。著者名、タイトル名、本の帯についたキャッチフレーズ=長い名前、推薦文=長い名前の威力。張子の虎。イワシの頭。単なる名前の呪術にかかっているだけ。それほど、名はパワフルでテリブルということ。パワハラ、テリハラ。

*

意味なし。筋なし。でも、伝染るんです。ぼのぼの。不条理演劇。自動筆記=児童ヒッキー。自動書記=総書記=もぬけの殻。ナンセンス・nonsense = ノンセンス・non sense = 無方向=無軌道=おだむどう = Where is that guy now? = あのヒトはいま。

こうなったら、「いみ・意味」じゃなくて、「いみ・忌」しかないか。暗澹死体・暗澹屍体「あんた、ん、してー」「案胆仕手」「安耽至帝」——。もはや、ラベル=名前は どうでもいい。

パワーだ、フォースだ、言霊だ、intensitéだ、「あんさん、して〜」だ、インテンシティだ、強度だ、匈奴だ。これも名前か。名前を貼られた「何か」が発する「何か」。「何か」という、影の薄いつーか、わけのわかんない名前に甘んじるしかないのか。「何か」はもったいぶっているから、「何でもありー」にしようか。いっそ、「……」でいくか。

取り乱しまして、大変失礼致しました。ことそんな具合なのです。いやー、ことって、ほんとーに不思議ですね。ということ。

◆

◆不思議なこと（後半）

2010-02-25 10:26:07 | さくぶん

*

まれに不思議なことが、確かに起こります。というか、見かけるというべきかもしれませんが。たとえば、「目」と「m」と「見る」との出あいです。この3つは似ていませんか？目が目の形から取られたという象形文字を祖先に持つという話は分かります。でも、mが目に似ているなんて、冗談は顔だけにしてくれと言われそうですが、似ているように見えてなりません。 $n + n = m$ 。 $n \wedge n$ 。「見る」を主題にした「眼界」を扱った「うつせみのたわごと-11-」2010-02-12について、「こんなことを書きました（2010年その3後半）」2010-02-23で、同記事に触れて簡単な解説を書きました。mは出てきませんが、似たような戯言です。

「目・眼・見・視・me・manako・miru」という言葉たちが、まなこを合わせる＝目を交わす＝目配せし合う。「目」も「口」も、ヒトの内と外とが触れ合う「穴」だとまで言うと、もはやこじつけだと笑われるにちがいありません。それはともかく、その目という穴と、口という穴が開いたり閉じたりする。「唇」と「瞼・目蓋」が動くという揺らぎを見せる。そのさまに誘われて＝同調して＝共振して、読む＝見る＝目にする、あるいは、口に出して「音＝空気の揺らぎ」として耳の鼓膜を震わせる。出あう。これを不思議なことと言わずして、何と言えればいいのでしょうか。

こうした、めちゃくちゃなこじつけた「読み」に興味のある方が、万が一いらっしゃれば、ぜひ、「あう(4)」2009-04-30と「あう(5)」で2009-05-01をご一読願います。あまりにも馬鹿馬鹿しくて、目を丸くし、開いた口がふさがらなかいようでしたら、このアホめの不徳の致すところです。ごめんなさい。でも、言い訳をさせてください。本気なのです。残念ながら、正気だと申し上げることはできませんが、本気です。大目に見ていただければ、幸いです。

いずれにせよ、「目」と「m」と「め」と「ま」と「見る」との出あいのような、不思議なことが、「こと」にも起こってくれないでしょうか。

*

行き詰まりましたので、また、ずらしてみます。

な・名・字・那・無・儼・己・汝・何・na

ことわり・事割り・言割り・断り・理・kotowari

かみ・神・髪・守・皇・上・紙・kami

たま・霊・玉・魂・魄・珠・球・適・遇・tama

うーん。感慨深いものがあります。ぞくっとします。

*

「こと」という名の仮名という場で、「事」と「言」という名の真名と、「koto」という音が出あう「こと＝出来事」を、目にする＝見るということ。ことたちが舞い、目まい＝目舞いを誘ってくれるようなことが、起きてくれないでしょうか。

*

だれかがいったように、かみは、しんだ。ということ。だれかがいったように、ひとは、すなのかおのごとく、なみうちぎわに、きえた。いや、きえている。ということか。ことわりという、なのしくみと、しかけ。しくみと、しかけという、な。ことわりというなの、ゆらぎとうごき。ゆらぎとうごきという、な。ゆらぎとうごきという、なが、ひとに、はたらきかけている、ということ。ひとをのぞく、ものや、ことや、さまにも、はたらきかけている、ということ。

なにかをなづけ、てなづけることにより、ひとは、なにかが、みえなくなり、なにかを、うしなったということ。なにかをみうしなったことに、ひとは、きづいていないと

いうこと。なづけえない、なにかに、もてあそばれていることもしらない。もてあそんでいる、なにかの、なさえもしらない。ということ。

なづけるということ。なのかずには、かぎりがある。それなのに、ひとは、なにかをさらにこまかくわかる。おのれのちいささに、あわせて、わけにわけまくる。わかるごとに、なをつければ、ながたりなくなるのは、あたりまえ。おなじおとの、なをつけるしかない。おなじかたちの、なをつけるしかない。ということ。

かくして、なは、またぐ。なは、かさなる。わけがわからなくなる。なは、あつい。おもいも、あつい。しかるに、なは、おもい。ということ。

なづけるとは、かわすこと。かわすたびに、なにかがかわる。ひとは、ゆらぐや、かわるには、ついていけない。とらえられない。それが、さが。ますます、わけがわからなくなる。ということ。

すべては、ひとという、わくのなかのこと。わくのそとのことは、どうしても、わからない、ということ。それが、ことであるかどうかさえ、わからないということ。あやしきこと。ことごと。

*

誰かが言ったように、神は、死んだ。と言う「こと・事・言」。誰かが言ったように、ヒトは、砂の顔のごとく、波打ち際に、消えた。いや、消えて居る。と言う「こと・事・言」か。「ことわり・事割り・言割り・断り・理」と言う、「名・字・何」の仕組みと、仕「掛け・賭け・懸け」。仕組みと、仕「掛け・賭け・懸け」と言う、「名・字・何」。「ことわり・事割り・言割り・断り・理」という「名・字・何」の、揺らぎと動き。揺らぎと動きと言う、「名・字・何」。揺らぎと動きという、「名・字・何」が、ヒトに、働き「掛け・賭け・懸け」ている、と言う「こと・事・言」。ヒトを除く、「もの・物・者」や、「こと・事・言」や、「さま・様・状・方」にも、働き「掛け・賭け・懸け」ている、と言う「こと・事・言」。

何かを「名・字・何」づけ、てなづける「こと・事・言」により、ひとは、何かが、「見・観・視」えなくなり、何かを、失ったと言う「こと・事・言」。何かを「見・観・視」失っ

た「こと・事・言」に、ヒトは、気づいていないと言う「こと・事・言」。「名・字・何」づけ得ない、何かに、もてあそばれている「こと・事・言」も知らない。もてあそんでいる、何かの、「名・字・何」さえも知らない。と言う「こと・事・言」。

「名・字・何」づけると言う「こと・事・言」。「名・字・何」の数には、限りがある。それなのに、ヒトは、何かをさらにこまかく「分ける・別ける」。おのれの小ささに、合わせて、「分け・別け」に「分け・別け」まくる。「分け・別け」るごとに、「名・字・何」をつければ、「名・字・何」が足りなくなるのは、当たり前。同じ音の、「名・字・何」をつけるしかない。同じ形の、「名・字・何」をつけるしかない。と言う「こと・事・言」。

かくして、「名・字・何」は、またぐ。「名・字・何」は、重なる。「分け・訳」が「分からなく・判らなく・解らなく」なる。「名・字・何」は、「厚い・篤い・熱い」。「思い・想い」も「厚い・篤い・熱い」。しかるに、「名・字・何」は、「重い・重い・想い」。と言う「こと・事・言」。

「名・字・何」づけるとは、交わす「こと・事・言」。交わすたびに、何かが「変わる・代る・替わる・換わる」。ヒトは、揺らぐや、「変わる・代る・替わる・換わる」には、ついていけない。とらえられない。それが、性。ますます、「分け・訳」が「分からなく・判らなく・解らなく」なる。と言う「こと・事・言」。

すべては、ヒトと言う、枠の中の「こと・事・言」。枠の外の「こと・事・言」は、どうしても、「分からない・判らない・解らない」、と言う「こと・事・言」。それが、「こと・事・言」であるかどうかさえ、「分からない・判らない・解らない」と言う「こと・事・言」。怪しき「こと・事・言」。ことごと。

*

馬鹿馬鹿しいですね。めちゃくちゃなこじつけ。尋常ではない。もはや自分語＝ひとり語というしかない。

こうなると、以下の2つの態度のうち、いずれか一方を取る、あるいは、そのうちのどちらかに寄るしかなさそうです。

(1) 不思議なこと。そうだ、そういう「こと」にしておこう。これ以上、名前に逆らうことはやめよう。参りました。負けました。名前至上主義、漫才じゃなくて、万歳！ ことについては、もう、いっさい、悩まないこと。

(2) 不思議なこと。そうだ、「こと」に徹底的にこだわろう。徹底抗戦。相手は手強いから、討ち死にしてもかまわない。妥当、じゃなくて、打倒名前至上主義！ 「名・字・何」という「音」が音でなくなる。「名・字・何」という「文字」が文字でなくなる。そんな感性をとりもどそう。

とはいうものの、(2) の負けは明らかなようです。(2) のスタンスは、ヒトという枠から外れることですから、危険です。ことのふち、つまり、限界＝崖っぷちに身を置くようなものです。異なるはずの事と言が結託しているのですから、こちらに勝ち目はありません。ことに打ち勝つこと。そんなこと、できっこない。ということ、です。

*

危うくなってきました。そもそも、なんでこのアホは、以上のようなことに頭を悩ませているのか。そうお思いになっている方が、ほとんどだろうと察しております。神経症的どころじゃ、なさそうです。ほんまものの重篤な心配が濃厚です。

我に返る必要がありそうです。とはいえ、返る我が見当たらないのです。我がない。破鏡再び照らさず。割れた鏡で、自分の姿さえ映し見ることはできない。要するに、かえるにかえれない。どこかで、聞いたか目にしたフレーズです。思い出しました。「かえるはかえる」2010-01-12、「かえるにかえる」2010-01-13、「もどるにもどれない」2010-01-14と立て続けにつづった記事のタイトルが合体したりフレーズみたいです。

やばい。マジやばです。事無きを得るためには、「こと・事・言」への負けを素直に認め、この辺で退散したほうがよさそうです。ということで、失礼いたします。ねえ、おねえさん、これでいいこと？

10.02.27 はかる -1-

◆はかる -1-

2010-02-27 09:52:21 | さくぶん

「わかる」と「はかる」は、字面と発音が似ていますよね。「wakaru」と「hakaru」。「w」と「h」。5W1Hなんて言い回しを思い出しました。こういうふう我突然出てくる連想は、「意味」ではなく「忌（※どうか「いみ」と読んでください）」なのだ、前回の「不思議なこと」2010-02-25 という記事で、決めちゃいました。反意味とか、へそ曲がりの意味とか、ノイズという感じです。どうぞ、よろしく。このブログでは、忌と意味を別け隔てなく扱っています。

のっけから、とちくるったことを書いて、ごめんなさい。びっくりなされた方も、いらっしゃるにちがいありません。変なブログがあると聞いたので覗いてみた。やっぱり変。簡単に要約しますと、そのような意味のメッセージを、このブログの左側にある「メッセージを送る」機能経由で、最近よくいただきます。

そんなわけで、初めてご訪問くださる方にも配慮しながら、たわごとをつづっております。このブログは、万事がこんな具合なのです。「変」であるかどうかはともかく、「偏・辺・片」＝「ふち・へり・きわ・かぎり」に常に身を置いていたいという願いはあります。長い目で見ていただくと嬉しいです。で、「わかる」と「はかる」に話をもどします。

両者が近いか遠いかというと、近いような気もするし、遠いような気もします。その時々によって、受けとめ方が異なる。各人の受けとめ方も、多種多様だ。いずれにせよ、個人レベルの話であることは確かなようだ。そんな感じがします。おそらく、そういう何かほんわかした、雲をつかむような頼りない、ものの受けとめ方が、「はかる」なのかもしれません。「おしはかる」という言葉もあるくらいです。

*

広辞苑を見ると、「おしはかる・押し量る・押し測る」の「おす・推す」は「押す・圧す・捺す」とも関係があるみたいです。スーパーなんかで、野菜やラップにくるまれた魚なんかを買おうとするときに、指で押してみるということがありませんか。商品に圧力を加えるなんて、本当はやっていけないのですが、ついやってしまいます。

「身が引き締まっていて、新鮮かな?」「中が、すかすかなんてことはないだろうか?」そんな思いにつられて、指先で押したり、触ったりしちゃいます。ちょっと後ろめたい感じがします。わくわく感やどきどき感も覚えます。それが「おす・推す」なのかなとも思います。そうそう、「重みをはかる」の「重み・重い・重さ」は「思う・思い」と語源が同じらしいという説が、広辞苑に載っていました。

思い当たることがあります。やはりスーパーでの話なのですが、よくキャベツやカボチャを手のひらに載せて、「重い・重み・重さ」をはかりますね。そんな時には、目を軽く閉じている人がいます。たとえ目を開いていたとしても、その目は宙を見つめているか、うつろです。あれは、自分の「思い・思う」の中にいる時の、人の表情や身ぶりではないでしょうか。

そんなイメージというか「意味・忌」が気に入ってしまって、このところ、そうした思いを込めて「思う・思い」「重み・重い・重さ」という言葉たちを眺めたり、つづったりしています。「おもいはおもい・思いは重い」「おもいおもい・重い思い」なんて、最近、よく記事に書いています。

こういうのは、おふざけではなく、自分がつづっているさまざまな言葉たちの「重み・思い・意味・忌・イメージ」＝「多義性・多重性・多層性」を、受けとめて楽しんでいるのです。はかっている、とも言えそうです。「はからずに・測らずに・量らずに・図らずに」、文章はつづれない気がします。

*

一方の「わかる」については、これまでさんざん、ああでもないこうでもない、ああでもあるこうでもある、ああでもないこうでもある、ああでもあるこうでもない、をしてきましたが、殺伐とした印象が常につきまとっているように思えてなりません。何し

る「わかる」には、「分ける・切る・割る」という動作が基本にあります。血生臭いです。ばらばら殺人とか、腑分けとか、マグロの解体という言葉の思い起こします。痛々しいのです。

「はかる」という言葉には、そうしたずさんだイメージをいただくことはありません。小学校の低学年のころ、よく商店街へお使いに行かされました。「はかる」で思い出すのは、お肉屋さんでのやり取りです。確か「ギユウのナミを 100 グラムください」と、こちらが言うと、いつもコロッケを揚げている島倉千代子さん（※もちろん、若き日のお千代さんです）にそっくりのおねえさんが、「ちょっと待ってね」なんて言って出て来て、牛肉を量ってくれるのです。

たいてい、「気持ちだけ、おまけしておいたからね」という言葉が返ってきて、その「気持ちだけ」という言い回しと、そう言う時の、おねえさんの口調が妙に色っぽくて、しかも優しげで、幸せな気分になったのを覚えています。「気持ちだけ」とか「心持ち」というフレーズの響き。それが、個人的には「はかる」と密接に結びついています。

*

時計を思わせる上皿式の秤の受け皿に、蠟をひいたような白っぽい紙に載せられた赤いお肉が見える。そこに、「気持ちだけ」が加わる。すると、「気持ちだけ」針が揺れる。「思い」の「重み」が揺れる。こっちの心も揺れる。秤の動きに似ていませんか。天秤やばねを利用した秤の揺らぎ。共振。

昔は、近郊の農家の人たちが、野菜やお味噌なんかをリヤカーに積んで住宅街を回ってきたものです。リヤカーを押したり引いてくる、おばさんたちは、棹秤（さおばかり）と呼ぶのでしょうか、目盛が刻まれた棹と分銅の位置を調節しながら、慣れた手つきでニンジンやキュウリの重さを量っていました。

その仕組みが分かったのは、小学校の高学年になってからだと思いますが、そんな妙な道具で重さを「はかる」ことができるというのが、不思議でなりませんでした。お肉屋さんの秤は、針と目盛で何とか「目に見える」のですが、農家のおばさんたちの秤は、得体がしれなくて、何だかいつもズルをされているような気がしました。

*

今になって思うと、学校という場所は、「はかる」と「わかる」に満ちあふれていました。そもそも、学校は「わかる」と「はかる」に二分される、と言ってもいいのではないのでしょうか。黒板と教科書とノートをつかってのお勉強は、たいていが「わかる」ためです。理科の実験・観察や体育や家庭科や図工なんかは、だいたいが「はかる」の世界です。保健室も「はかる」の領域という感じがしませんか。体温計、体重計、そして何と呼ぶのか知りませんが、身長や座高を測る計器が置いてあるところです。

学校と言えば、体育——。苦手でした。いい思い出はありません。体育も、「はかる」の世界です。というか、「はかる」そのものが体育だ、という印象があります。しかも「はかる」だけではなくて、「くらべる」のです。そして「きそう」のです。嫌でした。大学に進学して、一般教養の科目として体育があると知った時には、度肝を抜かれました。「うそー。だまされたー」という気がして、しばらく立ち直れませんでした。

高校を卒業して嬉しかったことのベスト3に、体育とのお別れがあったからです。そう信じて疑っていませんでした。なのに、大学にまで体育がついて来たのです。ショックでした。それで思い出しましたが、大学の入学式のすぐあとに、身体測定兼体力測定があったのです。その会場の雰囲気、すごく嫌でした。体育会系の部やサークルの連中らしき者たちが、当たり前みたいな顔をして場内をうろついているのです。そして握力や背筋力や肺活量などをはかる計器のそばで、新入生たちを物色しているのです。

ドナドナドーナ、ドーナという悲しげなメロディーが頭の中で鳴り響いていた記憶があります。売られていく家畜になったような、切ない気分になりました。でも、幸いなことに、運動能力とか、体力、腕力のたぐいには、全然自信がなかったので、見向きもされませんでした。特に握力形の数値を見たある上級生が、「嘘だろ」とか何とかつぶやいたのには、一瞬むかつきましたが、すぐさまほっとしました。「自分は売れそうもない——。よかった」。

*

自分の場合、ほかの人たちに比べて極端に乏しいのが、投げる力です。投げる力をはかるには、ハンドボールやソフトボールを投げさせられますよね。投げた時の距離が、半端じゃなく短いのです。それを知らない先生なんかだと、ずかずか寄ってきて、「おい、

ふざけんなよ」なんて言われたことがありました。肩にきつと障害があるのだと思います。でも、日常生活には支障がないので、気にはなりませんけど。

必然的に、ソフトボールも、野球も、ドッジボールも駄目ということになります。中学に入って、バレーボールとサッカーをやられた時には、何とか耐えましたけど、幼いころから球技全般に嫌悪感をいだいていました。好きだったのは、走ることぐらいでしょうか。それも短距離だけです。持久力がないので、長距離はまるっきり駄目でした。高校の「マラソン大会」の時には、遅れ気味の第2反抗期だったので、コースの後半は堂々と歩きとおしました。もちろん、「どんけつ=どべ」でした。内心、誇らしく思ったのを覚えています。

とにかく、スポーツは「はかる」の世界ですね。記録は「はかる」ものですから、当然です。趣味として、何かのスポーツをすることはありません。スポーツ観戦は、積極的にはしません。テレビでたまに見るくらいです。実際に、試合や競技が行われている場に出向くことはありません。プロ野球、サッカー、ラグビーのスタジアムやフィールドにも行った経験が一度もないくらい、スポーツとは縁がないのです。高校3年の秋に、市内対抗の体育大会が催された多目的競技会場に、嫌々ながら、応援のために連れて行かれたのが最後です。

*

それにもかかわらず、スポーツ関係のノンフィクションを読むのが大好きなのです。特に山際淳司と沢木耕太郎が書いたスポーツものは、ほとんど読んでいます。ルールを知らない競技のものでも、おもしろいというか、読んでいて快いので読みました。今挙げた2人の書き手の文章が好きだ、ということもあります。書く側としてのスタンスのとり方に、共感を覚えます。スポーツはやらないけどスポーツについて書かれた文章は読むという癖は、小説や詩は読まないが文芸批評は読むというのに、似ている気がします。

山際淳司と言えば、自分にとって非常に大切なことがあります。スポーツとはまったく関係がありませんが、おそらく自分がいちばん好きな短編と呼んでいい作品があって、それを訳したのが故山際淳司氏なのです。ピーター・キャメロンという米国人が書いた『ママがプールを洗う日』という短編で、同名の短編集に収められています。その短編が好きで好きでたまらなくて、原書まで買い求めました。今も、かたわらの書棚に訳書と原書が並んでいます。

その短編（原題は Memorial Day ）には、実母と義父に対して口を利かない少年が出て来て、一人称で語るという形式なのですが、短編のストーリーを要約するのも野暮なので、興味のある方は、ぜひ探してみてください。手元にあるのは、ちくま文庫のものですが、単行本でもあります。おそらく絶版なので、古本屋か、図書館で探さなければならぬと思います。

*

今、原書のほうを手にして、表紙を見ているのですが、タイトルの One Way or Another の下に絵があり、そこに描かれている赤いフレームの自転車が、よく見ると変なのです。前後にハンドルバーがあって（2つあるという意味です）、サドルがない。そんな自転車が、白い横羽目板の壁をバックに置かれています。

壁の左にはヒバに似た低木が茂っているのが見えます。絵の右側の隅には窓の端っこが描かれていて、その下に葉の多い枝が伸び、バラのような赤い花が2つ咲いています。で、例の奇妙な自転車の下には、白っぽいコンクリートか、石のボードを敷いたようにも見える小道があり、絵のいちばん下には芝生の緑が覗いています。

その絵も気に入っていて、よく眺めます。懐かしいのです。高校2年生の時に、20日間ほど米国を東部から南部にかけて旅行し、複数の家庭でホームステイをさせてもらったことがありました。そのうちの、ある家で見えた芝生のはえた庭とプールのある風景が鮮明な印象として残っていて、それが短編の描写と原著の絵と重なって思い出されます。

また、その短編に出てくる少年の心境が、当時の自分と重なって心が惹かれるのかもしれない。何度読み返したか分からない短編です。

訳文は、山際氏らしい、さらりとした文体（おそらくは下訳と呼ばれる本職の訳者がいて、それに山際氏が手を入れたのでしょう）。乏しい英語力の者が言うのも、おこがましいですが、原文を読むと言葉の選び方にウェットな趣が感じられます。どちらを読んでも、うっとりとした気分になります。ストーリーよりシーンに重点をおいた作風が、永遠の時にいるような錯覚にいざなってくれる。そんな作品です。

*

道草をしてしまいました。とりとめのない書き方で、とりとめのないことを書いています。このブログは、いつもこんな調子なのです。ごめんなさい。

テーマは、「はかる」と「わかる」でしたね。こじつけ——こじつける、何でもかんでも、つないでしまう、というのも、このブログの常套手段です——になってしまいますが、たった今紹介した短編は、語っている「現在の思い」と回想されている「過去の思い」とが重なって「現在でも過去でもない思い」となったような感じをいだかせる、やや「重い＝多重的」で「厚い＝多層的」な作りになっています。でも、誤解しないでください。テーマや書き方は全然重くはありません。もちろん、作品の受けとめ方は、人それぞれですけど。

もう、こうなったら、ずれまくりですけど、「読む」という行為は、「わかる」だけでなく「はかる」とも近いようにも、また「わかる」と「はかる」とが「読む」において重なっているようにも思われます。さらに言うなら、「スポーツをする」にも「スポーツを見る・観る」においても、「わかる」と「はかる」が共に重要な役割を果たしている気がします。そんなことについて、考えてみたいです。

ちなみに、広辞苑では「はかる・別る」という項目もあり、「(上代東国方言) ⇒ 「わかる」に同じ」という説明が見えます。このブログでよく出てくる広辞苑は、自分にとって「聖書」でも「六法全書」でも「教科書」でもありませんから、「ふーん」とか「へえー」とか「おもしろいなあ」というくらいの思いで受けとめています。

*

以前、「わかる」については、「かわる」とからめて考えてみたことがあります。スリリングでおもしろい体験でした。「かわる (1)~(10)」2009-03-26~2009-03-29 という連載で試みました。「こんなことを書きました (その5) (前半)」2009-04-18 の中で、「かわる」シリーズの記事に入りやすいリンクが貼ってありますので、ご興味のある方は、どうぞご利用ください。

「はかる」に関しても、やはり「わかる」と「かわる」がかかわってくる気がします。いちおう、連載の形を取って書いていく予定です。見通しはついていません。でも、研究論文を書くわけではありませんので、あちこち道草をし、出まかせ主義を実行しながら、マイペースで作業を進めていきたいと思います。お付き合いいただければ嬉しいです。

10.02.28 はかる -2-

◆はかる -2- (前半)

2010-02-28 10:57:14 | さくぶん

のっけから出まかせを言わせていただくのを、お許してください。当ブログでは、「出まかせ」こそがヒトのすっぴんのありようだと考えています。どういうことかと申しますと、「論理的思考」、「道理を詰めて考える」、「筋道を立てて話す」といった「美辞麗句＝きれいごと＝厚化粧」に異議を唱えているのです。

今述べたような、ヒトという種がいったん口走ってしまった言葉、つい付けてしまった名前、なぜか貼ってしまったラベルの心地よい響きに、惑わされないようにしましょう。これらのフレーズは、ヒトが物事を考えるさいに、よりどころとなる道具というより、むしろ思考停止を促し、楽をするための玩具に成り下がってしまった。そう申し上げたいのです。

「考えること」「思うこと」「言葉をもちいること」は、本来、ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ、うじうじおろおろのはずです。ヒトは、その「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ、うじうじおろおろ」を、「すっきり」「くっきり」「はっきり」「すばっつ」にすり替えてしまうという、横着を覚えてしまった。今挙げた擬態語を「論理的思考」、「道理を詰めて考える」、「筋道を立てて話す」といった、格好よく響くが意味不明のフレーズと取りかえてしまった。こうしたインチキは、その場しのぎでしかありません。

*

素直に、「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ、うじうじおろおろ」に立ち向かいましょう。そのさいにヒトの頭 or 心 or 意識に浮かぶのは、「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ、うじうじおろおろ」であり、口から出るのは「出まかせ」でしょう。親、先生、先輩や、その親、その先生、その先輩.....たちが、引いた線や筋、つまり、様式化されたフレーズ=決まり文句=紋切型をもちいて、「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ、うじうじおろおろ」を「すっきり」「くっきり」「はっきり」「すばっつ」という具合にすり替えるのはズルいです。

そうしたすり替えは、出来レース=八百長=やらせです。そうではなくて、「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ、うじうじおろおろ」に、身を任せるだけの正直さと誠実さを取りもどしませんか。そんなスタンスを「すっぴん」と呼んでいるのです。

「自分の頭と言葉で考えよう」などいう、美辞麗句とは違います。「じゃあ、どうすればいいんだ」という疑問が湧くのは当然のことです。それです。「どうすればいいのか」を考えるのです。ひとさまに、即座に「答え=紋切型のフレーズ」を尋ねたい気持ちを抑えましょう。

誰々が何々と書いた or 言ったことを「参考にする」のも、いいでしょう。でも、それをそっくりそのまま借りて=盗んで、「考える」「思う」の手抜き材料にするのでは、芸がなさすぎます。格好悪いとか言って体裁などを気にせず、「わからない」「どうなってるの?」「こんなん頭に浮かんだけど」「これ、どういうこと?」「なんでこうなるの?」「アホちゃうかと思われるかもしないけど、こんなこと思ったの」という調子で、「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ、うじうじおろおろ」しませんか。

*

「これはねえ、きみ、もう、〇〇が1世紀前に解決した問題なの」「それはねえ、哲学で言う△△という誤謬なのよ。勉強不足じゃない?」「あっ、そのことね。事実誤認。で、次の質問は?」「これについては諸説があって、私の意見としては□□が▽▽で書いた(EE)が、正しいと思うの」「どうして、そう言えるのかだって? きみい、☆☆学派の##が言ったことなんだよ。わかんないの? 頭悪いね」

「一目瞭然じゃないか。見ろよ、この数字。〇〇機の売り上げが前同時期比でXX%の減収じゃないか」「でも、顧客の満足度を示す値では——」「満足度？ そんな言葉は、信用しないね。何がヒューマンでソフトなマーケティング戦略だ。社長は、例の経営コンサルタントに洗脳されているんだ。ハード面での数字を見ないと、命取りだぜ。ほら、〇〇機の中核にあたる、この部分での不具合が、YY.ZZ という数字になって出ている」「ソフトじゃなく、ハードですね」「その通り。工場長を通さず、現場のエンジニアと相談しよう」

今挙げた発言は、もちろん、単純化したサンプルです。あえて、どの分野とは名指しませんが、ある作業を行った結果が、見えるなり、手で触れることができるという具合に体感しにくい領域で、よく口にされる「決まり文句」を紹介したまでです。文系の学問分野であろうと、理工系の領域であろうと、ものをつくる場であろうと、サービス業の職場であろうと、以上に類した言い方で、ものごとが「分かった」「考えられた」「解決した」「作業が完了した」「問題点が明確になった」と言われる状況を経験なさったことはありませんか。

共通しているのは、「当たり前」「決まったこと」「正しいとされていること」「適切だと思われていること」「客観的だとみなされていること」「信頼できるとされる数値」が前提となって、物事が運営される事態が進行している点です。こういう状況を、「すっきり」「くっきり」「はっきり」「すぱっつ」が、「すいすいと」「肅々と」「整然として」「着々と」「着実に」「滞りなく」「万事順調に」進んでいるさまである、と言ってもかまわないかと思われます。

*

でも、トラブルとか、問題とか、スキャンダルと呼ばれている事態は起こります。どんな分野でも起こります。たとえば、世界屈指のノウハウを有し、経営基盤や人材の面でも、トップに位置すると言われてきた、ごまかしのきかないはずの理工系の粋を集めた企業でも、大トラブル、大問題、大スキャンダルが起きます。現に起きつつあります。

ところで、自分は何を書こうとしていたのでしょうか？ ちょっと、ここで記事を読み直してみます。

*

.....。

*

失礼をいたしました。ある「出まかせ」を書こうとして、「すっぴん」という比喻をもちいたあたりから、話が大きく逸れはじめたことを確認しました。まず、「すっぴん」から片づけます。

*

ものごとを素直に「考えること」「思うこと」「言葉をもちいること」に伴う「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」に、身を任せるだけの正直さと誠実さを取りもどそう。そんなスタンスを「すっぴん」と呼んでいるのです。

*

で、冒頭で書こうとした「出まかせ」ですが、「はかる」では「基準」が重要な役割を果たし、「わかる」では「基準」はないのではないかという、きわめて根拠が薄弱な、単なる「イメージ・印象・勘」なのです。

自分の場合、ブログ記事を書くさいには、前もって、走り書きメモをつくっておきます。これは、たいていが、新聞の折り込み広告で裏が白いものを、カッターナイフで適当な大きさに切り分けたものにかかれています。下書きの段階では、そのメモを見ながらパソコンに向かい、ばあーっという感じで一気に、いわばアドリブで文章を入力していく癖があります。それを記事として投稿するわけですが、悪い癖があって、いったん掲載した記事をモニターで読み直しながら、「清書」をするのです。

その「清書」について、複数の読者の方から、これまで何度もお叱りのメッセージを頂戴いたしました。午前に軽く目を通した記事を、午後に読み直そうとしたら、どう考

えても、文面が変わっているようだが、実際にはどうなのか。そういう意味のお問い合わせを何度もいただいております。申し訳ありません。確かに、モニターを見ながら、「あっ、誤字だ」「あっ、脱字だ」「あっ、こんなことを書いている」「あっ、ここは書き改めたい」という感じで、家事の合間に文章をいじってしまうのです。

ブログとしては比較的長い記事を書いているせいか、下書きの段階でワープロソフトをもちいてつづった文章と、ブログ記事として投稿し終わったモニター上の文章が、ずいぶん違うように感じられるのです。文面というか内容まで異なっている気がする。そんなことが、ざらにあります。不思議でなりません。やはり、あやういのでしょうか。

午前中に記事を投稿することが多いのですが、その時間帯には、親の介護を含め、家事・雑事がいろいろありますので、数回に分けて文章をいじっているうちに、最終的にはかなり違った印象の文面になってしまう場合もあります。ごめんなさい。今のところ、そんな書き方しかできないのです。ご理解を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

*

またもや、一瞬、何を書いていたのか分からなくなりました。ただ今、さらにもう一度冒頭から読み直してみて、「基準」について書いていたのを思い出しました。ちなみに、このように文章をアドリブで書いていて道草をし、途中で何を書いていたのかが分からなくなった場合には、下書きの段階で整理をして書き直すということはしません。

「いま、ここで」や「手持ちの知識や情報」を大切にしたい。あくまでも「考えながらつづるプロセス」を優先し、「考えてつづった結果」はどうでもいい。ほぼそんな態度で、ブログを書きたいと思っているからです。テキトー、ものぐさ、横着、アホー—そんなご叱責の言葉が聞こえてくるようですが、「すっぴん」でいきたいと考えております。とは言うものの、正直申しまして、若干の後ろめたさがあります。

当ブログでは、投稿した記事がある程度溜まったところで、「こんなことを書きました」を掲載しています。自分が何を書いてきたのかを確認するため、つまり頭の整理だけでなく、アドリブで書いた記事の中で曖昧なままにしていた書名や人名を調べて「直接書かなかったキーワード」として明記することもあります。また、ひとさまに記事の文意を分かりやすく要約するという目的もあります。ちなみに「直接書かなかった

キーワード」については、「夢の素 (1)」2010-01-22 で、詳しく説明していますので、その部分だけでも、ちらりをご参照願えれば嬉しいです。

*

話をもどします。

「はかる」という行為には、「基準」があるというのは、よく考えれば当たり前のことです。2通りの意味で当たり前です。(1) 秤や計器には、目盛という名の「基準」がある。(2) 「はかる」さいには、観測する者の位置・意思・思惑・利害という名の「基準」を考慮しないわけにはいかない。という感じがします。感じがするだけです。

一方、「わかる」という行為では、「わかる」という作業が根底にありますから、「わけてみないことには、わからない」という仕組みが想定されます。したがって、前もって判断のよりどころとなる「基準」というものの入り込む余地はなさそうだという気がします。ただし、白黒がはっきりしている or 白黒をはっきりさせる作業が「わかる」という行為・状態ですから、「基準」ではなく「根拠」と呼べるものが、「わかる」きっかけとなる、「わかる」を促す気がします。感じがするだけです。

感じがする。感じがする。という、まことに心もとない話なので、さきほど「出まかせ」とお断りをしておきました次第です。さらに出まかせを言わせてください。

*

「はかる」はヒトという枠内でのいわば「確信犯的」かつ「テキトーな」行為であるのに対し、「わかる」はヒトという枠外へと、身の程もわきまえず侵犯しようといういわば「無鉄砲で」かつ「賭けに等しい」行為だと言えそうです。「はかる」では、ダメモトに近い軽い気持ちで秤に「かける・掛ける・翔る・賭ける」。「わかる」では、マジで白黒のどちらかに「かける・掛ける・駆ける・懸ける・賭ける」。そんなイメージでしょうか。

以上のように書くと、前回の「はかる-1-」2010-02-27 で、「殺伐とした」とか「血生臭い」と形容した「わかる」が、ドンキホーテ的というか、不可能性に挑むトホホな行為

に思えてきます。一方、前回、「ほんわかした」とか「雲をつかむような頼りない」と書いた「はかる」のほうは、計算ずくかつ狡猾でありながら、結果をそれほど重視してはいない、ちゃらんぼらんな行為に感じられます。でも、実際、そうなのではないでしょうか。



◆はかる -2- (後半)

2010-02-28 11:00:51 | さくぶん

*

「わかる」から考えてみましょう。

「わかる」という行為は、ヒトが不可能性に挑戦することです。客観性・真実・事実・現実といった、ヒトという枠の外への志向が前提となっています。ヒトは「わかる」という言葉を発し使用することはできても、「わかる」という言葉が指し示している行為を、ヒトが「期待する」ほどまでには実現できません。

「わかる」を目ざして「わけてみる」。その結果、「わかった」と言えても、心の隅では「わかってはいない」気がする。「わかった」と文字通り言える気がする場合もある。しかし、それは賭けでたまたま「当たった」感じがしないでもない。それは、「何かの代わりに何かではないものを持ちいる」という、ヒトにとって不可避な仕組みが働いているからです。

つまり、「わかる」の対象は、「何か」ではなく、あくまでも「何かではないもの=何かの代わり」だからです。その仕組みに敏感な人は、悔しいとか、もどかしく思う。鈍感な人は、「わかった」と狂喜するか、当たり前だと思い平然としている。

このように、「わかる」は、不可能性や不確実性や限界性と、いわば「表裏一体」の関係にあります。その意味で「わかる」と「わからない」とを隔てる「基準」を設定する余地はないと考えられます。むしろ、「わかる」という、いわば「確固とした or 後ろめたい

幻想」のよりどころとなる「根拠」と呼ぶにふさわしい「判断材料」が、「わかる」を支えています。

以上のようにイメージしています。蛇足ですが、イメージですから、個人的なレベルでいただいている感想です。

*

次に、「はかる」を考えてみましょう。

「はかる」という行為は、ヒトが自らの可能性らしきものに挑むことです。なぜ、「可能性らしき」なのかは、上述の「何かの代わりに何かではないものを持ちいる」という仕組みが働いているからです。数、長さ、重さ、量といった一連の「もののありよう」を、感覚器官を通して、つまり、あくまでも「何かではないもの＝何かの代わり」として「とらえる」ことが基本です。

感覚器官に加えて、道具を用いて、目盛、数値に「置き換える」（※これも「何かではないもの＝何かの代わり」を持ちいることにほかなりません）という作業を、ヒトは「つくり上げて」きました。たとえ、道具を持ちいても、最終的には五感によって「とらえる」という限界性（※言うまでもなく「何かではないもの＝何かの代わり」として「とらえる」という意味です）があります。その限界性を構成する要素の一部に、「はかる者＝観測者」の位置・意思・思惑・利害が挙げられます。それが、「はかる」行為に不可欠な「基準」を成り立たせています。

ふつう、ヒトは目的になしに、はかることはありません。何らかの「思い・思う」があって、それを満たしたり、実現するために、「重み・重い」をはかります。その目的は、確固としたものであったり、気ままであったりします。

ヒトには、「はかる」行為について高をくくっている向きがあります。「はかる」行為自体が、それほど難しい作業ではなく、また、「はかる」ことに失敗しても、それほどがっかりすることではないと思っているからです。

以上のようにイメージしています。

*

「わかる」がヒトという枠外を志向し、「はかる」がヒトという枠内での行為であるという点について、説明を加えます。

「わかる」は、「おもい・思い・想い・重い・おも・面」を、ヒトの限界性＝壁＝障害物ととらえて、それを打ち破ろうとする意思に支えられています。「知覚器官⇒シナプス⇒脳」という「信号＝データ＝情報」の流れを経て、意識や認識や行動と呼ばれるものに至るプロセスの外にある、「何か」としか名づけるしかない「もの・こと・さま」を「とらえようとする」行為だと言えそうです。

「はかる」は、ヒトが自分の「おもい・思い・想い・重い・おも・面」の枠内で「とらえられる」「もの・こと・さま」を、「とらえる」以上の行為を求めてはいません（※それ以上の行為を求めるのは、「わかる」のほうです）。また、ヒトには、自分の「おもい・思い・想い・重い・おも・面」が、かなり不安定で、当てにならないものだと、あきらめている節があります。したがって、「はかりそこなう」＝「とらえそこなう」ことがあっても、それほど失望しないと考えられます。

*

「はかる」と「わかる」とが別個の行為であるとみなせる場合と、両者が重なっているか、両者とは無関係とみなしたほうが妥当だと考えられる場合があります。具体的にみていきましょう。

*

* 「はかる」の要素が強い場合：

(1) 寒気がして、熱っぽい感じがするので、体温計で体温を測る。

(2) 帰宅したばかりの夫が浮かぬ顔をしているので、会社で何か良くないことがあったのではないかと、夫の気持ちを推しはかる。

(3) 子どもの誕生日のお祝いに何を買ってやれば喜ぶかと、子どもの気持ちをはかる。

(4) ○○社で大規模な商品の回収問題が発生したために、関係する企業の従業員として、そのトラブルの重みを考える。

(5) 父親を交通事故で亡くしたばかりの友人の気持ちを思いやり、自分がその立場に置かれたらどういう気持ちになるだろうかと想像する。

(6) 廊下の足音を聞いて、兄が帰ってきたと思う。

(7) ポーカーで、相手を観察し、これまでの経験を総合して、その手札を読む。

(8) その日の親の言動から、もうすぐ説教を始めるつもりだなと察する。

*

* 「わかる」の要素が強い場合：

(1) 患者の体温と血液検査の数値を見ながら、医師がその患者の容態を観察し、医師用のマニュアルを根拠に診断名を決定する。

(2) 最近さえない顔をしている夫について、会社の同僚と話して様子を探り情報を得て、退社後の夫を尾行し、確たる証拠を押さえ、夫がある女性と浮気をしていることを発見する。

(3) 子どもの誕生日祝いに、新しい自転車を買ってやろうと考えていたが、子どもが自らお祝いの品としてゲーム機を欲しいと言ったので、そちらを買うことに決める。

(4) ○○社で大規模な商品の回収問題が発生し、その子会社に勤める女性が、○○社の株価が㊦㊦円まで急落した時点で、以前に無理やり買わされた○○社の株式を全部売却しようと決心する。

(5) 父親を交通事故で亡くしたばかりの友人が、自殺を図り重傷を負ってN病院に入院しているのを知り、さっそく見舞いに行くことにする。

(6) 廊下の足音を聞いて、兄が帰ってきたと思ったので、兄に貸していたMDを返してもらおうと部屋から出ようとしたが、兄の彼女のYの声も聞こえたので、遠慮して部屋に留まることにする。

(7) ポーカーで、相手を観察し、これまでの経験を総合して、その手札を読んだつもりだったが、相手に□□万円の借金があることを思うと、気が引けてきたので、この勝負ではわざと負けてやろうと心変わりする。

(8) その日の親の言動から、不穏な気配を感じていたが、幼い弟を折檻し始めたのを見て、家から飛び出す。

*

* 「はかる」と「わかる」が重なっていたり、からみ合っているとみなされる場合、および両者とは無関係とも考えられる場合：

降水確率・株価指数・消費者物価指数・偏差値・知能指数・うつ病診断のための「はい・いいえ・どちらでもない」で答える質問票に基づく診断結果・星占い・手相・字画に基づく姓名判断・血液型性格診断および占い・スピリチュアル関連の書籍および自己啓発書に書かれたフレーズ――を根拠として、何らかの判断をする。

*

「はかる」を「わかろう」として「わけて」みる。すると、「はかる」には、とりあえず「基準」と名づけてもかまわないと考えられるものがあり、「わかる」には、とりあえず「根拠」と呼んでもかまわないと思われるものがあるようです。「わかり」やすく説明するなら、要するに、「はかる」には主観的判断が関与している度合いが強く、「わかる」には客観性を必死で目指している力み・気迫・野心が感じられます。

「はかる」というと、客観的なイメージがありませんか。たとえば身長が168センチ体重51キロなんて数値化されて出てくるのが、「はかる」の結果です。でも、これって「客観的」という言葉が指し示している「客観性」を満たしているのでしょうか。ご存知のように、長さなり重さの「基準」とされるものは、何国共通ではありません。メートル法が幅をきかせるようになったのは、ヒトの歴史では、つい最近のことです。

「度量衡」という言葉があります。「長さと容積と重さ」と広辞苑では定義しています。「はかる・測る・量る・計る」の対象となる「もの・こと・さま」はいろいろあるでしょう。でも、いくら数値化できると言っても、その背景には、「はかる」うえでのヒトの目的・意図があり、TPOにより、「はかる」の目的・意図がまちまちであっても不思議はありません。それを「客観的」という名で呼んでいいものなのでしょうか。

出まかせを言わせてもらいますと、「はかる」の結果となり得る「数字」は「名・言葉・語」と同じで、レッテルだという気がします。つまり、それ自体に意味も忌もイメージもなく、ニュートラルなものです。「意味・忌・イメージ」は、ヒトが「勝手に＝恣意的に＝テキトーに＝気分次第で」「決める・いなく」ものではないかと思います。

ところで、さきほど例に挙げた身長と体重ですが、ヒトはなぜそのような「もののありよう」をわざわざ「はかる」のでしょうか。不思議に思いませんか。たまたま、お遊びではかったとは考えられません。「はかる」側に何らかの目的・意図があり、また、いったん「はかる」が実行されて「出た」「結果」には、「つかう」側（※「はかった」側と一致するとは限りません）の何らかの目的・意図にそって利用されることになるのではないのでしょうか。

たとえば、高校で計測された、ある人の身長・体重が、その人が何らかの事件の容疑者 or 被害者とみなされ、その行方が知れない場合に、捜索のさいの重要なデータ＝根拠とされる場合が予想されます。政府が徴兵制を検討・準備する時に、資料のデータの1つとなっても、驚くには当たりません。

「はかる」が実行されて結果が出た以降、「はかる」側と、出た結果を「つかう」側とは必ずしも一致せず、両者の目的・意図も、必ずしも一致しない。これは、ズレが生じることです。しかも、そのズレは軽視できない。そんなふうに思われます。

「はかる」の結果であるかどうかを問わず、個人情報と呼ばれているもの——アンケートへの回答、生年月日、年収、健康診断の結果の数値など——が、流出し利用されるケースや事件が後を絶ちません。自分が被害者になった場合を想像すると、わかりやすいと思います。

*

一方、「わかる」を支えている「根拠」ととりあえず呼んでいるものは、ヒトという種のレベルにおいてきわめて「主観的」なものでありながら、「客観性」という言葉でヒトが目指しているものを強く求めている感じがします。

「わかる」ための「根拠」は、「はかる」ための「基準」のように、必ずしも数値化できるとは限りません（※数値化できるかどうかの是非とは別に、数値化されているものがかなりの数に上るもようですけど）。でも、ヒトがしばしば重要視する数字には、ヒトが期待するほどの重要性は認められないようなので、数値化そのものにそれほどこだわる必要はないと思います。理工系の方は、数値の裏にいかにも人間臭い動機や思惑があるかを、よくご存知のことと思います。問題は、数値を扱うヒトの側にあります。

数字・数値自体は、言葉・語と同様に、ニュートラルなものです。比喩的に言えば、「もの」です。ただ、「もの」はヒトが、ある目的・意図をもって、ある視点・立場から、恣意的に・自分の都合に合わせて、捏造する・でっち上げることが可能です。「はかる」ための「基準」としてよくもちいられる数字・数値、あるいはデータ・情報と呼ばれる「もの」は、「わかる」ための「根拠」と同様に、「すっぴん」では、かなり「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」としたものであるにもかかわらず、「厚化粧」をほどこした「すっきり」「くっきり」「はっきり」「すばっつ」に、「化けている」というか「化けさせられている」

と言えそうです。

粗雑な言葉を持ちいて単純化するなら、「もの」に「解釈」が行われるということです。「もの」を「読む」という比喻も可能かと思われます。ここで、「はかる・計測する」は「わかる・理解する」と同様に、いわゆる「文芸批評」の対象に、かなり近づくとも言えそうです。つまり、「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ、うじうじおろおろ」の対象になり得るということです。

「はかる」という行為の目的・意図にまつわりついている「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ、うじうじおろおろ」と、「はかる」という行為を実行した結果を「解釈する」という行為に密接にからみついている「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ、うじうじおろおろ」をまるで存在しないかのように装うのはやめませんか。むしろ、積極的に「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ、うじうじおろおろ」と戯れてみませんか。

「科学的」という言葉が、「何か」を志向する・指向する・思考する・施行するのであれば、それは「まやかし」によって「すっぴん・のっぺらぼう」を「厚化粧する・仮面をかぶせる」ことではなく、「すっぴん・のっぺらぼう」を直視し、認める・見留めることだと思います。「見る・観察・観測」することを止め、「すり替え・糊塗」に傾いた行為は、「科学」の名に値しないと断言してもよさそうです。

いわゆる理系の領域に属すると考えられがちな「はかる・計測する」という行為について、このところいろいろ考えているうちに疑問に感じたことを、ブログ記事を書くさいの、自分のごちゃごちゃおろおろぶりと重ねながら、今回はとりとめもなく、つづってみました。話が、隠喩的で抽象的になってしまいました。ごめんなさい。悪い癖だと反省しています。次回は、「はかる」をめぐる言葉たちに寄り添いながら、具体的に論じていこうと思います。

*

うじうじおろおろとしたお話を、辛抱強く、ここまで読んでくださった方に、感謝いたします。

10.03.XX はかる -3-

◆はかる -3-

【不投稿記事】

「はかる」の「おもい・思い・想い・意味・忌・イメージ」には、「重い・重み・重さ・重なる・重なり・嵩」と「あつい・厚い・熱い・篤い・あつみ・厚み・あつさ・厚さ・熱さ・篤さ」があります。このように、言葉たちの身ぶり・表情で、その重みや厚みを「とらえる・体感する」行為を、このブログではよく、つづられる言葉たちに演じてもらいます。

こうした書き方が、このブログを読もうとする人の気持を左右する。つまり、好き嫌いの分かれ目となる。そうしたことは、意識しております。

「もっと分かりやすい素直な文体で書けば.....」。今挙げたフレーズは、一昨日にブログページの左側にある「メールを送る」機能を通して、送られてきたメッセージの一部です。アドバイスをいただき、ありがとうございました。メールアドレスが添えられていなかったなので、この場を借りてお礼を申し上げます。

そうですね。おっしゃるとおりだと思います。以前、一種の売文業をしていたころには、「分かりやすい素直な文体」を心がけていました。商品ですから、自分の好き勝手に文章を書くわけにはまいりません。クライアントからの指示に従ったり、『朝日新聞の用語の手引き』（朝日新聞社刊）や『記者ハンドブック新聞用字用語集』（共同通信社刊）を参照しながら、文章を書いていた。

*

「うつせみのうつお」をパソコンのモニターでスクロールしながら、過去の記事を眺めてみると、いろいろな書き方をしています。「社会復帰」をあきらめたあたりからは、特にかなりとちくった表記が目立つようになりました。恐ろしいものですね。いったん何もかも捨てた気持ちになると、とんでもないことをするようになります。相談する友達がいないうえに、この記事は親や周りの人たちには内緒で書いているものなので、よけいに歯止めがきかなくなっているのでしょう。

読者の方々からのメッセージだけが、有り難いフィードバックです。ブログを書き始めたころから、記事を読んでくださっている方で、ときどきこのブログで「Hさん」と表記している方がいます。Hさんは「好きなことを好きなように書けばいいのよ」という意見の持ち主なので、書き方についてのコメントをいただいたことはありません。

*

冒頭のセンテンスですが、「分かりやすい素直な文体」で書き換えれば、次のようになると思います。

平仮名で記す「はかる」という言葉には、その語源や表記法を考慮すると、多義性が備わっています。つまり、意味に厚みのある語なのです。

以上のようにも書けるでしょう。でも、自分の中では、「多義性」や「意味に厚みのある」という部分が、抽象的で型にはまった言い方に感じられます。「はかる」という語がどのように多義的なのか、また意味の厚みとは、具体的に何を指すのかが不明なのです。そこで、そうした言い足りない部分を補うというか、センテンスに詰め込むと、冒頭のような書き方になります。言い換えると、それが自分にとって「分かりやすい素直な」文体ということになります。

なお、「おもい」が、自分にとってどれほど「おもい」言葉なのかについては、「夢の素(1)」2010-01-22の中ほどに、「おもい」の喚起するイメージと類語を挙げてありますので、さっと目を通していただければと思います。

*

以上のような言い訳を書いているのには、理由があります。この数日間というもの、「はかる」という言葉をめぐって、ずっと考えています。そのさいに、「計測する」「計量する」「観測する」「推測する」「推量する」といった漢語系の言葉を思い浮かべることがあります。でも、「はかる」という大和言葉系の語を見たり、口にしたりする時に感じる「何か」としか言えそうもないものが、あたまから離れないというか、気になってしかたがないのです。

これに似た気持ちは、「うつせみのたわごと」という連載を書いていたときにも覚えた記憶があります（※14回続いた、この連載は「こんなことを書きました（2010年その3）」2010-02-23に入ると、各回へのリンクが貼ってありますので、よろしければご覧ください）。まず、お腹のあたりにずしっとくる。そして徐々に体全体に広がってきて、最終的には頭にたどり着く。それがきわめて短い時間、瞬時とってかまわないあいだに起きるのです。

「はかる」「わかる」「かわる」という一連の大和言葉系の語を見聞きしたさいに共通して、覚える感覚です。平仮名で記されている。hakaru, wakaru, kawaru という音として耳に入る。そうした条件が整っていないと、感じることはありません。「測る」「分かる」「変わる」と書かれていたものを目にしたり、その文字を見ながら発音する時には、上で説明した気持ちは訪れてくれません。そうです。そういう気持ちに「なる」というより、どこかから「訪れてくる」という感じがします。

*

そうです。「おとずれ・おとずれる」なのです。「おと」と「ずれる」という音の響きから頭に浮かぶのは、「きぬずれ」や「あしおと」という言葉がよびさましてくる「おもい」に似た「何かの気配」です。何か動く。その動きと同時に何かがかすれ合う。その擦れる音がしだいに近づいてくるを感じる。

音は、聞こえるだけではありません。何か動き、あるいは揺らぐ。それが空気の波となって移動し、耳の鼓膜を震わせる。科学的にはどう定義されているのか知りませんが、同調、共振、共鳴とか呼ばれている現象が起こる。それが音として耳に届く。それだけではありません。

中途難聴者として生きていくと、動きや揺らぎが耳だけでとらえられるものでないことを、日常生活の中で頻りに経験します。空気の流れや揺れは、鼓膜だけでなく、体のいろいろな部分で感じ取ることができます。耳の奥ではなく耳たぶあたりの皮膚、顔や首の皮膚、手や指先、前腕など、露出した体の表面の皮膚で、空気の流れの変化を感じます。

*

特に、寝る間に補聴器を外した時など、ほとんど何も聞こえなくなりますから、不安感に襲われます。聴覚障害者にとっては、夜間の火事がいちばん怖いです。あたりで大騒ぎになっていても、音が聞こえないために気づかず、逃げ遅れた。そんな話をよく聞きます。

寝ている場合には分かりませんが、補聴器なしでじっと身のまわりに集中していると、動きや揺れを感じます。ちょっとした何かの動きがあると、目がそれを追います。他人の表情をうかがうような形になるのが、分かりやすい例でしょう。今、この人がかすかに眉をひそめたのはどういうわけなのだろう。そんな具合に、「おしはかる」のです。

目の前のデスク、お尻の下の椅子、足元の床といった、体と直接触れ合っている何か揺れるのを感じると、どきっとします。何だろう。何が起きたのだろう。何か近づきつつあるのか。

*

かつて聾学校と呼ばれた教育施設で育った人の手記の中に、ろうの子どもたちが、よく壁を叩いたり、窓を揺さぶったり、床をどンドン踏んだりして遊ぶことがあるという話がかかれていました。それが楽しいらしいのです。その気持ちが、少しだけ分かるような気がします。少しだけです。

おならをするさいに大きな音をたてるのを、聾学校に勤務するろう者ではない教師から注意された。恥ずかしいことなのだと言われたが、その意味が今でも分からない。手記にあった、そんな言葉も思い出されます。

障害者であるかどうかにかかわらず、自分には「とらえにくい」あるいは「とらえられない」ものやことやさまを「とらえようとする」体験は、「おしはかる」以外にありません。

あなたとわたしは違います。あなたは「あなた・彼方・貴方」にいます。このような話の途中で、言葉遊びをして恐縮ですが、「とおく・遠く」つまり「ちかく・近く」にないものを、「ちかく・近く」にあるものとして感じる仕組みが「ちかく・知覚」です。たとえば、犬にとっての嗅覚、ヒトにとっての視覚、コウモリにとっての超音波を発する声帯とその反響を聞き取る耳は、とりわけ遠近を「はかる」ために発達していると言われています。「知覚する」とは、「はかる」にほかならないと思われま

*

ヒトに限った話かもしれませんが、空間的な遠近という意味合いだけでなく、「はるか・遙か」つまり「とおくへだたった・遠く隔たった」存在を「おもう・思う・想う」行為が、「はかる・おしはかる」または「おもいやる」です。「はかる・はるか」をめっちゃくちゃにこじつけてしまいました。このように、「正しい」とされる意味に逆らった言葉の運動のありようや、ノイズとしてみなされがちなイメージを「いみ・忌」と、このブログでは呼んでいます。

不謹慎とも、不真面目ともとられるにちがいない、言葉との戯れを、大切にしたい。おろそかにしたくない。そう思っています。というのも、言葉がいとおいしいからです。「あなた」が「彼方」であり「貴方」でもある。「うつせみ」が「空蟬」でも「現人」でもある。これは、いわゆる「正しくない」が起こったからです。ということは、「正しくない」こそ「正しくない」ことになります。

不思議なことがあります。「正しくない」が起こったのかどうかは知りませんが、「な・汝・己」も「わ・我・吾」も、「わたし」でもあり「あなた」でもある。そんなふうに辞書に書いてあります。「てまえ・てめえ」と似ていると考えると、何となくわかる気がします。何となくです。なぜかは、わかりません。

*

言葉はわからないことだらけです。

「食べれない」と言って「食べられない」と言わない人がいてもいいではありませんか。「けさは、しばれるなあ」とか「ああ、よかんべ」と言う人がいても、かまわないではありませんか。あえて古い流行語を挙げますが、かつて「デカンショ」や「チョコベリグー」と言っていた人たちと、「スパコン」「イケメン」と言っている人たちとのあいだに何か違いがあるのでしょうか。今でも「てふてふ」と書いて「ちょうちょう」と書かない人たちがいてもいいじゃないですか。

みんな同じヒトです。みんな同じ言葉です。「正しい〇〇語」「正しくない〇〇語」「美しい〇〇語」「乱れた〇〇語」などという分け隔てはやめませんか。声に出して読みたい人は、お好きなようにどうぞ。また、そうしたキャッチフレーズを、ほかの目的につかわないでください。もっとも、お金儲けに利用するのはその人の自由です。ただ、思想教育とか洗脳とか、押し付けや強制につながる行為はしないでください。それに、世の中には声を出したくても出ない人がたくさんいます。

「はかる・おしはかる・おもいやる・おもいはかる・おもんばかり・おもんばかり（この「ば」の響きが愛らしい、お馬ばかばかみたい)」。奥が深そうな言葉ですね。気になります。今回もまた、道草をしてしまいました。本題に入ります。

*

ここで「はかる」を、漢字をもちいて、ずらしてみましよう。広辞苑を参考にします。

「はかる・計る・測る・量る・図る・謀る・諮る・別る」

「はかる・調べる・数える・計算する・みつもる・見積もる・考える・推し考える・分別する・考慮する・推しはかる・予測する・見当をつける・相談する・機会をうかがう・見はからう・企てる・もくろむ・工夫する・あざむく・だます」

「はかる・はかり・秤・許り・ます・枴・升・斗・ものさし・物差し・物指し・度量衡・度量衡原器・キログラム原器・メートル原器」

「はかる・はからい・思量・思料・思慮・おもんばかり・おもいはかる・おす・推す・押す・圧す・捺す・推定・推測・推量・考える・思う」

「思う・思い・想い・重い・重み・重さ・面・顔・顔つき・表面・重・主・おもだったこと・おもに」

「おもみ・重み・重さ・あつみ・厚み・厚さ・かち・価値・価直・ねうち・値打ち・効用・たち・性質・質・品質・体質・生まれ・しょう・ね・値・あたい・値・しょうね・性根・かなめ・要・要点・重要・肝要・肝心・肝腎・大切・大事」

「アナログ・デジタル・主観的・客観的・具体的・抽象的」

*

次に、「□□をはかる」というように、「はかる」の対象となるものを、思いつくままに列挙してみます。

「数・量・重さ・長さ・高さ・奥行き・厚み・面積・体積・容量・距離・時間・時刻・年数・年代・年齢・角度・直線の傾き・揺れ・具合・密度・速度・圧力・熱量・温度・濃度・明暗・〇〇の具合・〇〇の程度」

「知能・学力・体力・QOL・〇〇の価値」

「思い・意図・内容・程度・良し悪し・〇〇の可能性・〇〇の確率」

「悪事・暗殺」

「便宜・向上・充実・徹底・拡充・解決・改善・安定化・合理化・近代化・強化・活性化・
タイミング・バランス・効果・影響・レベル・度合・具合」

*

今度は、単位の名称を挙げてみます。本来なら、上述の事項と対照させるべきなのでしょうが、身の程をわきまえて、そうした出来もしない冒険をしたり、お勉強をする振りをして何かをコピーペーストすることは控えます。思いつくままで、いきます。

「メートル・ヤード・フィート・尺・マイル・グラム・オンス・トン・貫・個・人・匹・
頭・平方メートル・立方メートル・バレル・時間・年・月・週・日・分・秒・世紀・光年・
時速・毎秒・パスカル・マグニチュード・震度・カロリー・度・パーセント・ビット」

*

【※以上の言葉たちの中には、これまで記事の中で論じたものがいくつかあります。キーワードと記事を挙げておきますので、お時間とご興味のある方は、どうかご参照ください。微妙に「はかる」とかかわっています。

◆熱：「論理の鬼」2009-01-02 & 「書く・書ける (2)」2009-05-22 / ◆確率：「信号論 (3)」2009-05-12 & 「賭け・賭ける」2009-05-21 & 「さらに気になることが」2009-08-03 / ◆時間：「「時間」と「とき」」2009-06-28 & 「揺らぎ」と「変質」2009-06-29 & 「うたう」2009-07-02 / ◆直線の傾き：「もう1つ気になることが」2009-08-02 / ◆価値：「ケータイ依存症と唇」2009-01-27 & 「信号論 (1)」2009-05-10 & 「げん・言 -8-」2009-09-01 / ◆重さ：「うつせみのたわごと-10-」2010-02-11、2010-02-23 にある同記事の解説と併せてお読みください) / ◆厚み：「あつさのせい？」2009-07-16 & 「うつせみのたわごと-13-」2010-02-14、2010-02-23 にある同記事の解説と併せてお読みください)】

*

話をもどします。「はかる」という言葉から出発した、上述の連想ゲームもどきの言葉の羅列に、もう一度目をやってみてください。たくさんあって、ややこしいですね。でも、何となくイメージがわかってきませんか？ ここはお勉強の場ではないので、何とな

くで、かまわないと思います。

上で挙げた言葉たちを眺めていると、前回の「はかる -2-」2010-02-28 で書いたことが思い出されます。少し文言を変えて、以下に並べてみます。

(1) 「はかる」の裏には、「はかる」側の目的・意思・意図・思惑があると考えられる。

(2) 「はかる」者、つまり観測者の位置と、①に挙げた要素によって「はかる」の結果が左右されるのではないか。

(3) 「はかる」行為は、「基準・単位」を必要とする。「基準・単位」の設定は、ヒトが決めるものであり、一様でもなく一定してもいない。

(4) 「はかる」は、ヒトという枠の中での行為であり、とりわけ「おもい・思い」という枠の中で行われると思われる。同時に、「はかる」がヒトという枠の外からの何らかの働きかけに左右されることも大いに考えられる。枠の内外で生じる出来事や力によって、誤差やブレやノイズと呼ばれるものが生じるのではないか。いわゆる精度と信頼性の問題である。

(5) 「はかる」の次にヒトが行うのは、「さぐる・みつける・しる」「くらべる・きそう・てらしあわせる」「わかる・わかる」という広義の「解釈」と、「かわす・かえる」「つくる・おこす・うみだす」「うごく・うごかす・はたらく・はたらかせる・ゆらぐ・ゆらす」という広義の「運動」である。

(6) 「はかる」行為から生じた結果は、広義の言葉によって記される。広義の言葉とは、話し言葉と書き言葉だけでなく、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、指点字、音声（発声）、音楽、合図、映像、画像、さまざまな標識や記号や数字や信号などを指す。

(7) 「はかる」行為から生じた結果は、いったんヒトから離れた瞬間に、ニュートラルな「もの」となる。その「もの」は、ふたたびヒトにとらえられて初めて「意味・忌」を成す。

*

「はかる」とは、ヒトという枠内において、さまざまな「思い・思う・想い・想う」の「おもい・重い」重みと「あつい・厚い・熱い・篤い」厚みと重なり合って生じる擦れる音、つまり「おとずれ・音擦れ」として、ヒトにのみ「訪れる」ものなのではないでしょうか。だから、たぶん、はかないのです。その「はかる」の「はかなさ」について、次回は書きたいと思います。

10.03.XX はかる -4-

◆はかる -4-

【不投稿記事】

「はかる」を、ずらす。

「はかる」を、漢字、つまり中国語に当てはめて、意味をずらす。「はかる・計る・測る・量る・図る・謀る・諮る・別る」

「はかる」を、発音の似た大和言葉にずらす。「はかる・わかる」。

「はかる」を、その音節を並べかえて忌（※「いみ」と読んでください）をずらす。「はかる・はるか」

母語である日本語と戯れながら、ずらす。

「はかる」は「はかない・とりとめがない・たよりにならない・おもいがかならずしもかなわない」。「はかない」に似た語で「はかなくなる」という古い言い方があります。「なくなる・しぬ」という意味です。

「はかる」にネガティブなイメージを、ヒトはふつう覚えなないと思います。言葉に対しても覚えることは、まずないでしょう。でも、ヒトは日々、言葉と「はかる」に裏切られ、がっかりさせられています。それなのに、めげない。たくましい生き物です。これはある種の鈍感さに支えられた、たくましさです。

10.03.XX こんなことを書きました（その 20）

◆こんなことを書きました（その 20）

*「夢の素（1）」2010-01-22：他人の見た夢を聞かされる時の退屈さから話を起し、夢と思考と空想の3つが自分にとっては近い行為だと述べています。大和言葉系の「おもう・おもい」という語の多義性と多層性に触れ、どれだけの厚みのある言葉であるかを、例を挙げて示しています。言葉を使って思考する、という俗説を批判しています。言葉を話し言葉と書き言葉だけではなく、広義で取れば、言葉を使って「おもう」ことはあり得るのではないかと主張しています。「夢の素」という言葉とイメージについて語り、それが「おもう・おもい」を誘発し始動させる「粒」だと比喩的に説明しています。「こんなことを書きました」というタイトルで定期的に行っている記事に出てくる、「直接書かなかったキーワード」が、まさに「夢の素」であると書いています。キーワードは、「夏目漱石」「内田百閒」「ブレーンストーミング」「ゆめうつつ・夢現」「夢（＝広い意味での想像界）」「現実（＝知覚されている現在）」「思考（＝広義の言葉を用いて動いている心）」「味の素」「固有名詞」です。余白に書かれたキーワード、つまり「夢の素」は、「ステファヌ・マラルメ」「蓮實重彦」「ギュスターヴ・フローベール」『ブヴァールとペキュシェ』です。

*「夢の素 (2)」2010-01-23：言葉が「ずれる・言い換わる・たとえられる・こじつけられる・わかる・混乱する」という動きが、「夢の素」が「かわる・変容する・うつる・うつりかわる・わかる・ゆがむ・くずれる」という動きと似ているという意味のことを述べています。記事を書くさいの癖として、つづられる言葉たちに、つづられるテーマを身ぶり・動きとして演じさせる。そんな込み入った遊び＝戦略が好きだ、と言っています。そうした言葉によるテーマの擬態の方法は、渡部直己氏の著作から学んだと書いています。しかし、それはあくまでも個人的なひとりよがりの解釈にすぎないと断っています。「意識・思考・無意識・夢想・妄想」といった言葉とイメージを含む、「思い」という語とそのイメージを分析しています。イメージと「夢の素」は「いなく」ものであると主張し、「いなく」を「なく」へとずらし、「なくことはだかれることである」というテーマへと移行しています。そこから「意識する」と「意識される」とが、ヒトの意識の中ではほぼ同じことである、という話になります。また、ヒトは「分かっている」ことしか「分からない」という、かつて書いたテーマにも触れています。キーワードとキーフレーズは、「accent」「隠喩」「『言う・言葉』の直前にあるものとしての『夢の素』」「意識のグラデーション」「ヒトは『似ている』と『知っている・分かっている』を混同している」「出来レース」「経路」「ヒトにとって、森羅万象は、みんな『似ているもの』という意味での『偽物』だ」です。余白に書かれたキーワード、つまり「夢の素」は、「ジャック・ラカン」「レフ・ヴィゴツキー」「ニーチェ」「ピエール・クロソウスキー」です。

*「夢の素 (3)」2010-01-24：ヒトの夢や意識、ヒトがつくった話＝フィクションにおける「視点・視座・位置・主客・主述」がテーマです。前回の「抱く＝抱かれる」に引き続き、「する＝される」に徹底的にこだわっています。例を挙げながら詳細に考察したのちに、「見ている＝見られている」というイメージで総括しています。そうした動作・行為・身ぶりが、視点や主語や主体を欠いた匿名的でニュートラルなものである点が重要であると主張しています。キーワードとキーフレーズは、「レトリック・トリック」「言葉の綾・ありやりや」「『＝』という記号」「意識・認識・思考・混乱」「『事実と意見を分かる』のいかがわしさ」「走る＝走られる」「パッチワーク・ブリコラージュ・織物・テキスト」です。余白に書かれたキーワードは、「ジル・ドゥルーズ」「フェリックス・ガタリ」「『機械状無意識』」「モーリス・ブランショ」「『文学空間』」「来るべき書物」「宮川淳」「引用の織物」「紙片と眼差のあいだに」「鏡・空間・イメージ」「豊崎光一」「余白とその余白または幹のない接木」「ミシェル・フーコー」「『外の思考』」「クロード・レヴィ＝ストロース」「『野生の思考』」です。

*「夢の素 (4)」2010-01-24：作家に書かせる契機と動機を起させる「夢の素」について語り、スティーヴン・キングと宮部みゆきを例にとっています。キングに触れて、性的虐待のサバイバーである自分について、おそらく初めて直接的に言及しています（※「サバイバー」という語とイメージは「恵」というハンドルネームでブログに投稿した小説たちを書かせた「夢の素」と言えそうです。そうしたことにまで触れたのは、この記事

を書いた時が、かなり精神的にしんどかったからでしょう。抑うつとは違った意味で苦しかったのです)。大学の卒論で、ロラン・バルトがバルザックの『サラジヌ』を批評した『S/Z』を批評したことを回想しています。作家の「癖」＝「夢の素」に注目する批評の方法について述べています。そこから話が飛んで、薬物による幻覚を求めた作家たちとその作品を紹介しています。記事を書いているうちに、だんだんあやうい方向に行く自分にあえて、書かせています。悲しい日でした。キーワードおよび余白に書かれたキーワードは、「ガストン・バシュラール」「ジャン・リカルドー」「トマス・ド・クインシー」『阿片服用者の告白』「オルダス・ハクスリー」『知覚の扉』「ウィリアム・パロウズ」『裸のランチ』「アーヴィン・ウェルシュ」『トレインスポッティング』「由良君美」『椿説泰西浪漫派文学談義』「澁澤龍彦」『都心ノ病院ニテ幻覚ヲ見タルコト』「高山宏」「ステファヌ・マラルメ」「Brise marine」です。

*「うつせみのたわごと-1-」2010-02-02：1週間以上、心身ともに疲れていましたが、ようやく記事を書く気力が出てきたので、つづったものです。短いですが、できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。ふだん書いている文章とは違った書き方で、「言葉」、「書くということ」、「読むということ」をテーマに書くという、ややこしい実験をしています。アホなうえに偏屈者らしい企てというべきでしょう。また、「追記」というかたちで、グーグルの検索エンジンを使って、こちらが選んだキーワードを読者に検索してもらうという小細工もしています。ひとりよがりな戯れなのですが、キーワード検索という作業と、言葉というサイコロを振る「マラルメ的」身ぶりを重ね合わせたつもりです。読者に参加してもらう、または、読者に「動き」を促すように働きかけるための、本気で試みた仕掛けだったのですが、読み返すと恥ずかしいです。標準的な表記に直したキーワードは、「何かの代わりに何かを用いる」「ことわり・事割り・言割り・断り・理」です。直接書かなかったキーワードは、「坂部恵」「あわい」「かわる」です。このシリーズ全体を通じての、直接書かなかったキーワードは、「ジェイムズ・ジョイス」「サミュエル・ベケット」「フランツ・カフカ」「ジル・ドゥルーズ」「柳瀬尚紀」「レーモン・ルーセル」「VOA の special English」「basic English」「聖書の翻訳」「ジョージ・スタイナー」『After Babel (邦訳：バベルの後に)』「ピジン言語」「クレオール言語」「プリコラージュ」です。

*「うつせみのたわごと -2-」2010-02-02：テーマは、言葉でものごとを語ること、および、ヒトが真実・現実・事実をとらえることの不可能性です。標準的な表記に直したキーワードは、「まこと」「かたこと」「かたる・語る・騙る」です。直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦」です。

*「うつせみのたわごと -3-」2010-02-03：テーマは、ヒトが言語を獲得したこととトリートリーと知との絡み合いです。これまで何度か論じてきたことを、大和言葉系の語だけ

で語ろうとすることのおもしろさを感じました。スリリングな体験でした。標準的な表記に直したキーワードは、「謎」「なぞる」「かく・描く・搔く・書く」「思い」「掟」「しる・知る・領る・汁」「名づける」「手なずける」「なわばり・縄張り」「ち・地・知・血」「懐かしい所」「帰る」「戻る」「源」です。直接書かなかったキーワードは、「動物行動学」「縄張り行動」「マーキング行動」「闘争本能」です。

*「うつせみのたわごと -4-」2010-02-04：「外部・内部・辺境」という分類がテーマです。「よそおう」という言葉をつかって、そうした分類=分ける作業が、ありもしない物事を捏造することだと指摘しています。ヒトという生き物の性（さが）を嘆いています。この回で、ようやく、「追記」の意味を「種明かし=解説」しています。再読すると、ひとり相撲のわびしさを感じます。標準的な表記に直したキーワードは、「よそ」「装う」「そと」「うち」「ふち」「代わり」「偽物」「ずれる」「はずれる」「語る・騙る」「仮」「化ける」「誤る・謝る」「賢しい」「悪賢い」です。直接書かなかったキーワードは、「エルンスト・カッシーラー」「クロード・レヴィ=ストロース」です。

*「うつせみのたわごと -5-」2010-02-06：テーマは、「まぼろし・げん・幻」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「幻界」です。この回から、10の「げん」について連載していく形になります。きっかけは、このブログの熱心な読者であるHさんから届いたメールです。以前、10の「げん」をめぐる各10本、計100本の記事を書くと言言しておきながら、頓挫したことがありました。そのことを非難したとも取れる記述が、gooの評判分析で検出できると、Hさんに教えてもらったのです。評判分析の意図については未だに不明ですが、善意として理解し、素直に再度10の「げん」についてつづてみることにしました。ただし、各「げん」についてそれぞれ1本の記事しか書けないと断っています。また、10の「げん」の見取り図を紹介し、全体として何をやろうとしているのかを説明しようとしています。標準的な表記に直したキーワードは、「間を滅ぼす」「真を滅ぼす」「魔を滅ぼす」「イメージ・image」「信じる」です。直接書かなかったキーワードは、「知覚(する)」「想像(する)」「空想(する)」「夢想(する)」「魔法」「まじない・呪い」「だく・だかれる・いだく」「ジャック・ラカン」です。

*「うつせみのたわごと -6-」2010-02-07：テーマは、「言葉・げん・言」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「言界」です。言葉が代理でしかないこと、ヒトには言語を習得する先天的な能力が備わっているらしいこと、言葉はヒトの思いや感情の表出や伝達を担っていること、言葉がヒトの知の体系をつくり上げる支えとなってきたこと、について論じています。こうしたことがらを、大和言葉を多用しながら平仮名だけで記述する場合と、そうした語の使い方によらない書き方をした場合とを比較すると、つづる形態がつづられる内容に大きな影響を及ぼすことがよく分かる。そんな気がしました。簡単に言うと、書き方が書く内容を左右するということです。標準的な表記に直し

たキーワードは、「のっぺらぼう」「事の端・言の端・言の葉」「言霊」「思いは重い」「ひとり言」「すじ」「ずれ」「うつす・写す・移す・映す」「息・生きる・息る」「出る」です。直接書かなかったキーワードは、「表象」「代理」「ニュートラル・匿名性」「ノーム・チョムスキー」「言語能力・competence」「経路」「ミメシス」「コミュニケーション」「ヒトの言語獲得」です。

*「うつせみのたわごと -7-」2010-02-08：テーマは、「現実・げん・現」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「現界」です。目覚めている状態、つまり意識が働いている状態と、夢を見ていたり、空想をしていたり、無意識でいる状態とを対比するのではなく、連続した帯＝濃淡＝階調として論じようとしています。幻界、言界、現界が重なるものであるとも訴えています。また、瞑想などによって悟りを得て自分だけが救われようする態度や、現実を生きるさいに、現在多くの人たちが指針としがちな自己啓発書を批判しています。標準的な表記に直したキーワードは、「うつつ・現」「ゆめうつつ・夢現」「悟る」「救い」「あうん」「あくび」「歌う」「眠る」「仮の死」です。直接書かなかったキーワードは、「om」「うつ病」「出版界」「マーケティング」「実用書」「処世術」「脳科学」『ブヴァールとベキュシェ』です。自己啓発書に関して直接書けなかった3つの固有名詞＝人名は、どうか読み解いてください。難しくありませんので。今では「決まり文句」と化した名です。

*「うつせみのたわごと -8-」2010-02-09：テーマは、「かぎり・へり・げん・限」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「限界」です。ヒトをはじめ、あらゆる生き物は、それぞれに備わった枠の中で生きている。その枠組みを意識できるのは、おそらくヒトだけである。だが、ヒトを縛る枠は多種多様であり、それらの枠を意識することは難しい。枠はヒトを縛るが、枠をずらすことで、その縛りから一時的にでも逃れることが可能なのではないか。外・内・へりという分け方は、うさん臭いものであるが、あえてその分類を受け入れるとすれば、ヒトはへりにいると言える。以上のように要約できると思います。また、「後記」の中で、ある読者への回答として、「小品集」で試みたような小説を書く余裕が、今はないと断っています。いつか書きたいとの希望も述べています。標準的な表記に直したキーワードは、「線を引く」「縄を張る」「土地を名づける」「分ける」「名づける」「名が足りなくなる」「あわい・間」「境目」「言葉という枠」「体という枠」「種（しゅ）という枠」「書くという枠」「分かるという枠」「生死という枠」です。直接書かなかったキーワードは、「近親憎悪」「狂気」「フリードリヒ・ニーチェ」「アントナン・アルトー」「ジェラルド・ド・ネルヴァル」「フリードリヒ・ヘルダーリン」「フランツ・カフカ」「ジャック・デリダ」「ジル・ドゥルーズ」「ヒュー・ケナー」「ジャック・デリダ」です。

*「うつせみのたわごと -9-」2010-02-10：テーマは、「もと・はら・げん・原」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「原界」です。ヒトは何ごとについても、その始原

を求めようとする傾向がある。それは、「戻る」「帰る」という運動へとヒトを誘う。源に帰ろうとするという動きは、枝分かれしている形態の存在と、「出た」という過去の出来事を前提とする。「出る」「出た」は、流れる、移る、渡る、回るといった運動の源である。動きと動くものが、「出る」と「もと・はら」という場と重なる。もの、こと、さま、うごきが、重なる。それが「原界」である。以上のようにも、要約できると思います。個人的には、苦手な物語です。どうしても馴染めません。不謹慎かもしれませんが、笑ってしまいます。きっと、この種の話とは、相性が悪いのでしょう。標準的な表記に直したキーワードは、「群れ・群れる」「分かれる・別れる」「親」「母」「子」「旅」「つながり」「はらむ・孕む」「産む」「生まれる」「海」「死」「生まれ変わる」「輪」「めまい」です。直接書かなかったキーワードは、「うんち」「神話」「叙事詩」「経典」「聖典」「カール・グスタフ・ユング」「エミール・パンヴェニスト」「フェルディナン・ド・ソシュール」「インド・ヨーロッパ祖語」です。

*「うつせみのたわごと -10-」2010-02-11：長い記事になってしまいました。テーマは、「ふえる・げん・Gen（※ドイツ語で「遺伝子」）」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「Gen界」です。小さな命の単位が転写という仕組みでどんどん増えていく。転写しそこなう場合もある。死滅する単位もある。単位の集合体である生体は、単位を生殖や増殖という仕組みで、新たな生体を生み出していく。そうやって、写す、移る、増える、伝わる、渡す、という一連の動きが生起する。ヒトは、その生起を出来事としてではなく、物語としてとらえるしかない。その物語を生成するために必要なのは、分けるという作業だ。分けるのは、ヒトが小さいからにほかならない。自分より小さく分けて分かったとする。Gen界における、もうひとつの運動は、「交わす」ことである。「ものを交わす」から、「価値を交わす」へとヒトは「交わす」を変化させた。価値という分からないものに、ヒトはもてあそばれ、振り回されている。それが経済である。「増える・増やす」「交わす」の根底には、ヒトの欲望、とりわけ物欲がある。決して逃れることができない、根源的な欲がある。以上のような話です。なお、「後記」の中で「母語という枠の中で『外国語』で語る＝騙る」と「書き方によって書けることと書けないことがある」という意味のことを述べています。このシリーズの基本的なスタンスを言葉にしたものです。標準的な表記に直したキーワードは、「おもい・思い・想い・重い」「重み」「値」「値打ち」「かね・金」「はかる・量る・測る・計る・諮る・謀る」「サブプライム」「いちば・市場」です。直接書かなかったキーワードは、「ゲノム解読」「遺伝子工学」「遺伝子組み換え」「バイオテクノロジー」「クローン」「ES細胞＝胚性幹細胞研究」「ノーベル経済学賞」「金融工学」「CDO」「大不況」「資本主義」「市場経済」「造幣」「財政投融资」「投資」「投機」「博打」「株式」「ジョン・メイナード・ケインズ」「交換」「貨幣」「カール・マルクス」です。

*「うつせみのたわごと -11-」2010-02-12：前回を含め、記事が長くなるのが常態になっていきます。この回のテーマは、「め・げん・眼」という言葉とイメージをもとに世界を

とらえる眼界です。冒頭で「まじる・混じる」「もじ・文字」「まな・真名(漢字)」「まなこ・目」「みる・見る」と発音すると m で始まる言葉を頻出させて、ずらずという遊びをしています。次に、「めでみる」という行為を「見る・視る・観る・診る・看る・回る・廻る」と、さらにずらしています。このシリーズでは、こうした、つづられるテーマとつづる言葉たちの擬態=媚態=舞踏を試みたかったのです。そうした言葉たちの舞いを読者に読むというより、「見て」もらうことにより、眼界を体感してほしい、できれば「めまい=目舞い」を体験してほしい、という願いが形を取っている珍しいケースです。平仮名尽くしで書く必然性が「見える」という意味でも、稀有な例です。内容的には、「見る」を「知覚する」という広い意味で取り、「見える=見る=見分ける=分かる=意識する=認識する」へとつながっていくさまを語っています。「まだら・まばら」という言葉で、ヒトが「見間違う」「無視する」「見て見ぬ振りをする」こと、つまり、知覚と認識の限界性といかがわしさについても触れています。それまでに扱った各界と、眼界とがそれぞれ独立しているわけではなく絡み合っていることにも触れています。言葉の遊びを多用しているので、要約をしても、あまり意味がありません。実際に、記事を「見て」いただきたいと思っています。標準的な表記に直したキーワードは、「みわける・見分ける・身分ける」「ことわる・事割る・言割る・断る・判る」「あわいはあわい・間は淡い」です。直接書けなかったキーワードは、「ミシェル・フーコー」「豊崎光一」『砂の顔』「視線」「空間的広がり」「時間的経過」「再現の不可能性」「可視化というまやかし」「記憶の限界性」「信号・情報・データ」「手話」「指点字」です。

*「うつせみのたわごと -12-」2010-02-13：テーマは、「つる・つるされてゆらぐ・げん・弦」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる弦界です。ヒトが天から垂れた「つる・弦」または糸につかまって吊るされて、ぶらぶらゆらゆらしている。すべてを何ものかに任せている。この記事では、「任せる・負ける」という身ぶりが大きな役割を演じています。ヒトの力を超えた「何物か・何者か」の存在が前提になっているにもかかわらず、ヒトはそれを知り得ないという立場で話を進めています。ヒトの力を超えた「何物か・何者か」の威を借りる人たちを批判しています。言葉遊びから、ヒトが「やりすぎていること」を列挙していますが、それもまた、人知を超えた現象として描いています。つまり、最終的な善悪さえ断じる力はヒトの側にはない、まして裁く力などないという意味です。「任せる」から「賭ける」へと話に移り、「出あう・出あい・あい」という圧倒的な偶然性(※もちろん、やらせです、偶然性を装っている=演じているだけです)の中で、「愛」を出すという、めちゃくちゃなこじつけで終わっています。標準的な表記に直したキーワードは、「ぶらさがる」「揺れる」「身を任せる」「祈る・念じる」「驕りたかぶる」「代わりの者」「偽者」「生贄」「身の程を心得る」「サイコロを振る」です。直接書けなかったキーワードは、「代理(人)」「シャマニズム(シャーマニズム)」「シャーマン」「まつりごと・政・祭事・奉事」「予言(者)・預言(者)」「託宣・神託」「官僚主義」「議会制民主主義=代表民主制=間接民主制」「ジェームズ・フレイザー」『金枝篇』「文化人類学」「ステファヌ・マラルメ」「花=生殖器=性器」です。

*「うつせみのたわごと -13-」2010-02-14：テーマは、「減る・足りない・げん・減」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる減界です。言葉の遊びを多用しながら、「減る・足りない・欠ける」と「増える・足りる」とが言葉では矛盾しても、言葉の枠外では矛盾しないことを、言葉たちに演じてもらっています。再読すると、反意語や反対語と呼ばれている2項対立のからくりに対する懐疑と嫌悪感が表れているのを感じます。結果として、「減る」をめぐる言葉が「増える」こととなり、長い記事になりました。原理は単純です。ヒトは分ける。分けたものに名前を付ける＝分かったことにする。名前が増える、つまり、名前が足りなくなると。「事＝言足りる」が「事＝言足りない」となる。そうすると、訳＝分けが分からなくなってくる。「分けた＝分かった＝知が増えた」とならず、「分けた＝分かっていない＝知が欠けている」ことの確認にしかならないという「わけ」です。さらに、ヒトの知覚・認識・意識における集中力および持続力、データの保存容量、データの再現力・再構築力には限りがある。知が増えたはずが、常に減った・足りない感じがする。要するに、減界は限界でもある。そんな話なのです。ヒトは自分で意識しているよりは、はるかにぼーっとしている。すかさずの意識とまだらの認識の中にいる。と要約することもできます。ただし、ヒトが考え出した、すかさずの2進法でも、疲れを知らない機械ならば、そこそこの働きをすることが可能です。標準的な表記に直したキーワードは、「足りない」「間が抜けている」「たわける・戯ける」「ぼんやり」「26文字」「重なる」「またがる」「絡み合う」「だぶる」「厚み」「重み」「多い」「多すぎる」「忘れる」です。直接書けなかったキーワードは、「対応」「写像」「関係性」「語彙」「分類」「命名」「ラベル・レーベル」「博物学」「言と事の同一視」「語の多義性・多層性」「アルファベット」「辞書・百科事典の編さん」「デジタル」「コンピューター」「ゼロサム」「ナノテクノロジー」です。

*「うつせみのたわごと -14-」2010-02-15：テーマは、「糸・伝わる・伝える・げん・絃」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる絃界です。「伝わる・伝える」という動き、「伝わる・伝える」を仲介する媒体、「伝わる・伝える」の対象をめぐる、さまざまな言葉たちを次々と「ずらす」ことにより、その言葉たちの表情・身ぶり・目くばせを読者に体感してもらおうとしています。糸とその縦横の運動から成る織物と、紙と記された言葉たちの縦横の運動から成るテキスト＝テキストのつながりにも触れています。さらには、網とクモの巣、ひいてはインターネットへと話をつなげていきます。網における「引っ掛ける・仕掛ける」という動作の重要性を訴えています。検閲・検索の基本的仕組みだからです。「伝わる・伝える」の究極的な対象となる「揺れ・揺らぎ」について考察していますが、尻切れトンボに終わっています。再度、考えてみたいテーマです。不可解なテーマです。標準的な表記に直したキーワードは、「目まい」です。直接書けなかったキーワードは、「宮川淳」『引用の織物』『紙片と眼差のあいだに』『豊崎光一』『余白と余白または幹のない接木』『ロラン・バルト』『テキストの快樂』『Stephen Heath』『Vertige du déplacement』『ジル・ドゥルーズ』『プルーストとシーニュ』です。このシリーズは、タイトルを模倣し、まさに、たわごとで終わりました。幻界、言界、現界、限界、原界、

Gen 界、眼界、弦界、減界、絃界。なお、各記事の中で、断っているように、10の「げん」をめぐる各界は、別個のものではなく、パラレルな関係にあり、同調し、共振しているとイメージしています。各界も、各界についてのイメージも、戯言であることは言うまでもありません。読者に、目まいまでは行かなくとも、笑いという揺らぎを促すことができたなら、そんな嬉しいことはありません。

* 「「外国語」で書くこと」2010-02-16 : 「うつせみのたわごと」シリーズを書き終えた感想文です。これまでに自分の書いてきたブログ記事を、「うつせみのうつお」で、スクロールしながら、時系列に巻物のように眺めていくと、いつも同じことばかり書いているなあと思い、金太郎飴を連想します。ただ、目立つところがあるとすれば、ときどき文体=つづり方を微妙に変えることです。自分が書いたとされる文章に対する、ひとりよがりな感想=印象にすぎませんが、いろいろな小細工や仕掛けをしているつもりだという意味です。今回は、わりと目立つ文体上の細工をしました。漢語系の言葉の代わりに大和言葉系の語をもちいる。あるいは、前者を後者に置き換えるという作業をしました。そのさいに、どんなことを心がけたかについて述べています。キーワードとキーフレーズは、「くずす」「まげる」「杵をずらして書く」「違和感」「basic English」「VOAのspecial English」「言葉をつくりながら書く」「そこに近い場に身を置くことは、自分を揺さぶること」「柳瀬尚紀」「ジェイムズ・ジョイス」「フィネガンズ・ウェイク」「『翻訳不可能』を目ざして仕組む」「つづられる言葉たちに、つづられる内容を演じさせる」「渡部直己」「検索エンジン」「被害妄想」です。直接書かなかったキーワードは、「ジル・ドゥルーズ」「カフカー——マイナー文学のために」です。

* 「揺さぶり、ずらし、考える」2010-02-17 : 「日本語の乱れ」や「最近の日本語は乱れている」という決まり文句を批判しています。言語が移り変わるという現象を、抽象的な紋切型の言葉に置き換えることに強い嫌悪感をいだいているからです。ありもしないもの、あるいは知覚し得ないものを、あたかも、あるかのように想定する思考停止状態に我慢ができないからです。「言語」、「国語」という言葉の抽象性にも、噛みついていきます。個人は常に移り変わりつつある多面的な存在として揺らいでいる。そう信じています。その個人が発する言葉が、ひとくくりできるわけがありません。そうした思いを前提に、いとおしく健気な言葉たちの、生き生きとしたありようを擁護しようとした記事と見えそうです。キーフレーズは、「どの時代においても、言葉は変わる。言葉は、特定の人たちの占有物ではない。天は言葉の上に言葉を造らず、言葉の下に言葉を造らず」「あやしげではない日本語 or きちんとした日本語 or 標準的な日本語 or 正しい日本語 or 美しい日本語 or 乱れていない日本語なんて、あるのでしょうか。ない、と思います」「『考える』を、簡単に済ませる方法はないのか。あります。『決まり文句』を使えばいいのです」「たとえ、思考停止に等しい決まり文句であっても、その言葉を『揺さぶる』ことにより、『ずらす』ことができます。そうした『行為』を『思考する・考える』と呼んでもいいのではないのでしょうか」です。直接書かなかったキーワードは、「高山宏」「グスタ

フ・ルネ・ホッケ』『迷宮としての世界』『文学におけるマネリスム』『種村季弘』『ナンセンス詩人の肖像』です。

*「動詞という名の名詞」2010-02-19：言葉を話したり書いたりすることは、未だにヒトに備わっている、ヒトを除く生き物というレベルでのありようから見れば、きわめて不自然である。そんな思いをいただいています。日常生活において、ヒトが言葉に振り回されているのは、それが生き物というレベルから逸脱しているからです。とはいえ、ヒトである限り、言葉と無縁で生きることはできません。致し方ないことです。まして、言語そのものについて思いをめぐらしたり、話したり書いたりすることは、不可能性に挑むことです。言葉そのものを思考の対象にすれば、頭の中も、出てくる言葉も、ごちゃごちゃになります。ならないとすれば、手加減をしているか、無難な決まり文句を借りているだけです。「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ＝言語」を獲得してしまったヒトは、「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ＝意識＝思考＝言動」を回避するすべを身につけているのが普通です。不自然さを自然さとして錯覚するすべです。その不自然な言語というものの不自然さのひとつとして、動作を名づけて動詞という名の名詞とする、からくりがあります。そのからくりをめぐる悪態。この記事を、そのように要約することも可能かと思われま。ややこしい要約で、ごめんなさい。キーフレーズは、「森羅万象の動きや揺らぎを、名詞としてしかとらえられないヒトという生き物——」「万物を『名付ける・なつける・てなずける』という、ヒトに備わった習性、つまり名詞至上主義とでも呼びたくなる性癖に対する、ささやかな抵抗。その抵抗として、たとえば、音楽や映像に期待を寄せています。でも、いちばん、気になるものを挙げるとすれば、日本語や中国語や英語などと同じく言語である、手話です」です。直接書かなかったキーワードは、「ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン」「モーリス・ブランショ』『ヴィトゲンシュタインの問題』(in『フローベール全集別巻』)です。

*「名詞という名の動詞(前半)」2010-02-21：前回に引き続き、言語活動というヒト特有の行動が、生物としてのヒトの日常生活に、ひいては種としての存続に、必ずしもプラスとして働いていないのではないかという問題提起をしています。森羅万象の動きや揺らぎを、名詞としてしかとらえられないヒトという生き物が、ヒト以外の生物がクリアできる障害物を、言語というフィルターを通してとらえているために、クリアできない。そんな事態も起きているのではないか。そんな危惧について触れています。もっとも、神経症的な内容なので、危惧すべきなのは、自分の頭ではないかとも、思っているのですが.....。キーフレーズは、「言葉というものは、ヒトを錯覚させます。『見る・見える』という言葉があり、その『見る・見える』をつかうことによって、ヒトは『見た・見えた』気持ちになってしまう。『見る・見える』と『見た・見えた気持ちになる』とでは、大違いです」「ヒトは、名づけることにより、手抜きをする方法を習得したのではないのでしょうか。言い換えると、視野に入るすべてのものを注視しなくてもいい仕組みを手にしたということです。自分の周辺を、まだら状に見ていても大丈夫になったのです」

です。直接書かなかったキーワードは、「ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン」「モーリス・ブランショ」『ヴィトゲンシュタインの問題』(in『フローベール全集別巻』)です。

* 「名詞という名の動詞 (後半)」2010-02-21 : 横着なやり方で恐縮ですが、以下にこの記事のいわば「サビ」に当たるキーフレーズだけを挙げて、パッチワークをしてみます。「固有名詞は、強く、また多様なイメージを各人に喚起させる言葉です。あるテーマを論じる場合に、ある固有名詞が登場させると、たとえば、その固有名詞を名に持つ人に対する読者の多様なイメージが次々と呼び覚まされます。それがいわば『ノイズ＝ラベル』となって、そのテーマを演じている言葉たちの『表情・身ぶり・目くばせ・働き』などに、読者の目が行かなくなる。つまり、つづられている言葉たちへの注視の妨げになる。それほど、固有名詞のイメージの喚起力は強いのです」 / 「個人差はあるでしょうが、名詞の中では (固有名詞が) いちばん人の心や意識を揺さぶります。品詞の中では、特に名詞と動詞が激しい『揺らぎ＝動き』を人に『送ってくる＝発してくる』気がします。そのほかの品詞も、人を揺さぶります」 / 「品詞などという言葉を持ちいて、『ことわり＝言割り＝事割り＝断り』をする必要はない。品詞ではなく、言葉＝言の葉でいい。言葉は、人に働きかけ、『揺らぎ＝動き』を人に『送ってくる＝発してくる』。その『揺らぎ＝動き』と同調し共振した人は、『考える・思考する』にいたる」です。直接書かなかったキーワードは、「フリードリヒ・ニーチェ」「ジル・ドゥルーズ」「アンタンシテ・intensité・強度」です。

* 「はかる -1-」2010-02-27 : キーフレーズは、「おもいはおもい・思いは重い」「おもいおもい・重い思い」なんて、最近、よく記事に書いています。こういうのは、おふざけではなく、自分がつづっているさまざまな言葉たちの「重み・思い・意味・忌・イメージ」＝「多義性・多重性・多層性」を、受けとめて楽しんでいるのです。はかっている、とも言えそうです。「はからずに・測らずに・量らずに・図らずに」、文章はつづれない気がします。」 / 「一方の「わかる」については、これまでさんざん、ああでもないこうでもない、ああでもあるこうでもある、ああでもないこうでもある、ああでもあるこうでもない、をしてきましたが、殺伐とした印象が常につきまとっているように思えてなりません。何しろ「わかる」には、「分ける・切る・割る」という動作が基本にあります。血生臭いです。ばらばら殺人とか、腑分けとか、マグロの解体という言葉の思い起こします。痛々しいのです。」です。

* 「はかる -2- (前半)」 & 「はかる -2- (後半)」2010-02-28 : キーフレーズは、「はかる」はヒトという枠内でのいわば「確信犯的」かつ「テキトーな」行為であるのに対し、「わかる」はヒトという枠外へと、身の程もわきまえず侵犯しようといういわば「無鉄砲で」かつ「賭けに等しい」行為だと言えそうです。「はかる」では、ダメモトに近い軽い気持ちで秤に「かける・掛ける・翔る・賭ける」。「わかる」では、マジで白黒のどちらかに

「かける・掛ける・駆ける・懸ける・賭ける」。そんなイメージでしょうか。」／「わかる」という行為は、ヒトが不可能性に挑戦することです。客観性・真実・事実・現実といった、ヒトという枠の外への志向が前提となっています。ヒトは「わかる」という言葉を発し使用することはできても、「わかる」という言葉が指し示している行為を、ヒトが「期待する」ほどまでには実現できません。」／「はかる」という行為は、ヒトが自らの可能性らしきものに挑むことです。なぜ、「可能性らしき」なのかは、上述の「何かの代わりに何かではないものを持ちいる」という仕組みが働いているからです。数、長さ、重さ、量といった一連の「もののありよう」を、感覚器官を通して、つまり、あくまでも「何かではないもの＝何かの代わり」として「とらえる」ことが基本です。」／「ふつう、ヒトは目的になしに、はかることはありません。何らかの「思い・思う」があって、それを満たしたり、実現するために、「重み・重い」をはかります。その目的は、確固としたものであたり、気ままであったりします。」／「数字・数値自体は、言葉・語と同様に、ニュートラルなものです。比喩的に言えば、「もの」です。ただ、「もの」はヒトが、ある目的・意図をもって、ある視点・立場から、恣意的に・自分の都合に合わせて、捏造する・でっち上げることが可能です。「はかる」ための「基準」としてよくもちいられる数字・数値、あるいはデータ・情報と呼ばれる「もの」は、「わかる」ための「根拠」と同様に、「すっぴん」では、かなり「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」としたものであるにもかかわらず、「厚化粧」をほどこした「すっきり」「くっきり」「はっきり」「すばっつ」に、「化けている」というか「化けさせられている」と言えそうです。粗雑な言葉を持ちいて単純化するなら、「もの」に「解釈」が行われるということです。」です。

* 「はかる -3-」【不投稿記事】：キーフレーズは、「ヒトに限った話かもしれませんが、空間的な遠近という意味合いだけでなく、「はるか・遙か」つまり「とおくへだたった・遠く隔たった」存在を「おもう・思う・想う」行為が、「はかる・おしはかる」または「おもいやる」です。「はかる・はるか」をめちゃくちゃにこじつけてしまいました。このように、「正しい」とされる意味に逆立った言葉の運動のありようや、ノイズとしてみなされがちなイメージを「いみ・忌」と、このブログでは呼んでいます。」／「はかる」とは、ヒトという枠内において、さまざまな「思い・思う・想い・想う」の「おもい・重い」重みと「あつい・厚い・熱い・篤い」厚みと重なり合って生じる擦れる音、つまり「おとずれ・音擦れ」として、ヒトにのみ「訪れる」ものなのではないでしょうか。だから、たぶん、はかないのです。その「はかる」の「はかなさ」について、今回は書きたいと思います。」／「はかる」は「はかない・とりとめがない・たよりにならない・おもいがかならずしもかなわない」。「はかない」に似た語で「はかなくなる」という古い言い方があります。「なくなる・しぬ」という意味です。「はかる」にネガティブなイメージを、ヒトはふつう覚えないと思います。言葉に対しても覚えることは、まずないでしょう。でも、ヒトは日々、言葉と「はかる」に裏切られ、がっかりさせられています。それなのに、めげない。たくましい生き物です。これはある種の鈍感さに支えられた、たくましさです。」です。

* 「はかる -4」【不投稿記事】：キーフレーズは、「はかる」を、漢字、つまり中国語に当てはめて、意味をずらす。「はかる・計る・測る・量る・図る・謀る・諮る・別る」／「はかる」を、発音の似た大和言葉にずらす。「はかる・わかる」。／「はかる」を、その音節を並べかえて忌（※「いみ」と読んでください）をずらす。「はかる・はるか」／「母語である日本語と戯れながら、ずらす。」です。

以上です。

第2部 10.03.04~10.03.11

10.03.04 代理としての世界-1-

以下の文章は、「うつせみのうわごと」という名のブログで書いたものです。この「うつせみのうわごと」は、「うつせみのあなた」に収めた記事たちとは異なり、ダイジェストを作っていないうえに（※その気力がありません）、未完のまま短命に終わったブログです。しかし、2008年12月19日から2010年3月まで書き続けた記事たちのいわば「到達点」とも言えそうなので、校正や改稿をせず、そのまま再録します（※単なる横着ですよ）。

◆代理としての世界 -1-

2010-03-04 18:45:01 | うわごと

何かの代わりに何かではないものを用いる。

この仕組みは、この星に住むあらゆる生き物に備わっているようです。簡単に言えば、生き物は知覚器官を通して、自分の周りを知覚し認識しているということです。

たとえば、みなさんが今見ているパソコンのモニターは、目と耳という名前の知覚器官がとらえたデータ=情報を、みなさんの脳が処理した結果と言えます。で、そのモニターに映し出されている画像は、どこかに住んでいるあるアホがパソコンを利用して作ったと思い込んでいるものです。

このように、ヒトは自分の周りのありとあらゆることやものやさまを、「何か」の「代理=代わり」のものとして、おそらく脳で「とらえている=受信している」（※「=」という等号に大した意味はありません。似たような言葉を列挙するさいに、つなげる役割

をしているだけです)と考えられます。代理だけの世界に生きている。そんなふうにも言えそうです。

イリオモテヤマネコやチャバネゴキブリやヒラメやウズラやゾウリムシも、たぶん、そんな感じで代理だけの世界に生きているのではないのでしょうか。そうお思いになりませんか？

生物学については素人なので、今述べたことがどれほど「生物学的に正しい」のかは知りません。少なくとも、そう思っている。それだけのことです。なお、「正しい」か「正しくない」かについては、このブログではこだわりません。そのような判断ができる能力を、ヒトが備えているという立場になっていないからです。

ヒトは「正しい」「正しくない」という言葉を口にしてしまった。そういうものがあると決めてしまった。そんな感じで受けとめています。というわけで、このブログに書かれていることは、うわごと＝たわごとです。蛇足ながら、予めお断りしておきます。

話を戻します。ヒトの場合には、ほかの生き物に比べて、知覚、認識に加えて、意識というものを想定しています。個人的なレベルの言葉遣いなので、説明をしておきます。

(1) 知覚：知覚器官⇒シノプシス⇒脳。きわめて粗雑な図式でイメージしています。知覚とは、こんな感じの図式で伝わっている「情報＝データ＝信号」の流れの結果、生き物が「感じていること」です。知覚には取捨選択が不可欠です。そりゃあ、そうですよね。知覚器官が受け取ったすべてのデータを、脳が「感じる」と想像してみましょう。比喩的に言えば、脳は「爆発」してしまうでしょう。処理しきれないということです。都合のいいことだけ、あるいは、必要なことだけを「知覚する＝感じる」仕組みがあるとしか考えられません。

(2) 認識：脳の中での「情報＝データ」が処理されている過程とでも申しましょうか。そんな感じです。過程ですから、動きを伴います。それも「きわめて不安定な動き＝よろよろ＝おろおろ」かと思われま。知覚器官から流れてきた「情報＝データ」が取捨選択されたり、「保存＝記憶」されたり、加工されたり、捏造されたりしているとイメージしています。こうした過程では、エラーや誤作動や誤認、つまり、間違いや失敗はつきものではないかという気がします。いま、この与太話を書きながらも、個人的にそう

した印象を強く受けます。みなさんは、どうですか？ ご自分の脳の中は整然としている感じがしますか？

(3) 意識：認識を、ヒトが自覚的にとらえている場合を想定しています。思考しているとか、ぼんやりしているとか、ぼけーっとしている、眠っている、意識不明など、グラデーションがあるものとしておきます。そうすれば、いろいろな状態を指すことができる。そんな使い勝手のいい言葉にしておきたいという下心があるからだ、白状しておきます。テキトーですよ。

ついでに白状しておきますが、「自覚的にとらえている」というのは、嘘なんです。一応そんなふうに、とりあえずイメージしておいてくださいませんか。

ヒトは、自覚なんてできっこない。「自覚する」という言葉とイメージを「作ってしまった=捏造してしまった=でっちあげてしまった」ので、その気になっているだけだ。つまり、引くに引けない、という状況になってしまったのではないか。そんな出まかせから「嘘」だと書いたまでなのです。この「自覚する」という言葉は気になるので、これからぼちぼち考えていく予定です。

10.03.05 代理としての世界-2-

◆代理としての世界 -2-

2010-03-05 10:49:48 | うわごと

「私はあなたじゃない」という意味の言葉が、一時期に流行った記憶があります。然るべき時に然るべき人が然るべき言葉を口にする、ある地域内でその言葉が広がることがありますね。それにしても「然るべき」という言葉は曖昧=テキトーです。いずれにせよ、その「然るべき」状況を抜きにして、「私はあなたではない」という言葉について考

えてみましょう。

逆に言うと「あなたは私ではない」となります。さらに「ずらしてみる＝言い換えてみる」と「Aという人はBという人ではない」と言えそうです。すごく当たり前のことを言葉にしているような気がします。よく考えると、「当たり前」などという決まり文句では片付けられない話のような気がします。

「決まり文句」という言葉を使いましたが、さきほどの「然るべき」と同様に、曖昧でテキトーなのにもかかわらず、多くの人たちが、まさに『『当たり前』のように＝その意味を深く考えることなしに＝思考停止に近い状態で」用いている語みたいに感じられます。ヒトの用いるほとんどの語やフレーズが決まり文句なのではないか、という気がします。もちろん、このたわごとも決まり文句に満ちている気がしてなりません。話を進めます。

*

>ヒトは、自覚なんてできっこない。「自覚する」という言葉とイメージを「作ってしまった＝捏造してしまった＝でっちあげてしまった」ので、その気になっているだけだ。つまり、引くに引けない、という状況になってしまったのではないか。

以上は、前回の記事からの引用です。ここで、話を飛躍させます。ちなみに、みなさんが今お読みになっている or 見ている記事は、うわごとです。たぶん論理的でもなく、筋道も立っていない文章です。そもそも論理とか筋道とか道理といった言葉やイメージの妥当性を信じていないアホが書いているのですから、それこそ「当たり前」だと思われれます。

みなさんは、論理、道理、筋道という言葉が指しているとされることやことのありようが、どれくらい実行されているとお思いですか？ 今の質問を簡略化すると、「XだからYで、Zなのだ」ほどの話し方やつづり方に沿って、話したり、書いたり、考えている状況を日常的に、自分やほかの人が実践しているのを見聞きなさっていらっしゃいますか？ 首尾一貫してですよ。

もし、そうだという印象（※あくまでも、印象です。論理 or 道理 or 筋道を、論理 or

道理 or 筋道で説明することはうさん臭いというか、無理だと思いますので「印象」としておきます)をお持ちになっているとするなら、それって有効性がかなりありますか？話を戻します。

*

話を飛躍する、と書いたあたりまで、戻します。

(1) 自分と他人というものがいる or ある。

(2) 自分が、とりあえず「自覚する」と言われている行為＝作業をしている。

今挙げた(1)と(2)の2つのフレーズを読み返して、それがどういうことやありようを指しているのかを考えてみましょう。で、このアホの思っていることを書きますと、次のようになります。

「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みを基本にしている限り、(1)と(2)は分からない。でも、「代わり＝代理」に、「すべてお任せする＝いわば全権委任状を渡す」のなら、(1)と(2)は「分かる」可能性が出てくる。ただし、その「分かる」も「お任せ＝委任」の中に含まれていますから、「分かる」は『「分かる or 分かった』ということになっているらしい』という意味になります。「代わり＝代理」を通して、直接に「分かる or 分かった」なんてあり得ない、ということです。

ちなみに、「……だとはあり得ない」と思っていることを、「……であるらしい」とか「……だということになっている」とか「……だと決めた」と言い換えると、「……である」可能性があるまで思い込む傾向が、ヒトにはあるようです。このアホの印象では、こうした思い込みは錯覚だという気がしますが、多数決で否決されるでしょう。事実、真理、現実、客観性とヒトが呼んでいるものは、多数決で決まります。正確に言えば、ある集団ごとに多数決で決まります。集団内に「少数派＝多数派が決めた意見に異議を唱える者」がいることは言うまでもありません。

さらに言うなら、事実、真理、現実、客観性とヒトが呼んでいるものは、多数決で決

まると言うより、腕力で決まると言った方が適切なような気がします。「国語とは、軍隊を持つ方言である」みたいなフレーズを見聞きした覚えがあります。英国の歴史と現状を見ると、「言えてるなあ」なんて感心してしまいます（そもそも、英国のことを言っているフレーズでしたっけ）。

いや、もはや、そうした一国の問題ではないでしょう。広義の欧米と広義のイスラム圏との対立や衝突（「文明の衝突」なんて本がありますね）が現在だけでなく、これから先の世界で最大の問題になるだろう、なんて考えると、お先真っ暗な気持ちになってしまいます。へたをすると「ハルマゲドン」ですよ。その根っこに、事実、真理、現実、客観性とヒトが呼んでいるものの定義の争いがあるのですから。だって、定義の権化である原理主義者は、今話題にしている両サイドにいるのです。しかも、双方の原理主義者たちは、権力の中枢近くにいるのです。

*

話を戻します。

さきほど「委任状を渡す」という言い回しを比喻として用いましたが、やさしく言えば、「自分以外の何かにお任せする＝自分の責任を放棄する＝ややこしいことは自分は考えないしタッチしない」くらいの状況を指します。そのような状況下で「分かる or 分かった」はないでしょう。そんな感じです。ところで、たった今、気になる言葉を使っちゃいました。「自分」です。

「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みを基本にする、というのは「トリッキー＝もっともらしいが変」な言い方だとは思いませんか？「誰が or 何が」が抜けているのです。これは、このうわごとを書いているアホが仕組んでいたズルなんです。ごめんなさい。早めに白状しておきましたので、どうかお許しを願います。

「誰が or 何が」「何かの代わりに何かではないものを用いる」のかは、不明なのです。ということは、そうした前提に立つと、「自分」「他人」「私」「あなた」について、語ることは、どうも無理らしいと言えそうです。でも、騙ることならできそうです。というか、ヒトは「語る＝騙る」＝「話を作る＝フィクションとして述べる」ことをしょっちゅうやっている。ぶっちゃけた話、それしかできないということになります。このブログのタイトルの一部が「うわごと」なのは、そうした事情も汲んでのことなのです。

10.03.06 代理としての世界-3-

◆代理としての世界 -3-

2010-03-06 11:11:29 | うわごと

恥ずかしいフレーズを書かせていただきます。

「自分」って何でしょう。

みなさん、上のセンテンスを読んで恥ずかしく思いませんか。書いた者も恥ずかしいのですから、お読みになった方も恥ずかしいのではないかと想像するのは、自意識過剰というやつでしょうか。ちなみに、自意識過剰という言葉にも「自」という言葉が出てきますね。

> 「自覚的にとらえている」というのは、嘘なんです。

> ヒトは、自覚なんてできっこない。「自覚する」という言葉とイメージを「作ってしまった=捏造してしまった=でっちあげてしまった」ので、その気になっているだけだ。つまり、引くに引けない、という状況になってしまったのではないか。

以上は、「代理としての世界-1-」2010-03-04 の最後のほうで書いた部分からの引用です。

「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みが、ヒトの「知覚」、「認識」、「意識」と呼ばれていること or もので働いているとするなら、おそらく、「自分」「自」「自覚する」などという言葉が指していること or もの——何を指しているかについての意見やイメージは各人によって異なりますから、すごくテキトーな＝杜撰な話をしていることをお詫び申し上げます——は、すべて「何かではないもの」、つまり「何かの代わり＝何かの代理」ということになりそうです。「自分」や「自分の思い」ですら、「代わり＝代理＝仮のもの＝借りもの」だと考えられます。

自分は自分以外の何ものでもない。自分の思っていることは、当の本人の思っていることなのだから、その内容は承知している。そんなふう信じている人にとっては、自分が「自分＝本人＝本もの」であるのは当たり前であり、自分が何ものかの代わりを務めているといった考え方なんて正気の沙汰じゃない、と思うにちがいません。

自分が自分であることに疑いを持つ度合いが小さい人ほど、「自分って何なのでしょう」とか「自分とは何ぞや」という具合に考えることはないのではなからうか、という気がします。いわゆる気質というものがあるみたいです。漠然とした印象を申しますと、「自分とは何か」といった問いにこだわったり悩んだりするのは、癖のようなものだという感じがします。みなさんは、どうお思いになりますか。ご自身の場合で考えてみてください。「自分って何だろう」なんて、考えることはありませんか？

もっとも、「自分って何だろう」という問いは幾とおりの解釈ができそうです。思いつくままに、挙げてみます。

(1) 私という人間は、他人と比べてどういう点が優れていて、どういう面で劣っているのか。

(2) 私は、どんな性格 (or 運命 or 使命) を持った (or 授かった) 人間であり、どう生きたいのだろうか。

(3) 今の自分は仮の (or 偽りの) 姿であり、本当の自分はこんなふうじゃないはずだ。本当の (or 本来あるべき) 自分を探し求めてみたい。

(4) 今、この世でこうしている自分ではなく、生まれ変わりを何度も経てきたコアとなる自分について知りたい。

(5) 自分がいて、その自分が世界 (or 身のまわり or 宇宙) を知覚・認識・意識しているという話になっているけど、その「自分」とか「世界 (or 身のまわり or 宇宙)」というのは何なのか。「知覚・認識・意識する」とは、どういうことなのか。

(1) から (4) については、大きめの本屋さんへ足を運んで、「自己啓発・ビジネス書」「スピリチュアル・占い」「恋愛・性格診断」「宗教・哲学」「就活特設コーナー」などという文字の書かれたプレートや貼り紙をお探しになれば、その近くに置いてある本に、ある程度納得できる or 満足のいく答えや、答えとまでは言わなくてもヒントは見つかるような気がします。

上の中で (5) が長くなったのは、このうわごとをつづっているアホが考えていることだからです。ちなみに、このアホは (5) のような愚問にこだわっているので、本屋さんに答えを探しに行く気はありません。愚問は、自分で考えるのがいちばんいいという、経験からくる思いがあるからです。アホを長年やっていると、いろいろな経験をします。その経験から、「あきらめ」という名の「学習」をします。

ここで言う愚問とは、愚者が自分で納得しなければ満足できないような問いだ、くらいでイメージしてください。へそ曲がり＝偏屈者は、他人の言葉には耳を貸さない。そのたぐいのお聞きになったことが、あるいは、そうした状況を体験なさったことがありますか。そんな感じです。偏屈者は、放っておくのがいちばんです。相手にしちゃいけません。生きた事例が申していることですから、信用してよろしいかと存じます。

愚者＝へそ曲がり＝偏屈者は、世間でそう呼ばれていない人たちなら、あまり気にしないことにこだわります。で、上述の (5) なのですが、問いの形を取っていますが、答えは出ているのです。というか、このアホの場合には、出まかせと思いつきで、勝手に解決したつもりになっているのです。そうです。さきほど上のほうで書いたことと、ほとんど同じです。一応まとめてみます。

「自分」も、「世界 (or 身のまわり or 宇宙)」も、「知覚・認識・意識する」も、「代わり＝

代理=仮のもの=借りもの」らしい。

こんな具合になります。最後は「らしい」で終わっていることに注目してください。「自分」を「代理」だと思い込んでいる者が、このセンテンスを「である」と断定口調で終えることはできません。偏屈者にも、それなりの仁義はあるみたいです。

10.03.07 代理としての世界-4-

◆代理としての世界 -4-

2010-03-07 09:45:48 | うわごと

前回の「代理としての世界-3-」2010-03-06の終わりのほうで書いたセンテンスを引用させていただきます。

> 「自分」も、「世界（or 身のまわり or 宇宙）」も、「知覚・認識・意識する」も、「代わり=代理=仮のもの=借りもの」らしい。

以上のフレーズを真に受けると、「自分」というものが、あやふやで頼りないものになってしまいます。「自分」が、ふつう考えられている=イメージされている「自分」ではなく、「他人」みたいに思えてきませんか？ だって、「自分」は「代わり=代理=仮のもの=借りもの」らしい、という「与太話=フィクション=作り話」なんですよ。冗談は顔だけにしてくれ、と思う人がほとんどではないでしょうか。

このアホも、そう思います。ただし、ちょっとだけ、そう思うくらいです。内心では、かなりマジで、「自分」は「代わり=代理=仮のもの=借りもの」らしいと思い込んでいます。でも、これは「与太話=フィクション=作り話」にしかすぎないのだと、これまた、かなりマジで考えてもいます。ついでに申しますと、ヒトは「与太話=フィクシ

ン=作り話」しか、こしらえることはできないとも思っています。

なにしろ、「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みが、ヒトの「知覚」、「認識」、「意識」と呼ばれていること or もので働いている、という点から、ものごとを考える癖が付いているのです。アホに付ける薬はないみたいです。ひとさまから、おまえはビョーキだと言われても、反論するだけの度胸も根拠もありません。最初から、議論をする気持ちがないのです。議論にせよ、取っ組み合いの喧嘩にせよ、まして戦争にせよ、戦う or 闘うのが苦手なのです。

戦う or 闘うくらいなら、初めから「参りました」と降参しておき、相手がこちらの負けを受け入れてくれれば、「ああ、よかった」と心の中でつぶやき、「参りました」とは正反対の気持ちや意見を温存させておく。これまで、そんな調子で、他人との争いを避けてきました。これも、偏屈と同様に癖のようです。生き方だなんて偉そうな言葉は使いませんが。いずれにせよ、いつもこんな調子で生きてきたので、直りそうも=治りそうもありません。致し方ありません。

ところで、ここだけの話ですけど、天動説を信じています。理由は単純でして、どうしても地動説を「体感できない=体が納得してくれない」からです。一般に言われていることや、「真実」とか「事実」という名の付いたことよりも、自分の体のほうが信頼できる場合って、ありません？ 映画やテレビの画像が、画素とか呼ばれている点の集まりだとか、静止画像をコマ送りしたものだとか言われても、「はい、そうですね」とか「本当だ。今言われて、気づいたよ。分かる、分かる」という具合には、体 and/or 脳が素直に納得しないのと同じです。

世界でいろいろな神や神々や靈魂やイワシの頭や妖精のたぐいが信じられている。これらのものは、このアホには到底信じられないし体感もできないものです。でも、その手のものを信じている人たちの中には、いわゆる科学者も、あるいは極悪非道の「ひとでなし」と呼ばれている人もいるようです。そのうえに、神様のたぐいの威を借りて、私腹を肥やしている「罰当たりな」人たちも少なからずいるみたいです。そんなふうにきわめてテキトーなのがヒトの世界なのです。ですから、天動説を信じていても恥ずかしくはないはずなのですが、正直申しまして、やっぱりどこかに恥ずかしいという気持ちがあります。偏屈な割には、人目を気にする小心者なのでしょうね。話を戻します。

>ヒトは「与太話=フィクション=作り話」しか、こしらえることはできない。

これは、「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みが、ヒトの「知覚」、「認識」、「意識」と呼ばれていること or もので働いている、と思い込んでいる者にとっては、当然の話＝フィクションなのです。

ヒトは、「知識＝情報」と呼ばれるものやことを、現存の仲間たちとの間で伝え合う or 交わす媒介として「言葉」を用います。「知識＝情報」は「言葉」という形で、同時代を生きる仲間同士のみならず、亡くなった仲間たちから受け継ぎ、将来生まれるであろう仲間たちに引き渡されます。この場合の「言葉」は、広く取ったほうが便利だし、正確だと思われまます。話し言葉や書き言葉だけでなく、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、合図、手話、指點字、点字、音声（発声）、音楽、映像、画像、さまざまな標識や記号や数字や信号などまで含めてみましょう。

今述べた広義の言葉もまた、「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みにおいては、「代わり＝代理＝仮のもの＝借りもの」だと言わざるを得ません。簡単な比喩で説明すると、広義の言葉とは「道具」です。その「道具」の使用目的は「何かを伝える」や「何かを表す＝現す」ことのようにです。ただし、ヒトは「道具」そのものを、その使用目的とは無関係に触れたり（※「戯れる」と言っただけかまわない場合も想定しています）集めたりする習性があるみたいです。また、意識的にか無意識のうちにかを問わず、当初の使用目的とは異なる目的に使用することもあります。

たとえば、話し言葉で何かを伝えるのではなく、言葉を音として楽しむ。これは、難しい話ではありません。誰かの話を聞いて、その内容の 100 % を理解するなんてこと、あり得ますか？ その話を聞きながら、ほかのことを考えたり、この人の声や話し方が好きだとか嫌いだとか感じることはないですか？ 話し言葉と歌とは、かなり近いです。話し言葉に節とかメロディーが付くと、歌になります。メッセージソングなんて古い言い方がありますが、歌の場合に、その歌詞の意味がどれだけ重要な役割を担っているかは、とても曖昧です。

歌詞にしる、演説やプレゼンにしる、言葉という「道具」に込められていることになっているはずの「メッセージ」とか「意味」なんて、ヒトがその言葉に期待しているほどの働きはしていないと思われまます。聞き手は話の〇〇%しか聞いていない、なんてプレゼンのハウツー本によく書かれていますね。そういうハウツー本に書かれている話も〇〇%しか読まれない、という「メッセージ or 意味」でしょう。そう思うと、あの種のいかかわしい書籍にも説得力を感じまます。

話し言葉は、音声の集まりです。その音声は、何かの「代わり＝代理」の役目を果たすだけでなく、あるいは、そうした役目を果たすと同時に、「代わり＝代理」という名にも値しない全く「別の何か」になっている場合がある。正確に言うと、ヒトは音声を「気ままに＝勝手に＝恣意的に」聞いているし、そのような聞き方しかできないということです。これを言い換えると、話し言葉は、話す側と話を聞く側のヒトたちがどんなに頑張っても「何かの代わり」に成り損ねたり、「別の何か」にすり替わってしまうという事態が常態化しているようだ、となります。

ということは、「何かの代わりに何かではないものを用いる」というのは、誰か or 何かの意思や思惑とは関係なく働いている仕組みだという意味になります。つまり、この仕組みにヒトの企みが入り込む余地はなさそうです。この仕組みを、ヒトは仕組むことはできない。そんなふうに言ってもいいと思います。「話し言葉で何かを伝える or 表す」と口では言えても――本気でそう思い込んで、そう言っている人たちは多いし、ヒトの世界ではそれがほぼ常識となっているみたいです――いざやってみるとかなり難しいし、正確にやろうとするのは不可能と言わざるを得ないというのが、このアホの意見＝うわごとです。

要するに、いわゆる「話が通じない」という状況の話をしているわけですけど、この話はみなさんに通じているでしょうか？ 心もとなしという感じです。でも、「心もとなし」とあまり考えないのがヒトの「たくましき＝鈍感さ＝生きるうちに身につけた惰性」ですから、気にせずに「話が通じない」という話を進めましょう。

「話が通じているようで通じていない」というトホホ状態は、話をする側および聞く側の人のせいではありません。話し言葉という「道具」(※念を押しておきますが、比喻です)に対して、ヒトが主導権や支配権を持っていないというか、持つことが不可能だからです。整理します。

(1) 話し言葉という「道具」を用いる限り、ヒトは伝えよう or 表そうと思う「何か」を「道具」で代用するしかない。つまり、話は「道具」をパーツとして「作る＝組み立てる」しかない。

(2) 話し言葉という「道具」は、話す側においても聞く側においても、「何か」を伝える or 表すという使用目的を満たし損ねたり、「別の何か」にすり替わる可能性が高い。こう

した事態の根底には、ヒトの集中力と脳の情報処理能力に限界があることに加え、そもそも「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みがある。

(3) 話し言葉という「道具」を使用するさいに、ヒトは「道具」に対して主導権を握っていない。

以上の3点は、上述の広義の言葉すべてについて言えるような気がします。

10.03.09 代理としての世界-5-

◆代理としての世界 -5-

2010-03-09 08:57:38 | うわごと

のっけから、ぶしつけな質問をさせていただきます。

あなたは、あなたに対して主導権を握っていますか？

唐突な質問ですが、よく考えてみてくださいませんか。この場合の「あなた」というのは、いわゆる「体と心」の両方を指します。ややこしくて、答えにくいですか？ 質問の仕方を変えてみます。

あなたは、自分の体や心に対して違和感を覚えることがありますか？ たとえば、体のある部分が思うように動いてくれないとか、内臓がうまく機能してくれないということがありませんか？ または、気分がすぐれないとか、思うように気持ちが何かに向いてくれないという、もどかしさを覚えることがありますか？

少々長い質問になりましたが、どうでしょう？ 今の質問は、個人的な実感から述べたものです。自分の場合には、一日のうちで、自分が自分の体や心に対して主導権を握っていると感じない時のほうが長い気がします。やばいのでしょうか？ 実際、複数の医院に定期的通い、診察を受け、薬の処方してもらっています。通院先は、身体および心の病を専門とする医院です。

体や心が言うことを聞いてくれない。そうした言い方があります。よく分かる気がします。朝、目が覚めて、いちばん先に思うことは、「きょうのご機嫌はいかがかな」です。何のご機嫌なのかと申しますと、「気分」なのです。気分のご機嫌。言葉の遊びみたいに響くかもしれませんが、切実な問題なのです。いわゆるうつを患っているために、自分の気分がどういう状態にあるかという問題に常に付きまといわれます。うつを「気分障害」の一種だと呼ぶ場合があります。その語感もよく分かる気がします。

自分の場合には、気分のご機嫌に聴覚のご機嫌が加わります。中途難聴が年々悪化していき、身体障害者手帳の交付を受けております。人によって違うとは思いますが、自分の難聴は耳鳴りも伴ううえに、「聞こえ＝聞こえにくさ」も、その日によって、さらには同日でも変化します。予測のつかない気分と聴覚と付き合っただけで毎日を過ごしている。そんな感じです。ご想像いただけるでしょうか。

うつという診断を受けていない人たちや、聴覚に著しい障害のない人たちと交わしたさまざまな会話を思い返すと、こちらの抱えている諸問題をなかなか分かってもらえないという気がします。一方で、自分にはない障害や病に苦しんでいらっしゃる人たちとお話をした時のことを思い出すと、そうした方々が日々経験している不都合を理解どころか、想像もできない自分に気づいたりもします。

ただ、これは言えるではないかと思うのは、ヒトは自分に対して主導権を握っていない、ということです。冒頭の無礼な質問は、そういう思いから出たものなのです。さきほど述べた言い回しを使って、「あなたは、体や心が言うことを聞いてくれないという気持ちを経験することはありませんか？」と、尋ねれば良かったのだらうとも思います。もっとも、「主導権」という場違いな印象を与えるだろう言葉を用いたのは、前回の「代理としての世界-4」2010-03-07 で書いた次のフレーズが頭にあったからです。

＞「話に通じているようで通じていない」というトホホ状態は、話をする側および聞く

側の人のせいではありません。話し言葉という「道具」（※念を押しておきますが、比喩です）に対して、ヒトが主導権や支配権を持っていないというか、持つことが不可能だからです。

*

今回は、ヒトが抱えている「もどかしさ＝不自由さ＝悔しさ＝あきらめ」について書いてみたいと思います。この話はかなり広いものにもなり得るし、狭く絞ることもできます。どちらにしようかと、今、迷っているところです。出まかせ＝出たところ勝負＝アドリブで、記事を書く癖があるので（※いかにも「気分障害」らしいと言われそうです）、こんなふうに、うろうろ、おろおろ、うじうじ、ちんたらしています。ごめんなさい。そうだ。どれくらい広い、あるいは狭い話になるのかを、大雑把に説明してみます。別に急ぐ必要はないのですから、見取り図だけでも示しておくことにします。

まず、ヒトが抱えている「もどかしさ＝不自由さ＝悔しさ＝あきらめ」を広く見渡してみます。

ヒトは自覚という行為をすることができない。なぜなら、知覚・認識・意識という過程において、「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みが働いているからだ。つまり、いわゆる「自分」も、「世界（or 身のまわり or 宇宙）」と呼ばれているものも、「知覚・認識・意識する」という言葉が指すとされている行為も、どうやら「代わり＝代理＝仮のもの＝借りもの」らしいからだ。

以上の前提に立つなら、ヒトが「自分」だと思っているものは、「自分以外」と呼んでもおかしくないほど、「自分」という言葉が指し示すと広く考えられているものと隔たっているのではないか。こういう場合には、「枠」という言葉とイメージを採用して「話をする＝話を作る＝話をでっち上げる＝こじつけて語る（＝騙る）」とおもしろそうだ。「自分という枠」を仮定する＝捏造するのである。

「自分という枠」を構成するものは、「自分の代わり＝代理」と「自分とは無関係と思われる『何か』」だと考えてみる。両者に共通するのは、「自分」という言葉とイメージが含まれているだけ。その「自分」が、各種の辞書や事典での語義・定義という名の「説＝フィクション」としての「自分」や、ヒトという種で大多数を占める人たちが「自分」という名で漠然とイメージしている「自分」に含まれているだけ。

「自分」という「言葉＝語＝名詞＝名前」と、その言葉が指し示すとされている「こと or もの or ありよう」との関係性は、検証できない。単なる「作り話＝フィクション」である。ただし、ヒトが個人レベルでいっている「自分」をめぐる「作り話＝フィクション」と、学問の世界で「学説」や「理論」と呼ばれている「作り話＝フィクション」との隔たりは、「自分」という曖昧模糊としたものをテーマとしている限りにおいて、優劣や正誤や真偽という言葉とイメージでは「はかる」ことはできない。つまり、「フィクション＝言語構築物」としてみなす限りにおいて、後者を特権的なものとする根拠は乏しいのではない。

今述べたような「ことわり＝事割り＝言割り＝断り＝理＝言葉で分けて分かつとする行為」とは関係なく、ヒトは、「体や心が言うことを聞いてくれない」、「自分の体や心に対して違和感を覚える」、「体のある部分が思うように動いてくれない」、「内臓がうまく機能してくれない」というフレーズやイメージで、「自分という枠」にいることの「もどかしさ＝不自由さ＝悔しさ＝あきらめ」を感じる。

以上です。

*

次に、ヒトが抱えている「もどかしさ＝不自由さ＝悔しさ＝あきらめ」をある程度、絞り込んで考えてみましょう。

なるべく多くの人に、「自分のこと」として受けとめていただきたいので、ここで「障害」という言葉とイメージを広く取ってみます。みなさんは、「障害」あるいは「障害者」という言葉を見て、具体的にどんな状態や、周りにいる特定の人を思い浮かべますか？個人的には、「障害」を「心身のありとあらゆる不調」くらいにまで広げてイメージしています。たとえば、以下のような場合を想定しています。

「きょうは、少しだけ頭痛がする」、「なぜかちょっとしたことでいらつく」、「けさから生理が始まった」、「きのう、テニスをしたせいか、肘と膝に鈍い痛みを感じる」、「下痢気味だ」、「さっき眼鏡を床に落として、フレームが壊れてしまったので眼鏡を外しているが、見にくいし不安感を覚える」、「今、妊娠して7カ月の身だ」、「12年間飼っていたミド

リガメが死んで3週間が過ぎたが、以前のような元気が出ない気がする」、「帰国子女で海外の日本人学校以外で教育を受けたため、日本語は話せるが漢字の読み書きに苦勞している。電車が不通となって駅で足止めを食っているが、目の前にある貼り紙に何て書いてあるのかが分からない。容姿が外国人ぽくないために、周りの人に尋ねる勇気がない。以前こんな時に他人に話し掛けると、気味悪がられて逃げられたことがある」……。

個人的には、上述の状態を全部「障害」に含めてもいいと思っています。「障害」を心身、身体の部分、継続的か一時的かといった言葉とイメージなどで「分ける」のではなく、「濃淡＝グラデーション＝緩やかな移り変わり」としてとらえるのです。ですから、お役所や官僚や医師や医療分野の研究者とは異なる受けとめ方をしています。財政・効率・利害・権限といった、「障害」そのものをそっちのけにした事情を基準にしていません。「もどかしさ＝不自由さ＝悔しさ＝あきらめ」を覚えるかどうか、それだけが基準になります。

それだけ緩やかな基準を設けると、「今、財布に50円しかなくて、いつも利用している電車に乗って帰宅できない」場合まで、「障害」ということになるではないか。なんて言われそうですが、確かにそのとおりで、そうした状況も「障害」に含めていいと考えています。

*

絞り込んで考えてみましょう、なんて書きながら、ずいぶん、話が広がってしまったじゃないか。そんなお叱りの言葉が聞こえてくる気がしますので、言い訳をさせてください。いろいろな例を挙げましたが、さまざまな状況下にある各人が経験すると考えられる、その時々に応じた個々の問題として「障害」をとらえてみてはどうか、という意味なのです。混乱なさった方には、お詫び申し上げます。

この世はままたらぬ。そんな言葉を思い出しました。めちゃくちゃこじつけて、出まかせを言わせてもらうなら、「自分という枠」の中にいるヒトは、身体（※健康状態や容姿や性別や年齢や人種・民族を含むと考えるとください）、心（※精神や意識や気分と考えるとまかまいません）、境遇（※現時点で住んでいる or 滞在している国、国籍 or 無国籍状態、住んでいる地域、人種・民族、宗教、信条、家族、生まれ、生い立ち、財政的状况、趣味、人間関係、職業 or 無職状態、学校 or 学校に通っていない状態、受けた教育、他人から貼られたラベル＝レッテルなど）という「しがらみ＝かせ＝備わった条件・属性」の中に、いわば放り込まれているのです。

そうした「粹」の中で生きていることを一括りにして、幸福・不幸、満足・不満足、快・不快という2項対立な尺度ではかるのは無理だという気がします。多面的=多層的であり、常に移り変わりつつあるのが、ヒトのありようではないかと思います。では、最後に1つ質問をさせてください。

あなたは、あなたに対して主導権を握っていますか？

10.03.11 代理としての世界-6-

◆代理としての世界 -6-

2010-03-11 15:14:19 | うわごと

「自分」とは、ヒトが「でっち上げたもの」だという気がします。「捏造する」というちょっと気取った言い方もありますし、単に「作った」とか「作り上げた」くらいで済ませてもいいのですが、「でっち上げた」にはネガティブなイメージを喚起させる響きがありませんか。今回は、「自分」「他人・他者」「世界」「森羅万象」「宇宙」「真実・事実・現実」といったものは、すべてヒトが「でっち上げたもの」だということについて、うわごと=与太話をしてみたいと思います。

ヒトが「でっち上げたもの」だ、というフレーズについて説明します。いろいろな説明というか、言い換えが可能です。たとえば、「でっち上げたもの」=フィクション=虚構=作り話=言説=言語構築物=言葉の集まり、という感じです。いちばん単純な言い方は、「言葉」でしょうか。

「自分」とは「言葉」である。

このように書くと、ずいぶんすっきりしますね。でも、すっきりした分だけ、いろいろな大切な部分を切り捨てていることを忘れてはなりません。とは言うものの、大切なところをごちゃごちゃ書き足すと、ややこしくなりますから、できる限り「すっきり」路線で話を進めていきます。

今、ここで問題にしているのは、あくまでも「自分」という「言葉＝語」であることをくれぐれもお忘れにならないようにお願いします。拡大解釈やないものねだりの、ここで書いていないことまでに話を発展させないでくださいね。このうわごとをつづっているアホは、勉強家でも物知りでも、いわゆる論理的な思考に慣れた者でもありません。出まかせ・勘・アドリブに頼りながら、うろうろおろおろ、うじうじぐちゃぐちゃとした書き方しかできないのです。以下の図式は、このアホが考えていることをイメージ化したものです。

(A)「自分」という「言葉＝語」：ある程度知覚可能

↓（「対応・指し示す・意味する」という関係性をヒトは想定している）

(B)「自分」という「言葉＝語」で呼ばれている「イメージ」：個人レベルでいただくものであり一定しないため、「言葉＝語」を用いてお茶を濁すしかない

↓（「対応・指し示す・意味する」という関係性をヒトは想定している）

(C)「自分」という「言葉＝語」で呼ばれている「何か」：知覚不能であるため、「言葉＝語」を用いてお茶を濁すしかない

*

なお、上述の

「自分」とは「言葉」である。

というフレーズにある「言葉」は、広義の「言葉」です。「代理としての世界-4」2010-03-07で書いた文にちょっと手を加えて紹介させてください。

広義の「言葉」：話し言葉や書き言葉だけでなく、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、合図、手話、指点字、音声（発声）、音楽、映像、図像、標識、記号、数字、信号など。

このように何でもあり的なイメージで受け取っていただきたいと思います。表象、象徴、シンボル、代理、ルプレザンタシオンなどの語を見聞きなさった方は、そうした語が定義しているものにも少し似ているとお考えになってもかまいません。今挙げた語については、いろんな人がいろんな定義をしているようですから、どれでもお好きなものをイメージなさってください。ここでは、定義ごっこや定義争いとも無縁なうわごとをほざいているわけですから、「柔軟に＝テキトーに」「受けとめて＝受け流して」いただくのが、よろしいかと存じます。

どんな言葉＝語を用いようと、どんな定義をしようと、それが言葉である限り、つまり、ヒトという枠の中のお話である限り、大騒ぎをするほどのことではない。ヒトは「大騒

ぎすべきこと＝ヒトの行動に起因するらしい、この星の行く先にかかわる大事」については本気で騒がず、「ささいなこと＝ヒトという枠の中でしか通用しないこと」で大騒ぎをする。そんなふう日々感じています。うろうろと話が逸れはじめたので、さきほどのフレーズに戻ります。

「自分」とは「言葉」である、でしたね。「自分」という言葉＝語は、その言葉＝語が指し示すはずの「何か」を「指し示している」わけではなく、その「何か」を「指し示している」と思い込んでいる or 決めた」というのが正確な言い方だと思います。簡単な比喻を使うと、言葉＝語は「ラベル」だとなります。ラベルですから、何にでも貼ることができます。ラベルとラベルを貼られたものとの間には、ヒトの思い込み or 思惑 or 都合、あるいは、ヒトとは無関係で起きたアクシデント以外に「関係性＝対応＝写像（※比喻です）」と呼べるようなものは存在しない気がします。

具体的には、「うつせみ・空蝉・現人」「あなた・彼方・貴方」「な・汝・己」「てまえ・手前」という言葉＝語を、少し大きめの辞書で引いてみると、言葉＝語というラベルが、さまざまな事情や、原因不明のアクシデントにより複数の語義を成しているさまを垣間見ることができるでしょう。そう思うと「うつせみのあなたに」なんて、何だかロマンチックなイメージも喚起するし、謎めいた響きもあるみたいですが、実のところは、多義的＝多層的＝テキトー＝馬鹿みたいなネーミングですよ。ね。「うつせみのうわごと」の前身としての資格を十分に備えているのではないのでしょうか。

で、「自分」という言葉＝語なのですが、その言葉＝語が指し示すものは「何か＝名づけ得ぬもの＝ヒトという枠を超えたもの」であるように感じられます。でも、ヒトは「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みを基本として、「知覚する」とか「認識する」とか「意識する」といった、もっともらしい「言葉＝語＝ラベル＝名前」を使って、「自分」という「言葉＝語＝ラベル＝名前」をめぐる、「話を作る＝でっち上げる」ことがあります。ここでも、やっていますね。「自分」とは「言葉」であるとは、それくらいの意味なのです。大したことでもなければ、ややこしいことでもありません。

ややこしいという印象は、たぶん、混乱・混同・誤認してしまうからでしょう。もう少し言葉を加えると、ある言葉＝語と、その言葉＝語が指し示すと考えられている「何か」を混乱・混同・誤認してしまうという意味です。ここで最も重要なのは、「何か」です。ヒトが観測できない「何か」です。ただし、ここでは観測できない「何か」には、これ以上触れません。日常会話で用いる「何か」であっても、事態は一向に変わりませんので。

混乱・混同・誤認する原因として考えられるものを挙げてみます。

(1) 言葉＝語＝ラベル＝名前は、何にでもくっつく。対象を選ばない面がある。ヒトが故意にくっつける場合もあれば、不注意でくっつく場合もあれば、原因意不明のアクシデントでくっついてしまう場合もある。その意味で、ヒトは言葉＝語＝ラベル＝名前と

いう、いわば道具に対して主導権を握っていない。逆にもてあそばれる側にある。

(2) ヒトは、個人レベルで、各言葉＝各語＝各ラベル＝各名前を、その時々で勝手に気ままにとらえる＝解釈する。たとえば、誰かと話しているうちに、その指し示すものを、話し相手との利害関係を考慮し途中で故意に変えてしまう。解釈・定義を変更してしまう。そのような「節操のなさ＝機敏さ＝臨機応変＝当意即妙＝賢さ」さえ持ち合わせている。困ったことに、ヒトは自分が解釈・定義を変更したことを忘れてしまい、その新しい解釈こそが「正しい定義」だと思いついてしまうことが多い。都合の悪いことはすぐに忘れるということです。その意味でも、ヒトは言葉＝語＝ラベル＝名前という、いわば道具に対して主導権を握っていない。逆にもてあそばれる側にある。

(3) 言葉＝語の使用が、「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みを、もっとも身近に「表す＝現す＝現出させる」行為であるにもかかわらず、ふつうヒトはそんな仕組みを意識しない。つまり、いわば「使用上の注意」を怠っている。ヒトに対して好意的な見方をすれば、ヒトは言葉＝語が「欠陥品」であることを十分に理解していないとも言える。

(4) 言葉＝語は、その指し示すものとイコールである。ほぼそれくらいの認識で、ヒトは日常生活を送っているのに慣れきっている。また、そうした認識で日々を過ごしながら、そうした認識に起因すると考えられなくもないさまざまな問題に直面し、てんでこ舞いつつも、何とか生きていけるという確信を、おそらく無意識にいただいている。言い換えると、「言葉＝語は、その指し示すものとイコールではない」は、いわば圧倒的多数によって否決されている状況の中で、ヒトは生きている。

以上のような気がします。気がするだけです。なにしろ、たった今述べたような、いかがわしい属性を備えた、わけの分からない存在である言葉＝語と呼ばれているものを用いて、このうわごとをつづっているのです。欠陥品を使って欠陥品の説明をしているのです。ですので、「気がします」「気がするだけです」と控えめに書いても、心もとない気分は一向に去りません。実は、「思います」「思われます」「考えています」「考えられます」「感じがします」「感じられます」……のうちで、どれを使おうかなあ、なんて20秒ほど迷ってました。確信が持てないことを、どの言い回しで締めくくろうかとよくよく思い悩んでいたわけです。

で、「ま、いっか」の乗りで、選ばれたのが「気がします」です。このブログでは、上に挙げたような語尾は、いつもそんな感じのうじうじとした態度をベースに、語尾の単調さや連続をなるべく避けようくらいの魂胆＝文章作法でつづられていることを白状しておきます。

ここで、ちょっとややこしい話に移ります。上述の広義の「言葉」についての、くだくだした文に、もう一度目を通していただいただけませんか。話を単純にするために、これから

述べる話では、「言葉＝語」という言葉を使いますが、本当は「広義の『言葉』」を頭に置いているからです。

さて、結論から書きます。

「自分」という言葉＝語で指し示すと考えられている「何か」は、「代わり＝代理＝仮のもの＝借りもの」である。特に、「借りもの」だという点に的を絞って出まかせを言うと、その「何か」は「引用されたものの断片＝真似たものの断片＝何か or 誰かに成りきったものの断片＝何か or 誰かの言動を手本として演じたものの断片＝何か or 誰かを装ったものの断片＝どこかから借りてきた or 盗んできたものの断片」ではないか。今挙げたものを、単純化して「借りてきたものの断片」とひっくるめて呼んでみよう。「借りてくる」行為には、誤差やノイズが伴うと思われる。その誤差やノイズも小さなものから大きなものがあるだろう。

いずれにせよ、「借りてくる」という行為に誤差やノイズがあるということは、「変わる」とも言える。しかも、その「借りてきたもの」は断片であり、おびただしい数のそうした断片が集まって「自分」と呼ばれているものを構成しているとも言えそうだ。そうした視点を強調すれば、

「自分」という言葉＝語で指し示すと考えられている「何か」は、「代わり＝代理＝仮のもの＝借りもの」である

と同時に、

「自分」という言葉＝語で指し示すと考えられている「何か」は、「作られたもの」、あるいは「借りてくる間に変わったものの寄せ集め or ごった煮 or パッチワーク」である

という比喩的な言い方もできるのではないか。

以上のような気がします。というか、そんな感じがします。

あなたは、「自分」と呼ばれているものが、これまで「自分」が見聞きしてきた雑多な広義の言葉やイメージの寄せ集めだという気がしませんか？ 自分の言動のある部分の出どころみたいなものを意識することはありませんか？ あっ、今私がやっていることは、□□さんに成りきっているみたいだとか、よく考えると▽▽さんをイメージしている、なんて具合に。

自分とは「借りもの」だ。という考え方の説明として、思いつくままに、例をでっち上げてみます。

「今、口にしたい言い回しはこの間本で読んだものだ」「このたとえば、去年の夏ころに〇〇が言っていたのを拝借して、これまで何度も使っているものなのだが、なかなか説得力のある言葉だと思う」「今の表情と仕草は、何年か前に見たテレビドラマの登場人物が、あるシーンで演じた時のものをイメージしているんだけど、それが自分の癖になっている気がする」「わたしは、娘 or 息子と接するとき、無意識に母 or 父を思い浮かべて、そのイメージに沿って行動をしているように思えてならない」

「この挨拶の仕方は母親譲り。自分でも意識してる」「こいつのこういう癖を、直させなければならない。そうだ、今朝の連ドラで、似たようなシチュエーションがあって、何とかいう俳優が父親役でいいこと言っていた、あれを真似よう」「この人に対しては、女優の△△をイメージして下唇をちょっと噛んで、すねた顔を作って目だけで甘える。あの手を試してみよう。きょうまくいくわ」

「このレポートの書き方は、あの本に書いてあった方法を下敷きにして、例のブログに書いてあったことをちょっと変えたものだけど、コピペしたわけじゃないから、まあ、いっか」「わたしは CEE を尊敬している。懂れている。CEE の生き方だけでなく、話し方、表情、服装、趣味まで、意識的に真似ている。CEE のようになる。それがわたしの夢だ」「自分らしく生きる。これは◎◎の言葉だ。私は◎◎の本は全部読んでいます。◎◎のように、自分らしく生きたい」

どうでしょうか。今、挙げた例と似たような感じで「自分」は「出来ている」という気がしませんか？ 言葉＝語だけでなく、話し方、話の内容、表情、仕草、身ぶり、声の出し方、行動などありとあらゆるものが、誰か or 何かから部分的に「借りてきたもの」だという意味です。

個人的にはそうした思いが強いです。友達がいないので、こうしたことについて、誰かと話し合ったり、意見を求めたことはありません。ただ、ほかの人たちの言動を観察していたり、書いたものを読んでいて、この人たちも自分が感じているのと同じように、複数の「他人」の断片から「出来ている＝成り立っている」のではないかと。そんなふうにも思ったことが、数えきれないほどあります。

整理しましょう。

(1) 「自分」というものはない。「自分」とは、ヒトが口にしたり、書き記す言葉＝語である。その「自分」が指し示すものは「何か」としか言えないものだ。「自分」とは、対応物を欠いた空虚な言葉だとも言える。何しろ、ヒトは△○㊦という言葉をつくり、次に「△○㊦とは何か？」と問い思い悩む生物である。そのように考えると、ヒトは言葉を「つくる」というより、「でっち上げる＝ねつ造する」と言うほうが適切であろう。

(2) 各人のレベルで言えば、「自分」と呼ばれている「何か」は、おびただしい数の誰か

or 何かから部分的に「借りてきた」言葉＝語、話し方、話の内容、表情、仕草、身ぶり、声の出し方、行動などから「出来ている」。なお、「自分」と呼ばれている「何か」を構成する、「100 %借りてきたもの」だと言える「何か」の断片は存在しないと思われる。むしろ、「借りてきたものにさまざま程度で何らかの変更が加えられた」おびただしい数の「何かの断片」が集まっているのではないか。また、「借りてきたもの」ではない、つまり、オリジナルな「何かの断片」は存在しないのではないか。言い換えると「自分のオリジナルな部分」はないということになる。一方で、「借りてきたもの＝生後に学習したもの」「生得的に備わっているもの＝本能」という分け方も可能であろう。その場合に、後者を「自分のオリジナルな部分」と呼ぶ人たちがいても不思議はないだろう。だが、個人的には、本能を「オリジナルなもの」と呼ぶことには抵抗を感じる。

(3) ヒト各人は、「自分」を認識することも、意識することも、おそらくできない。「借りもの」としての「自分」という情報＝データが膨大なものだからである。ヒトが「認識・意識」していると自覚している情報は、ヒトが期待している or 思い込んでいるよりはるかに小さいのではないか。ヒトは「自分」は言うまでもなく、周りの世界を、空間的広がりとしても時間的経過としても、いわば「まだら状」にしか「知覚・認識・意識」できない。そのさまをやさしく言い直せば、濃い霧の中でかなり狭い視野の目で眺めている重度の健忘症の人をイメージすると近いのではないか。

(4) 上の(1)でも触れたが、「自分」とは「作りもの＝フィクション＝でっち上げられたもの」だ。フィクションとは、ヒトという枠の中での「話」である。いわゆる「実体」はない。また、言葉＝語という媒介を通してのみ、ヒト各人が表出し、各人の間で交わされる以上、「自分」は常に解釈＝誤解の対象となり、その解釈＝誤解は時の経過とともに常に揺れ動く。

(5) 上の(1)から(4)を前提にすると、ヒトが「自分」＝「借りもの」＝「何か」に対して主導権を握っていないばかりか、「自分」＝「借りもの」＝「何か」にもてあそばれている＝振り回されている可能性がきわめて高く、またそうした状況は常態化していると思われる。したがって、「自意識」「自覚」「知覚」「認識」「意識」という、ヒトがでっち上げた言葉＝語は、かなりいかがわしいものと言わざるを得ない。ひいては、そうした言葉＝語の産物とも言える「真実」「事実」「現実」という言葉＝語もまた、かなりいかがわしいものと言わざるを得ない。

そんなふう感じられます。

未完（※おそらく、この続きは書けないと思います。あくまでも、おそらく、ですけど）

代理としての世界 (改訂版) (1)

「代理としての世界」(10.03.04~10.03.10 全6回)は、以下の文で終わっています。

>未完(※おそらく、この続きは書けないと思います。あくまでも、おそらく、ですけど)

確かに書くべきことはないのですが、駄目押しに少しだけ付け足したいと思います。「代理としての世界」の特に前半を加筆・改訂したくなったのです。そんなわけで、改訂版をつくりました。

◆代理としての世界(改訂版)(1)

何かの代わりに何かではないものを用いる。この仕組みは、この星に住むあらゆる生き物に備わっているようだ。簡単に言えば、生き物は知覚器官を通して、自分の周りを知覚し認識しているということである。

*

たとえば、この文章を映しているパソコンのモニターは、目と耳という名前の知覚器官がとらえた「データ=情報」を、見ているヒトの脳が処理した結果と言える。つまり、このモニターに映し出されている画像は、どこかに住んでいるあるアホがパソコンを利用して作ったと、PCの前にいるヒトは思い込んでいる。馬鹿みたいに「当たり前の=芸のない=分かり切った」理屈だ。

このように、ヒトは自分の周りのありとあらゆることやものやさまを、「何か」の「代理=代わり」のものとして、おそらく脳で「とらえている=受信している」(※「=」と

いう等号に大した意味はありません。似たような言葉を列挙するさいに、つなげる役割をしているだけです」と考えられる。代理だけの世界に生きている。そんなふうにも言えるだろう。

*

イリオモテヤマネコやチャバネゴキブリやヒラメやウズラやゾウリムシも、たぶん、そんな感じで代理だけの世界に生きているのではないだろうか。生物学については素人なので、今述べたことがどれほど「生物学的に正しい」のかは知らない。少なくとも、そう思っている。それだけのことだ。

なお、「正しい」か「正しくない」かについては、このブログではこだわらないことにしている。そのような判断ができる能力を、ヒトが備えているという立場になっていないからである。ヒトは「正しい」「正しくない」という言葉を口にしてしまった。そういうものがあると決めてしまった。そんな感じで受けとめている。そんなわけで、このブログに書かれていることは、「うわごと＝たわごと」である。蛇足ながら、予めお断りしておく。

*

話を戻そう。ヒトの場合には、ほかの生き物に比べて、知覚、認識に加えて、意識というものを想定している。個人的なレベルの言葉遣いなので、説明しておく。

(1) 知覚：知覚器官⇒シノプシス⇒脳。きわめて粗雑な図式でイメージしている。知覚とは、このような感じの図式で伝わっている「情報＝データ＝信号」の流れの結果、生き物が「感じていること」である。知覚には取舍選択が不可欠だ。当然であろう。知覚器官が受け取ったすべてのデータを、脳が「感じる」と想像してみよう。比喩的に言えば、脳は「爆発」してしまうのではないだろうか。処理しきれないということである。都合のいいことだけ、あるいは、必要なことだけを「知覚する＝感じる」仕組みがあるとしたか考えられない。

(2) 認識：脳の中で「情報＝データ」が処理されている過程とも言えるだろう。過程だから、動きを伴う。それも「きわめて不安定な動き＝よろよろ＝おろおろ」かと思われ

る。知覚器官から流れてきた「情報＝データ」が取捨選択されたり、「保存＝記憶」されたり、加工されたり、捏造されたりしているとイメージしている。こうした過程では、エラーや誤作動や誤認、つまり、間違いや失敗はつきものではないかという気がする。いま、この与太話を書きながらも、個人的にそうした印象を強く受ける。自分の脳の中が整然としているとは、どうてい考えられない。

(3) 意識：認識を、ヒトが自覚的にとらえている場合を想定している。思考しているとか、ぼんやりしているとか、ぼけーっとしている、眠っている、意識不明など、グラデーションがあるものとしておく。そうすれば、いろいろな状態を指すことができる。そんな使い勝手のいい言葉にしておきたいという下心があるからだと、白状しておく。きわめてテキトーだと言わざるを得ない。

ついでに白状しておきたいことがある。「自覚的にとらえている」というのは、嘘なのである。一応そんなふうに、とりあえずイメージしておいていただきたい。

ヒトは、自覚なんてできっこない。「自覚する」という言葉とイメージを「作ってしまった＝捏造してしまった＝でっちあげてしまった」ので、その気になっているだけだ。つまり、引くに引けない、という状況になってしまったのではないか。そんな出まかせから、「嘘」だと書いたまでのこと。この「自覚する」という言葉は気になるので、これからぼちぼち考えていく予定だ。

代理としての世界 (改訂版) (2)

◆代理としての世界 (改訂版) (2)

「私はあなたじゃない」という意味の言葉が、一時期に流行った記憶がある。逆に言うと「あなたは私ではない」となる。さらに「ずらしてみる＝言い換えてみる」と「Aという人はBという人ではない」と言えそう。すごく当たり前のことを言葉にしているような気がする。だが、よく考えると、「当たり前」などという決まり文句では片付けられな

い話のような気もする。

「決まり文句」とは、「曖昧でテキトー」なのにもかかわらず、多くの人たちが、まさに「当たり前」のように＝その意味を深く考えることなしに＝思考停止に近い状態で用いている語と言えるだろう。ヒトの用いるほとんどの語やフレーズが決まり文句なのではないか、という気がする。もちろん、このたわごと決まり文句に満ちている気がしてならない。

*

＞ヒトは、自覚なんてできっこない。「自覚する」という言葉とイメージを「作ってしまった＝捏造してしまった＝でっちあげてしまった」ので、その気になっているだけだ。つまり、引くに引けない、という状況になってしまったのではないか。

以上は、前回の記事からの引用だ。ここで、話を飛躍させてみる。ちなみに、この記事は、うわごとである。たぶん論理的でもなく、筋道も立っていない文章だろう。そもそも論理とか筋道とか道理といった言葉やイメージの妥当性を信じていないアホが書いているのだから、この文章がうわごとであるのは「当たり前」だと思われる。

*

論理、道理、筋道という言葉が指しているときれる、ことや、ことのありようは、どれくらい実現されているだろうか？

今の質問を簡略化すると、「XだからYで、Zなのだ」ほどの話し方やつづり方に沿って、話したり書いたり考えている状況を、日常生活において見聞きすることができるだろうか、となる。

もし、そうだという印象――論理 or 道理 or 筋道を、論理 or 道理 or 筋道で説明することなんて、うさん臭いというか、無理だと思われるので「印象」としておく――を持つヒトがいるのなら、「それって有効性がかなりありますか？」と尋ねてみたい。

*

(1) 自分と他人というものがいる or ある。

(2) 自分が、とりあえず「自覚する」と言われている「行為＝作業」をしている。

今挙げた(1)と(2)の2つのフレーズを読み返して、それがどういう、ことや、ありようを、指しているのかを考えてみよう。このアホの考えは、次のようになる。

「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みを基本にしている限り、(1)と(2)は分からない。だが、「代わり＝代理」に、「すべてお任せする＝いわば全権委任状を渡す」のなら、(1)と(2)は「分かる」可能性が出てくる。

ただし、その「分かる」も「お任せ＝委任」の中に含まれているから、「分かる」という断定は、実は「分かる or 分かった」ということになっているらしい」という「推定＝推測＝憶測＝あてずっぽう」になる。

要するに、「代わり＝代理」を通して、「直接に分かる or 分かった」なんてあり得ない、ということだ。

*

ちなみに、「.....だとはあり得ない」と思っていることを、「.....であるらしい」とか、「.....だということになっている」とか、「.....だと決めた」と言い換えると、「.....である」可能性があるとまで思い込む傾向が、ヒトにはあるようだ。このアホの印象では、こうした思い込みは錯覚だという気がするが、きっと多数決で否決されるだろう。

事実、真理、現実、客観性とヒトが呼んでいるものは、多数決で決まる。正確に言えば、ある集団ごとに多数決で決まる。集団内に「反主流派＝プロテスタント＝異端者＝異教徒＝邪教徒＝少数派＝多数派が決めた意見に異議を唱える者＝謀反人＝スパイ＝要注意

人物＝変人＝偏屈者＝病人＝何かに憑りつかれた者＝狂人＝魔女」がいることは言うまでもない。ちなみに、今列挙した言葉たちは、「主流派＝多数派」によって貼られた、悪意に満ちた「レッテル＝ラベル」とも言える。

さらに言うなら、事実、真理、現実、客観性とヒトが呼んでいるものは、多数決で決まると言うより、腕力や武力で決まると言った方が適切だ。「国語とは、軍隊を持つ方言である」みたいなフレーズを見聞きした覚えがある。英国の歴史と現状を見ると、「言えてるなあ」と感心してしまう（そもそも、英国のことを言っているフレーズだったような気もする）。

＊

以上述べたことは、もはや、そうした一国や一共同体の問題ではないだろう。広義の欧米と広義のイスラム圏との対立や衝突（ずばり「文明の衝突」というタイトルの本がある）が現在だけでなく、これから先の世界で最大の問題になるだろう、などと考えると、お先真っ暗な気持ちになってしまう。

へたをすると、「ハルマゲドン」だ。その根っこに、事実、真理、現実、客観性とヒトが呼んでいるものの定義の争いがある。なにしろ、定義の権化である原理主義者は、今話題にしている両サイドにいる。しかも、双方の原理主義者たちは、権力の中核近くにいるのである。＊

さきほど書いたことを、以下に引用する。

> 「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みを基本にしている限り、（１）と（２）は分からない。

> だが、「代わり＝代理」に、「すべてお任せする＝いわば全権委任状を渡す」のなら、（１）と（２）は「分かる」可能性が出てくる。

> ただし、その「分かる」も「お任せ＝委任」の中に含まれているから、「分かる」とい

う断定は、実は「分かる or 分かった」ということになっているらしい」という「推定＝推測＝憶測＝あてずっぽう」になる。

＞要するに、「代わり＝代理」を通して、「直接に分かる or 分かった」なんてあり得ない、ということだ。

上の文章で「委任状を渡す」という言い回しを比喻として用いたが、やさしく言えば、「自分以外の何かにお任せする＝自分の責任を放棄する＝ややこしいことは自分は考えないタッチしない」くらいの状況を指す。そのような状況下で「分かる or 分かった」はないだろう。そんな感じである。ところで、たった今、気になる言葉を使ってしまった。「自分」という言葉だ。

*

「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みを基本にする、というのは「トリッキー＝もっともらしいが変」な言い方だと思えないだろうか？ どういうことかと言うと、「誰が or 何が」が抜けているのだ。実は、これは、このうわごとを書いているアホが組んでいたズルなのである。申し訳ない。

「誰が or 何が」「何かの代わりに何かではないものを用いる」のかは、不明なのである。ということは、そうした前提に立つと、「自分」「他人」「私」「あなた」について、語ることは、どうも無理らしい考えられる。だが、騙ることならできそう。というか、ヒトは「語る＝騙る」＝「話を作る＝フィクションとして述べる」ことをしょっちゅうやっている。ぶっちゃけた話、それしかできないということになる。このブログのタイトルの一部が「うわごと」なのは、そうした事情も考慮してのことなのである。

【※この「代理としての世界」というシリーズの原型は、「うつせみのうわごと」という名のブログで書いた記事です。】

代理としての世界 (改訂版) (3)

◆代理としての世界 (改訂版) (3)

「自分」って何だろう。

この問いに答えはあるだろうか。

*

>ヒトは、自覚なんてできっこない。「自覚する」という言葉とイメージを「作ってしまった=捏造してしまった=でっちあげてしまった」ので、その気になっているだけだ。つまり、引くに引けない、という状況になってしまったのではないか。以上は、「代理としての世界-1-」2010-03-04の最後のほうで書いた部分からの引用だ。

*

「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みが、ヒトの「知覚」、「認識」、「意識」と呼ばれていること or もので働いているとする。すると、「自分」「自」「自覚する」などという言葉が指していること or ものは、すべて「何かではないもの」、つまり「何かの代わり=何かの代理」ということになる。「自分」や「自分の思い」ですら、「代わり=代理=仮のもの=借りもの」だとなる。*

自分は自分以外の何ものでもない――。

自分の思っていることは、当の本人の思っていることなのだから、その内容は承知し

ている――。

そのように信じている者にとっては、自分が「自分＝本人＝本もの」であるのは当たり前であり、自分が何ものかの代わりを務めているといった考え方などは正気の沙汰ではない、と思うにちがいない。

自分が自分であることに疑いを持つ度合いが小さい人ほど、「自分って何なだろう」と考えることはない気がする。いわゆる「気質」というものがあるように思われる。「自分とは何か」といった問いにこだわったり悩んだりするのは、癖や気質のようなものだという気がする。

*

「自分って何だろう」という問いは幾とおりかの解釈ができそうだ。思いつくままに挙げてみよう。

(1) 私という人間は、他人と比べてどういう点が優れていて、どういう面で劣っているのか。

(2) 私は、どんな性格 (or 運命 or 使命) を持った (or 授かった) 人間であり、どう生きたらいいのだろうか。

(3) 今の自分は仮の (or 偽りの) 姿であり、本当の自分はこんなふうではないはずだ。本当の (or 本来あるべき) 自分を探し求めてみたい。

(4) 今、この世でこうしている自分ではなく、生まれ変わりを何度も経てきた「コア＝核＝もと」となる自分について知りたい。

(5) 自分がいて、その自分が世界 (or 身のまわり or 宇宙) を知覚・認識・意識しているという話になっているが、その「自分」とか「世界 (or 身のまわり or 宇宙)」という

のは何なのか。「知覚・認識・意識する」とは、どういうことなのか。

*

上の(1)から(4)については、大きめの書店へ足を運び、「自己啓発・ビジネス書」、「スピリチュアル・占い」、「恋愛・性格診断」、「宗教・哲学」、「就活特設コーナー」などという文字の書かれた、プレートや貼り紙を探せばいい。その近くに置いてある本に、ある程度納得できる or 満足のいく答えや、答えとまでは言わなくてもヒントは見つかるだろう。

ただし、以上のような疑問をいただく者たちの癖や気質は直らない。えんえんと、その種の本を買い続ける。こうなると、ビジネスの話となる。出版界は大不況下で躍起になって、そうした本を出版し続ける。孫引き、変奏、変装、パクリー。中身はコピペだらけ。内容は無い様に近づく。

*

上の(5)は、このうわごとをつづっているアホが考えていることである。ちなみに、このアホは(5)のような愚問にこだわっているために、書店や図書館に答えを探しに行く気はない。

自分がいて、その自分が世界(or身のまわり or 宇宙)を知覚・認識・意識しているという話になっているけど、その「自分」とか「世界(or身のまわり or 宇宙)」というのは何なのか。「知覚・認識・意識する」とは、どういうことなのか――。

このような愚問をかかえている患者や偏屈者やへそ曲がりや、時がたつにつれて「あきらめ」という名の「学習」をする。しかし、患者は患者だから、学習したことをすぐに忘れる。

*

ここで言う愚問とは、愚者が自分で納得しなければ満足できないような問いだ、くらいでイメージしていただきたい。「へそ曲がり＝偏屈者」は、他人の言葉には耳を貸さない。そのたぐい話を聞いたり、あるいはそうした状況を体験したことがないだろうか。

偏屈者は、放っておくのがいちばんいい。相手にしてはならない。なにしろ生きた実例が言っていることであるから、信用していいだろう。「愚者＝へそ曲がり＝偏屈者」は、世間でそう呼ばれていない人たちなら、あまり気にしないことにこだわる。それだけのことだ。

*

上述の(5)に、もう一度目を通していただきたい。問いの形を取っているが、実は答えは出ているのである。というか、このアホの場合には、出まかせと思いつきで、勝手に解決したつもりになっている。上述したことと、ほとんど同じであるが、まとめてみよう。

「自分」も、「世界(or身のまわり or 宇宙)」も、「知覚・認識・意識する」も、「代わり＝代理＝仮のもの＝借りもの」らしい。こんな感じになる。最後が「らしい」で終わっていることに注目していただきたい。「自分」を「代理」だと思い込んでいる者は、このセンテンスを「である」と断定口調で終えることはできない。偏屈者にも、それなりの仁義はあるようだ。

代理としての世界 (改訂版) (4)

****◆代理としての世界(改訂版)(4) ** **

前回の終わりのほうで書いたセンテンスを、以下に引用する。

>**「自分」も、「世界 (or 身のまわり or 宇宙)」も、「知覚・認識・意識する」も、「代わり=代理=仮のもの=借りもの」らしい。**

以上のフレーズを真に受けると、「自分」というものが、あやふやで頼りないものになってしまう。「自分」が、ふつう考えられている=イメージされている「自分」ではなく、「他人」みたいに思えてこないだろうか？ なにしろ**、「自分」は「代わり=代理=仮のもの=借りもの」らしい、という「与太話=フィクション=作り話」なのである。冗談は顔だけにしてくれ、と思う人がほとんどではないではないか。

このアホも、そう思っている。ただし、ちょっとだけ、そう思うくらいだ。しかし、内心では、かなりマジで、「自分」は「代わり=代理=仮のもの=借りもの」らしいと思っ込んでいる。一方で、これは「与太話=フィクション=作り話」にしかすぎないのだと、これまた、かなりマジで考えてもいる。ついでに言うと、ヒトは「与太話=フィクション=作り話」しか、こしらえることはできないとも思っている。

なにしろ、「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みが、ヒトの「知覚」、「認識」、「意識」と呼ばれていること or もので働いている、という点から、ものごとを考える癖が付いている** のだ。アホに付ける薬はないみようだ。ひとさまから、おまえはビョーキだと言われても、反論するだけの度胸も根拠もない。最初から、議論をする気持ちがない。議論にせよ、取っ組み合いの喧嘩にせよ、まして戦争にせよ、戦う or 闘う or 競うのが苦手なのだ。

戦う or 闘う or 競うくらいなら、初めから「参りました」と降参しておき、相手がこちらの負けを受け入れてくれれば、「ああ、よかった」と心の中でつぶやき、「参りました」とは正反対の気持ちや意見を温存させておく。これまで、そんな調子で、他人との争いを避けてきた。これも、偏屈と同様に性格というか性向らしい。生き方だなんて偉そうな言葉は使わないが。いずれにせよ、いつもこんな調子で生きてきたので、「直りそうも=治りそうも」ない。致し方ない。

*

ところで、ここだけの話だが、天動説を信じている。理由は単純だ。どうしても地動説を「体感できない=体が納得してくれない」からである。** 一般に言われていることや、

「真実」とか「事実」という名の付いたことよりも、自分の体のほうが信頼できる場合がないだろうか？** 映画やテレビの画像が、画素とか呼ばれている点の集まりだとか、静止画像をコマ送りしたものだとか言われても、「はい、そうですね」とか「本当だ。今言われて、気づいたよ。分かる、分かる」という具合には、** 体 and/or 脳が素直に納得しない ** のと同じである。

世界でいろいろな神や神々や靈魂やイワシの頭や妖精のたぐいが信じられている。これらのものは、このアホには到底信じられないし体感もできないものである。だが、その手のものを信じている人たちの中には、いわゆる科学者も、あるいは極悪非道の「ひとでなし」と呼ばれている人もいるようだ。そのうえに、神様のたぐいの威を借りて、私腹を肥やしている「罰当たりな」人たちも少なからずいるようだ。

そんなふういきわめてテキトーなのがヒトの世界なのである。だから、天動説を信じていても恥ずかしくはないはずなのだが、正直言って、やっぱりどこかに恥ずかしいという気持ちがある。偏屈な割には、人目を気にする小心者なのだろう。話を戻そう。

*

** >ヒトは「与太話＝フィクション＝作り話」しか、こしらえることはできない。 **
これは**、「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みが、ヒトの「知覚」、「認識」、「意識」と呼ばれていること or もの or ありようで働いている、と思いつている者にとっては、当然の話＝フィクションなのである。 **

ヒトは、「知識＝情報」と呼ばれるものやことを、現存の仲間たちとの間で伝え合う or 交わす媒介として「言葉」を用いる。「知識＝情報」は「言葉」という形で、同時代を生きる仲間同士のみならず、亡くなった仲間たちから受け継ぎ、将来生まれるであろう仲間たちに引き渡される。この場合の「言葉」は、広く取ったほうが便利だし、正確だと思われる。

** 話し言葉や書き言葉だけでなく、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、合図、手話、指字、点字、音声（発声）、音楽、映像、画像、さまざまな標識や記号や数字や信号などまで含めて「広義の言葉」と呼んでみよう。 ** 今述べた** 広義の言葉もまた、「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みにおいては、「代わり＝代理＝仮のもの＝借りもの」だ** と言わざるを得ない。簡単な比喩で説明

すると、** 広義の言葉とは「道具」なのである。その「道具」の使用目的は「何かを伝える」や「何かを表す=現す」ことだと言えるだろう。

ただし、ヒトは「道具」そのものを、その使用目的とは無関係に触れたり（※「戯れる」と言っただけかまわない場合も想定している）集めたりする習性があるようだ。また、意識的にか無意識のうちにかを問わず、当初の使用目的とは異なる目的に使用することもある。** *

たとえば、** 話し言葉で何かを伝えるのではなく、言葉を音として楽しむ。これは、難しい話ではない。誰かの話を聞いて、その内容の 100% を理解するなんてことは、あり得るだろうか？ その話を聞きながら、ほかのことを考えたり、この人の声や話し方が好きだとか嫌いだとか感じていることがないだろうか？

話し言葉と歌とは、かなり近い。話し言葉に節とかメロディーが付くと、歌になる。メッセージソングなどという古い言い方があるが、歌の場合に、その歌詞の意味がどれだけ重要な役割を担っているかは、きわめて曖昧である。** 歌詞にしる、演説やプレゼンにしる、言葉という「道具」に込められていることになっているはずの「メッセージ」とか「意味」などは、ヒトがその言葉に期待しているほどの働きはしていないと思われる。

聞き手は話の〇〇%しか聞いていない、とプレゼンのハウツー本によく書かれている。そういうハウツー本に書かれている話も〇〇%しか読まれない、という「メッセージ or 意味」が込められているにちがいない。そう思うと、あの種のいかがわしい書籍にも説得力を感じる。

*

** 話し言葉は、音声の集まりである。その音声は、何かの「代わり=代理」の役目を果たすだけでなく、あるいは、そうした役目を果たすと同時に、「代わり=代理」という名にも値しない全く「別の何か」になっている場合がある。

正確に言うと、ヒトは音声を「気ままに=勝手に=恣意的に」聞いているし、そのような聞き方しかできないということだ。これを言い換えると、話し言葉は、話す側と話を聞く側のヒトたちがどんなに頑張っても「何かの代わり」に成り損ねたり、「別の何

か」にすり替わってしまうという事態が常態化しているようだ、となる。** ということは、**「何かの代わりに何かではないものを用いる」というのは、誰か or 何かの意思や思惑とは関係なく働いている仕組みだということになる。この仕組みに、ヒトの企みが入り込む余地はなさそうだ。この仕組みを、ヒトは仕組むことはできない。そんなふうにも言ってもいいと思う。

「話し言葉で何かを伝える or 表す」と口では言えても——本気でそう思い込んで、そう言っている人たちは多いし、ヒトの世界ではそれがほぼ常識となっているようだが——いざやってみるとかなり難しいし、正確にやろうとするのは不可能と言わざるを得ないというのが、このアホの意見＝うわごとである。ちょっと道草をしてみよう。

*

太古に、尻尾のないサルのうちで、体毛が薄いうだつの上がらない種がいた。どういいうわけか、そのサルが他のサルに比べれば、超高性能の情報処理能力を備えた脳を持ってしまった。そんな「作り話＝フィクション＝うさん臭い話＝でまかせ＝与太話」を前提として、話を進めてみよう。

さらに、でまかせを言うと、上述の元サルは、この星に生息するすべての生物に共通する、「何かの代わりに、その何かではないものを用いる」という仕組みを、体内にある全器官の情報処理を行う脳の機能としても備えていた。** さて、もし、元サルが超高性能の情報処理機能からアウトプットされた膨大な情報を「見える」ものとしていたなら、元サルの脳は「爆発する＝機能不全に陥る＝しっちゃんめっちゃかになる」という事態を招いていただろう。

ところで、** 地球に住むすべての生物は、「見える・見る＝知覚・認識・意識する」機能と同時に「見えない・見ない＝知覚・認識・意識しない」機能を備えているらしい。言い換えると、必要な情報と不要な情報とを取捨選択する能力を持っているということだ。そうした取捨選択「機能＝能力」を備えていなければ、各生物の脳や脳に当たる部分は、「爆発する＝機能不全に陥る＝しっちゃんめっちゃかになる」にちがいない。**

見えすぎちゃって困るわ——とかいう、アンテナ専門の企業のCMを思い出した。裸眼で太陽を見ると目が損傷を受ける——という簡単なたとえも頭に浮かぶ。あくまでも、「たとえ」であるが。

**「何かの代わりに、その何かではないものを用いる」という仕組みを備えた元ヒトの脳は、「見える・見る」と同時に「見えない・見ない」という選択機能も備えていたと言えそうだ。当然のことながら、この星でしたい放題の乱行（らんぎょう≠らんこう・乱交）をしている、ホモ・サピエンスにも、そうした便利な機能が備わっていると考えられる。

*

まとめてみると、「見える・見る」と同時に「見えない・見ない」という取捨選択という仕組みは、「何かの代わりに、その何かではないものを用いる」という代理の仕組みと密接にかかわっている、と言えそうな気がする。でまかせで言うと、以上の2つの場合の「何か」という「もの・こと・ありよう」は、「見てはならないもの」ではないだろうか。「見てはいけないもの」だから、「その何かではないもの」を「代理とする＝代用する」のである。

ヒトという種においては、「見える・見る」は、さらに「見分ける＝知覚・認識・意識する・理解する・解釈する」という「高性能の情報処理」にまでいたる、と言えそうな気がする。その「処理＝作業＝計算（たとえばコンピューターの類においての）」は、「見てはいけないもの」を取捨しているような気がする。では、なぜ「見てはいけないのか」。

たぶん、「高性能の情報処理」「器官＝装置」である脳が、自らの「爆発＝機能不全＝機能停止」を阻止しているからだ、という気がする。もっとも、こうした問いは、生物学や医学が対象とすべきものであろう。言い方を変えれば、そうした脳を備えた元サルだけが、結果として生き延びたということだと言えるかもしれない。ホモ・サピエンスは、そうした元サルの子孫なのであろう。

*

「見てはいけないもの」とは、当然のことながら、「……するべからず」といった道徳・倫理的なタブーでもなければ、神仏によって裁かれる罰（ばち）でもなければ、法・掟が禁じている罰（ばつ）や強制的処分とも関係がないにちがいない。

とはいえ、宗教団体やカルト組織はもちろん、ヒトが群れて生じるありとあらゆる集団で、「代理・代行・代用」の仕組みに加えて「.....してはならない.....するべからず」という「法・掟」という仕組みが形成される。そのメカニズムとダイナミズムが気になる。

*

・「見る・見える」と「見ない・見えない」とを分けるものは、「匿名的＝非人称的＝ニュートラル」な「さばき」という仕組みである――。

・「何か＝見てはいけないもの」を見えなくするために、「その何かではないもの＝代理＝見えるもの」を用いる――。

・「用いる」には、何らかの主体が主導権をもっておこなうという前提が透けて見える。「用いられる」という具合に、何らかの主体を想定していない、「匿名的＝非人称的＝ニュートラル」な記述が正確なように思われる――。 ** 以上のような気がする。気にもなる。いつか、もっと考えてみたい。だいぶ道草を食った。話を戻そう。

*

> 「話し言葉で何かを伝える or 表す」と口では言っても――本気でそう思い込んで、そう言っている人たちは多いし、ヒトの世界ではそれがほぼ常識となっているようだが――いざやってみるとかなり難しいし、正確にやろうとするのは不可能と言わざるを得ないというのが、このアホの意見＝うわごとである。

という話の続きをしよう。

要するに、いわゆる「話が通じない」という状況の話をしていただけだが、この話は読者のみなさまに通じているだろうか？ 心もとなしというのが実感である。とはいえ、「心もとなし」とあまり考えないのがヒトの「たくましさ＝鈍感さ＝生きるうちに身につけた惰性」であるから、気にせずに「話が通じない」という話を進めてみる。

*

「話に通じているようで通じていない」というトホホ状態は、話をする側および聞く側の人のせいではない。** 話し言葉という「道具」(※念を押すが、これは比喻である)に対して、ヒトが主導権や支配権を持っていないというか、持つことが不可能だ** からののである。整理してみよう。

** (1) 話し言葉という「道具」を用いる限り、ヒトは伝えよう or 表そうと思う「何か」を「道具」で代用するしかない。つまり、話は「道具」をパーツとして「作る＝組み立てる」しかない。 **

** (2) 話し言葉という「道具」は、話す側においても聞く側においても、「何か」を伝える or 表すという使用目的を満たし損ねたり、「別の何か」にすり替わる可能性が高い。こうした事態の根底には、ヒトの集中力と脳の情報処理能力に限界があることに加え、そもそも「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みがある。 **

** (3) 話し言葉という「道具」を使用するさいに、ヒトはその「道具」に対して主導権を握っていない。 **

以上の3点は、わかりやすくするために「話し言葉」について書いたが、上述の** 事態は「広義の言葉」すべてについて言える ** ような気がする。

どうやら、** ヒトは降ってわいて身に付いた、高度に体系化された「道具」に振り回されてきたし、これからも振り回されていく** ようだ。(2012.02.09 記)

あとがき

あとがき

哲学がしたーい。誰々が何々と言ったなんて、関係なーい。自分の頭と体で考えてみたーい。インプットする暇などない。アウトプットに全力をあげよう。今ここにある手持ちのものを総動員して、言語、哲学、表象について、考えてみたい。哲学を庶民の手に！

うつを患いながらも、以上のような気持ちで、いわば憂さ晴らしに書き始めたのが、本書のもととなったブログでした（「うつせみのあなたに」というブログは、現在も開店いたしております）。いったん始めたら、そればかりを律儀に続ける——これこそ、まさに、うつになりやすい典型的な性格だと思います。

そうした性格の私は、ほぼ1年間にわたり毎日毎日（ときおりダウンもしましたが）、ブログ記事にしては長いものを書き続けたのでした。その結果、生まれたのが本書です。テーマは、人間の原点である「表象の働き」——「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組み——です。

具体的には、言語、哲学、社会現象、表象文化が、私にとっての思考の対象になりました。今でも、そのスタンスは変わりません。そうした分野を、駄洒落を頻発し、遊び心を持ち、あくまでも素人の立場から、自由奔放に論じる。上述の「表象の働き」を、読み手に話しかけるように、なるべくややこしくならないように書きつづる（とはいっても、ややこしくならざるを得ない部分もありますけど）——。それが、本書の一貫した態度です。

今思えば、心の病をかかえていたものの（現在もかかえています）、贅沢な時間を過ごした気がします。なにしろ、自分のいちばん興味のある、「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みについて、考えることができたのですから。

『うつせみのあなたに 第1巻～第11巻』の記事タイトル

第1巻

08.12.19 今日は誕生日

08.12.20 地図は現地ではない

08.12.21 消えてしまいたい指数

08.12.22 言葉に振りまわされる毎日

08.12.23 狂ったサル

08.12.24 あえて、その名は挙げない

08.12.25 遠い所、遠い国

08.12.26 横たわる漱石

08.12.27 信じてはいけない言葉

08.12.28 そして、話はお金に行き着く

08.12.29 匿名性の恐ろしさ

08.12.30 再び「消えてしまいたい指数」について

08.12.31 その点、ナンシー関は偉かった

09.01.01 私家版『存在と無』一序文一

09.01.02 論理の鬼

09.01.03 うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について

09.01.04 haiku と俳句、ベースボールと野球

09.01.05 翻訳の可能性＝不可能性

09.01.06 ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない

09.01.07 名のないモンスター、あるいは外部の思考

09.01.08 見えないものを見る

09.01.09 読めないけど分かる言葉

09.01.10 聞こえるけど聞けない言葉

09.01.11 目は差別する

09.01.12 投資って何だろう？ お金って何だろう？

09.01.13 架空書評：狂った砂時計

09.01.14 ん？

09.01.15 「ん」の不思議

09.01.16 あなたなら、どうしますか？

09.01.17 やっぱり、ハンコは偉い

09.01.18 架空書評：何もかもが輝いて見える日

09.01.19 こんなことを書きました（その1）

第2巻

09.01.20 それは違うよ

09.01.21 ま～は、魔法の、ま～

- 09.01.22 なぜ、ケータイが
- 09.01.23 お口を空けて、あーん
- 09.01.24 冬のすずめ
- 09.01.25 架空書評：彼らのいる風景
- 09.01.26 交信欲＝口唇欲
- 09.01.27 ケータイ依存症と唇
- 09.01.28 オバマさんとノッチさん
- 09.01.29 もしかして、出来レース？
- 09.01.30 カジノ人間主義
- 09.01.31 コラブログとモノブログ
- 09.02.01 架空書評：ビッグ・ブラザー
- 09.02.02 こんなことを書きました（その2）
- 09.02.03 1カ月早い、ひな祭り
- 09.02.04 神様になる方法
- 09.02.05 かつらはずれる
- 09.02.06 究極の武器はヒューヒューともしもしなのだ
- 09.02.07 ひとかたならぬ世話になっております
- 09.02.08 架空書評：PDSジェネレーションズ
- 09.02.09 1人に2台のテレビ
- 09.02.10 人面管から人面壁へ

09.02.11 マトリックス

09.02.12 こんなマヨじゃ、いやだ！

09.02.13 そっくり

09.02.14 「東京」CE 無限大

09.02.15 架空書評：九つの命

09.02.16 こんなことを書きました（その3）

第3巻

09.02.17 ああでもあり、こうでもある

09.02.18 差別化

09.02.19 飽きっぽくて、忘れっぽい

09.02.20 まぼろし

09.02.21 トリトメのない話

09.02.22 架空書評：奪還

09.02.23 おいしくない社会

09.02.24 あきらめない

09.02.25 最後のとりでを守る

09.02.26 やっぱり CHANGE なのだ

09.02.27 イエス・アイ・キャン

09.02.28=10.06.26 うつせみのあなたに

- 09.03.01 なぜ、お父さんがいないの？
- 09.03.02 女か男か？
- 09.03.03 ヒトは本を読めない
- 09.03.04 作者はいない
- 09.03.05 おくりびと vs. 千の風になって
- 09.03.06 毎度ありがとうございます
- 09.03.07 ゆうれいをはらう
- 09.03.08 こんなことを書きました（その4）
- 09.03.09 要するに、まなかな、なのだ
- 09.03.10 女心を男が歌う
- 09.03.10-09.03.12 でまかせしゅぎじっこうちゅう（前編）
- 09.03.13-09.03.15 でまかせしゅぎじっこうちゅう（後編）
- 09.03.16-09.03.25 うつせみのうつお
- 09.03.26-09.03.27 かわる（1）～（5）
- 09.03.28-09.03.29 かわる（6）～（10）
- 09.03.30 なる（1）～（3）
- 09.03.31 なる（4）～（6）
- 09.04.01 なる（7）～（8）
- 09.04.02 なる（9）～（10）
- 09.04.03 たとえる（1）～（2）

09.04.04 たとえる (3) ~ (4)

09.04.05 たとえる (5) ~ (6)

09.04.06 たとえる (7)

09.04.07 たとえる (8)

09.04.08 たとえる (9)

09.04.06-09.04.09 でまかせしゆぎじっこうちゅう

09.04.10-09.04.16 うつせみのうつお

09.04.17 たとえる (10)

09.04.18 こんなことを書きました (その5)

第4巻

09.04.19 平安時代のテープレコーダー

09.04.20 言葉を奪われる

09.04.21 「事実=意見」=両方ともでたらめ

09.04.22 「人間=機械」説 (1)

09.04.23 4月23日にギャグる

09.04.24 「人間=機械」説 (2)

09.04.25 「人間=機械」説 (3)

09.04.26 反「人間=機械」説

09.04.27 あう (1)

09.04.28 あう (2)

09.04.29 あう (3)

09.04.30 あう (4)

09.05.01 あう (5)

09.05.02 あう (6)

09.05.03 あう (7)

09.05.04 こんなことを書きました (その6)

09.05.05 スポーツの信号学 (1)

09.05.06 ドラマ信号論 (1)

09.05.07 信号論から見た経済 (1)

09.05.07 信号論から見た経済 (2)

09.05.08 信号学的視線論 (1)

09.05.09 信号学的視線論 (2)

09.05.10 信号論 (1)

09.05.11 もくじをつくりました

09.05.12 信号論 (2)

09.05.12 信号論 (3)

09.05.13 こんなことを書きました (その7)

第5巻

09.05.14 かく・かける (1)

- 09.05.15 かく・かける (2)
- 09.05.16 かく・かける (3)
- 09.05.16 かく・かける (4)
- 09.05.17 かく・かける (5)
- 09.05.18 かく・かける (6)
- 09.05.19 かく・かける (7)
- 09.05.19 かく・かける (8)
- 09.05.20 占い・占う
- 09.05.21 賭け・賭ける
- 09.05.22 書く・書ける (1)
- 09.05.22 書く・書ける (2)
- 09.05.23 こんなことを書きました (その8)
- 09.05.24 と、いうわけです (1)
- 09.05.24 と、いうわけです (2)
- 09.05.25 あられる・あらず (1)
- 09.05.26 あられる・あらず (2)
- 09.05.27 あられる・あらず (3)
- 09.05.28 あられる・あらず (4)
- 09.05.29 あられる・あらず (5)
- 09.05.30 あられる・あらず (6)

09.05.31 あらわれる・あらわす (7)

09.06.01 あらわれる・あらわす (8)

09.06.02 こんなことを書きました (その9)

第6巻

09.06.03 つくる (1)

09.06.04 つくる (2)

09.06.05 つくる (3)

09.06.06 つくる (4)

09.06.07 テリトリー (1)

09.06.08 テリトリー (2)

09.06.08 テリトリー (3)

09.06.09 テリトリー (4)

09.06.10 テリトリー (5)

09.06.11 テリトリー (6)

09.06.12 テリトリー (7)

09.06.13 こんなことを書きました (その10)

09.06.18 なわ=わな

09.06.19 台風と卵巣

09.06.20 出る

09.06.21 うんちと言葉

09.06.22 地と知と血 (1)

09.06.22 地と知と血 (2)

09.06.23 「あつい」と「わからない」

09.06.24 ぼーっとする、ゆえに我あり

09.06.25 時の神＝あわいわあい (1)

09.06.25 時の神＝あわいわあい (2)

09.06.26 こんなことを書きました (その 11)

第 7 卷

09.06.27 空前の「純文学」ブーム

09.06.28 「時間」と「とき」

09.06.29 「揺らぎ」と「変質」

09.06.30 不自由さ (1) 2010 年

09.06.30 不自由さ (2) 2010 年

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (1)

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (2)

09.07.02 うたう

09.07.03 まつはいつまでも、まつ

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (1)

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (2)

- 09.07.05 マンネリズム・マニエリズム
- 09.07.06 こんなことを書きました（その 12）
- 09.07.07 いみのいみ
- 09.07.08 何となく
- 09.07.14 記述＝奇術＝既述
- 09.07.15 3人のゲンちゃん
- 09.07.16 あつきのせい？
- 09.07.17 システムと有効性と比喻
- 09.08.01 気になるというか
- 09.08.02 もう1つ気になることが
- 09.08.03 さらに気になることが
- 09.08.04 できないのにできる
- 09.08.05 何もないところから
- 09.08.06 めちゃくちゃこじつけて
- 09.08.07 銃が悪いのではなく
- 09.08.08 どうにもならないときには
- 09.08.25 こんなことを書きました（その 13）

第8巻

- 09.08.11 たわむれる
- 09.08.12 なつかれる

09.08.13 げん・幻 -1-

09.08.14 げん・幻 -2-

09.08.15 げん・幻 -3-

09.08.16 げん・幻 -4-

09.08.17 げん・幻 -5-

09.08.18 げん・幻 -6-

09.08.19 げん・幻 -7-

09.08.20 げん・幻 -8-

09.08.21 げん・幻 -9-

09.08.22 げん・幻 -10-

09.08.30 こんなことを書きました（その 14）

09.08.23 げん・言 -1-

09.08.24 げん・言 -2-

09.08.26 げん・言 -3-

09.08.27 げん・言 -4-

09.08.28 げん・言 -5-

09.08.29 げん・言 -6-

09.08.31 げん・言 -7-

09.09.01 げん・言 -8-

09.09.XX げん・言 -9-

09.09.XX げん・言 -10-

09.09.XX げん・現 -1-

09.09.XX げん・現 -2-

09.09.XX げん・現 -3-

09.09.XX こんなことを書きました（その 15）

09.09.04-09.09.26 小品集（1）

09.09.27-09.10.23 小品集（2）

09.10.25-09.11.14 小品集（3）

第9巻

09.09.04 お墓参り

09.11.11 言葉とうんちと人間（言葉編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（うんち編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（人間編）

09.11.13 代理だけの世界（1）

09.11.14 代理だけの世界（2）

09.11.15 代理だけの世界（3）

09.11.19 代理だけの世界（4）

09.11.27 1年前の記事を読んで

09.11.28 今、考えていること

09.11.29 社会復帰はあきらめました

09.11.30 代理だけ

09.12.01-09.12.11 うつせみのあなたに（再録）

09.12.XX こんなことを書きました（その16）

09.12.02 でまかせ・いず・む

09.12.03 もてあそばれるしかない

09.12.04 わかるはわかるか

09.12.05 翻訳の可能性と不可能性

09.12.06 わかるという枠

09.12 07 わかるはわからない

09.12.08 わかるはプロセス

09.12.09 3つの枠

09.12.10 ちょっとないんですけど

09.12.11 あなたとは違うんです

09.12.XX こんなことを書きました（その17）

第10巻

09.12.06 ヒトいろいろ

09.12.07 信号としての石川君

09.12.08 コトバとチカラ

09.12.09 ごめんなさい

- 09.12.10 政治とは「分ける」こと
- 09.12.11 きな臭い話
- 09.12.08 ブログ廃人と呼ばれて
- 09.12.09 続・社会復帰はあきらめました
- 09.12.10 ブログと心中？
- 09.12.11 よくないなあ
- 09.12.12 素面でいたい
- 09.12.13 儀式
- 09.12.14 爪を切る
- 09.12.15 わける（1）
- 09.12.16 わける（2）
- 09.12.XX こんなことを書きました（その18）
- 09.12.16 二句
- 09.12.19 ずらす
- 09.12.20 かえるのではなくてかえる
- 09.12.21 とりとめもなく
- 09.12.22 パラレル
- 09.12.23 日本語にないものは日本にない？（1）
- 09.12.24 日本語にないものは日本にない？（2）
- 09.12.25 日本語にないものは日本にない？（3）

09.12.26 日本語にないものは日本にない？（４）

09.12.27 日本語にないものは日本にない？（５）

10.01.12 かえるはかえる

10.01.13 かえるにかえる

10.01.14 もどるにもどれない

10.01.15 け＝く

10.01.16 まことにまこと

10.01.17 まことはまことか（前半）

10.01.17 まことはまことか（後半）

10.01.18 本物の偽物（前半）

10.01.18 本物の偽物（後半）

10.01.19 からから

10.01.20 2010年1月20日にギャグる

10.01.21 こんなことを書きました（その19）

第11巻

10.01.22 夢の素（1）

10.01.23 夢の素（2）

10.01.24 夢の素（3）

10.01.24 夢の素（4）

- 10.02.02 うつせみのたわごと -1-
- 10.02.02 うつせみのたわごと -2-
- 10.02.03 うつせみのたわごと -3-
- 10.02.04 うつせみのたわごと -4-
- 10.02.06 うつせみのたわごと -5-
- 10.02.07 うつせみのたわごと -6-
- 10.02.08 うつせみのたわごと -7-
- 10.02.09 うつせみのたわごと -8-
- 10.02.10 うつせみのたわごと -9-
- 10.02.11 うつせみのたわごと -10-
- 10.02.12 うつせみのたわごと -11-
- 10.02.13 うつせみのたわごと -12-
- 10.02.14 うつせみのたわごと -13-
- 10.02.15 うつせみのたわごと -14-
- 10.02.16 「外国語」で書くこと
- 10.02.17 揺さぶり、ずらし、考える
- 10.02.19 動詞という名の名詞
- 10.02.21 名詞という名の動詞（前半）
- 10.02.21 名詞という名の動詞（後半）
- 10-02-25 不思議なこと

10.02.27 はかる -1-

10.02.28 はかる -2-

10.02.XX はかる -3-

10.02.XX はかる -4-

10.03.XX こんなことを書きました (その 20)

10.03.04 代理としての世界 -1-

10.03.05 代理としての世界 -2-

10.03.06 代理としての世界 -3-

10.03.07 代理としての世界 -4-

10.03.09 代理としての世界 -5-

10.03.11 代理としての世界 -6-

代理としての世界 (改訂版) (1)

代理としての世界 (改訂版) (2)

代理としての世界 (改訂版) (3)

代理としての世界 (改訂版) (4)

奥付

奥付

うつせみのあなたに 第11巻

<https://puboo.jp/book/17491>

著者：星野廉

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/renhoshino77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/17491>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/17491>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

うつせみのあなたに 第11巻

著 星野廉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
